

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第93集

野田遺跡Ⅱ・野田廃寺

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ



2005.3

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

野田遺跡Ⅱ・野田廃寺

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

2005.3

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

平成7年度より行ってきた土佐市バイパス建設に伴う発掘調査も今年で10年目を迎えることとなりました。その間に調査が実施された遺跡は6ヶ所におよび、それぞれの遺跡で数多くのすばらしい発見がありました。これらの調査成果は、これまで知られていなかった土佐市の歴史のみならず、高知県全体の歴史の解明に大きく貢献しています。

さて、本書はその土佐市バイパス建設に伴う野田遺跡の発掘調査報告書で、今回実施した国道56号以北の発掘調査報告書としては最後となるものです。今調査においては、今まで知られていなかった古代寺院の存在を確認し、土佐市の古代の歴史に新たな1ページを加えることとなりました。また、県下でも出土例のない貴重な遺物が多く出土するなど、その成果は目を見張るものがあります。本書が地域史の解明や考古学的研究などに広く活用されるとともに、埋蔵文化財へのますますの理解を深めるものとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたって多大なご理解とご協力をいただいた国土交通省高知河川国道事務所、土佐市都市計画課、地元関係者各位、および発掘調査に従事していただいた方々に心よりお礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
所長 川村寿雄

例言

1. 本書は土佐市バイパス建設に伴い平成13年度から平成14年度にかけて発掘調査を実施した野田遺跡第Ⅱ調査地区の発掘調査報告書である。なお、土佐市バイパス建設に伴う調査の経緯と経過、確認調査、調査の方法及び遺跡の地理的・歴史的環境については平成12年度に刊行した『光永・岡ノ下遺跡』－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－に記している。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国整備局(現四国地方整備局)から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 野田遺跡は高知県土佐市高岡町に所在する古代から近世にかけての複合遺跡で、古代の寺院跡や中世・近世の屋敷跡に関連するとみられる溝跡や掘立柱建物跡などが確認された。発掘調査は廃土処理の関係上6回に分けて行い、発掘調査延べ面積は8,197㎡であった。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

平成12年度

総括：財団法人埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄, 同主任 山本三津子, 同主幹 大原裕幸

調査総括：同調査課長 重森勝彦

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久, 同専門調査員 高橋厚彦・岩本繁樹, 同主任調査員 伊藤強・江戸秀輝, 同調査員 下村裕・田中涼子, 技術補助員 大原直美

臨時職員：原真由美, 福留美穂

平成13年度

総括：財団法人埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄, 同主任 山本三津子, 同主幹 中城英人

調査総括：同調査課長 重森勝彦

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久, 同主任調査員 中山真司・籠尾泰輔, 同調査員 下村裕・田中涼子, 技術補助員 大原直美

臨時職員：福留美穂, 阪本由美, 馬場洋子

平成14年度

総括：財団法人埋蔵文化財センター所長 島内靖

総務：同総務課長 久川清利, 同主幹 中城英人・金子晃子

調査総括：同調査課長 横山耿一

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久, 同専門調査員 堅田至・田中耕輔, 同主任調査員 中山真司・籠尾泰輔, 同調査員 下村裕・田中涼子, 技術補助員 大原直美

臨時職員：馬場洋子, 西田佐知子

平成15年度

総括：財団法人埋蔵文化財センター所長 島内靖

総務：同総務課長 久川清利, 同主任 池野かおり, 同主幹 金子晃子・長谷川明生

調査総括：同調査課長 横山耿一

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久, 同専門調査員 堅田至・田淵瑞世, 同主任調査員 中山真司, 同調査員 下村裕・田中涼子, 技術補助員 大原直美

臨時職員：西田佐知子, 丸岡宜子

平成16年度

総括：財団法人埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

総務：同総務課長 久川清利, 同主任 池野かおり, 同主幹 長谷川明生

調査総括：同調査課長 横山耿一

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久, 同調査員 徳平涼子, 技術補助員 大野大

臨時職員：丸岡宜子, 濱田博子

5. 本書の執筆は第Ⅱ章1(2)を大原, 第Ⅳ章3・9を廣田, 第Ⅳ章8を大原, それ以外を徳平が分担し, 編集等は徳平が行った。現場写真は中山, 籠尾, 徳平が撮影し, 遺物写真は徳平が撮影した。
6. 遺構については, SB(建物跡), SA(塀・柵列跡), SK(土坑・土坑墓), SD(溝跡), P(ピット)等の略号も併用した。遺構番号は古代を101から, 中世を201から, 近世以降を301から通し番号とした。また, 掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており, 方位Nは旧日本座標系におけるGNであり, 遺跡付近(国土基本図Ⅳ-I D18)の真北はGNに対し東に0°1'6", 磁北はGNに対し東に5°48'35"振っている。ただし, 報告書抄録の緯度・経度は世界測地系で記してある。なお, 中世・近世の掘立柱建物跡は縮尺1/200で模式図を掲載し, 確認した柱穴は●, 未検出の柱穴は○で表記している。
7. 遺物については原則として縮尺1/3で記載し, 一部の遺物については縮尺を変えているが, 各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は通し番号とした。
8. 埴仏については, 岡本桂典氏(高知県文化財団歴史民俗資料館), 萩原哉氏(善通寺宝物館)にご教示, ご指導頂いた。記して感謝する次第である。
9. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また, 同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。
石元清香, 入野三千子, 岩井涼子, 川添明美, 岸本洋子, 坂本エリ, 島村加奈, 竹村小百合, 土居江里子, 西村美喜, 松田美香, 元木恵利子, 森川歩, 森沢美紀, 森田直美, 原真由美, 宮地邦代, 吉野絵里
10. 調査にあたっては, 国土交通省四国整備局高知河川国道事務所, 土佐市バイパス監督官詰所, 土佐市都市計画課のご協力を頂いた。また, 地元住民の方々に, 遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き, 厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物は平成13年度が「01-3TN」, 平成14年度が「02-3TN」と註記し, 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序章	
1. はじめに	1
2. 調査の契機と経過	2
(1) 契機と経過	2
(2) 確認調査	3
第Ⅱ章 調査の概要	
1. 調査の概要	5
(1) 調査の概要	5
(2) 調査日誌抄	5
2. 調査区の概要	9
(1) 層序	9
(2) 堆積層出土遺物	13
第Ⅲ章 遺構と遺物	
1. 古代	49
(1) 掘立柱建物跡	49
(2) 礎石建物跡	49
(3) 溝跡	50
(4) ピット	52
(5) 性格不明遺構	59
2. 中世	64
(1) 掘立柱建物跡	64
(2) 塀・柵列跡	71
(3) 土坑	72
(4) 溝跡	82
(5) ピット	90
(6) 性格不明遺構	107
3. 近世以降	109
(1) 掘立柱建物跡	109
(2) 塀・柵列跡	112
(3) 土坑	113
(4) 溝跡	138
(5) 畝状遺構	142
(6) ピット	143

第IV章 考察

1. 古代について.....	147
2. 古代の瓦について.....	150
3. 土師器と土師質土器について.....	151
(1) はじめに.....	151
(2) 土師器の高杯.....	152
(3) ロクロの使用と底部外面.....	152
(4) ヨコナデ調整と回転ナデ調整.....	153
(5) 土師質土器.....	153
(6) 製作工人.....	153
(7) 結語.....	158
4. 中世について.....	154
5. 中世の地形について.....	155
6. 近世について.....	156
7. 炉跡について.....	157
8. 近世作業土坑について.....	158
9. 結語.....	158
(1) はじめに.....	158
(2) 調査の成果.....	159
(3) 遺跡の消長.....	160

挿図目次

Fig. 1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡位置図.....	1
Fig. 2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S=1/100,000).....	2
Fig. 3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図(S=1/10,000).....	2
Fig. 4 調査対象区域図及び調査区設定図(S=1/2,500).....	3
Fig. 5 発掘調査風景1.....	5
Fig. 6 測量風景.....	7
Fig. 7 航空撮影風景.....	7
Fig. 8 発掘調査風景2.....	8
Fig. 9 発掘調査風景3.....	9
Fig.10 調査区中央部セクション図.....	10
Fig.11 調査区東部セクション図.....	12
Fig.12 第I層出土遺物実測図(近世陶器・近世磁器).....	13
Fig.13 第III層出土遺物実測図(土師器・須恵器・土師質土器・瓦).....	14

Fig.14	第Ⅳ層出土遺物実測図(土師器)	15
Fig.15	第Ⅳ層出土遺物実測図(須恵器)	17
Fig.16	第Ⅳ層出土遺物実測図(黒色土器・東播系須恵器・土師質土器ほか)	18
Fig.17	第Ⅳ層出土遺物実測図(土製品・石製品)	19
Fig.18	第Ⅳ-1層出土遺物実測図(東播系須恵器・土師質土器・瓦質土器ほか)	21
Fig.19	第Ⅳ-2層出土遺物実測図(土師質土器・瓦質土器・白磁ほか)	22
Fig.20	第Ⅳ-3・5・7層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器・白磁ほか)	23
Fig.21	第Ⅳ-11層出土遺物実測図(須恵器・瓦器・東播系須恵器ほか)	26
Fig.22	第Ⅳ-12層出土遺物実測図(須恵器・瓦器・土師質土器ほか)	27
Fig.23	第Ⅴ層出土遺物実測図(土師器)	29
Fig.24	第Ⅴ層出土遺物実測図(須恵器1)	30
Fig.25	第Ⅴ層出土遺物実測図(須恵器2)	32
Fig.26	第Ⅴ層出土遺物実測図(須恵器・二彩陶器)	34
Fig.27	第Ⅴ層出土遺物実測図(瓦1)	35
Fig.28	第Ⅴ層出土遺物実測図(瓦2)	36
Fig.29	第Ⅴ層出土遺物実測図(瓦3)	37
Fig.30	第Ⅴ層出土遺物実測図(瓦4)	38
Fig.31	第Ⅴ層出土遺物実測図(瓦5)	39
Fig.32	第Ⅴ層出土遺物実測図(瓦6)	40
Fig.33	第Ⅴ層出土遺物実測図(瓦7)	41
Fig.34	第Ⅴ層出土遺物実測図(瓦8)	42
Fig.35	第Ⅴ層出土遺物実測図(土製品・鉄製品)	43
Fig.36	その他の出土遺物実測図(須恵器・土師質土器・備前焼ほか)	44
Fig.37	その他の出土遺物実測図(近世陶器)	45
Fig.38	その他の出土遺物実測図(近世磁器)	47
Fig.39	その他の出土遺物実測図(古銭)	48
Fig.40	SB-101	49
Fig.41	SB-102	50
Fig.42	SD-102	50
Fig.43	SD-102出土遺物実測図	50
Fig.44	SD-104出土遺物実測図	51
Fig.45	P-101・102出土遺物実測図	53
Fig.46	P-103出土遺物実測図	54
Fig.47	P-104～110出土遺物実測図	56
Fig.48	P-111～115出土遺物実測図	58
Fig.49	SX-102	60

Fig.50	SX - 101・102出土遺物実測図	61
Fig.51	SX - 102出土遺物実測図	63
Fig.52	SB - 201	64
Fig.53	SB - 202	64
Fig.54	SB - 203	64
Fig.55	SB - 204	65
Fig.56	SB - 205	65
Fig.57	SB - 206	65
Fig.58	SB - 207	65
Fig.59	SB - 208	65
Fig.60	SB - 209	66
Fig.61	SB - 210	66
Fig.62	SB - 211	66
Fig.63	SB - 212	66
Fig.64	SB - 213	66
Fig.65	SB - 214	67
Fig.66	SB - 215	67
Fig.67	SB - 216	67
Fig.68	SB - 217	68
Fig.69	SB - 218	68
Fig.70	SB - 219	68
Fig.71	SB - 220	68
Fig.72	SB - 221	68
Fig.73	SB - 222	69
Fig.74	SB - 223	69
Fig.75	SB - 224	69
Fig.76	SB - 225	70
Fig.77	SB - 226	70
Fig.78	SB - 211・221・224・225出土遺物実測図	70
Fig.79	SA - 203・204出土遺物実測図	72
Fig.80	SK - 204	73
Fig.81	SK - 208	74
Fig.82	SK - 210	74
Fig.83	SK - 215	75
Fig.84	SK - 217	76
Fig.85	SK - 201～203・206・215・218出土遺物実測図	76

Fig.86	SK - 219.....	76
Fig.87	SK - 230・231 出土遺物実測図.....	79
Fig.88	SK - 235.....	80
Fig.89	SK - 236.....	80
Fig.90	SK - 237.....	81
Fig.91	SK - 238.....	81
Fig.92	SK - 241.....	81
Fig.93	SK - 235・236・240・241 出土遺物実測図.....	82
Fig.94	SD - 202.....	82
Fig.95	SD - 203.....	82
Fig.96	SD - 210・211.....	84
Fig.97	SD - 214.....	84
Fig.98	SD - 218～220.....	86
Fig.99	SD - 211・214・217・219・220 出土遺物実測図.....	87
Fig.100	SD - 223.....	87
Fig.101	中世遺構平面図2.....	88
Fig.102	SD - 227・228.....	89
Fig.103	SD - 222～224・227 出土遺物実測図.....	89
Fig.104	P - 201～210 出土遺物実測図.....	93
Fig.105	P - 211～220 出土遺物実測図.....	95
Fig.106	P - 221～230 出土遺物実測図.....	99
Fig.107	P - 231～240 出土遺物実測図.....	102
Fig.108	P - 241～249 出土遺物実測図.....	105
Fig.109	P - 250～255 出土遺物実測図.....	107
Fig.110	SX - 201・202 出土遺物実測図.....	108
Fig.111	SX - 203.....	109
Fig.112	SB - 301.....	110
Fig.113	SB - 302.....	110
Fig.114	SB - 303.....	110
Fig.115	SB - 304.....	110
Fig.116	SB - 301・303・304 出土遺物実測図.....	111
Fig.117	SB - 305.....	111
Fig.118	SB - 306.....	111
Fig.119	SB - 307.....	111
Fig.120	SA - 302 出土遺物実測図.....	112
Fig.121	SK - 302.....	113

Fig.122	SK - 304	114
Fig.123	SK - 313	116
Fig.124	SK - 314	116
Fig.125	SK - 316	117
Fig.126	SK - 317	117
Fig.127	SK - 305・310・315・318・319 出土遺物実測図	118
Fig.128	SK - 324	118
Fig.129	SK - 325	119
Fig.130	SK - 325 出土遺物実測図	119
Fig.131	SK - 327	119
Fig.132	SK - 328	120
Fig.133	SK - 328 出土遺物実測図1	121
Fig.134	SK - 328 出土遺物実測図2	122
Fig.135	SK - 328 出土遺物実測図3	123
Fig.136	SK - 328 出土遺物実測図4	124
Fig.137	SK - 329	125
Fig.138	SK - 330	125
Fig.139	SK - 331	126
Fig.140	SK - 332	126
Fig.141	SK - 334	126
Fig.142	SK - 335	127
Fig.143	SK - 337	127
Fig.144	SK - 337 出土遺物実測図	129
Fig.145	SK - 338	130
Fig.146	SK - 339	130
Fig.147	SK - 340	131
Fig.148	SK - 343	131
Fig.149	SK - 339・340・352 出土遺物実測図	133
Fig.150	SK - 354	134
Fig.151	SK - 354 出土遺物実測図	136
Fig.152	SK - 355	137
Fig.153	SK - 355～358 出土遺物実測図	138
Fig.154	SD - 301～303	139
Fig.155	SD - 307・308	140
Fig.156	SD - 314	141
Fig.157	SD - 301・308・316 出土遺物実測図	142

Fig.158	SU - 301 出土遺物実測図	142
Fig.159	P - 301 ~ 309 出土遺物実測図	145
Fig.160	軒丸瓦	150
Fig.161	土師器(323)	152
Fig.162	土師器脚(現地説明会資料より)	152
Fig.163	土佐市バイパス関連遺跡群横断図	155
Fig.164	土佐市バイパス関係の遺跡と調査年度(S = 1/25,000)	159

表目次

Table.1	土佐市バイパス発掘調査概要	4
Table.2	古代建物跡計測表	49
Table.3	中世掘立柱建物跡計測表1	67
Table.4	中世掘立柱建物跡計測表2	71
Table.5	中世塀・柵列跡計測表	72
Table.6	近世掘立柱建物跡計測表	112
Table.7	近世塀・柵列跡計測表	113

図版目次

PL. 1	調査前風景(東より)	(西より)
	調査前風景(西より)	調査区北東部中世遺構完掘状態
PL. 2	調査区西部近世遺構検出状態(北より)	(南東より)
	調査区西部近世遺構検出状態(南より)	PL. 8 調査区中央部中近世遺構検出状態
PL. 3	調査区西部近世遺構完掘状態(北より)	(南より)
	調査区西部近世遺構完掘状態 (真上より)	調査区中央部中近世遺構完掘状態 (北上空より)
PL. 4	調査区西部中世遺構検出状態(北より)	PL. 9 調査区中央部古代遺構検出状態
	調査区西部中世遺構完掘状態(北より)	(東より)
PL. 5	調査区南部中世遺構検出状態(西より)	調査区中央部古代遺構完掘状態
	調査区南部中世遺構完掘状態(西より)	(東より)
PL. 6	調査区南東部中世遺構検出状態 (西より)	PL.10 調査区中央部中近世遺構検出状態 (西より)
	調査区南東部中世遺構完掘状態 (東より)	調査区中央部中近世遺構完掘状態 (真上より)
PL. 7	調査区北東部中世遺構検出状態	PL.11 調査区中央部古代遺構検出状態

- (西より)
調査区中央部古代遺構完掘状態
(西より)
- PL.12 調査区中央部古代遺構完掘状態
(東上空より)
調査区中央部古代遺構完掘状態
(真上より)
- PL.13 調査区中央部北壁セクション(南より)
調査区北東部北壁セクション(南より)
- PL.14 SB - 101・102(東より)
SB - 101(西より)
- PL.15 SB - 102(南より)
SB - 219～225(北西より)
- PL.16 SD - 225・226(南東より)
SK - 304(西より)
- PL.17 SK - 328セクション(西より)
SK - 328完掘状態(西より)
- PL.18 SK - 316(南西より)
SK - 329(北より)
- PL.19 SK - 331(北より)
SK - 332(東より)
- PL.20 SK - 337(南西より)
SK - 337(北西より)
- PL.21 SD - 101瓦出土状態(南西より)
SD - 102瓦出土状態(西より)
- PL.22 SD - 104瓦出土状態(南西より)
SX - 102遺物出土状態(北より)
- PL.23 SB - 101(南より), SD - 103(南より),
P - 114(西より), SX - 101(東より),
SK - 203(西より), SK - 231(西より),
SK - 233(北西より), SK - 235(南より)
- PL.24 SK - 237(南より), SK - 242(東より),
SD - 201(南より), SD - 203(西より),
SD - 205・207(東より), SD - 206(西
より), SD - 210・211(南より), SD -
222(東より)
- PL.25 SD - 223(南より), SD - 225・226(南
より), ピット集石出土状態(北より),
SK - 302(東より), SK - 303(南より),
SK - 313(南より), SK - 314(東より),
SK - 321(南より)
- PL.26 SK - 322(南より), SK - 323・324(南
より), SK - 325(南より), SK - 327
(南より), SK - 329 検出状態(南より),
SK - 329(南より), SK - 330(東より),
SK - 331・332 検出状態(南東より)
- PL.27 SK - 334(南より), SK - 335(南東より),
SK - 336 検出状態(南より), SK - 338(南
より), SK - 339(南より), SK - 340(南
より), SK - 341(西より), SK - 343(東より)
- PL.28 SK - 344(西より), SK - 345(東より),
SK - 351(南東より), SK - 354(南より),
SK - 355(南より), SK - 356(西より),
SD - 307・308(西より), SD - 314(南より)
- PL.29 第三層須恵器(7)出土状態(西より), 第
三層土師質土器(8)出土状態(東より),
第四 - 1層青磁(59)出土状態(南より),
第四 - 1層青磁(60)出土状態(南より),
第四 - 3層土師質土器(71)出土状態(東
より), 第四 - 7層土師質土器(74)出土
状態(西より), 第四 - 7層土師質土器
(75)出土状態(南より), 第四 - 7層土師
質土器(76)出土状態(南より)
- PL.30 第四 - 11層須恵器(78)出土状態(南よ
り), 第四 - 11層瓦器(80)出土状態(南
より), 第四 - 11層土師質土器(88)出土
状態(北より), 第四 - 11層青磁(96)出土
状態(南より), 第四 - 12層鉄製品(103)
出土状態(南東より), 第五層土師器(104)
出土状態(西より), 第五層土師器(110)
出土状態(南より), 第五層土師器(115)
出土状態(西より)

- PL.31 第V層須恵器(129)出土状態(西より),
第V層須恵器(135)出土状態(東より),
第V層瓦(157)出土状態(東より), SD
- 102須恵器(213)出土状態(南より), P
- 101 遺物出土状態(南より), P - 101
須恵器(216・217)出土状態(西より), P
- 103 土師器(220～228)出土状態(北よ
り), P - 104 土師器(229)出土状態1(北
西より)
- PL.32 P - 104 土師器(229)出土状態2(南西よ
り), P - 106 遺物出土状態(南より), P
- 109 須恵器(234)出土状態(西より),
P - 111 瓦出土状態(南より), P - 114
須恵器(241)出土状態(西より), SX -
102 土師器(252)出土状態(南より), SX
- 102 瓦(266)出土状態(北より), SB -
221 土師質土器(269)出土状態(北より)
- PL.33 SK - 201土師器(275)出土状態(北より),
SK - 206 土師質土器(278)出土状態(西
より), SK - 218 土師質土器(280)出土
状態(南より), SK - 230 瓦器(283)出土
状態(北より), SK - 230 瓦器(285)出土
状態(北より), SK - 231 瓦器(286)出土
状態(南より), SK - 231 瓦器(287)出土
状態(北より), SD - 211 須恵器(293)出
土状態(北西より)
- PL.34 SD - 224 青磁(302)出土状態(南より),
P - 203 土師質土器(306)出土状態(南よ
り), P - 210 土師質土器(313)出土状態
(西より), P - 211 土師器(314)出土状
態(南より), P - 212 須恵器(315)出土
状態(北東より), P - 220 土師器(323)出
土状態1(北西より), P - 220 土師器(323)
出土状態2(北西より), P - 230 土師質
土器(334)出土状態(東より)
- PL.35 P - 236 青磁(341)出土状態(南東より),
P - 241 古銭(348)出土状態(北より), P
- 249 土師質土器(356)出土状態(北東よ
り), P - 252 土師質土器(361)出土状態
(西より), P - 255 土師質土器(364)出
土状態(西より), SB - 304 石製品(376)
出土状態(東より), SK - 328 近世陶器
(388)出土状態(北より), SK - 328 遺物
(390・399)出土状態(南より)
- PL.36 SK - 337 瓦(418)出土状態(西より),
SK - 337 曲物出土状態(南西より), SK
- 354 近世磁器(427)出土状態(南より),
SK - 354 近世磁器(427・429・431)出土
状態(北より), SK - 354 近世磁器(431)
出土状態(東より), SK - 354 遺物(433・
434)出土状態(南東より), SK - 357 須
恵器(440)出土状態(北東より), P - 306
古銭(454)出土状態(南東より)
- PL.37 SB - 101 P - 1 礎板出土状態(北より),
SB - 101 P - 2 礎板出土状態(南より),
SB - 101 P - 3 礎板出土状態(南より),
SB - 101 P - 4 礎板出土状態(南より),
SB - 101 P - 5 礎板出土状態(南より),
SB - 102 礎石検出状態(南より), SB - 102
礎石セクション(西より), SB - 102
礎石(南より)
- PL.38 土師質土器(羽釜), 瓦質土器(羽釜)
白磁(碗), 青磁(碗), 青白磁(合子)
- PL.39 土師質土器(羽釜), 瓦質土器(羽釜)
青磁(碗)
- PL.40 須恵器(蓋)
須恵器(杯)
- PL.41 瓦(軒丸瓦)
瓦(軒丸瓦)
- PL.42 瓦(軒丸瓦)
近世磁器(蓋)
- PL.43 瓦(軒丸瓦)

- 土師質土器(小皿)
- PL.44 瓦(平瓦)
- PL.45 瓦(平瓦)
- PL.46 瓦(平瓦)
- PL.47 瓦(丸瓦・平瓦)
- PL.48 土師器(杯), 須恵器(杯・高杯・蓋), 黑色土器(椀), 瓦(軒丸瓦)
- PL.49 須恵器(壺), 瓦(平瓦)
- PL.50 土師質土器(火鉢), 瓦(平瓦・丸瓦), 近世陶器(皿), 土製品(塙仏)
- PL.51 須恵器(杯・高杯), 備前焼(播鉢), 瀬戸・美濃系陶器(皿), 近世磁器(皿・瓶)
- PL.52 土師器(甕), 須恵器(壺), 青磁(碗), 近世陶器(鉢), 近世磁器(皿), 石製品(石鍋)
- PL.53 瓦(軒丸瓦・平瓦・鬼瓦), 近世陶器(壺), 近世磁器(瓶)
- PL.54 土師質土器(焜炉), 瓦(軒丸瓦・鳥衾), 近世陶器(蓋), 近世磁器(蓋)
- PL.55 東播系須恵器(甕・片口鉢), 青磁(碗), 近世陶器(皿), 近世磁器(碗・鉢), 土製品(土錘)
- PL.56 土師器(杯), 須恵器(杯・高杯・蓋), 青磁(碗)
- PL.57 土師質土器(焜炉), 備前焼(播鉢), 瓦質土器(焜炉), 瓦(軒丸瓦), 近世陶器(碗・播鉢), 土製品(土錘), 鉄製品(釘)
- PL.58 土師器(皿・甕), 瓦器(椀), 青磁(碗), 近世磁器(皿)
- PL.59 土師器(高杯), 土師質土器(焜炉), 青磁(碗), 近世陶器(碗・播鉢), 近世磁器(碗), 土製品(土錘), 石製品(砥石), 鉄製品(釘)
- PL.60 近世陶器(碗), 近世磁器(碗・皿・猪口)
- PL.61 須恵器(甕), 土師質土器(焜炉), 近世陶器(甕・播鉢), 近世磁器(碗・皿), 土製品(土錘), 銅製品(煙管)
- PL.62 土師器(杯), 須恵器(杯・壺), 土師質土器(小皿), 瓦(軒平瓦)
- PL.63 瓦器(椀), 東播系須恵器(片口鉢), 土師質土器(杯・小皿), 石製品(砥石), 古銭(元豊通寶)
- PL.64 土師器(杯), 土師質土器(杯・小皿), 青磁(碗)
- PL.65 土師器(杯・皿), 須恵器(杯・皿・盤), 二彩陶器(小壺)
- PL.66 土師器(杯), 須恵器(杯), 近世陶器(皿), 近世磁器(紅皿), 古銭(寛永通寶)
- PL.67 土師器(杯・皿・蓋), 須恵器(杯)
- PL.68 土師器(杯), 須恵器(杯・蓋), 土師質土器(小皿)
- PL.69 須恵器(蓋), 瓦器(小皿・椀), 土師質土器(杯・小皿), 瀬戸・美濃系陶器(皿)
- PL.70 土師器(杯), 須恵器(杯), 土師質土器(小皿・羽釜), 鉄製品(刀子)
- PL.71 瓦器(小皿・椀), 土師質土器(小皿), 青磁(碗), 古銭(元祐通寶・熙寧元寶)
- PL.72 土師質土器(杯・小皿), 瀬戸・美濃系陶器(皿), 青磁(碗), 瓦(平瓦), 近世磁器(蓋), 青花(碗), 土製品(土錘), 鉄製品(短刀)
- PL.73 近世陶器(皿・蓋), 近世磁器(皿・紅皿・蓋), 鉄製品(皿・釘), 銅製品(煙管)

付図目次

- 付図1 野田遺跡第Ⅱ調査地区古代遺構平面図(S=1/200)
- 付図2 野田遺跡第Ⅱ調査地区中世遺構平面図1(S=1/200)
- 付図3 野田遺跡第Ⅱ調査地区近世以降遺構平面図(S=1/200)

第 I 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が国土交通省四国整備局(現四国地方整備局)から業務委託を受けた土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成13年度から14年度にかけて実施した野田遺跡(野田遺跡第Ⅱ調査地区)の発掘調査の結果をまとめたものである。この調査は国土交通省四国整備局高知工事事務所(現高知河川国道事務所)が実施している土佐市バイパス建設工事に伴い、工事区域内に所在する遺跡(埋蔵文化財)の内、工事の影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い、記録保存を図ることを目的としている。

野田遺跡は昭和49年に道路工事の際発見された縄文時代から近世にかけての複合遺跡で、仁淀川右岸の自然堤防上に立地する。野田遺跡において初めて発掘調査が行われたのは、平成12年度の土佐市バイパス建設工事に伴う発掘調査である。この調査(野田遺跡第Ⅰ調査地区)では、中世から近世にかけての多くの遺構を検出し、溝によって区画された屋敷跡や、和鏡などを副葬する屋敷墓も確認している。また、この調査区はホノギ(小字)に「土居」と残っており、長宗我部地検帳にも多くの「屋敷」がみられる部分でもある。

同平成12年度には第Ⅰ調査地区の東側についても試掘調査を行い、古代から近世にかけての遺構・遺物が検出され、県道39号土佐伊野線以東についても第Ⅱ調査地区として、平成13・14年度に本調査を行うこととなった。本調査では第Ⅰ調査地区と同様な中近世の溝で囲まれた屋敷跡を確認するとともに、古代の建物跡や瓦が出土し、これまで知られていなかった古代寺院の存在が明らかとなった。

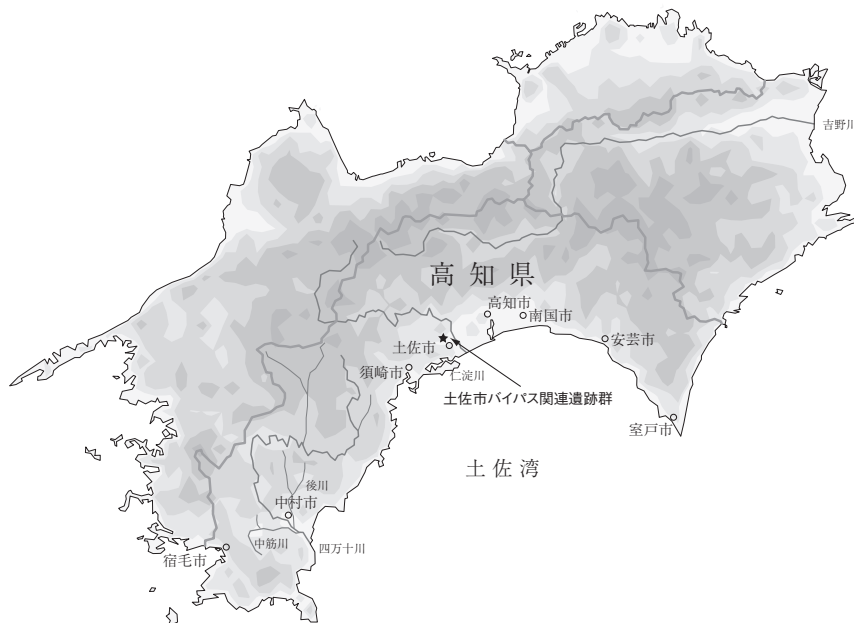


Fig.1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡位置図

2. 調査の契機と経過

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

平成8年度から土佐市バイパス建設に伴って市道都市計画道路1号線以西について光永・岡ノ下遺跡や天神遺跡などの本調査を実施している。平成11年度にはそれ以东についても土佐市バイパスが建設されることとなり、平成11・12年度に確認調査を行った。平成11年度は市道都市計画道路1号線から県道39号土佐伊野線間について確認調査を行い、その結果を受け、平成12



Fig.2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S = 1/100,000)

年度には野田遺跡第I調査地区として本調査を実施し、平成13年度に報告書(『野田遺跡I』-土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書V-)が刊行されている。さらに平成12年度には県道39号土佐伊野

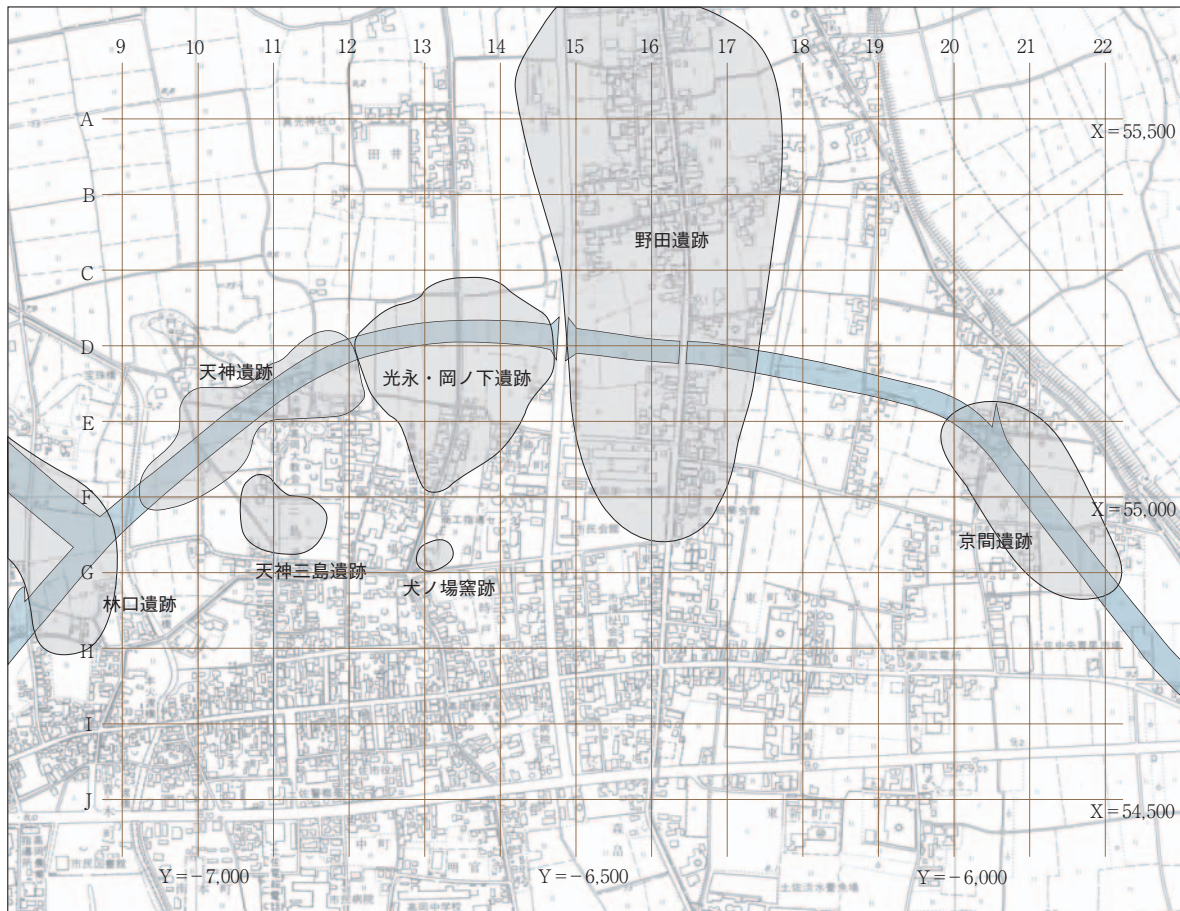


Fig.3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図(S = 1/10,000)

線以東の試掘調査を行い、野田遺跡が約100m東まで拡がることを確認され、野田遺跡第II調査地区として平成13・14年度に本調査を行うこととなった。

調査は、平成13年度に西部と工事用道路部分(南部約8m幅)を2回に分けて行い、平成14年度に残りの部分を土置き場の関係などから3回に分けて実施した。

(2) 確認調査

確認調査は県道39号土佐伊野線の東約80mの地点に3ヶ所のトレンチ(5×5m)を設定し、平成12年9月25日から26日まで行った。掘削は機械力(ユンボ)と人力、遺構検出については人力で行った。また、遺構については検出に留めた。

確認調査では設定したすべてのトレンチにおいて、地表下0.34～0.56mで遺物包含層を確認し、遺物包含層からは須恵器や土師質土器、陶磁器、瓦など、古代から近世にかけての遺物が出土した。また、遺物包含層を取り除いた段階で土坑、溝跡、ピットなどの遺構が検出された。この確認調査によって野田遺跡の範囲がこれまでより東に拡がることが判明し、県道39号土佐伊野線より東側についても本調査が必要であると判断された。県道39号土佐伊野線は自然堤防頂部にあたり、江戸時代に造られた水路(中井筋用水)も走っており、この県道を中心に遺跡が拡がっていることが確認された。また、第II調査地区の東端に走る長池川以東は、平成13年度に確認調査を行ったが、流れ込みとみられる遺物はみられたものの、遺物包含層、遺構は確認されず、野田遺跡の東端は県道39号土佐伊野線より東約100mまでであると確認された。本調査においても第II調査地区の東端は砂礫層の堆積が厚く、中世には地形が大きく下がっていたことが確認されている。

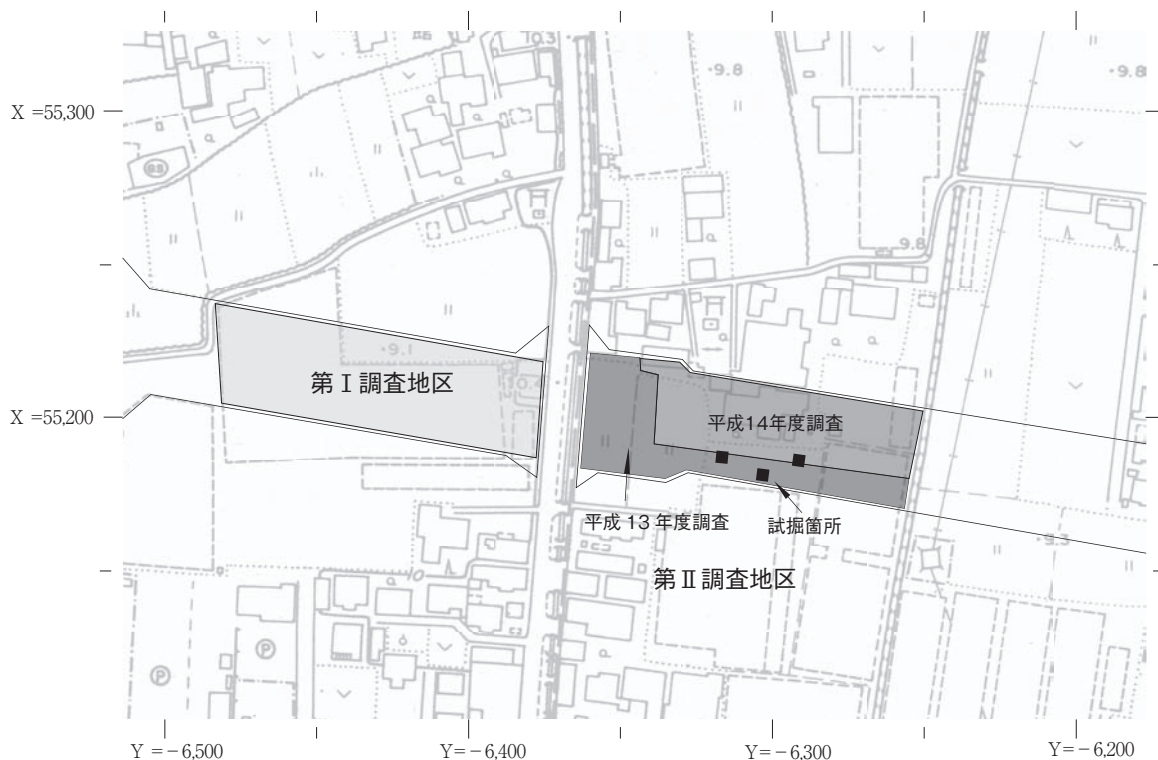


Fig.4 調査対象区域図及び調査区設定図(S = 1/2,500)

2. 調査の契機と経過

Table.1 土佐市バイパス発掘調査概要

遺跡名	調査年度	調査面積	調査延べ面積	主な検出遺構
光永・岡ノ下遺跡	H8・9・11年度	6,785 m ²	7,306 m ²	古墳(祭祀跡), 古代・中世(掘立柱建物跡, 柵列, 土坑, 溝跡, ピットなど)
天神遺跡	H8～10年度	8,527 m ²	14,817 m ²	弥生(竪穴住居跡, 土坑, 土器集中遺構など), 古代(溝跡, 畝状遺構など), 中世(掘立柱建物跡, 柵列, 土坑, 溝跡, 畝状遺構, ピットなど), 近世以降(土坑, ピットなど)
林口遺跡	H8・10・11年度	8,601 m ²	8,960 m ²	中世・近世(掘立柱建物跡, 柵列, 土坑, 溝跡, ピットなど)
蓮池城跡北面遺跡	H11年度	1,069 m ²	1,091 m ²	中世・近世(掘立柱建物跡, 柵列, 土坑, 溝跡, ピットなど)
野田遺跡	H12～14年度	7,118 m ²	11,028 m ²	古代(掘立柱建物跡, 礎石建物跡, 土坑, 溝跡, ピットなど), 中世・近世(掘立柱建物跡, 柵列, 土坑, 溝跡, ピットなど)
京間遺跡	H12～15年度	8,270 m ²	10,241 m ²	中世・近世(掘立柱建物跡, 柵列, 土坑, 溝跡, 井戸跡, ピットなど)
合計		40,370 m ²	53,443 m ²	

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の概要

(1) 調査の概要

今回の調査は第Ⅰ調査地区の東側で、平成13・14年度の2年に互って調査を行った。調査では第Ⅰ調査区と同時期の溝によって区画された屋敷跡を確認し、屋敷地が東に広がっていたことが確認された。また、近世後期においても集落を形成しており、大掛りな水利施設とみられる遺構も確認している。さらに、今回の調査では第Ⅰ調査地区では確認されていなかった古代の遺物包含層と遺構が検出された。出土遺物には土師器、須恵器のほか多量の瓦がみられ、掘立柱建物跡や礎石建物跡などの遺構も確認されており、これまで知られていなかった古代寺院の存在が明らかとなった。古代の遺構は野田遺跡の西隣に位置する光永・岡ノ下遺跡でも確認されており、緑釉陶器等の出土から官衙関連施設とみられ、古代寺院との関連が注目される。

調査は平成13年度に水路付け替え部分(調査区西部)と仮設道部分の幅約10m(調査区南部・調査区南東部)を行い、平成14年度に残りの調査区北東部と土置き場の関係より調査区中央部を2回に分けて調査を行った。調査期間は平成13年11月14日から平成14年2月8日、平成14年5月13日から6月19日、10月30日から平成15年3月3日で実働日152日、調査面積4,287㎡であった。

(2) 調査日誌抄

平成13年度

調査区西部(2001.11.14～2002.1.12)実働38日

- 11.14 調査区の周囲に安全柵を打つ。
- 11.15 調査区北西部より重機による土層掘削を開始する。併行して遺構検出を行う。軒丸瓦が出土する。
- 11.16 調査区西部の土層掘削を行う。
- 11.19 調査区中央部の土層掘削を行う。グリッド杭の設置を開始する。
- 11.21 重機による土層掘削を終了し、遺構検出及び遺構配置図の作成を行う。
- 11.22 調査区中央部及び南部の遺構検出を行い、畝状遺構を検出する。
- 11.23 精査を終了し、近世の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 11.26 調査区北部より遺構調査を開始する。
- 11.27 引き続き調査区北部の遺構調査を行い、併行して遺構平面図を作成する。
- 11.28 調査区中央部を中心に遺構調査を行う。
- 11.29 調査区中央部の遺構調査を行う。午後より

- 降雨のため作業中止。
- 11.30 調査区北部の遺構調査を行う。
- 12.3 調査区北部及び中央部の遺構調査を行う。
- 12.4 午前は作業中止。午後から調査区南部の遺構調査を行う。
- 12.5 引き続き調査区南部の遺構調査を行う。
- 12.6 調査区中央部及び南部の遺構調査を行う。



Fig.5 発掘調査風景1

1. 調査の概要

- 12.7 調査区南部の遺構調査を行い、併行して調査区を精査する。
- 12.8 引き続き調査区南部の遺構調査及び調査区の精査を行う。
- 12.10 近世の遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 12.11 平面実測及びレベル測量を終了し、調査区北部より中世の遺物包含層の人力掘削を開始する。
- 12.12 引き続き人力掘削を行い、調査区東部は重機による土層掘削を行う。
- 12.13 雨天のため作業中止。
- 12.14 調査区中央部の人力掘削を行い、併行して遺構配置図の作成を開始する。
- 12.17 調査区南部の人力掘削を行う。午後より降雨のため作業中止。
- 12.18 人力及び重機による土層掘削を終了し、調査区の精査を開始する。
- 12.19 中世の遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構調査を開始する。
- 12.20 調査区北部の遺構調査を行う。
- 12.21 引き続き調査区北部の遺構調査を行う。
- 12.25 調査区中央部の遺構調査を行う。午後より

降雨のため作業中止。

- 12.26 調査区中央部及び南部の遺構調査を行う。
- 12.27 調査区南部の遺構調査と調査区北東部の遺構完掘状態を写真撮影する。
- 12.28 調査区南部及び北東部の遺構調査を行う。
- 1.5 調査区北東部の遺構調査を行い、併行して遺構平面図の作成を開始する。
- 1.6 引き続き調査区北東部の遺構調査を行う。調査区の精査と平面実測及びレベル測量を行う。
- 1.8 調査区北東部の瓦出土状態及び中世の遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 1.9 中世の遺構完掘状態の航空写真撮影を行う。調査区東部に下層確認トレンチを設定し、古代の遺構を確認する。
- 1.10 古代の遺構の調査を終了し、調査区南部より埋め戻しを開始する。
- 1.11 調査区北部に下層確認トレンチを設定し、調査を行う。
- 1.12 北壁セクション図を作成する。埋め戻しを終了し、調査区西部の調査を完了する。

調査区南部(2002.1.15～1.28)実働9日

- 1.15 調査区東部より重機による土層掘削を開始する。を終了し、古代の遺物包含層の掘削を開始する。
- 1.16 雨天のため作業中止。
- 1.17 調査区中央部の土層掘削と併行して遺構検出を行う。
- 1.18 中世の遺構検出状態の写真撮影を行い、調査区西部より遺構調査を開始する。
- 1.21 午前昨夜の降雨のため作業中止。午後から遺構調査及び調査区の精査を行う。
- 1.22 中世の遺構完掘状態の写真撮影及び航空写真撮影を行う。平面実測及びレベル測量
- 1.23 古代の遺構検出・完掘状態の写真撮影を行う。
- 1.24 調査区南部に下層確認トレンチを設定し、調査を行う。
- 1.25 調査区南壁セクション図の作成を行う。調査区北部より埋め戻しを開始する。
- 1.28 埋め戻しを終了し、調査区南部の調査を完了する。

調査区南東部(2002.1.28～2.8)実働10日

- 1.28 調査区西部より重機による土層掘削を開始し、併行して遺構検出を行う。写真撮影を行う。
- 1.29 中世の遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構調査を開始する。
- 1.30 引き続き遺構調査を行う。
- 1.31 中世の遺構完掘状態の写真撮影及び航空写真撮影を行う。
- 2.1 下層よりさらに中世の遺物包含層(Ⅳ-2層)を確認し、遺物包含層掘削後、遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 2.4 遺構調査を行い、遺構完掘状態の写真撮影を行う。

- 2.5 遺構完掘状態の航空写真撮影を行う。中世の遺物包含層(Ⅳ-3層)を掘削する。
- 2.6 中世の遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 2.7 中世の遺構調査及び遺構完掘状態の写真撮影を行う。調査区北部に下層確認トレンチを設定し、調査を行う。
- 2.8 埋め戻しを行い、調査区南東部の調査を完了する。



Fig.6 測量風景

平成14年度

調査区北東部(2002.5.13~6.19)実働24日

- 5.13 調査区の周囲に安全柵を打ち、南西部より重機による土層掘削を開始する。
- 5.14 調査区中央部の土層掘削を行い、併行してグリッド杭の設置及び遺構配置図の作成を開始する。
- 5.15 雨天のため作業中止。
- 5.16 雨天のため作業中止。
- 5.17 雨天のため作業中止。
- 5.20 調査区北部の土層掘削及び遺構検出を終了する。
- 5.21 近世の遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構調査を開始する。
- 5.22 調査区中央部の溝跡の調査を行う。午後より降雨のため作業中止。
- 5.23 午前は降雨のため作業中止。午後から調査区中央部の溝跡を中心に調査を行う。
- 5.24 近世の遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面実測及びレベル測量を終了する。調査区東部の中世遺物包含層(Ⅳ-3~5層)を人力掘削する。
- 5.27 引き続き調査区東部の人力掘削を行う。
- 5.28 調査区東部の人力掘削を行う。
- 5.29 人力掘削を終了し、中世の遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構調査を開始する。
- 5.30 引き続き遺構調査を行い、遺構より土師質土器の杯が出土し、写真撮影を行う。
- 5.31 遺構調査をほぼ終了し、遺構平面図の作成を行う。
- 6.3 中世の遺構完掘状態の写真撮影を行い、平面実測及びレベル測量を終了する。
- 6.4 中世の遺構完掘状態の航空写真撮影を行

- う。午後より中世遺物包含層(Ⅳ-6・7層)を人力及び重機により掘削を開始する。
- 6.5 引き続き人力及び重機による土層掘削を行う。
- 6.6 引き続き人力掘削を行い、重機による土層掘削は終了する。
- 6.7 遺構検出を行い溝跡を確認する。東壁の写真撮影及びセクション図の作成を行う。
- 6.10 溝跡の調査及び南壁の写真撮影を行う。
- 6.11 雨天のため作業中止。
- 6.12 調査区の精査を行い、併行して遺構平面図を作成する。
- 6.13 遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面実測及びレベル測量を終了する。
- 6.14 北壁の写真撮影を行う。調査区中央部に下層確認トレンチを設定し、調査を行う。
- 6.17 下層確認を終了し、埋め戻しを開始する。
- 6.18 昨夜の降雨のため排水作業を行う。
- 6.19 埋め戻しを終了し、調査区北東部の調査を完了する。



Fig.7 航空撮影風景

1. 調査の概要

調査区中央部(2002.10.30～12.27)実働31日

- 10.30 調査区の周囲に安全柵を打ち、宅地跡のコンクリートをクラッシャー付重機で解体する。
- 10.31 引き続き解体を行う。併行して調査区北西部から重機による土層掘削を開始する。
- 11.1 引き続き調査区北部の重機による土層掘削を行う。
- 11.5 調査区中央部の重機による土層掘削を行い、遺構検出及びグリッド杭の設置を開始する。
- 11.6 調査区南部の重機による土層掘削を終了し、遺構検出及び遺構配置図の作成を行う。
- 11.7 中近世の遺構検出状態の写真撮影を行う。中学生が体験学習に来る。
- 11.8 調査区北西部から遺構調査を開始する。
- 11.11 調査区西部の遺構調査を行う。
- 11.13 調査区北西部の遺構調査を行う。ピットより青磁が出土し、写真撮影を行う。
- 11.14 調査区中央部の遺構調査を行う。土坑より瓦器が出土し、写真撮影を行う。
- 11.15 引き続き調査区中央部の遺構調査を行う。
- 11.18 調査区南部の遺構調査と併行して遺構平面図の作成を開始する。
- 11.19 調査区南部及び東部の遺構調査を行う。
- 11.20 引き続き調査区南部及び東部の遺構調査を行う。
- 11.21 調査区東部の遺構調査を行う。
- 11.22 引き続き調査区東部の遺構調査を行う。
- 11.25 雨天のため作業中止。
- 11.26 調査区東部の遺構調査と併行して調査区の精査を開始する。
- 11.27 遺構調査を終了し、調査区の全面精査を行う。
- 11.28 中近世の遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面実測及びレベル測量を終了する。
- 12.9 調査区の全面精査を行う。
- 12.10 中近世の遺構完掘状態の航空写真撮影を行う。古代の遺物包含層の掘削を開始する。
- 12.11 調査区中央部の掘削を行う。
- 12.12 調査区東部の掘削を行う。
- 12.13 引き続き調査区東部の掘削を行う。
- 12.16 雨天のため作業中止。
- 12.17 調査区北部及び西部の掘削を行う。
- 12.18 引き続き調査区北部及び西部の掘削を行う。
- 12.19 雨天のため作業中止。
- 12.20 古代の遺物包含層の掘削を終了する。
- 12.24 古代の遺構検出状態を写真撮影し、遺構調査を行う。
- 12.25 古代の遺構完掘状態の写真撮影を行う。調査区南部及び東部の重機による土層掘削を行い、平面実測及びレベル測量を終了する。調査区北西部に下層確認トレンチを設定し、調査を行う。
- 12.26 調査区北西部の重機による土層掘削を行う。セクション図の作成を行う。
- 12.27 埋め戻しを終了し、調査区中央部の調査を完了する。

調査区中央部(2003.1.7～2003.3.3)実働40日

- 1.7 調査区の周囲に安全柵を打ち、宅地跡のコンクリートをクラッシャー付重機で解体する。
- 1.8 調査区北西部から重機による土層掘削を開始する。
- 1.9 引き続き重機による土層掘削を行う。土師質土器が出土し、写真撮影を行う。
- 1.10 重機による土層掘削と併行して遺構検出を開始する。
- 1.11 重機による土層掘削を終了する。
- 1.14 調査区北部及び西部を中心に遺構検出を行う。グリッド杭の設置と遺構配置図の作成を開始する。
- 1.15 中近世の遺構検出状態の写真撮影を行う。



Fig.8 発掘調査風景2

- 調査区西部より遺構調査を開始する。
- 1.16 調査区西部を中心に遺構調査を行う。
 - 1.17 引き続き調査区西部の遺構調査を行う。
 - 1.20 調査区西部及び中央部の遺構調査を行う。
 - 1.21 調査区西部及び中央部の遺構調査を行う。
 - 1.22 引き続き調査区西部及び中央部の遺構調査を行う。
 - 1.23 昨夜の降雨のため排水作業を行い、調査区西部及び中央部の遺構調査を行う。
 - 1.24 引き続き調査区西部及び中央部の遺構調査を行う。
 - 1.25 調査区中央部の遺構調査を行う。
 - 1.27 雨天のため作業中止。
 - 1.28 調査区中央部の遺構調査を行う。
 - 1.29 降雪のため作業中止。
 - 1.30 調査区中央部の遺構調査を行う。
 - 1.31 引き続き調査区中央部の遺構調査を行う。
 - 2.3 調査区中央部及び東部の遺構調査を行う。
 - 2.4 調査区東部の遺構調査を行い、併行して調査区西部より精査を開始する。
 - 2.5 中近世の遺構完掘状態の写真撮影及び航空写真撮影を行う。遺構平面図の作成を終了し、レベル測量を開始する。
 - 2.6 レベル測量を終了し、調査区西部より古代の遺物包含層の掘削を開始する。
 - 2.7 調査区西部の土層掘削を行う。須恵器の蓋・杯が出土し、写真撮影を行う。
 - 2.10 引き続き調査区西部の土層掘削を行う。
 - 2.12 調査区西部及び中央部の土層掘削を行う。
 - 2.13 調査区西部及び中央部の土層掘削と併行してグリッド杭の設置を行う。土師器の杯が出土し、写真撮影を行う。
 - 2.14 引き続き調査区西部及び中央部の土層掘削を行う。
 - 2.15 調査区中央部の土層掘削を行う。SX-102より軒丸瓦や須恵器が出土し、実測図の作成及び写真撮影を行う。
 - 2.17 調査区中央部の土層掘削を行う。土師器の皿、須恵器の杯が出土し、写真撮影を行う。
 - 2.18 古代の遺物包含層の掘削を終了し、遺構検出を行う。
 - 2.19 古代の遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構調査を開始する。
 - 2.20 調査区西部の遺構調査を行う。
 - 2.21 引き続き調査区西部の遺構調査を行う。
 - 2.22 遺構調査及び調査区の精査を行う。
 - 2.24 引き続き遺構調査及び調査区の精査を行う。
 - 2.25 古代の遺構完掘状態の写真撮影及び航空写真撮影を行う。平面実測及びレベル測量を終了する。
 - 2.26 調査区北西部の下層確認調査を行う。調査区南東部から埋め戻しを開始する。
 - 2.27 引き続き調査区北西部の下層確認調査を行い、古代の遺構を確認する。
 - 2.28 古代の遺構調査と測量を終了する。
 - 3.3 埋め戻しを終了し、すべての調査を完了する。



Fig.9 発掘調査風景3

2. 調査区の概要

(1) 層序

調査区西部・中央部では基本的に旧耕作土と床土、その下に近世、中世、古代の遺物包含層の堆積がみられた。調査区東部については中世には地形が大きく下がっており、西部・中央部とは異なる堆積が認められたため別に記した。

2. 調査区の概要

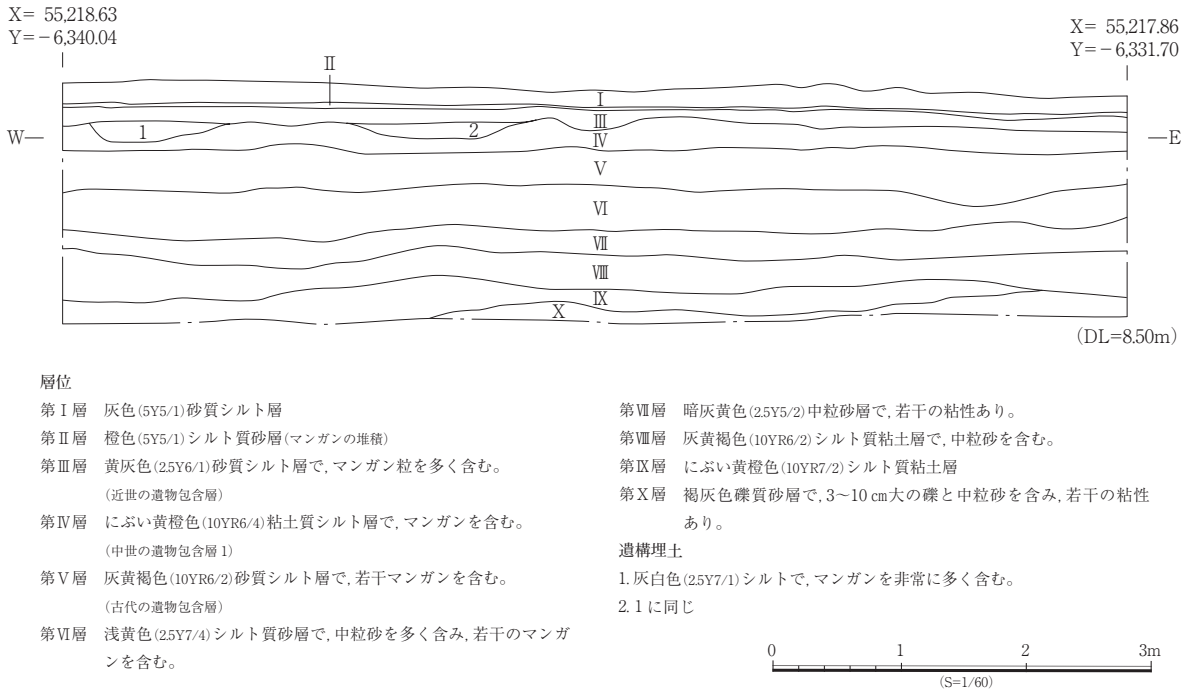


Fig.10 調査区中央部セクション図

なお、調査区中央部北壁では下記の土層が認められた。

- 第I層 灰色(5Y5/1)砂質シルト層
- 第II層 橙色(5Y5/1)シルト質砂層(マンガンの堆積)
- 第III層 黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト層で、マンガン粒を多く含む。(近世の遺物包含層)
- 第IV層 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土質シルト層で、マンガンを含む。(中世の遺物包含層1)
- 第V層 灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト層で、若干マンガンを含む。(古代の遺物包含層)
- 第VI層 浅黄色(2.5Y7/4)シルト質砂層で、中粒砂を多く含み、若干のマンガンを含む。
- 第VII層 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂層で、若干の粘性あり。
- 第VIII層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土層で、中粒砂を含む。
- 第IX層 にぶい黄橙色(10YR7/2)シルト質粘土層
- 第X層 褐灰色礫質砂層で、3~10cm大の礫と中粒砂を含み、若干の粘性あり。

第I層は旧耕作土で、調査区北部を除きほぼ全面でみられた。厚さ約16cmを測り、西から東に緩やかに傾斜し、約20cmの比高差がみられた。調査区北部では調査前は宅地であり、第I層が見られず、攪乱を受けている箇所が多くみられた。

第II層は旧耕作土に伴う床土で、マンガンの堆積である。厚さ約3cmを測り、調査区西部を中心に一部で認められた。

第III層は近世の遺物包含層で、調査区西部・中央部で見られた。厚さ8~24cmを測り、調査区中央部から西部に向かって緩やかに傾斜する。調査区北部では一部近代の遺物包含層がみられ、近世の遺物包含層は削平を受けた可能性がある。

第IV層は中世の遺物包含層で、調査区東端を除きほぼ全面でみられた。厚さ9~29cmを測り、調査

区中央部から西部・東部に向かって緩やかに傾斜する。

第Ⅴ層は古代の遺物包含層で、土壌化が非常に弱く、灰黄褐色を呈する。調査区西部・中央部で見られ、中央部から西部に向かって緩やかに傾斜し、厚さ14～35cmを測る。

第Ⅵ層から第Ⅸ層は自然堆積層で、第Ⅵ層から第Ⅷ層は調査区西部・中央部、第Ⅸ層は調査区西部のみでみられた。

第Ⅹ層は礫質砂層で、河川の氾濫による堆積とみられる。調査区全面で見られ、調査区中央部では地表下約0.8m、調査区東端では地表下1.5mで認められ、調査区の東側に流れる長池川に向かって大きく地形が下がっている。また、長池川の東側の確認調査では地表下約1.2mで砂礫層が確認されており、長池川の周辺が最も地形が低く、長池川の東側は緩やかに地形が上がって行くものとみられる。

調査区東部では古代・近世の遺物包含層は確認されず、地形が落ち込んだ部分では中世の遺物包含層が6層確認された。

なお、調査区東部北壁では下記の堆積が認められた。

第Ⅰ層 灰色(5Y5/1)砂質シルト層

第Ⅱ層 橙色(5YR7/1)礫質砂層(マンガンの堆積)

第Ⅳ層 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂層で、マンガンを多く含む。(中世の遺物包含層1)

第Ⅳ-1層 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土質シルト層(中世の遺物包含層2)

第Ⅳ-2層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト質砂層で、粘性は弱く、炭化物を含む。(中世の遺物包含層3)

第Ⅳ-3層 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質砂層で、細粒砂と炭化物を含む。

第Ⅳ-4層 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト質砂層

第Ⅳ-5層 にぶい黄橙色(10YR7/4)礫質砂層で、粗粒砂と1cm大の礫を含む。(中世の遺物包含層4)

第Ⅳ-6層 にぶい黄橙色(10YR6/3)礫質砂層で、粗粒砂と1cm大の礫を含む。

第Ⅳ-7層 にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂層で、細粒砂を多く含む。(中世の遺物包含層5)

第Ⅳ-8層 にぶい黄橙色(10YR6/4)礫質砂層で、1cm大の礫と粗粒砂を含む。

第Ⅳ-9層 灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂層

第Ⅳ-10層 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト層で細粒砂を含む。

第Ⅳ-11層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂層で、細粒砂を含む。(中世の遺物包含層6)

第Ⅳ-12層 浅黄色(2.5Y7/3)シルト質砂層で、若干の粘性があり、粗粒砂と1cm大の礫を含む。

(中世の遺物包含層7)

第Ⅳ-13層 灰色(5Y5/1)粗粒砂層

第Ⅴ層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂層で、細粒砂と黄色シルトのブロックを含む。

第Ⅺ層 にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト層

第Ⅻ層 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト層

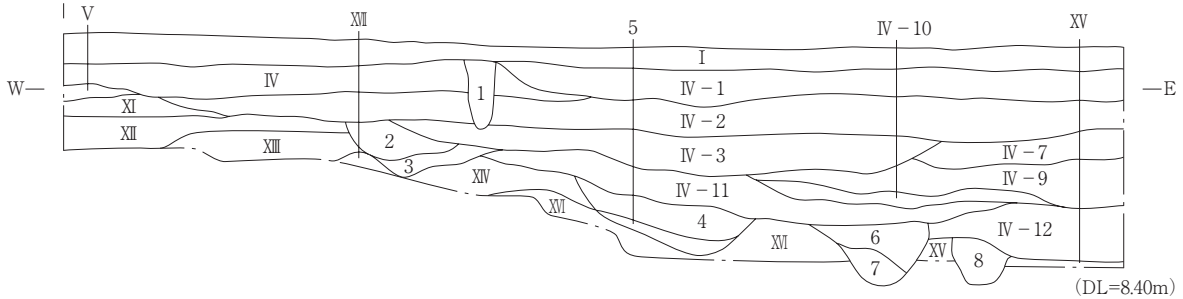
第Ⅼ層 明黄褐色(10YR7/6)シルト質砂層

第Ⅽ層 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルト層

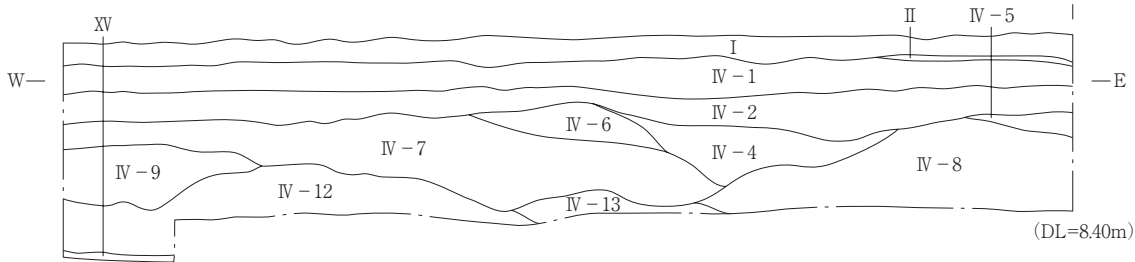
第Ⅾ層 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂層で、細粒砂を非常に多く含み、にぶい黄橙色シルトのブロックと1cm大の礫を含む。

2. 調査区の概要

X= 55,204.30
Y=-6,253.10



X= 55,201.57
Y=-6,240.29



層位

- 第 I 層 灰色(5Y5/1)砂質シルト層
- 第 II 層 橙色(5YR7/1)礫質砂層(マンガンの堆積)
- 第 IV 層 におい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂層で、マンガンを多く含む。
(中世の遺物包含層 1)
- 第IV-1層 におい黄褐色(10YR6/4)粘土質シルト層(中世の遺物包含層 2)
- 第IV-2層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト質砂層で、粘性は弱く、炭化物を含む。(中世の遺物包含層 3)
- 第IV-3層 におい黄褐色(10YR6/4)シルト質砂層で、細粒砂と炭化物を含む。
- 第IV-4層 におい黄褐色(10YR6/4)シルト質砂層
- 第IV-5層 におい黄褐色(10YR7/4)礫質砂層で、粗粒砂と1cm大の礫を含む。(中世の遺物包含層 4)
- 第IV-6層 におい黄褐色(10YR6/3)礫質砂層で、礫と粗粒砂を含む。
- 第IV-7層 におい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂層で、細粒砂を多く含む。
(中世の遺物包含層 5)
- 第IV-8層 におい黄褐色(10YR6/4)礫質砂層で、1cm大の礫と粗粒砂を含む。
- 第IV-9層 灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂層
- 第IV-10層 におい黄褐色(10YR6/3)砂質シルト層で細粒砂を含む。
- 第IV-11層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂層で、細粒砂を含む。
(中世の遺物包含層 6)
- 第IV-12層 浅黄色(2.5Y7/3)シルト質砂層で、若干の粘性があり、粗粒砂と1cm大の礫を含む。(中世の遺物包含層 7)

- 第IV-13層 灰色(5Y5/1)粗粒砂層
- 第 V 層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂層で、細粒砂と黄色シルトのブロックを含む。
- 第 XII 層 におい黄褐色(10YR6/4)シルト層
- 第 XIII 層 におい黄褐色(10YR6/3)砂質シルト層
- 第 XIV 層 明黄褐色(10YR7/6)シルト質砂層
- 第 XV 層 におい黄褐色(10YR6/4)砂質シルト層
- 第 XVI 層 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂層で、細粒砂を非常に多く含み、におい黄褐色シルトのブロックと1cm大の礫を含む。
- 第 XVII 層 におい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト層
- 第 XVIII 層 におい黄褐色(10YR6/3)礫質砂層で、若干の粘性あり。

遺構埋土

1. 灰色(5Y5/1)シルト質砂(ビニールハウス)
2. 灰黄色(2.5YR6/2)シルト質砂(SD-221)
3. 灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルトで、灰白色シルトのブロックを含む。(SD-221)
4. におい黄褐色(10YR6/3)砂質シルト(SD-224)
5. 浅黄色(2.5Y7/3)シルトで、細粒砂を非常に多く含む。(SD-224)
6. におい黄褐色(10YR6/3)シルト質砂で、中粒砂と炭化物を含む。(SD-225)
7. におい黄褐色(10YR7/2)粘土質シルトで、中粒砂と炭化物を含む。(SD-225)
8. 黄灰色(5Y6/1)砂とにおい黄褐色(10YR7/2)シルトが薄く交互に堆積する。
(SD-226)

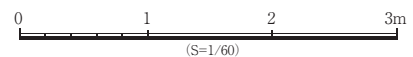


Fig.11 調査区東部セクション図

第 VII 層 におい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト層

第 VIII 層 におい黄褐色(10YR6/3)礫質砂層で、若干の粘性あり。

第 I 層は調査区西部・中央部でもみられた耕作土、第 II 層はそれに伴う床土で、調査区東端でみられた。

第 III 層は近世の遺物包含層であるが、調査区東部では認められなかった。

第IV層は中世の遺物包含層で、調査区西部・中央部でも認められた層である。

第IV-1層から第IV-13層は中世の堆積層で、調査区東部でのみ認められた。

第IV-1層は第IV層以降の遺物包含層で、ほぼ水平に堆積し、厚さ約20～25cmを測る。

第IV-2層から第IV-13層は第IV層以前の堆積層で、いずれも調査区東部でみられた。

第IV-2層は中世の遺物包含層で、ほぼ水平に堆積し、厚さ約20～35cmを測る。

第IV-3層は落ち込みの斜面部でのみみられた遺物包含層で、若干東に向かって傾斜し、厚さ約15～30cmを測る。

第IV-4層から第IV-6層は調査区東端の一部でみられた自然堆積層である。

第IV-7層は中世の遺物包含層で、やや東に傾斜し、厚さは0.15～0.65mを測る。

第IV-8層から第IV-10層は調査区東端の一部でみられた自然堆積層である。

第IV-11層は落ち込みの斜面部でのみみられた遺物包含層で、東に向かって傾斜し、厚さ約10～30cmを測る。

第IV-12層は中世の遺物包含層で、ほぼ水平に堆積し、厚さ約40cmを測る。

第IV-13層は調査区東端の一部でみられた自然堆積層である。

第V層は古代の遺物包含層で、調査区西部・中央部でも認められた層である。

第VI層から第X層は調査区西部・中央部で、古代の遺物包含層以下でみられた自然堆積層で、調査区東部では確認されなかった。

第XI層から第XIII層は調査区東部で、古代の遺物包含層以下でみられた自然堆積層である。第XI層から第XIII層は落ち込みの西側で確認された層で、水平に堆積する。第XIV層から第XVI層は落ち込みの斜面部で確認された層で、東に傾斜する。

(2) 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

近世陶器(Fig.12-1)

1は唐津焼の皿で、底部の約1/2が残存し、底径4.8cmを測る。底部には幅が広く、直立する削り出し高台を有する。内面と外面の体部下半まで灰釉を薄く施し、見込には砂目が残る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰色、外面が灰黄色または灰白色を呈する。

近世磁器(Fig.12-2～4)

2は碗で、約1/2が残存し、口径11.0cm、器高6.2cm、底径4.8cmを測る。底部には高く、ハの字状に開く削り出し高台を有し、体部は腰が張る形態を呈する。全面に透明釉、口縁端部は茶色の釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。見込には「年」と「萬」の文字、外面には波線で

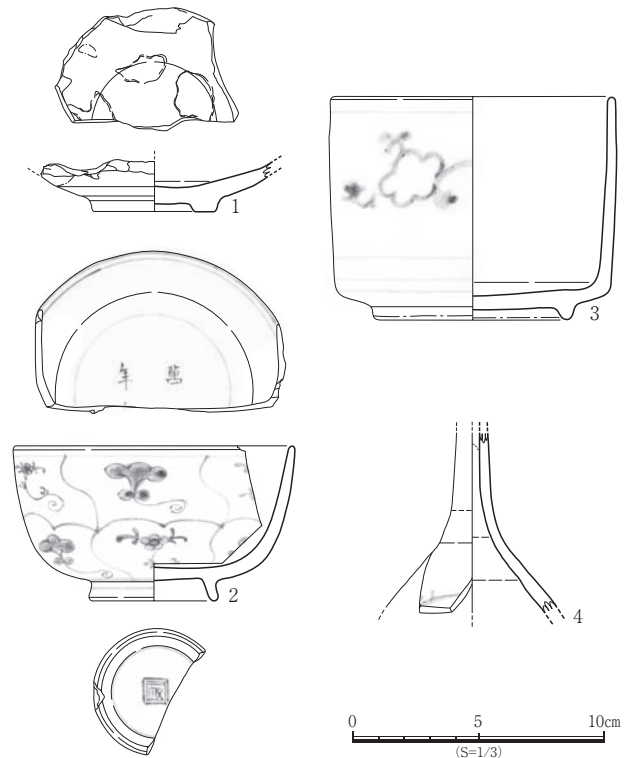


Fig.12 第I層出土遺物実測図(近世陶器・近世磁器)

2. 調査区の概要

区画した中に草花文の染付、高台内には銘がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

3は肥前系の鉢で、約1/2が残存し、口径11.0cm、器高8.9cm、底径7.6cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有し、体部は底部より屈曲して上方に立ち上がる。全面にやや緑味を帯びた透明釉を薄く施し、豊付は釉ハギを行う。外面には梅文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも明オリーブ灰色を呈する。

4は鶴首瓶で、一部が残存する。頸部は細く、上方に真直ぐ立ち上がる。外面と口縁部内面には白色釉を薄く施す。外面には一部染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

第Ⅲ層出土遺物

土師器(Fig.13-5)

5は皿で、底部の約1/3が残存し、底径8.6cmを測る。底部より屈曲して外上方に真直ぐ立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が灰色、外面が灰色または灰白色を呈する。

須恵器(Fig.13-6・7)

6は蓋で、天井部の一部が残存し、つまみ径は2.6cmを測る。天井部はほぼ平らで、内面は回転ナデ調整、外面はナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰色、外面が褐灰色を呈する。

7は壺で、底部の約1/2が残存し、底径7.8cmを測る。器壁は薄く、底部にはハの字状に開く高台が付き、胴部は平らな底部よりやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が明青灰色、外面が灰色を呈する。

土師質土器(Fig.13-8~10)

8は杯で、約1/3が残存し、口径9.4cm、器高3.5cm、底径5.0cmを測る。器高が低く、皿に近い形態を

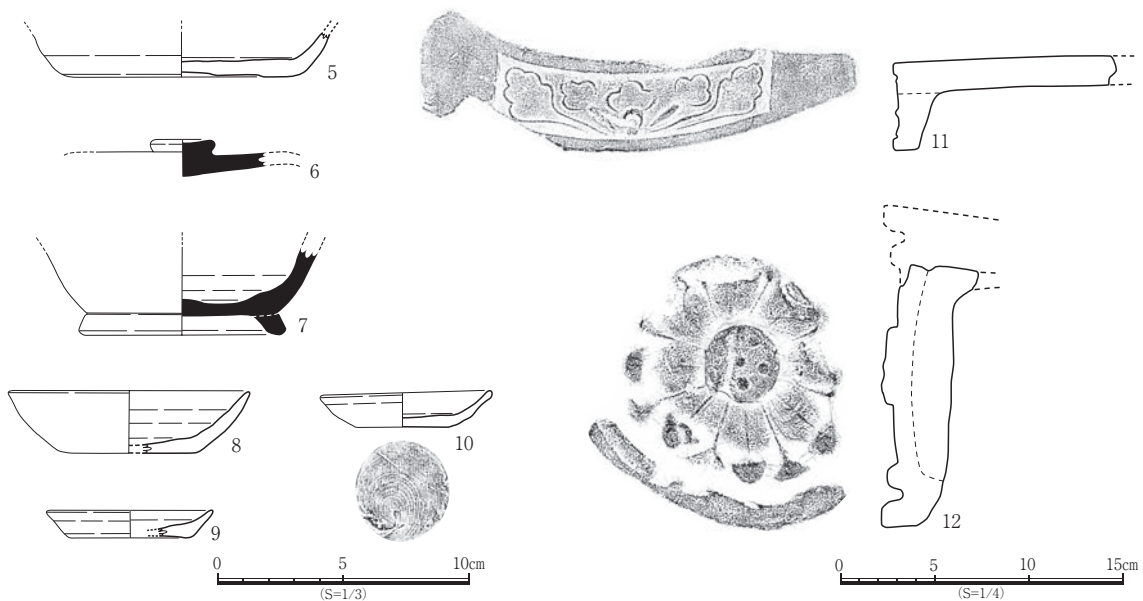


Fig.13 第Ⅲ層出土遺物実測図(土師器・須恵器・土師質土器・瓦)

呈する。器面には回転ナデ調整を施したとみられるが、著しく摩耗するため不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

9・10は小皿である。9は約1/3が残存し、口径6.4cm、器高1.1cm、底径4.6cmを測る。口縁部は真直ぐ外上方に伸び、端部は細く仕上げる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。10はほぼ完存し、口径6.6cm、器高1.5cm、底径3.6cmを測る。口縁部は真直ぐ外上方に伸び、端部は丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。
瓦(Fig.13-11・12)

11は軒平瓦で、一部を欠損し、残存長11.4cm、瓦当高4.7cmを測る。平瓦に顎を接合し、全面にナデ調整を施す。瓦当は中心に花文、両脇に草文がみられ、ハナレ砂が付着する。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は凹面が暗灰色または灰白色、凸面が暗灰色を呈する。

12は軒丸瓦で、瓦当の一部が残存し、直径16.8cm、外径13.1cm、中房径4.1cmを測る。瓦当は素弁八葉蓮華文で、花卉は稜を有し、花卉端は反転し、直線的に仕上げる。間弁は肉厚で三角形を呈し、中房の連子は1+5顆とみられる。周縁は圏線状の浅い溝が一部みられる。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや良く、色調は灰色を呈する。

第Ⅳ層出土遺物

土師器(Fig.14-13~16)

13~15は杯である。13は底部がほぼ完存し、底径6.2cmを測る。体部は平らな底部より屈曲して外上方に立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。14は約1/3が残存し、口径13.0cm、底径8.3cm、器高3.6cmを測る。器壁が薄く、体部は底部から緩やかに内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。器面は若干摩耗するが、口縁部内面には煤の付着がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。15は底部の破片で、皿または盤の可能性も考えられる。大型で、底部には高台が付く。器面には回転ナデ調整を施し、底部には直立する高台を貼付し、高台内はナデ調整を施す。器面には全面に赤色顔料を塗彩する。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともいぶき黄橙色または橙色を呈する。

16は皿で、約1/5が残存し、口径17.8cm、底径15.0cm、器高2.2cmを測る。口縁部は直線的に伸び、端部をやや細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施した後、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面がにぶき黄橙色、外面が褐灰色またはにぶき黄橙色

を呈する。

須恵器(Fig.15-17~29)

17は蓋である。口縁部の破片で、口径12.2cmを測る。天井は緩やかに口縁部に至り、口縁部を屈曲

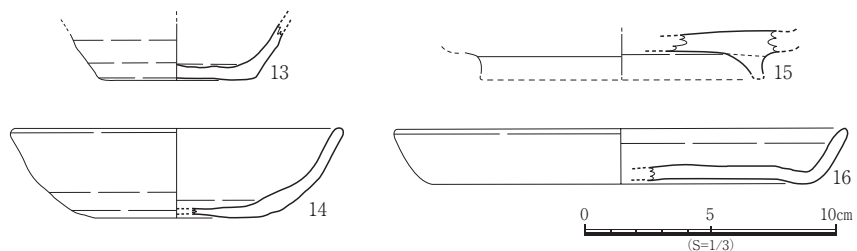


Fig.14 第Ⅳ層出土遺物実測図(土師器)

2. 調査区の概要

させ、端部を丸く収める。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

18～28は杯である。18は小型の杯で、約1/8が残存し、口径10.0cm、底径6.4cm、器高3.0cmを測る。体部は平らな底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸び、口縁部を薄く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。口縁部内外面には煤の付着がみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色または黒色、外面は灰白色または淡黄色を呈する。19～28は高台を有する杯である。19は底部の約1/3が残存し、底径8.8cmを測る。体部は底部より屈曲して立ち上がり、高台は直立する。器面には回転ナデ調整を施し、底部内外面にナデ調整を加える。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。20は底部の約1/4が残存し、底径9.2cmを測る。体部は底部より緩やかに立ち上がり、高台はハの字状に開く。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや粗く、焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。21は底部の約1/4が残存し、底径9.9cmを測る。体部は外上方に真直ぐ伸び、高台は低く直立する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色または灰黄色、外面が灰黄色を呈する。22は約1/2が残存し、口径12.6cm、底径8.0cm、器高4.1cmを測る。体部は底部より屈曲して立ち上がり、外上方に真直ぐ伸び、高台は直立する。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加える。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色または灰色、外面が灰色を呈する。23は約1/8が残存し、口径13.3cm、底径8.6cm、器高4.4cmを測る。器壁が薄く、体部は底部より屈曲して立ち上がり、外上方に真直ぐ伸び、高台はハの字状に開く。器面には回転ナデ調整を施し、底部内外面にナデ調整を加える。内底面には赤色顔料を塗彩する。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰白色またはにぶい赤褐色を呈する。24は約1/2が残存し、口径13.8cm、底径8.9cm、器高4.3cmを測る。体部は底部より緩やかに立ち上がり、外上方に真直ぐ伸び、高台は直立する。器面には回転ナデ調整を施し、底部内外面にナデ調整を加える。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。25はほぼ完存し、口径13.8cm、底径9.4cm、器高4.2cmを測る。底部は平らで、体部はやや内湾し、高台は直立する。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内面が灰白色、外面が灰色または灰白色を呈する。26はほぼ完存し、口径13.9cm、底径10.1cm、器高3.9cmを測る。体部は底部より屈曲して立ち上がり、外上方に真直ぐ伸び、高台は直立する。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。27は約1/4が残存し、口径14.3cm、底径10.3cm、器高3.7cmを測る。若干器高が低く、体部は底部より緩やかに内湾して立ち上がり、高台は直立する。器面には全面にナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。28は約1/4が残存し、口径20.0cm、底径13.8cm、器高5.5cmを測る。体部は底部より緩やかに立ち上がり、口縁端部を細く仕上げる。高台は低く、ややハの字状に開く。調整は回転ナデとみられるが、器面は著しく摩耗するため不明瞭である。口縁部外面には炭素が付着する。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内面が灰白色、外面が暗灰色または灰白色を呈する。

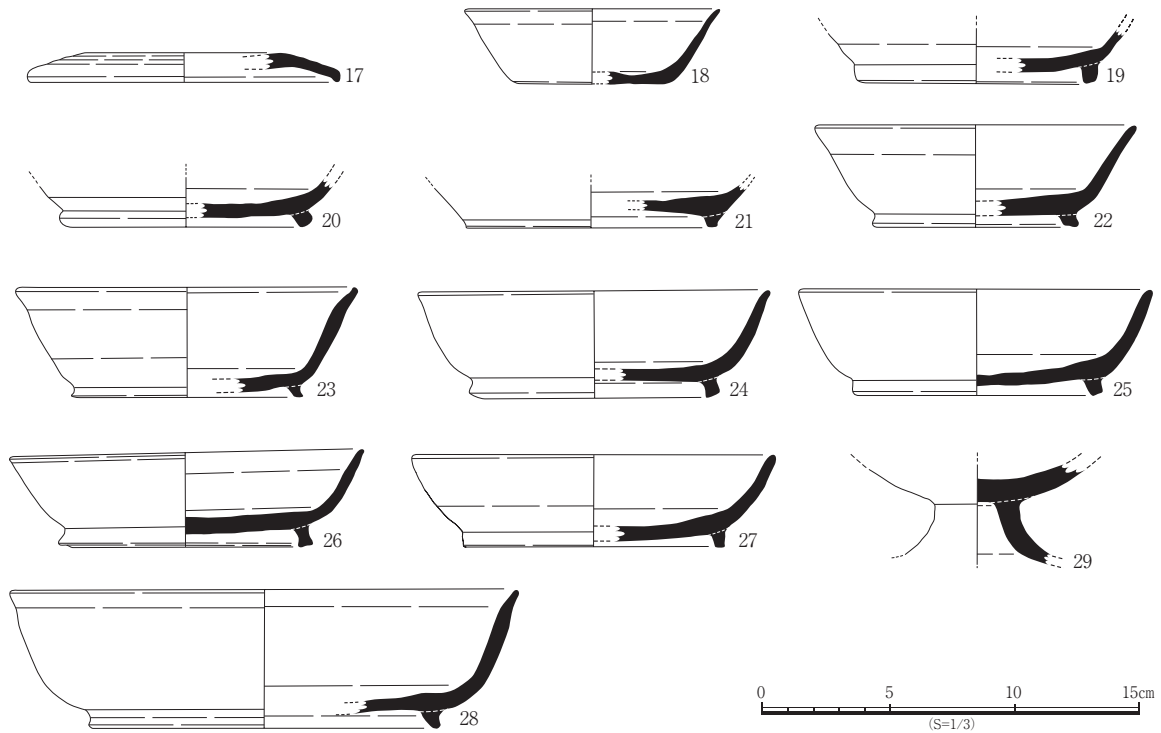


Fig.15 第IV層出土遺物実測図(須恵器)

29は小型の高杯で、口縁部と裾部を欠損する。杯部は内湾して立ち上がり、裾部はハの字状に開く。脚部には回転ナデ調整を施すが、杯部は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

黒色土器(Fig.16 - 30)

30は椀で、約1/5が残存し、口径13.8cm、器高3.9cm、底径5.0cmを測る。器壁が薄く、底部は平らで、口縁部はやや内湾し、端部を細く仕上げる。調整は外面がナデ調整で、指頭圧痕が残り、体部には一部ヘラ削りがみられる。口縁部はヨコナデ調整を施し、内面はナデで、その後口縁部は横方向のミガキ、体部は連結輪状の暗文を施し、炭素が吸着する。胎土はやや密で金雲母と石英を含み、焼成は良く、色調は内面が黒色、外面がにぶい黄褐色または黒褐色を呈する。

東播系須恵器(Fig.16 - 31・32)

31・32は片口鉢である。31は口縁部の約1/8が残存し、口径25.4cmを測る。体部は外上方に真直ぐ伸び、口縁部は肥厚して上方に拡張する。器面には回転ナデ調整を施したとみられるが、著しく摩耗するため不明瞭である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内面が灰白色または灰黄色、外面が灰黄褐色を呈する。32は口縁部の約1/6が残存し、口径25.6cmを測る。器壁は薄く、口縁部は直線的な体部より屈曲し、肥厚して上方に拡張する。器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

土師質土器(Fig.16 - 33~37)

33は杯で、底部の約1/3が残存し、底径8.8cmを測る。器壁が薄く、体部はやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、

2. 調査区の概要

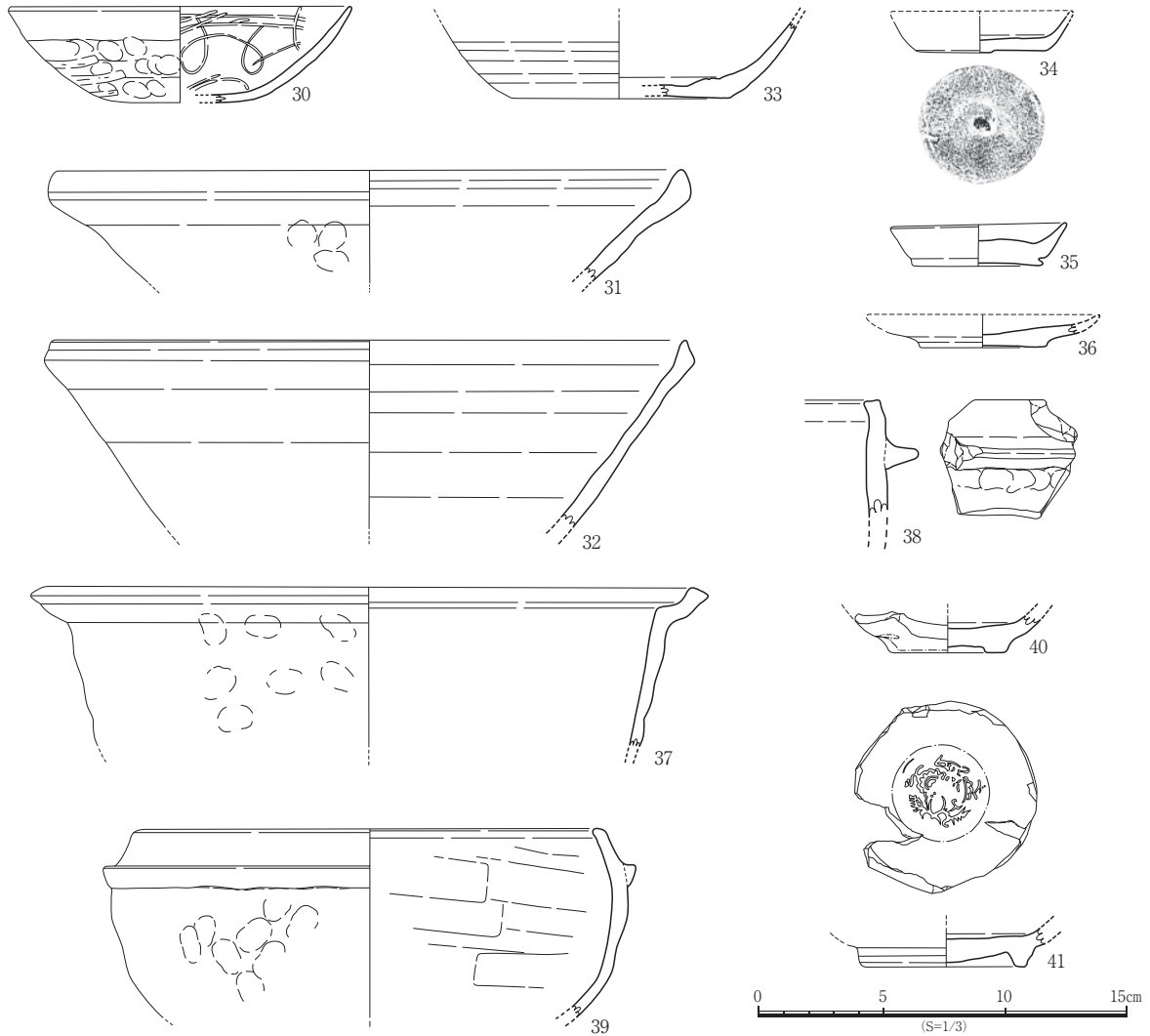


Fig.16 第IV層出土遺物実測図(黒色土器・東播系須恵器・土師質土器ほか)

色調は内面が橙色, 外面が橙色または浅黄橙色を呈する。

34～36は小皿である。34は底部が完存し、底径5.3cmを測る。口縁部はやや内湾する。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は悪く、色調は内面が灰黄色または浅黄色、外面が浅黄色を呈する。35はほぼ完存し、口径7.1cm、器高1.7cm、底径5.3cmを測る。底部の器壁が厚く、口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも褐灰色またはにぶい橙色を呈する。36は底部が完存し、底径5.1cmを測る。口縁部は外へ大きく開く。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

37は鍋で、口縁部の一部が残存し、口径26.3cmを測る。体部は外上方へ真直ぐ伸び、口縁部は内湾して内傾する面を有する。体部外面がナデ調整で、指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデ調整、内面は摩耗するため不明である。胎土は密で砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内面が灰色または淡黄色、外面は灰色またはにぶい黄橙色を呈する。

瓦質土器(Fig.16 - 38・39)

38・39は羽釜である。38は口縁部の破片で、直立して端部はやや外傾する面を有し、外面には水平に伸びる断面三角形の鏝が付く。体部はナデ調整、口縁部にはヨコナデ調整を施し、鏝の下には指頭圧痕が残り、外面には炭素が吸着する。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰色または黄灰色を呈する。39は口縁部から体部の約1/6が残存する。体部は大きく内湾し、口縁端部を丸く収め、外面には断面三角形の小さな鏝が付く。胴部外面はナデ調整で指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデ調整、胴部内面には板ナデ調整を施し、鏝の下には煤が付着する。全面に炭素の吸着がみられる。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰色、外面が灰色または暗灰色を呈する。

青磁(Fig.16 - 40・41)

40・41は龍泉窯系の碗である。40は底部の約1/2が残存し、底径4.8cmを測る。底部には低く太い削り出し高台を有する。器面には高台付近までオリーブ色の釉を薄く施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面がオリーブ灰色、外面がオリーブ灰色または灰白色を呈する。41は底部がほぼ完存し、底径6.5cmを測る。底部には断面逆台形を呈する削り出し高台を有し、見込には花文のスタンプがみられる。器面には高台までオリーブ色の釉を薄く施し、見込は円形に釉ハギを行う。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が青灰色またはオリーブ灰色、外面が青灰色または灰白色を呈する。

土製品(Fig.17 - 42～47)

42～47は管状土錘で、いずれも全面にナデ調整を施す。42は円筒形を呈し、完存する。全長4.4cm、全幅0.8cm、孔径0.3cm、重量2.8gを測る。43は紡錘形を呈し、一部を欠損する。残存長4.8cm、全幅1.1cm、孔径0.4cm、重量3.5gを測る。44は円筒形を呈し、ほぼ完存する。全長4.9cm、全幅1.0cm、孔径0.3cm、重量4.1gを測る。45は円筒形を呈し、一部を欠損する。残存長5.0cm、全幅1.5cm、孔径0.5cm、重量9.8gを測る。46は紡錘形を呈し、一部を欠損する。残存長5.4cm、全幅1.5cm、孔径0.5cm、重量7.6gを測る。47は円筒形を呈し、完存する。全長5.6cm、全幅1.2cm、孔径0.5cm、重量5.4gを測る。

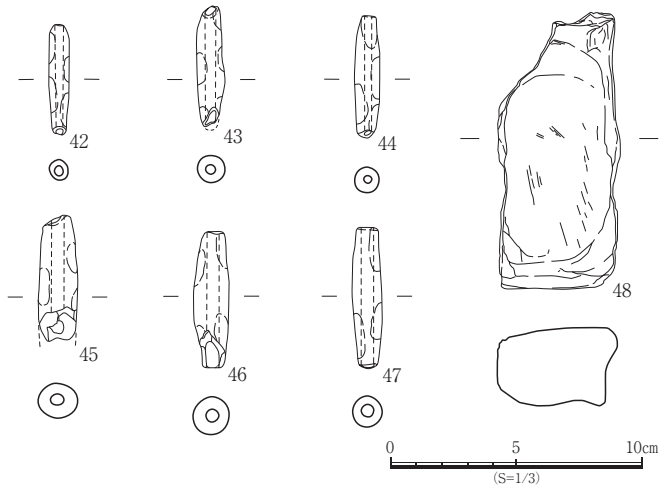


Fig.17 第IV層出土遺物実測図(土製品・石製品)

石製品(Fig.17 - 48)

48は砥石で、一部が残存し、残存部で1面に使用が認められる。残存長11.0cm、全幅4.9cm、全厚3.1cm、重量229gを測る。石材は細粒花崗岩である。

第IV - 1層出土遺物

東播系須恵器(Fig.18 - 49・50)

49は片口鉢で、口縁部の一部が残存する。口縁部は体部より屈曲して上下に拡張し、全面に回転ナ

2. 調査区の概要

デ調整を施す。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面とも灰白色を呈する。

50は甕の口縁部の破片である。口縁部は大きく外反し、口縁端部内面には沈線上の段が巡る。外面にタタキ目が残るが、器面は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。胎土はやや粗く、焼成は不良で、色調は内外面とも浅黄色を呈する。

土師質土器(Fig.18 - 51~54)

51・52は杯である。51は底部がほぼ完存し、底径6.6cmを測る。器壁は薄く、体部はやや内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明瞭で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内面が橙色または浅黄橙色、外面が橙色またはにぶい黄橙色を呈する。52はほぼ完存し、口径11.8cm、器高3.3cm、底径5.2cmを測る。器壁が薄く、体部はやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。成形は口くろ水挽とみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

53は小皿で、約1/4が残存し、口径7.8cm、器高2.3cm、底径5.1cmを測る。底部の器壁が厚く、口縁部は真直ぐ外上方に伸びる。器面には回転ナデ調整を施すが、内底面は摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が浅黄橙色または灰色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

54は羽釜で、口縁部の一部が残存し、口径26.8cmを測る。口縁部は真直ぐ立ち上がり、端部は水平な面を有し、外面には幅1.3cmの鏝が水平に伸びる。口縁部にヨコナデ調整を行うが、その他は著しく摩耗するため不明である。胎土はやや密で砂粒を含み、焼成はやや良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

備前焼(Fig.18 - 55)

55は播鉢で、口縁部の一部が残存する。口縁部は肥厚し、内傾する面を有する。器面には回転ナデ調整を施し、内面には5条の摺り目が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面が灰褐色、外面がにぶい赤褐色を呈する。

瓦質土器(Fig.18 - 56・57)

56は羽釜で、口縁部の一部が残存する。口縁部はやや内湾し、端部は外傾する面を有する。外面には扁平な鏝が付く。全面に炭素の吸着がみられるが、器面は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。胎土はやや密で砂粒を含み、焼成はやや良好で、色調は内面が灰色またはにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色またはにぶい黄褐色を呈する。

57は鍋の破片で、口径19.2cm、胴径21.9cmを測る。胴部は大きく膨らみ、口縁部は屈曲して外上方に短く伸びる。器面には胴部にナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ調整とみられるが、摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が淡黄色または浅黄色、外面が黄灰色を呈する。

青磁(Fig.18 - 58~60)

58~60は龍泉窯系の碗である。58は底部の約1/2が残存し、底径5.6cmを測る。底部の器壁は厚く、低い削り出し高台を有する。器面にはほぼ全面にオリーブ色の釉を薄く施し、畳付には2箇所胎土目がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰オリーブ色を呈する。59は口縁部の約

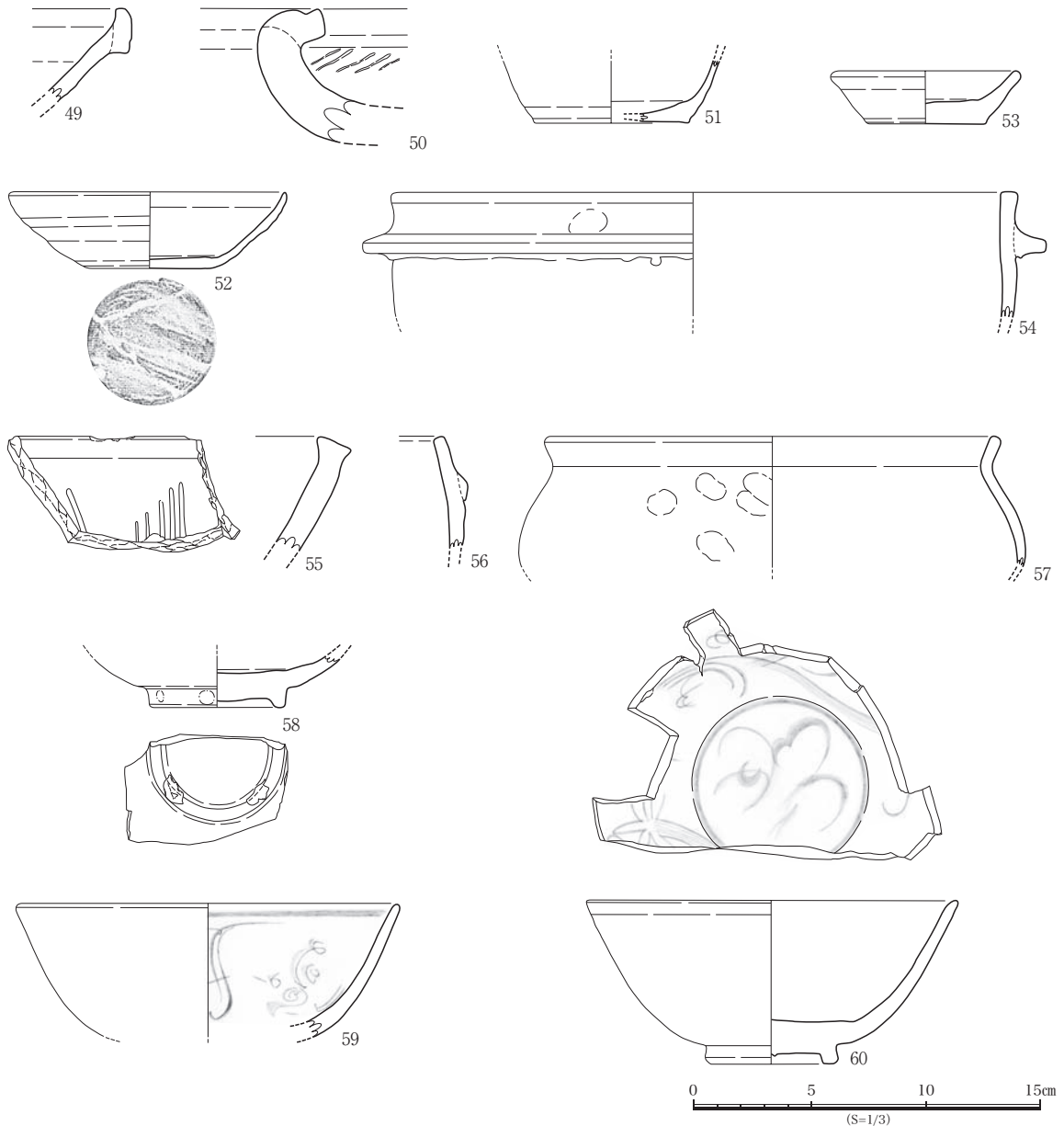


Fig.18 第Ⅳ-1層出土遺物実測図(東播系須恵器・土師質土器・瓦質土器ほか)

1/4が残存し、口径16.2cmを測る。器面にはオリーブ色の釉を薄く施し、内面には飛雲文がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰オリーブ色を呈する。60は底部が完存し、口径15.8cm、器高7.1cm、底径5.2cmを測る。底部の器壁は厚く、低い削り出し高台を有する。器面には畳付まで黄緑色の釉を薄く施すが、釉に光沢はみられない。内面には片彫りまたは櫛状工具による草花文がみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともオリーブ黄色を呈する。

第Ⅳ-2層出土遺物

土師質土器(Fig.19-61~63)

61は小皿で、底部が完存し、口径6.8cm、器高1.6cm、底径4.6cmを測る。底部の器壁が厚く、口縁部は短く内湾する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともいぶき色または橙色を呈する。

2. 調査区の概要

62・63は羽釜で、口縁部の一部が残存する。62は口縁部が内湾し、端部は外傾する面を有し、外面には幅1.0cmの鐏が水平に伸びる。外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整、内面は摩耗するため不明で、胴部外面と鐏の下には煤が付着する。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや悪く、色調は内面が浅黄橙色、外面が浅黄橙色または黒褐色を呈する。63は口縁部が内湾し、端部は肥厚して凹面をなす。外面には幅1.5cmの鐏がやや下方に伸びる。器面にはナデ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整を行い、鐏の下には煤が付着する。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

瓦質土器 (Fig.19 - 64)

64は羽釜で、口縁部の一部が残存する。器壁が厚く、口縁部はやや内湾し、外面には扁平な鐏が付く。外面は横方向のナデ調整、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面は灰色を呈する。

白磁 (Fig.19 - 65)

65は碗で、体部の一部が残存する。高台は高く直立するものとみられ、体部はやや内湾して大きく外上方に伸びる。器面には体部下半まで白色釉を薄く施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

青磁 (Fig.19 - 66)

66は龍泉窯系の碗で、底部の約1/2が残存し、底径5.0cmを測る。底部の器壁は厚く、低く太い削り出し高台を有する。器面には高台付近までオリーブ色の釉を薄く施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰オリーブ色、外面が灰オリーブ色またはにぶい褐色を呈する。

青白磁 (Fig.19 - 67)

67は景德鎮窯系の合子で、約1/8が残存し、口径5.0cm、器高1.8cm、底径3.6cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は肥厚して受口状を呈する。型成形で、体部外面は菊花状をなす。底部外面を除き、オリーブ色の釉を薄く施し、口縁端部は釉ハギを行う。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面がオリーブ灰色または灰白色、外面が灰白色を呈する。

古銭 (Fig.19 - 68)

68は行書の元豊通寶で、完存する。銭径2.25cm、孔径0.63cm、銭厚0.11cm、重量1.6gを測る。北宋銭で、初鑄造年は1078年である。

第IV-3層出土遺物

瓦器 (Fig.20 - 69)

69は椀で、約1/3が残存し、口径13.8cmを測る。口縁部は大きく内湾し、やや腰の張る形態を呈

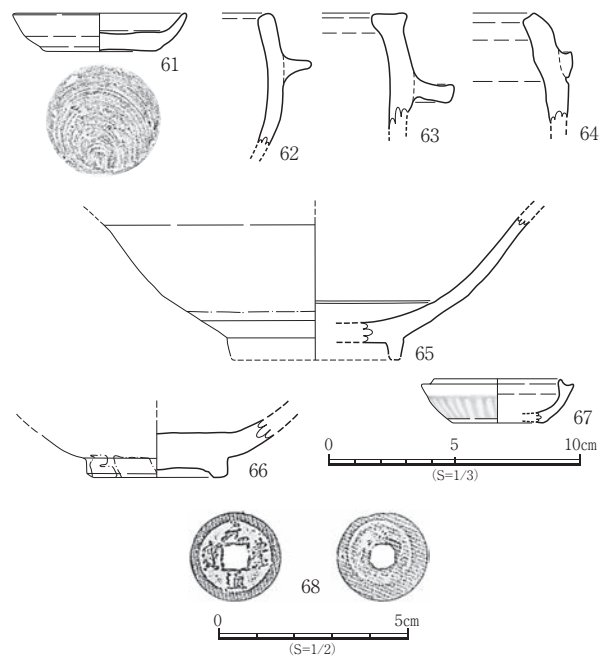


Fig.19 第IV-2層出土遺物実測図
(土師質土器・瓦質土器・白磁ほか)

する。外面はナデ調整で、指頭圧痕が顕著に残り、口縁部にヨコナデ調整を1段、内面はナデ調整のち一部ミガキがみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰色、外面が灰色または淡黄色を呈する。

土師質土器 (Fig.20 - 70~72)

70・71は杯である。70は底部が完存し、底径6.2cmを測る。体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面がにぶい橙色、外面がにぶい橙色またはにぶい黄橙色を呈する。71は底部が完存し、口径13.0cm、器高3.9cm、底径7.0cmを測る。体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りで、ロクロ水挽成形とみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が浅黄橙色、外面が灰白色を呈する。

72は小皿で、約1/2が残存し、口径7.9cm、器高1.8cm、底径5.4cmを測る。底部の器壁は厚く、口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面がにぶい橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

第Ⅳ-5層出土遺物

青磁 (Fig.20 - 73)

73は龍泉窯系の碗で、口縁部の約1/4が残存し、口径15.8cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部を細く仕上げる。器面にはオリーブ色の釉を薄く施し、外面には鎬蓮弁文がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面がオリーブ灰色、外面が灰白色を呈する。

第Ⅳ-7層出土遺物

土師質土器 (Fig.20 - 74~76)

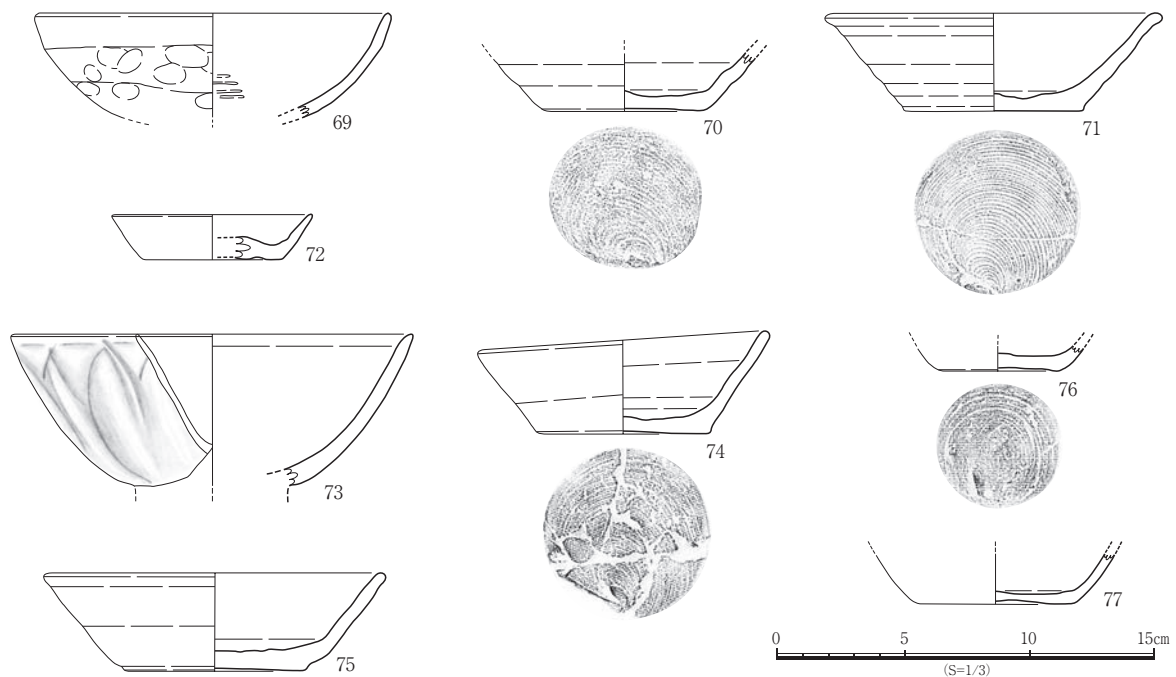


Fig.20 第Ⅳ-3・5・7層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器・白磁ほか)

2. 調査区の概要

74・75は杯である。74はほぼ完存し、口径11.4cm、器高4.1cm、底径6.7cmを測る。体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともにぶい橙色またはにぶい黄橙色を呈する。75は底部が完存し、口径13.3cm、器高3.9cm、底径7.0cmを測る。体部は底部より屈曲し、外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

76は小皿で、底部が完存し、底径4.8cmを測る。底部の器壁は厚く、口縁部はやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

白磁(Fig.20 - 77)

77は皿で、底部の約1/4が残存し、底径6.2cmを測る。器壁は薄く、体部は底部より屈曲し、内湾して立ち上がる。器面には灰白色の釉を薄く施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

第IV - 11層出土遺物

須恵器(Fig.21 - 78)

78は小型の高杯である。脚部の約1/3が残存し、底径8.6cmを測る。脚部はハの字状に開き、裾部は水平に伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成は悪く、色調は内外面とも灰色を呈する。

瓦器(Fig.21 - 79・80)

79・80は椀である。79は約1/2が残存し、口径12.6cm、底径3.4cm、器高4.0cmを測る。大きく歪んでおり、器面には炭素の吸着は認められない。外面はナデ調整で、指頭圧痕が平行に3段残り、口縁部にヨコナデ調整を1段、内面はナデ調整ののち圏線状のミガキがみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。80は底部が完存し、口径13.0cm、底径3.6cm、器高3.9cmを測る。口縁部は歪んでおり、大きく傾く。外面はナデ調整で、指頭圧痕が平行に3段残り、口縁部にヨコナデ調整を1段、内面はナデ調整ののち体部に圏線状のミガキ、底部に平行線状の暗文がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰色、外面が灰色または暗灰色を呈する。

東播系須恵器(Fig.21 - 81)

81は片口鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は直線的に伸び、口縁部は下方に肥厚する。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部外面には重ね焼痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面が灰白色、外面が灰白色または灰黄色を呈する。

土師質土器(Fig.21 - 82~92)

82~85は杯である。82は底部の約1/2が残存し、底径7.4cmを測る。体部は底部より内湾して緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。83は約3/4が残存し、口径10.4cm、器高4.2cm、底径6.8cmを測る。体部は底部よりやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を

呈する。84は底部が完存し、底径6.0cmを測る。体部は底部より屈曲して外上方に伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色または黄灰色を呈する。85は底部がほぼ完存し、口径12.2cm、器高3.8cm、底径6.7cmを測る。体部は底部より屈曲して立ち上がりやや外反する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が橙色、外面が橙色または灰褐色を呈する。

86～90は小皿である。86は底部が完存し、底径4.1cmを測る。口縁部は外上方へ真直ぐ立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。87はほぼ完存し、口径7.0cm、器高1.9cm、底径4.4cmを測る。口縁部は外上方へ真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面がにぶい黄橙色または灰白色、外面がにぶい黄橙色を呈する。88はほぼ完存し、口径7.2cm、器高1.9cm、底径5.5cmを測る。口縁部はやや内湾する。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。89はほぼ完存し、口径7.5cm、器高1.8cm、底径4.8cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内面が浅黄橙色またはにぶい橙色、外面が浅黄橙色または橙色を呈する。90はほぼ完存し、口径7.8cm、器高1.8cm、底径5.3cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗するため不明瞭で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内面が橙色、外面が橙色またはにぶい黄褐色を呈する。

91・92は羽釜である。91は口縁部の一部が残存する。口縁部は内湾し、端部は肥厚してやや外傾する凹面をもつ。外面には幅1.8cmの鐏が水平に伸びる。調整は鐏の下がヘラ削り、口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整である。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈する。92は約1/5が残存し、口径28.0cmを測る。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は上方に伸び、端部は肥厚して水平な面を有する。外面には幅2.1cmの鐏が水平に伸びる。調整は鐏の下が平行タタキのちヘラ削り、口縁部がヨコナデ調整、内面がナデ調整である。鐏の下と胴部外面には煤が付着する。胎土はやや密で砂粒を含み、焼成は良く、色調は内面が橙色、外面が橙色または黒褐色を呈する。

瓦質土器(Fig.21 - 93)

93は羽釜で、口縁部の約1/8が残存し、口径15.5cmを測る。口縁部は内湾して、外面には幅1.2cmの鐏が水平に伸びる。調整は胴部がナデで、外面には指頭圧痕が残る、口縁部はヨコナデを施す。胎土はやや密で、焼成はやや良好で、色調は内外面とも暗灰色を呈する。

青磁(Fig.21 - 94～96)

94～96は龍泉窯系の碗である。94は底部の約1/2が残存し、底径5.8cmを測る。底部の器壁は厚く、直立する削り出し高台を有する。器面には高台まで黄緑色の釉を薄く施し、内面には片彫りまたは

2. 調査区の概要

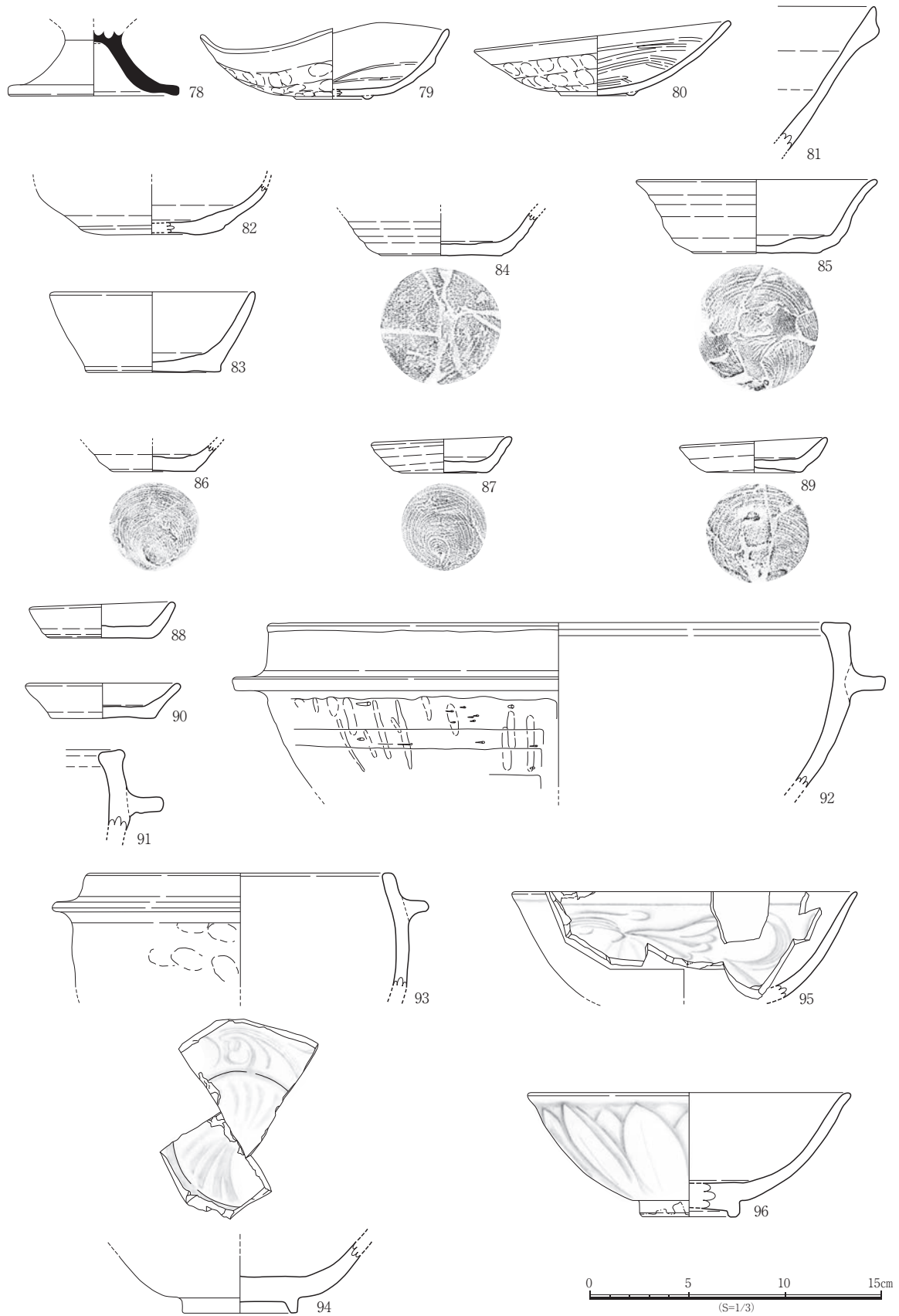


Fig.21 第Ⅳ-11層出土遺物実測図(須恵器・瓦器・東播系須恵器ほか)

櫛状工具による草花文がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面ともオリーブ黄色または灰オリーブ色を呈する。95は口縁部の約1/4が残存し、口径17.6cmを測る。器面にはオリーブ色の釉を薄く施し、内面には劃花文がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰オリーブ色を呈する。96は約1/2が残存し、口径16.3cm、器高6.4cm、底径4.8cmを測る。底部は器壁が厚く、低い削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。器面には畳付までオリーブ色の釉を薄く施し、外面には鎬蓮弁文がみられる。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内面が灰オリーブ色、外面が灰オリーブ色または灰白色を呈する。

第IV-12層出土遺物

須恵器(Fig.22-97)

97は杯である。底部の約1/8が残存し、底径9.2cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し、体部は緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、不明瞭である。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

瓦器(Fig.22-98)

98は椀である。口縁部の約1/3が残存し、口径13.0cmを測る。器壁が厚く、体部はやや直線的に立ち上がる。外面はナデ調整で、指頭圧痕が平行に4段残り、口縁部にヨコナデ調整を1段、内面はナデ調整ののちミガキを施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

土師質土器(Fig.22-99・100)

99は杯で、底部の約3/4が残存し、底径6.2cmを測る。体部は底部より緩やかに内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

100は小皿で、約3/4が残存し、口径7.0cm、器高1.8cm、底径4.4cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

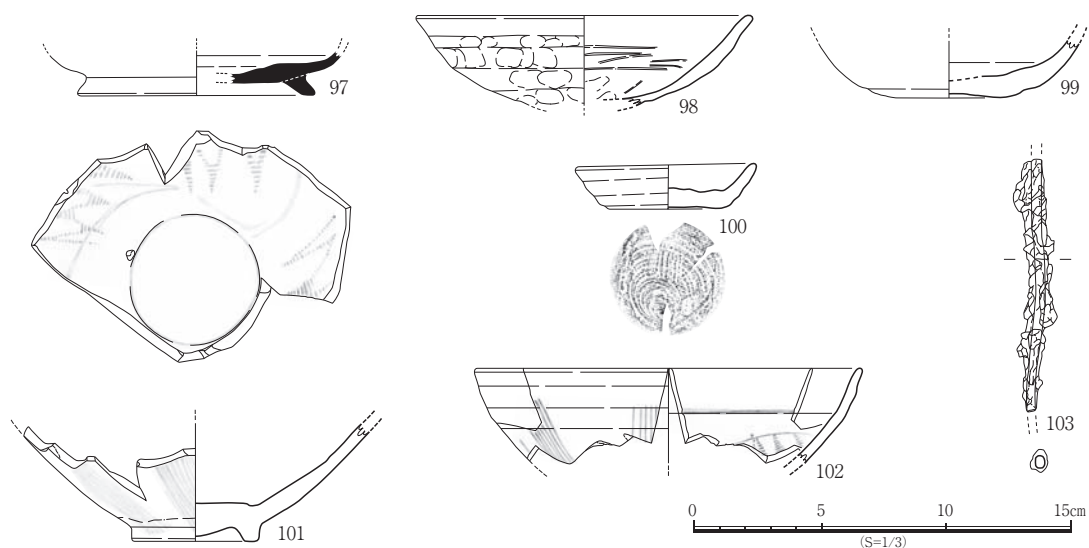


Fig.22 第IV-12層出土遺物実測図(須恵器・瓦器・土師質土器ほか)

2. 調査区の概要

青磁(Fig.22 - 101・102)

101・102は同安窯系の碗である。101は底部が完存し、底径4.9cmを測る。底部の器壁は厚く、断面逆台形を呈する削り出し高台を有する。器面には高台付近まで黄緑色の釉を約0.5～1.0mmの厚さに施し、内面には櫛状工具によるジグザグ文、外面には縦方向の櫛目がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰オリーブ色、外面が灰オリーブ色または灰黄色を呈する。102は口縁部の約1/5が残存し、口径15.2cmを測る。器面には黄緑色の釉を薄く施し、内面には櫛状工具によるジグザグ文、外面には縦方向の櫛目がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰オリーブ色を呈する。

鉄製品(Fig.22 - 103)

103は鉄釘で、両端を欠損する。残存長は10.1cmで、断面は矩形を呈し、全幅0.4cm、全厚0.5cmを測る。やや湾曲し、先端は細く仕上げる。全面に錆化がみられる。

第V層出土遺物

土師器(Fig.23 - 104～115)

104～113は杯である。104～112は高台を持たないものである。104は完存し、口径9.5cm、器高3.2cm、底径6.3cmを測る。口縁部は体部からやや外方向に屈曲し、端部は丸く収める。器面には回転ナデ調整を施すが、内底面は摩耗するため調整は不明で、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が橙色または浅黄橙色、外面が浅黄橙色を呈する。105は約2/3が残存し、口径9.8cm、器高3.2cm、底径7.1cmを測る。口縁部は体部からやや外方向に屈曲し、端部は肥厚し丸く収める。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は悪く、色調は内外面ともいぶ黄橙色を呈する。106は約1/2が残存し、口径10.6cm、器高2.9cm、底径7.2cmを測る。口縁部はやや外反し、端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が橙色、外面がにぶい橙色を呈する。107は約1/3が残存し、口径10.8cm、器高3.3cm、底径6.6cmを測る。口縁部はやや外反し、端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施すとみられるが、著しく摩耗するため調整は不明で、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内面がにぶい黄橙色または暗褐色、外面がにぶい黄橙色または灰色を呈する。108は約2/3が残存し、口径11.9cm、器高3.4cm、底径7.3cmを測る。口縁部はやや外反し、端部を丸く収める。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部内面には馬蹄形に煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色またはにぶい黄橙色、外面が灰白色または明黄褐色を呈する。109・110は底部より湾曲して立ち上がる杯である。109は口縁部の破片で、約1/6が残存し、口径12.2cmを測る。口縁部はやや内湾し、端部を上方へ摘み上げる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、口縁部内外面には煤が付着する。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも灰白色または暗灰黄色を呈する。110はほぼ完存し、口径13.9cm、器高3.8cm、底径9.1cmを測る。体部は底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部を丸く収める。器面は著しく摩耗するため調整と底部の切り離しは不明で、内面と外面の一部には煤が付着する。胎土は密で、焼成は悪く、色調は内面が灰色また

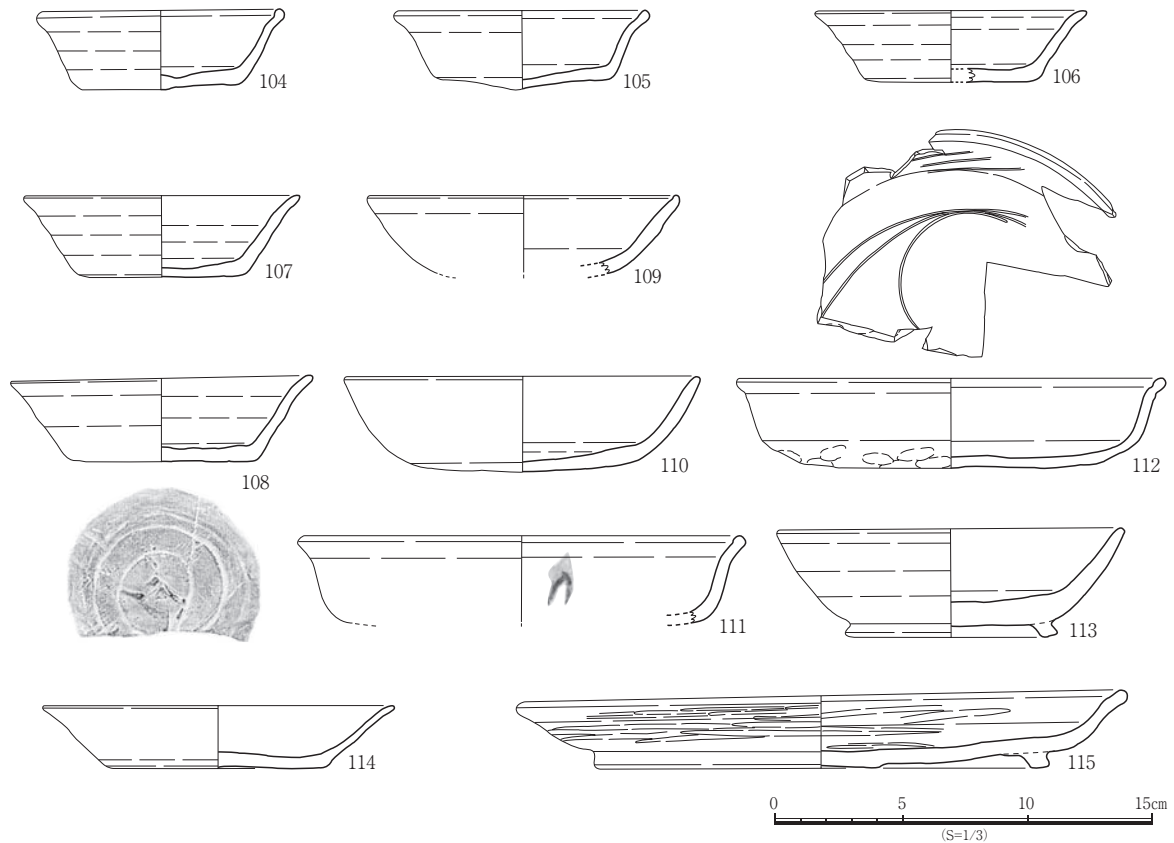


Fig.23 第V層出土遺物実測図(土師器)

はにぶい黄褐色，外面がにぶい黄褐色または黄褐色を呈する。111は口縁部の破片で，口径17.3cmを測る。口縁部は体部から屈曲してやや外に伸び，端部は肥厚して丸く収める。器面には回転ナデ調整を施し，全面に赤色顔料を塗彩し，口縁部内面には馬蹄形に煤が付着する。胎土はやや密で，焼成は良く，色調は内外面とも橙色または浅黄橙色を呈する。112は約1/4が残存し，口径16.7cm，器高3.6cm，底径8.6cmを測る。体部は底部より緩やかに立ち上がり，口縁部はやや外上方に伸び，内面には沈線上の段を有する。口縁部はヨコナデ調整，底部外面にはナデ調整を施し，指頭圧痕が顕著に残る。また，内底面は摩耗するが，圏線状のミガキ，口縁部内面は放射線状の暗文がわずかに残存する。胎土は密で，焼成は良く，色調は内外面とも橙色を呈する。113は高台を有する杯で，約2/3が残存する。口径13.6cm，器高4.3cm，底径8.4cmを測る。底部は器壁が厚く，ハの字状に開く高台を貼付し，口縁はやや内湾して緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転ヘラ切りで，高台内はナデ調整を加える。内面と口縁部外面には煤が付着する。胎土は密で，焼成は良く，色調は内面が黒色，外面が浅黄橙色または黒色を呈する。

114・115は皿である。114は底部が完存し，口径13.9cm，器高2.5cm，底径8.7cmを測る。口縁部は底部より屈曲して，外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内面にはわずかに煤が付着する。胎土は密で，焼成はやや悪く，色調は内面が橙色，外面が橙色またはにぶい橙色を呈する。115は約2/3が残存し，口径23.7cm，器高3.1cm，底径17.4cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し，体部は緩やかに立ち上がり，口縁部はやや内湾して，内

2. 調査区の概要

面には凹線状の段を有する。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部内外面に横方向のミガキ、内底面には圈線状のミガキがみられる。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

須恵器(Fig.24～26 - 116～153)

116～123は杯蓋である。116は口縁部の破片である。稜は鋭く断面三角形を呈し、口縁部は若干開き、端部は内傾する浅い凹面を有する。器面には回転ナデ調整を施し、内面にはナデ調整を加える。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。117・118は口縁部の破片で、端部にはかえりが付く。器面には回転ナデ調整を施し、天井部外面には回転ヘラ削りを加える。胎土は密で、焼成は良く、色調は灰色または灰白色を呈する。119～121は輪状のつまみを有するものである。119はつまみの一部が残存し、つまみ径4.4cmを測る。器面には回転ナデ調整を施した後、内面には一部ナデ調整を加え、外面にはつまみを貼付する。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰白色を呈する。120は一部が残存し、口径12.2cm、器高2.0cm、つまみ径3.0cmを測る。天井部はやや丸味をもって口縁部に至り、口縁端部は下方に屈曲させる。器面には回転ナデ調整を施し、天井部外面には回転ヘラ削り、天井部内面にはナデ調整を加え、輪状のつまみを貼付する。内外面に赤色顔料を塗彩する。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰赤色または灰白色を呈する。121は天井部の一部が残存し、つまみ径4.1cmを測る。天井部はやや丸味をもつ。調整は外面が不定方向の削りで、輪状のつまみを貼付し、内面がナデ調整で、「密」とみられる墨書が残る。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。122は約1/3が残存し、口径15.5cmを測る。天井部はほぼ水平に伸び、口縁は屈曲して、端部を細く下方に摘む。器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。123は壺蓋で、口縁部の一部が残存し、口径12.8cmを測る。天井部は中央部がやや落ち込み、口縁部は屈曲して下方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、天井部内面にはナデ調整を加える。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

124～145は杯で、124～131は高台を持たないものである。124は約1/4が残存し、口径7.8cm、器高2.4cm、底径6.1cmを測る。器高が低く、皿に近い形態を呈する。口縁部は外上方に真直ぐ伸び、端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。125は約1/4が残存し、口径9.5cm、器高2.6cm、底径6.8

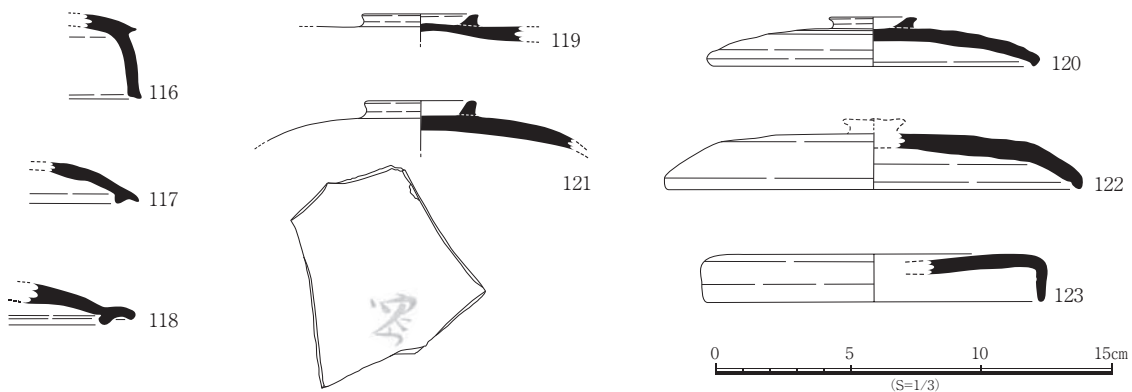


Fig.24 第V層出土遺物実測図(須恵器1)

cmを測る。器高が低く、口縁部は体部より屈曲し、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。126は約1/4が残存し、口径12.0cm、器高2.8cm、底径7.0cmを測る。器高が低く、口縁部はやや内湾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。127は約2/3が残存し、口径9.4cm、器高2.7cm、底径6.2cmを測る。器壁が薄く、体部はやや外反して立ち上がり、口縁部はやや内湾し、端部は肥厚して丸く収める。器面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗するため不明瞭で、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも灰白色を呈する。128は底部の約2/3が残存し、底径6.2cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。129はほぼ完存し、口径9.5cm、器高3.9cm、底径6.6cmを測る。底部の器壁が厚く、口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも明青灰色を呈する。130は約1/4が残存し、口径13.8cm、器高3.5cm、底径9.0cmを測る。やや大型のもので、口縁部は内湾して立ち上がり、端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。外面の底部から口縁部にかけて火襷がみられ、口縁部内外面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色または白色、外面が灰白色または淡黄色を呈する。131は底部の約1/3が残存し、底径4.9cmを測る。底部が小さく、体部は内湾し大きく開き、椀に似た形態を呈する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

132～145は高台を有する杯である。132は底部の約1/3が残存し、底径6.4cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し、体部は屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、高台内はナデ調整を施す。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも明褐灰色を呈する。133は底部の約1/2が残存し、底径7.3cmを測る。底部にはややハの字状に開く高台を有し、端部は凹面をなす。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや粗く、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。134は底部の約1/2が残存し、底径7.5cmを測る。底部は器壁が厚く、ややハの字状に開く高台を有し、端部は凹面をなす。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。135はほぼ完存し、口径9.0cm、器高3.5cm、底径5.9cmを測る。底部には低く直立する高台を有し、体部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。136は底部の約1/3が残存し、底径8.0cmを測る。底部には直立する高台を有し、体部はやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加え、内面には赤色顔料を塗彩する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が明褐灰色、外面が灰色を呈する。137は底部の約1/3が残存し、底径8.6cm

2. 調査区の概要

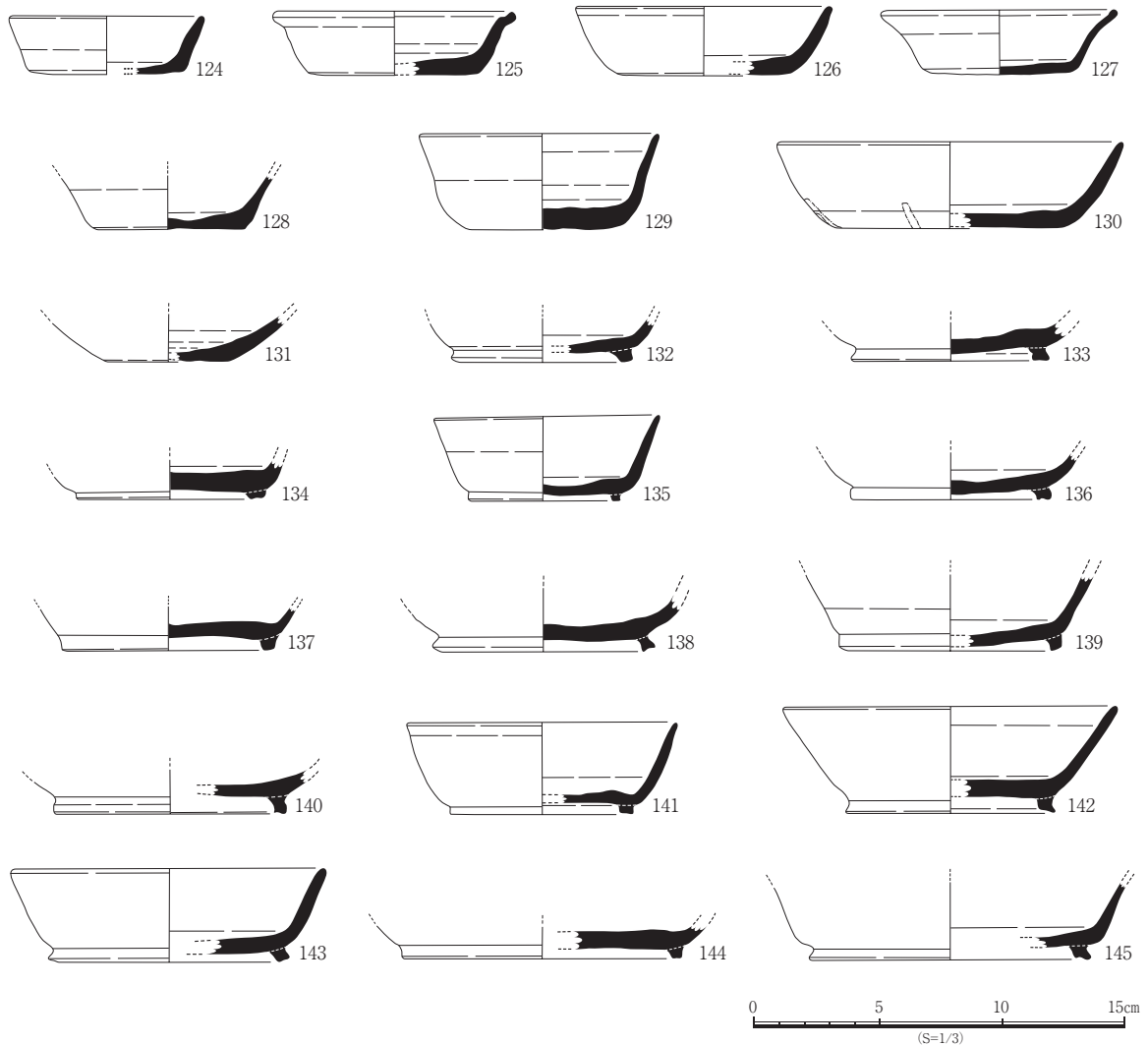


Fig.25 第V層出土遺物実測図(須恵器2)

を測る。底部の器壁は厚く、断面方形で直立する高台を有し、体部は底部より屈曲して外上方に伸びる。器面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。138は底部の約1/2が残存し、底径9.0cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し、体部は底部より内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、高台内はナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。139は底部の約1/4が残存し、底径9.0cmを測る。底部には断面方形で直立する高台を有し、体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。140は底部の約1/2が残存し、底径9.4cmを測る。底部には高く直立する高台を有し、端部は凹面をなす。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、不明瞭である。胎土は粗く砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。141は約1/4が残存し、口径10.8cm、器高3.7cm、底径7.4cmを測る。底部には低く直立する高台を有し、

体部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整、高台内にはナデ調整を施し、外面の一部には自然釉が付着する。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。142は約1/3が残存し、口径13.4cm、器高4.3cm、底径8.4cmを測る。底部には直立する高台を有し、体部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面が灰色または灰白色、外面が灰色を呈する。143は約1/5が残存し、口径12.5cm、器高3.8cm、底径9.7cmを測る。底部には断面方形でハの字状に開く高台を有し、体部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため不明で、内面には煤が付着する。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内面が灰色、外面が灰白色を呈する。144は底部の約1/3が残存し、底径11.2cmを測る。底部には断面台形で直立する高台を有する。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。145は約1/5が残存し、底径11.2cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し、接地面は凹面をなす。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが不明瞭である。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰色または灰白色を呈する。

146～148は皿である。146は約1/5が残存し、口径14.0cm、器高2.3cm、底径9.4cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ伸び、端部内面には浅い溝状の段を持つ。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。147は高台を有する皿で、約1/3が残存し、口径11.1cm、器高2.6cm、底径7.9cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し、端部は凹面をなす。口縁部はやや内湾し、端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加え、口縁部内面にはわずかに煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰色または灰白色を呈する。148は高台を有する皿で、ほぼ完存し、口径14.3cm、器高3.5cm、底径9.8cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し、口縁部はやや外反し、端部を丸く収める。器面には回転ナデ調整を施し、内底面はナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰色または灰白色を呈する。

149は盤で、約1/2が残存し、口径21.7cm、器高5.2cm、底径10.8cmを測る。底部にはハの字状に開く高い高台を有し、口縁部は緩やかに内湾して立ち上がり、端部内面には浅い沈線状の段をもつ。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成は悪く、色調は内面が灰白色、外面が灰白色または浅黄色を呈する。

150はいわゆる鉄鉢で、底部が完存する。底部は鋭く尖り、胴部はやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

151・152は壺である。151は底部の約1/2が残存し、底径6.6cmを測る。底部には幅の広いハの字状に開く高台を有し、胴部は底部より屈曲してやや内湾して伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面には自然釉が付着する。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面が灰黄色、外面が灰黄褐色を呈する。152は長頸壺で、胴部がほぼ完存し、胴径16.0cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を

2. 調査区の概要

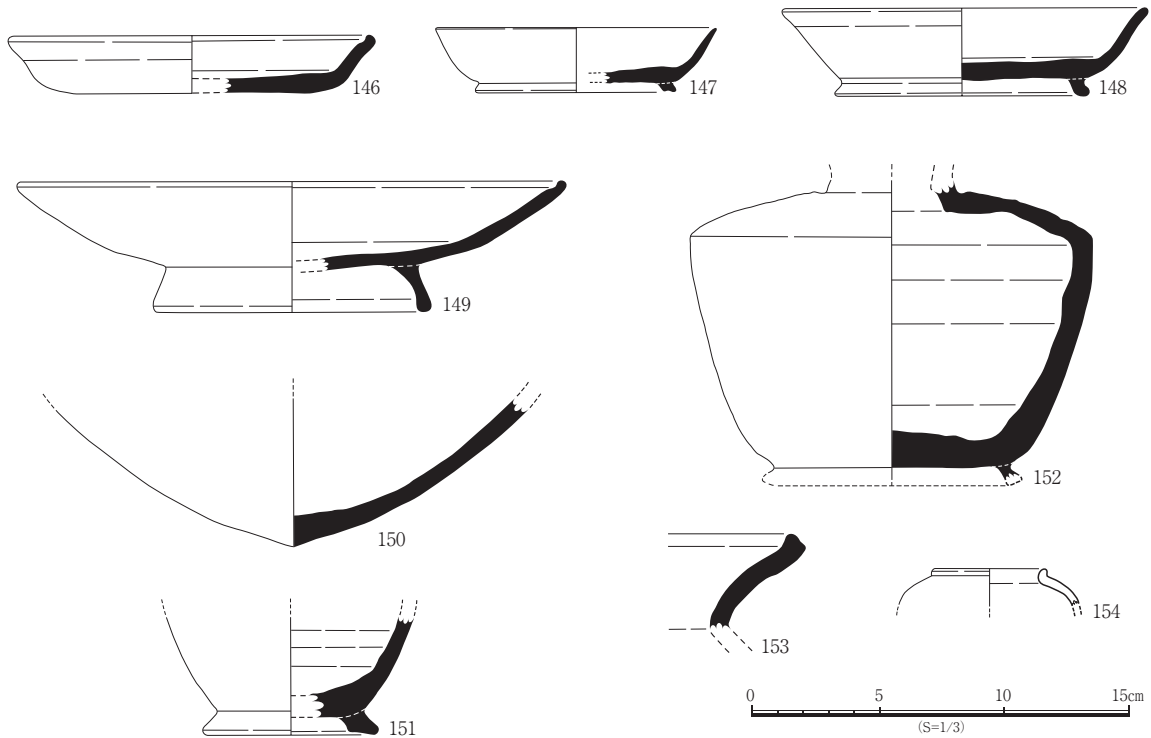


Fig.26 第V層出土遺物実測図(須恵器・二彩陶器)

有し、胴部はやや内湾して立ち上がり、屈曲して明瞭な肩部をなす。調整は胴部が回転ナデ、頸部と内底面はナデ、底部の切り離しは回転ヘラ切りで、高台内はナデ調整を施す。肩部には一部自然釉が付着する。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

153は甕で、口縁部の一部が残存する。口縁部は頸部より屈曲して、外上方に真直ぐ伸び、端部は内側を肥厚させ、内傾する面を有する。器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

二彩陶器 (Fig.26 - 154)

154は小壺で、口縁部の一部が残存し、口径4.3cmを測る。肩が張り、口縁部は短く上方に伸びる。器面は著しく摩耗するが、外面には緑釉と白釉がわずかに残存する。胎土はやや密で金雲母を含み、焼成はやや良好で、色調は内面がにぶい黄橙色、外面は灰白色を呈する。

瓦 (Fig.27 ~ 34 - 155 ~ 176)

155 ~ 158は軒丸瓦である。瓦当は素弁八葉蓮華文とみられ、花卉は稜を有し、花卉端は反転し、直線的に仕上げる。間弁は肉厚で三角形を呈し、周縁は素文とみられる。丸瓦部の凹面には布目圧痕が残り、その他はナデ調整を施す。155は瓦当の一部が残存する。周縁は摩耗するため不明瞭だが素文とみられる。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調はにぶい橙色を呈する。156は瓦当の約1/2が残存し、直径17.2cm、内区径14.0cm、中房径4.5cmを測る。中房は摩耗するため連子はみられない。瓦当と丸瓦部の接合は、瓦当上端より下側に丸瓦を置き、その上下に粘土を厚く貼付する。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや良く、色調はにぶい橙色を呈する。157は瓦当が完存し、直径17.3cm、内区径13.5cm、中房径4.3cmを測る。周縁には圏線状の浅い溝が一部残存し、中房は剥離するため連

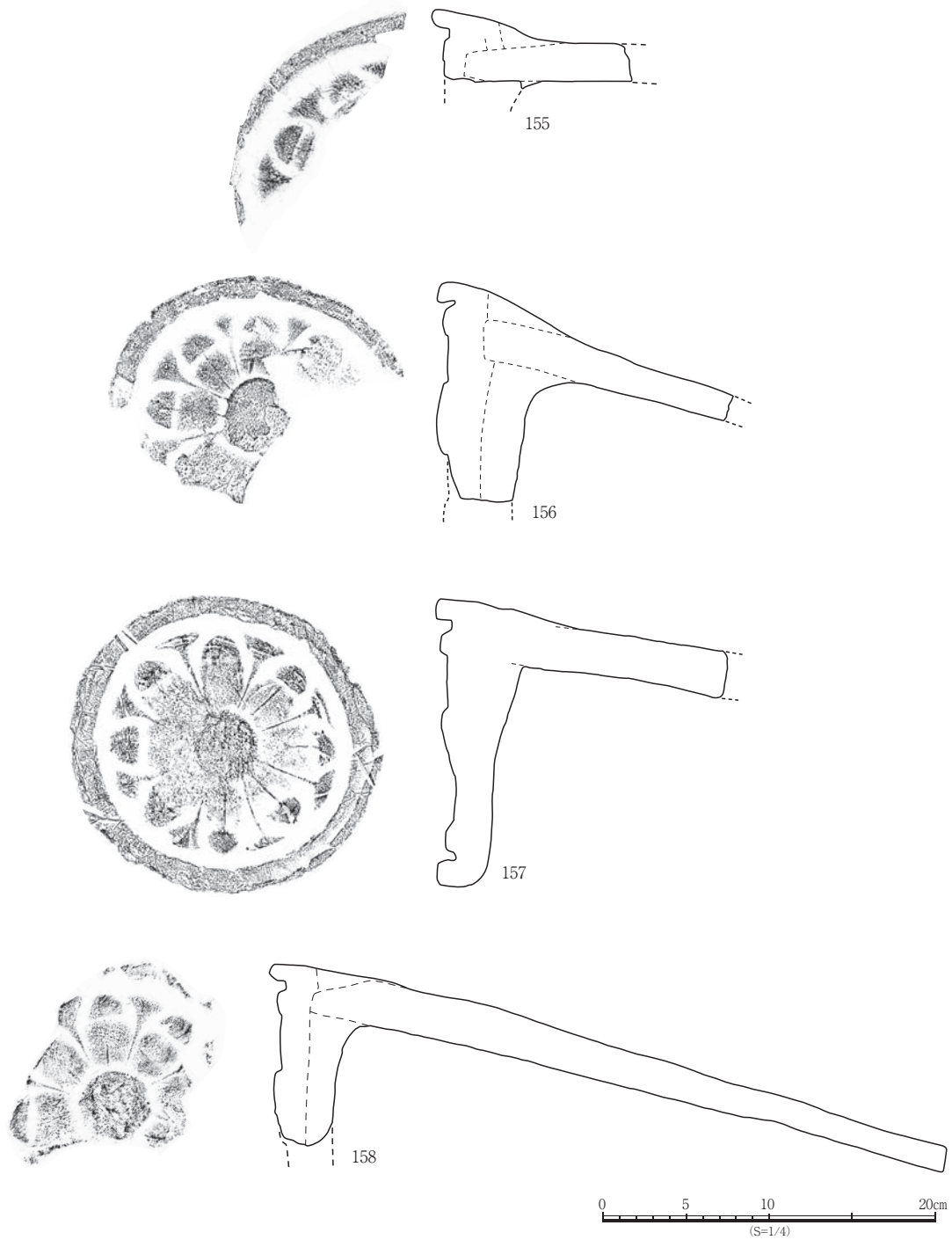


Fig.27 第V層出土遺物実測図(瓦1)

子は不明である。胎土はやや密で砂粒を多く含み、焼成は良く、色調はにぶい橙色を呈する。158は丸瓦部が完存、瓦当の約1/2が残存し、全長41.8cm、直径17.6cm、内区径14.8cm、中房径4.4cmを測る。中房は摩耗するため連子は不明である。瓦当と丸瓦部の接合は、瓦当上端より下側に丸瓦部を置き、その上下に厚く粘土を貼付する。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調はにぶい橙色を呈する。

159・160は熨斗瓦とみられる。159は一部が残存し、残存長11.6cm、厚さ1.3cmを測る。凹面は布目圧痕が残り、凸面は摩耗するため調整は不明である。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや不

2. 調査区の概要

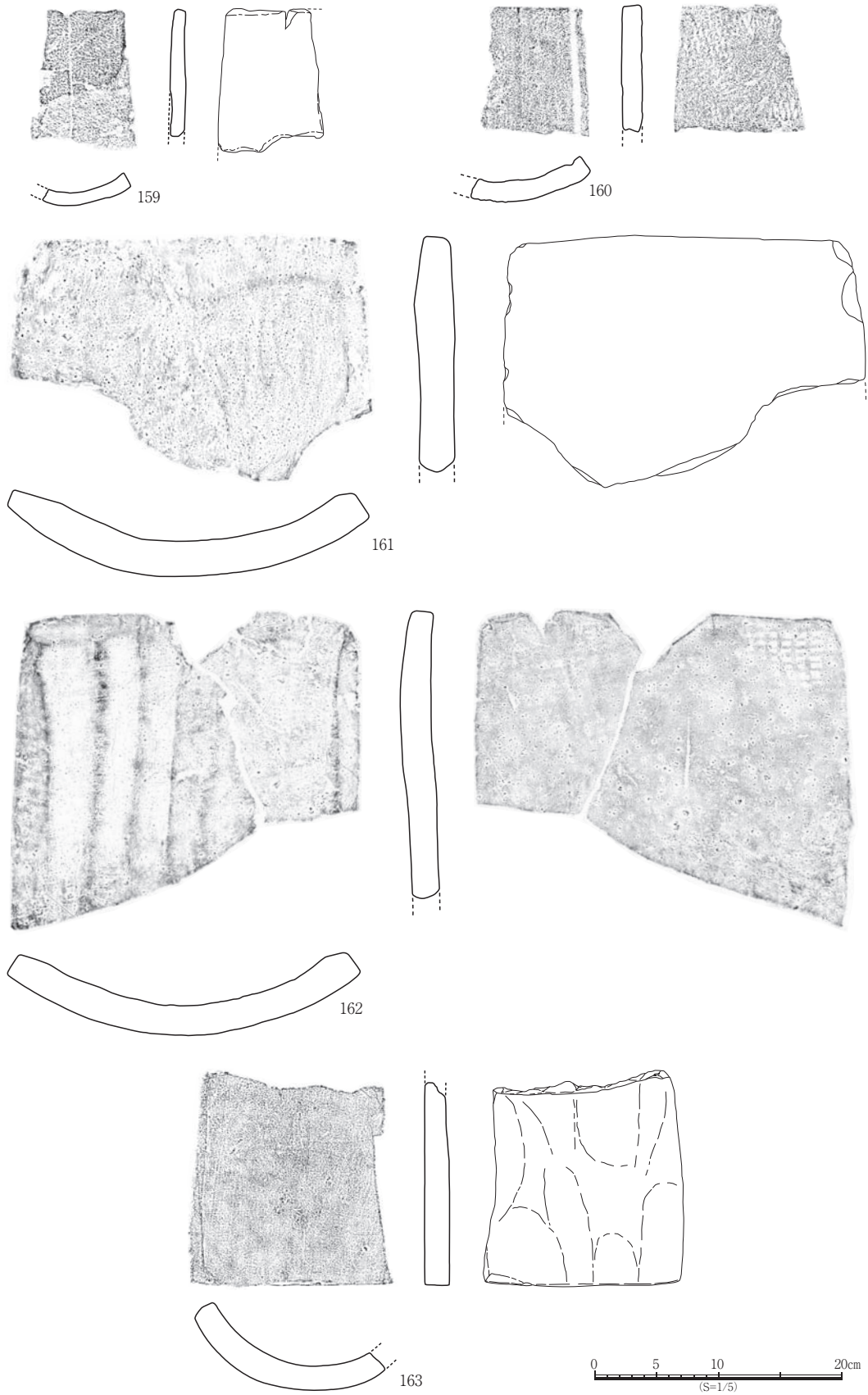


Fig.28 第V層出土遺物実測図(瓦2)

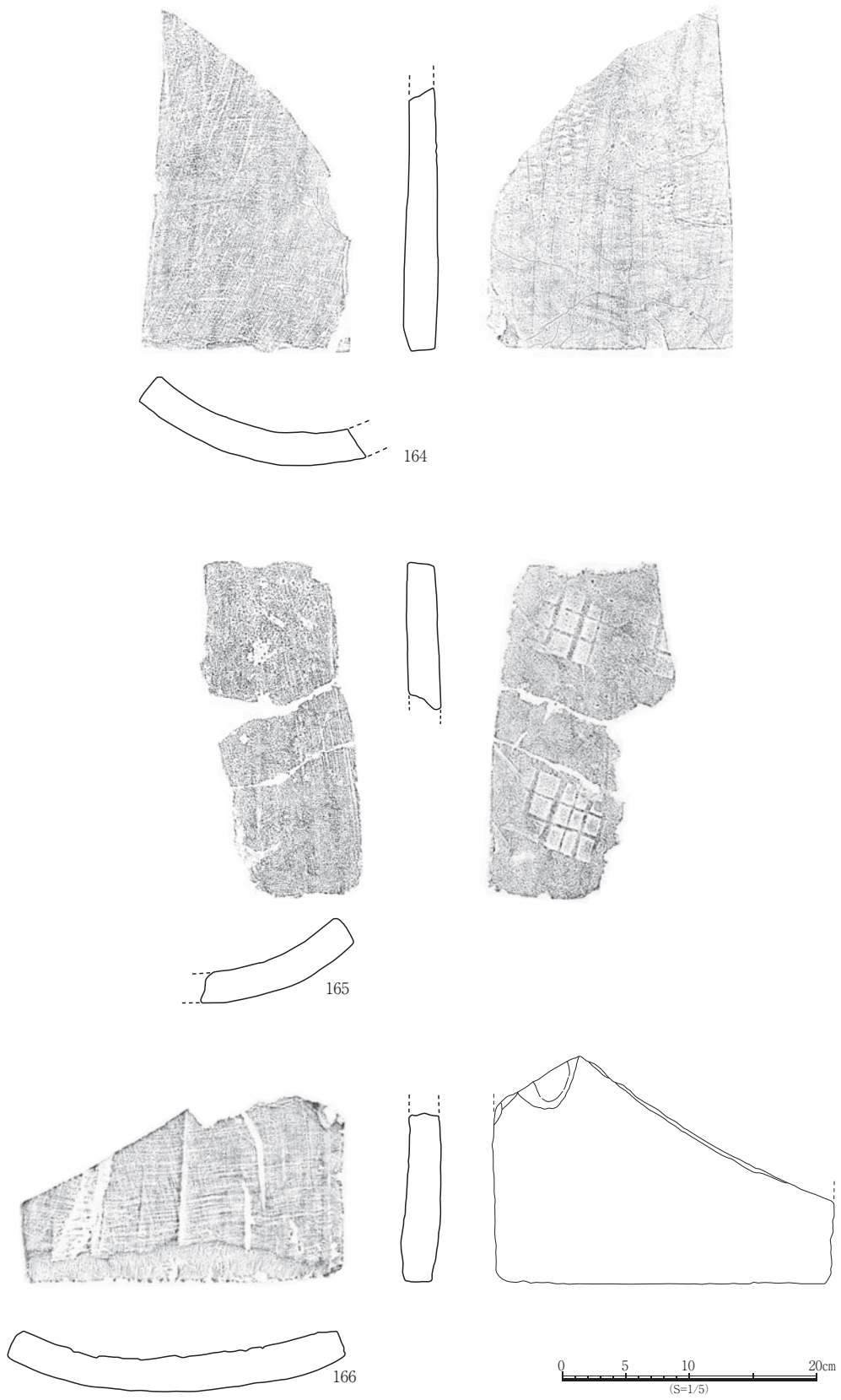


Fig.29 第V層出土遺物実測図(瓦3)

2. 調査区の概要

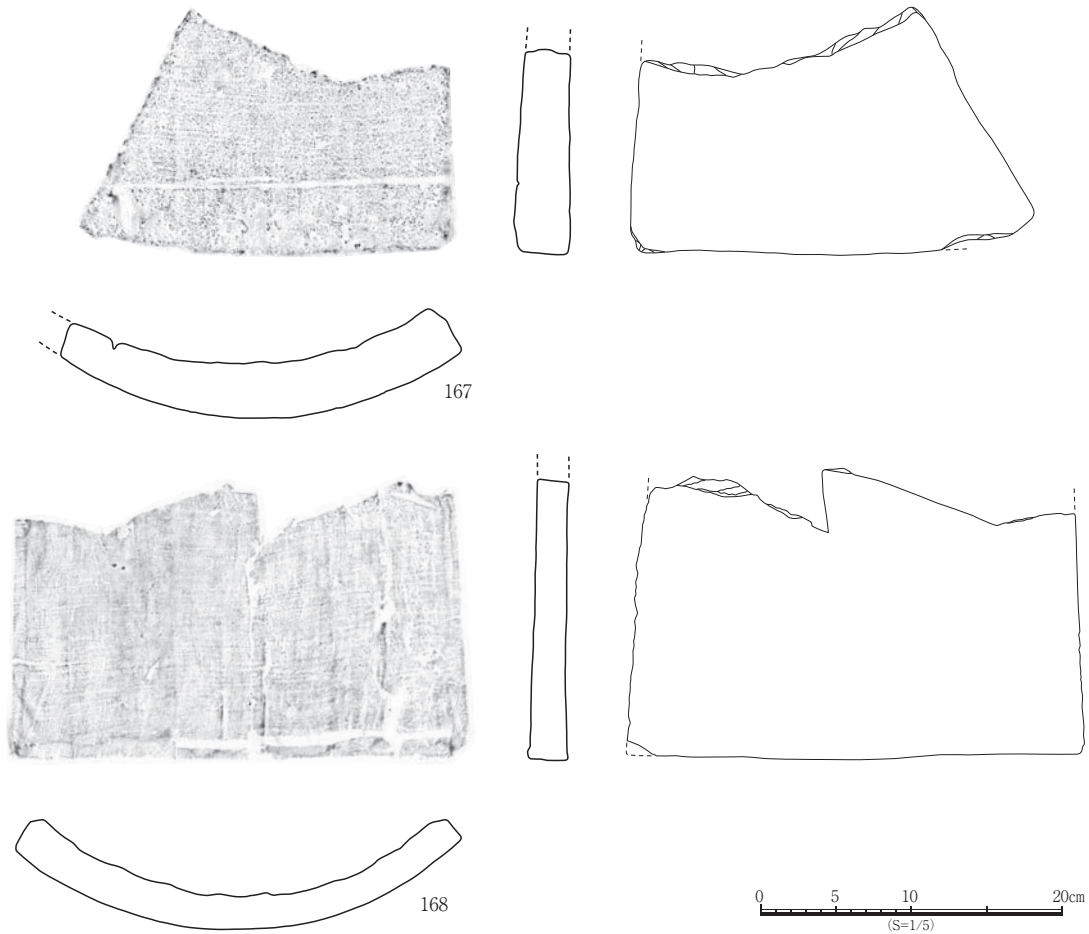


Fig.30 第V層出土遺物実測図(瓦4)

良で、色調は凹面が灰色またはにぶい黄色、凸面が灰色を呈する。160は一部が残存し、残存長10.5cm、厚さ1.6cmを測る。凹面は布目圧痕が残り、縦方向に沈線状の浅い溝がみられる。凸面は縄目状のタタキ目が残る。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は浅黄色を呈する。

161～174は平瓦である。161は約1/2が残存するとみられ、残存長20.2cm、厚さ2.9cmを測る。凹面は狭端部と両側面を面取りし、一部に布目圧痕が残る。凸面は摩耗するため調整は不明である。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや良好で、色調は灰色を呈する。162は約1/2が残存するとみられ、残存長26.3cm、狭端幅25.9cm、厚さ2.5cmを測る。凹面は狭端部と両側面を面取りし、布目圧痕と模骨痕が残る。凸面は細目の格子状タタキ目がみられる。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は凹面が灰色、凸面が灰色または褐色を呈する。163は一部が残存し、残存長17.5cm、厚さ2.0cmを測る。凹面は布目圧痕が残り、凸面は摩耗するため調整は不明である。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや良く、色調は凹面が浅黄色または灰色、凸面が灰黄色または黄色を呈する。164は約1/2が残存するとみられ、残存長29.2cm、厚さ2.6cmを測る。凹面は広端部と側面を面取りし、布目圧痕が残り、凸面は縦方向のナデ調整を施し、細目の格子状タタキ目が残る。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は凹面が黄灰色、凸面が暗灰黄色を呈する。165は一部が残存し、残存長26.7cm、厚さ2.6cmを測る。凹面は布目圧痕が残り、凸面は粗目の格子状タタキ目がみられる。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は凹面が浅黄橙色、凸面がにぶい橙色を呈する。166は約1/3が残存するとみられ、残存長17.7cm、

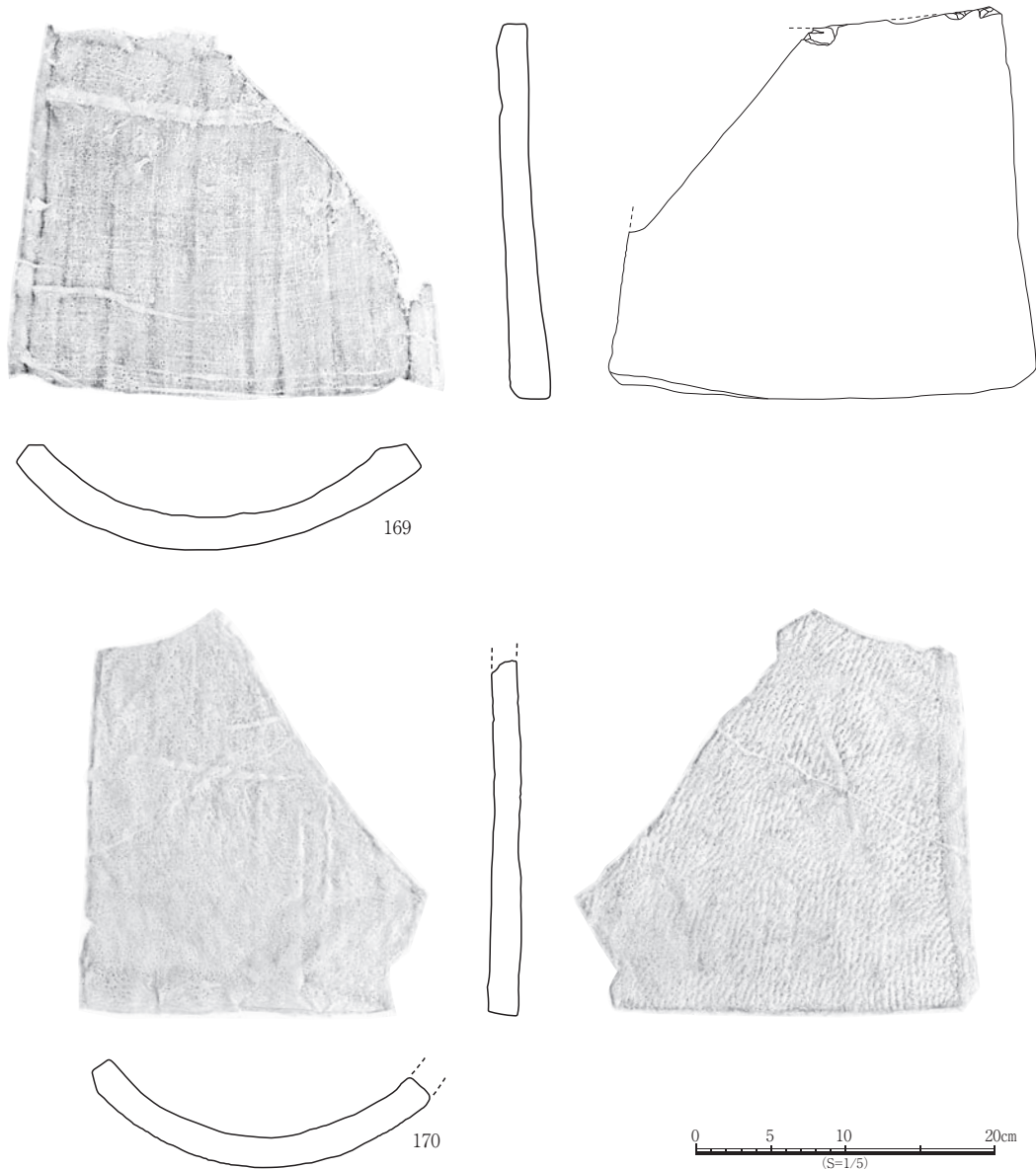


Fig.31 第V層出土遺物実測図(瓦5)

広端幅26.6cm, 厚さ2.8cmを測る。凹面は広端部と両側面を面取りし, 布目圧痕が残る。凸面は細目の格子状タタキ目がわずかに残るが, 摩耗するため調整は不明瞭である。胎土はやや密で, 焼成はやや良く, 色調は黄灰色を呈する。167は約1/3が残存するとみられ, 残存長16.5cm, 厚さ3.8cmを測る。凹面は広端部と側面を面取りし, 縦方向と横方向に浅い沈線状の溝がみられ, 布目圧痕が残る。凸面は摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で, 焼成はやや良く, 色調は凹面がにぶい黄橙色, 凸面が黄褐色を呈する。168は約1/2が残存するとみられ, 残存長19.2cm, 広端幅29.9cm, 厚さ2.2cmを測る。凹面は広端部と両側面を面取りし, 布目圧痕と模骨痕が残る。凸面は摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で, 焼成はやや悪く, 色調は凹面が灰色, 凸面が灰色または灰オリーブ色を呈する。169は一部を欠損し, 残存長26.3cm, 広端幅28.7cm, 厚さ2.2cmを測る。凹面は四方を面取りし, 横方向に浅い沈線状の溝がみられ, 布目圧痕と模骨痕が残る。凸面はナデ調整を施すが, 摩耗するため調整は不明瞭である。胎土はやや密で, 焼成はやや良く, 色調は凹面が褐灰色, 凸面が灰色を呈す

2. 調査区の概要



Fig.32 第V層出土遺物実測図(瓦6)

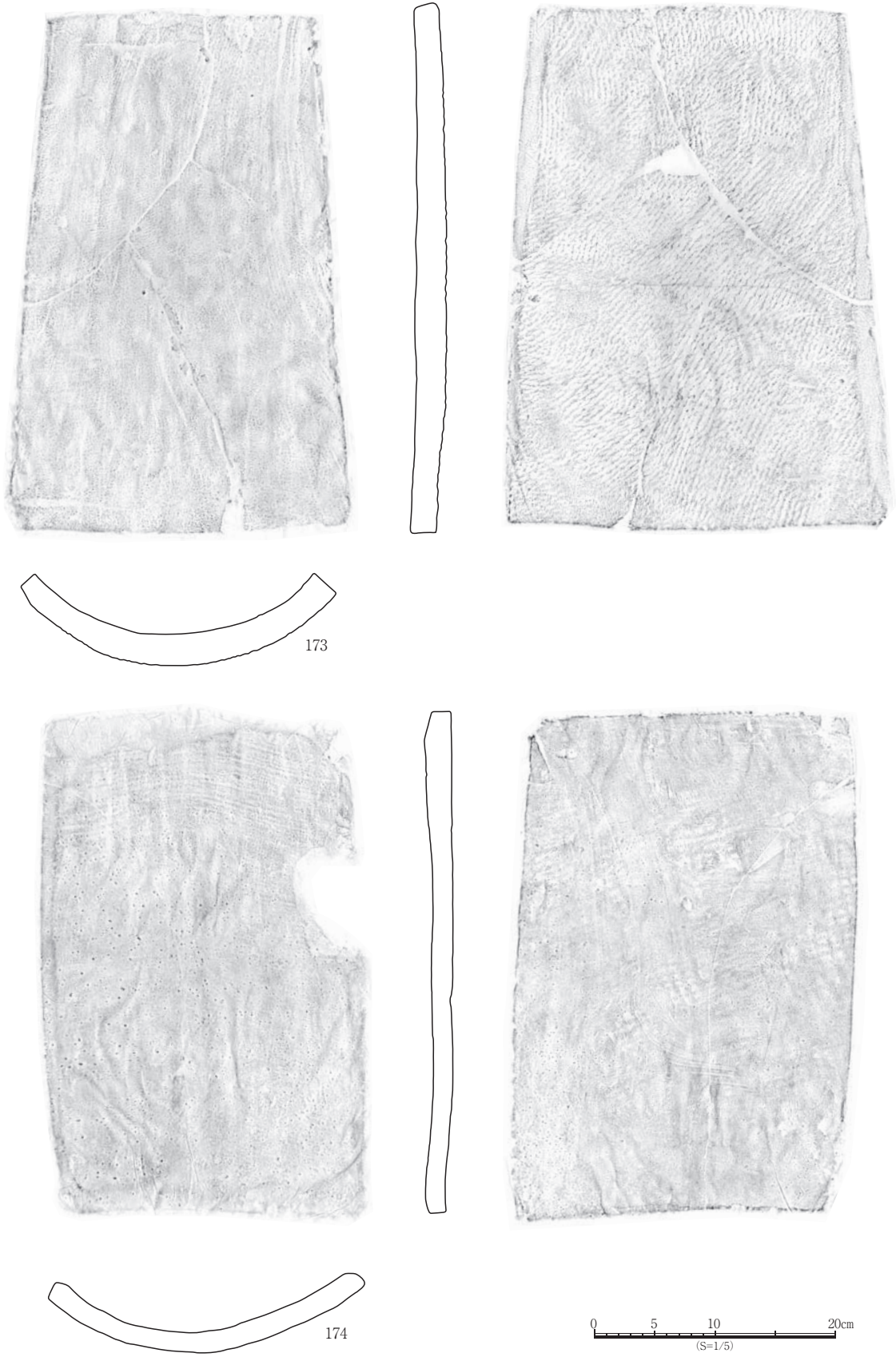


Fig.33 第V層出土遺物実測図(瓦7)

2. 調査区の概要

る。170は一部が残存し、残存長27.7cm、厚さ2.0cmを測る。凹面の広端部と凸面の側面は面取りを行う。凹面は布目圧痕と模骨痕が残り、凸面は全面に縄目状のタタキ目がみられる。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調はにぶい黄橙色を呈する。171は完存し、全長39.9cm、広端幅29.1cm、狭端幅24.0cm、全厚2.1cmを測る。凹面は広端部と両側面を面取りし、布目圧痕と模骨痕が残る。凸面は細目の格子状タタキ目がわずかに残るが、摩耗するため調整は不明瞭である。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は黄灰色を呈する。172は一部を欠損し、全長42.6cm、厚さ2.2cmを測る。凹面は広端部を面取りし、布目圧痕がわずかに残る。凸面は全面に縄目状のタタキ目がみられる。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調はにぶい黄灰色を呈する。173は完存し、全長43.9cm、広端幅28.0cm、狭端幅21.8cm、全厚2.6cmを測る。凹面は布目圧痕と模骨痕が残り、凸面は側面を面取りし、全面に縄目状のタタキを施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は凹面が灰白色または明黄褐色、凸面が灰白色または浅黄橙色を呈する。

174はほぼ完存し、全長42.2cm、全幅26.0cm、全厚1.8cmを測り、平面形態は長方形を呈する。凹面は四方を面取りし、布目圧痕と模骨痕が残る。凸面は細目の格子状タタキを施したのち、ナデ調整を行う。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は黄灰色を呈する。

175・176は丸瓦である。175は一部が残存し、残存長21.0cm、狭端幅14.2cm、厚さ2.0cmを測る。凹面は両側面を面取りし、布目圧痕が残る。凸面はナデ調整を施すが、摩耗するため不明瞭である。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は灰黄色を呈する。176は約2/3が残存するとみられ、残存長27.0cm、狭端幅14.2cm、厚さ2.1cmを測る。凹面は両側面を面取りし、

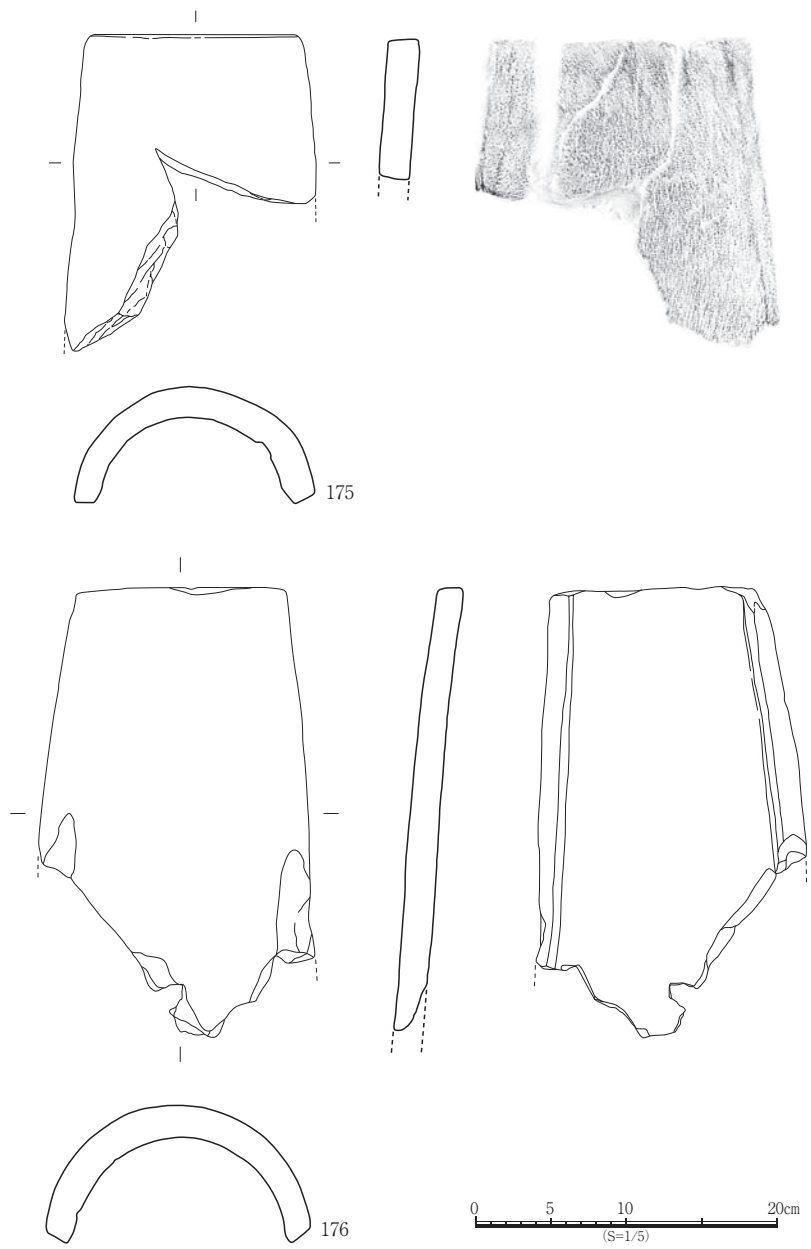


Fig.34 第V層出土遺物実測図(瓦8)

布目圧痕がわずかに残る。凸面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は凹面が黄灰色またはにぶい黄橙色、凸面が黄灰色を呈する。

土製品(Fig.35 - 177~179)

177は博仏である。方形の独尊博仏で、残存長5.4cm、全幅4.0cm、厚さ1.5cmを測る。博面には菩薩像を配し、顔面は剥落するが、頭光を負い、頭上には化仏とみられる膨らみがあり、両肩には垂髪がみられる。左肩には衣を纏い、右手は施無畏印、胸元には胸飾りらしきものがみられる。背面はハケ調整で、側面はヘラまたはナデによる調整を加える。胎土は密で、焼成は良く、色調はにぶい黄橙色または灰色を呈する。

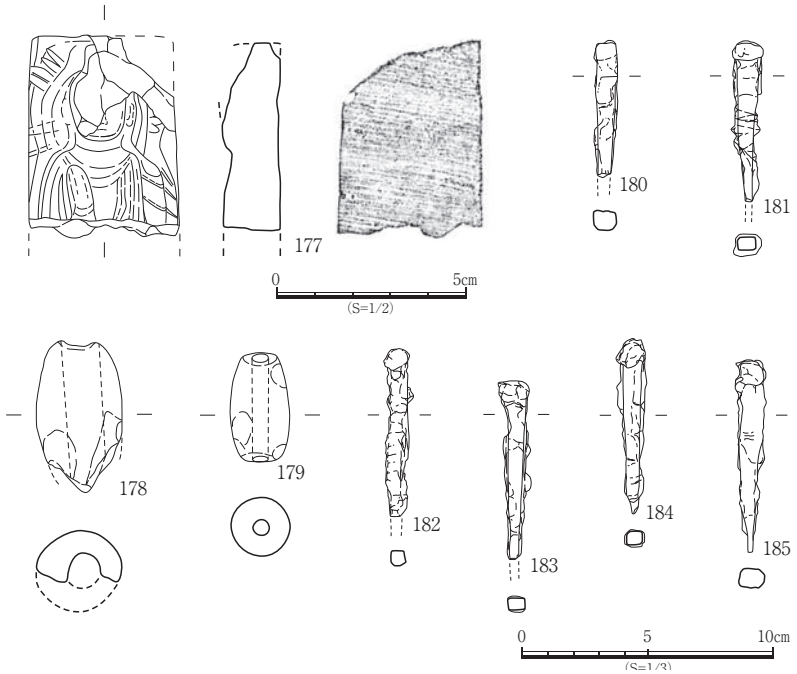


Fig.35 第Ⅴ層出土遺物実測図(土製品・鉄製品)

178・179は管状土錘である。

178は紡錘形を呈する。一部が残存し、残存長6.0cm、全幅3.4cm、孔径1.4cm、重量25.6gを測る。全面にナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため不明である。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は橙色を呈する。179は円筒形を呈する。完存し、全長4.4cm、全幅2.3cm、孔径0.6cm、重量24.0gを測る。全面にナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調はにぶい黄橙色または黄灰色を呈する。

鉄製品(Fig.35 - 180~185)

180~185は釘で、いずれも全面に錆化が見られる。断面は矩形で、頂部はL字状を呈し、先端を細く仕上げる。180は先端を欠損し、残存長5.4cm、全幅0.9cmを測る。181は先端を欠損し、残存長6.4cm、全幅0.9cmを測る。182は先端を欠損し、残存長6.7cm、全幅0.8cmを測る。183は先端を欠損し、残存長6.4cm、全幅0.9cmを測る。184は完存し、全長7.0cm、全幅0.9cmを測る。185は完存し、全長7.7cm、全幅1.0cmを測る。

その他の出土遺物

攪乱を受けた遺構より出土したもので、いずれも近代の遺物と伴出した。

須恵器(Fig.36 - 186)

186は高杯で、脚部の一部が残存する。脚部はハの字状に開き、杯底部は緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、脚柱内面はナデ調整でシボリ目が残る、外面には凹線を2条施す。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面とも灰色または灰白色を呈する。

土師質土器(Fig.36 - 187・188)

2. 調査区の概要

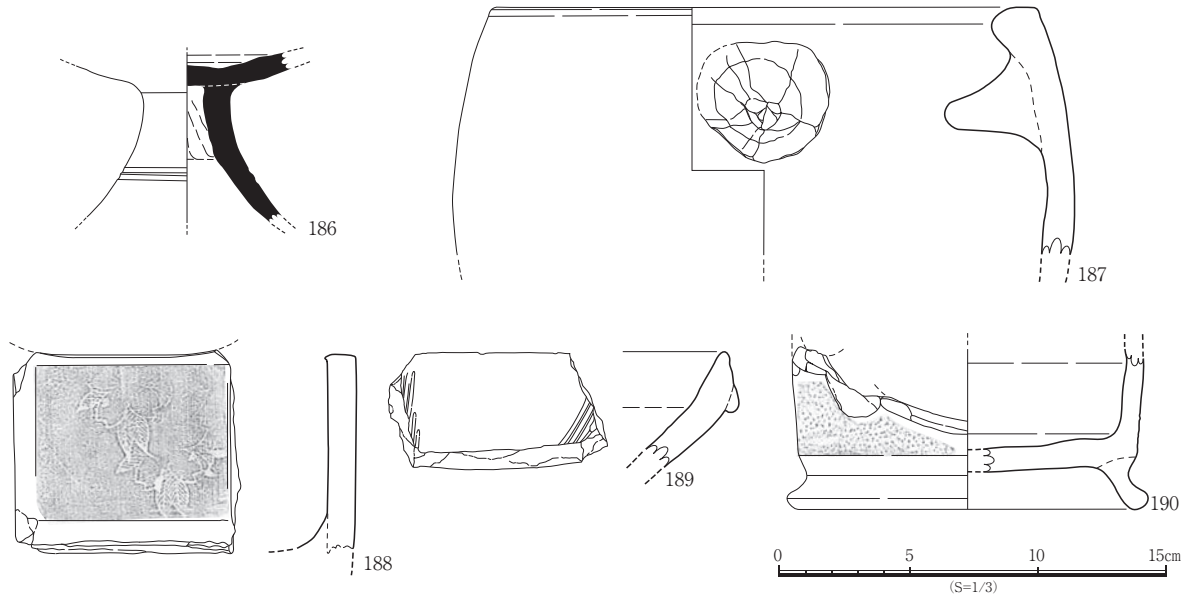


Fig.36 その他の出土遺物実測図(須恵器・土師質土器・備前焼ほか)

187は焜炉で、口縁部の約1/5が残存し、口径20.8cmを測る。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は大きく肥厚して、端部を丸く収める。内面には残存部で一箇所角状突起を貼付する。調整は全面にナデを施し、外面は特に丁寧に仕上げ、口縁部はヨコナデである。胎土はやや密で金雲母を含み、焼成はやや良好で、色調は内外面とも橙色を呈する。

188は方形を呈するとみられる火鉢で、側板の一部が残存する。口縁部は弧を描き、両側面と下面は接合面となり、接合面には多数の沈線を入れる。型成形とみられ、外面は方形枠に桜文がスタンプ状に施され、内面はナデ調整を施す。胎土はやや粗く金雲母を多く含み、焼成は良好で、色調は内外面ともいぼ褐色を呈する。

備前焼(Fig.36 - 189)

189は播鉢で、口縁部の一部が残存する。口縁部はやや内湾し、端部は外面に粘土を貼付して肥厚させる。器面には回転ナデ調整を施し、内面には摺り目の一部がみられる。胎土はやや粗く、焼成は良く、色調は内面が暗灰黄色、外面がいぼ赤褐色を呈する。

瓦質土器(Fig.36 - 190)

190は焜炉で、体部から底部の約1/3が残存し、底径13.0cmを測る。底部にはハの字状に開く高い高台を貼付し、体部は底部より屈曲して上方に立ち上がり、2箇所窓が残る。調整は体部外面は型成形とみられ、体部内面は横方向のナデ調整、内底面と高台内はナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

近世陶器(Fig.37 - 191 ~ 196)

191~193は瀬戸・美濃系の広東碗である。器面には白化粧土を薄く施したのち、透明釉を薄く掛け、曇付は釉ハギを行う。191は底部が完存し、底径6.0cmを測る。底部は器壁が厚く、直立する高台を有する。見込には五弁花のコンニャク印判、外面には染付がみられる。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰白色を呈する。192は底部がほぼ完存し、口径11.0cm、器高6.3cm、底径4.8cmを測

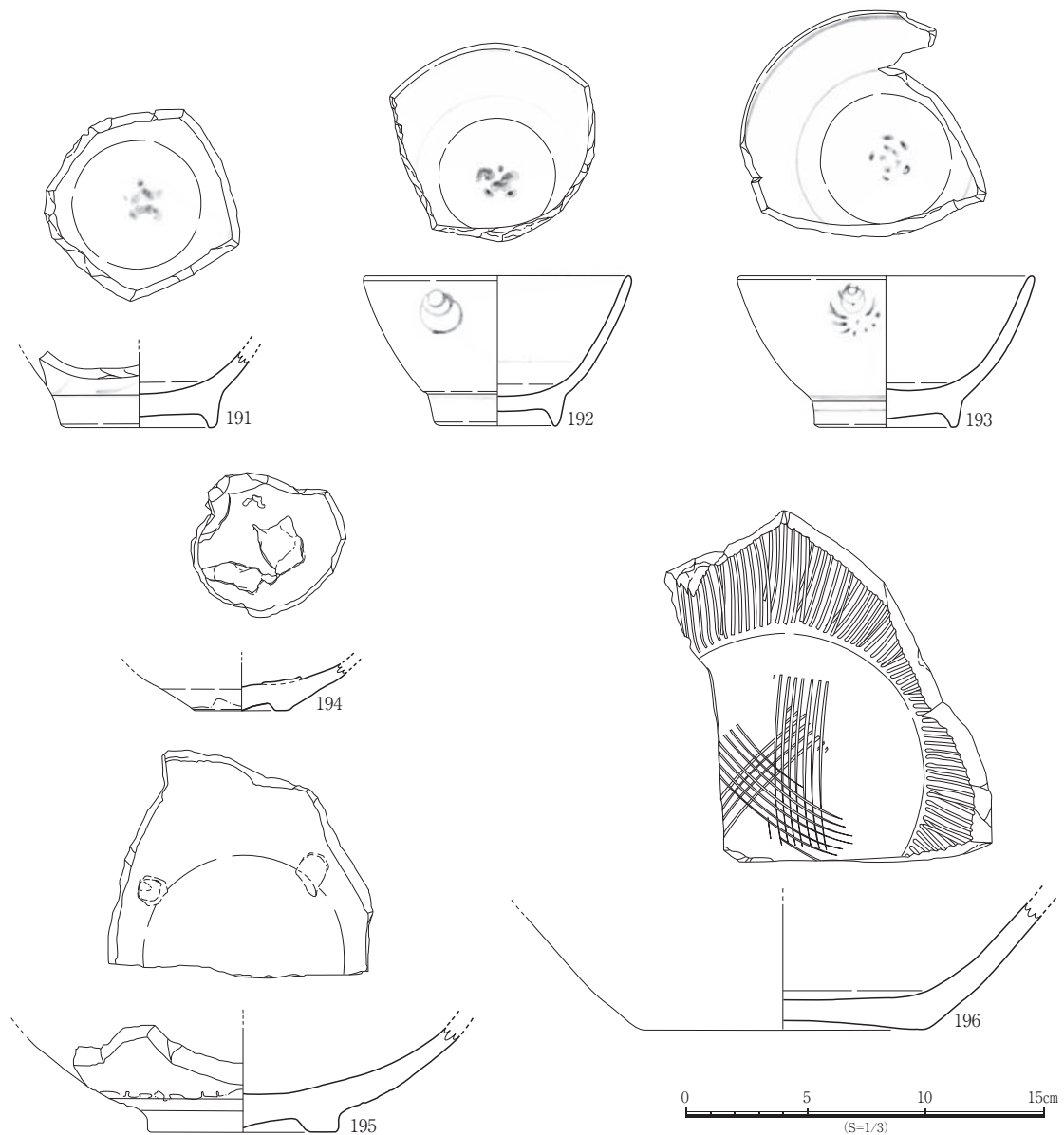


Fig.37 その他の出土遺物実測図(近世陶器)

る。底部は断面三角形を呈する高台を有する。見込には五弁花のコンニャク印判，外面には宝文の染付がみられる。胎土はやや密で，焼成は良く，色調は内外面とも灰白色を呈する。193は底部が完存し，口径12.2cm，器高6.3cm，底径5.6cmを測る。底部は器壁が厚く，断面三角形を呈する高台を有する。見込には五弁花のコンニャク印判，外面には宝文の染付がみられる。胎土はやや密で，焼成はやや良く，色調は内外面とも灰白色を呈する。

194・195は唐津焼の皿である。194は底部がほぼ完存し，底径4.1cmを測る。底部には低く太い削り出し高台を有し，高台内には兜巾が残る。器面には一部高台内まで灰釉を薄く施し，見込には砂目痕が残る。胎土はやや密で，焼成はやや良く，色調は内面がオリーブ灰色，外面が灰白色またはにぶい赤褐色を呈する。195は底部の約1/2が残存し，底径7.8cmを測る。底部には低く太い削り出し高台を有し，高台脇の削りはシャープである。器面には体部下半まで灰釉を薄く施し，見込には胎土目痕が

2. 調査区の概要

残る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰白色または浅黄橙色を呈する。

196は播鉢で、底部の約1/4が残存し、底径11.8cmを測る。底部は平らで、体部はやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部外面は無調整である。体部内面には7~8本単位の摺り目、内底面はナデ調整ののち櫛状工具による記号がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも赤褐色を呈する。

近世磁器 (Fig.38 - 197~208)

197・198は肥前系の蓋である。青磁染付で、外面は青磁釉、内面とつまみ内は透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内面には中央に五弁花、口縁部に四方襷文の染付、つまみ内には二重方形枠に渦福の銘がみられる。197は約2/3が残存し、口径9.5cm、器高3.3cm、つまみ径4.0cmを測る。天井部から緩やかに湾曲して口縁部に至る。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色、外面がオリーブ灰色を呈する。198はつまみが完存し、口径10.0cm、器高3.4cm、つまみ径4.0cmを測る。天井部から大きく湾曲して口縁部に至る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰黄色、外面がオリーブ色または灰黄色を呈する。

199・200は肥前系の丸碗である。青磁染付で、外面は青磁釉、内面と高台内は透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギする。見込に五弁花、口縁部内面に四方襷文の染付、高台内には二重方形枠に渦福の銘がみられる。199は底部が完存し、口径11.3cm、器高6.3cm、底径4.0cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が明オリーブ灰色、外面がオリーブ灰色を呈する。200は底部が完存し、口径11.2cm、器高6.4cm、底径4.0cmを測る。器壁が厚く、底部には直立する削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面がオリーブ灰色を呈する。

201~203は肥前系(波佐見)の皿である。201は約1/2が残存し、口径13.2cm、器高3.0cm、底径6.3cmを測る。器高が低く、底部に断面三角形を呈する削り出し高台を有する。器面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギ、見込は蛇ノ目釉ハギを行う。内面には口縁部に唐草文の染付、見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも明オリーブ灰色を呈する。202は約1/2が残存し、口径13.5cm、器高4.3cm、底径7.7cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内面には口縁部に梅、松、扇、外面には唐草文の染付、見込には五弁花のコンニャク印判、高台内には銘がみられる。胎土はやや密で5mm大の礫を含み、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。203は約1/3が残存し、口径14.0cm、器高4.1cm、底径8.8cmを測る。底部は器壁が厚く、断面三角形を呈する削り出し高台を有する。器面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内面には扇、岩に葦とみられる染付、見込には五弁花のコンニャク印判、外面には唐草文、高台内には銘がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

204・205は肥前系の瓶である。204は完存し、口径1.3cm、器高6.1cm、底径2.4cmを測る。底部にはややハの字状に開く削り出し高台を有する。胴部は若干膨らみ、頸部は真直ぐ上方に立ち上がり、口縁部は短く外反する。外面と口縁部内面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面には松と草文、雁の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。205は口縁部

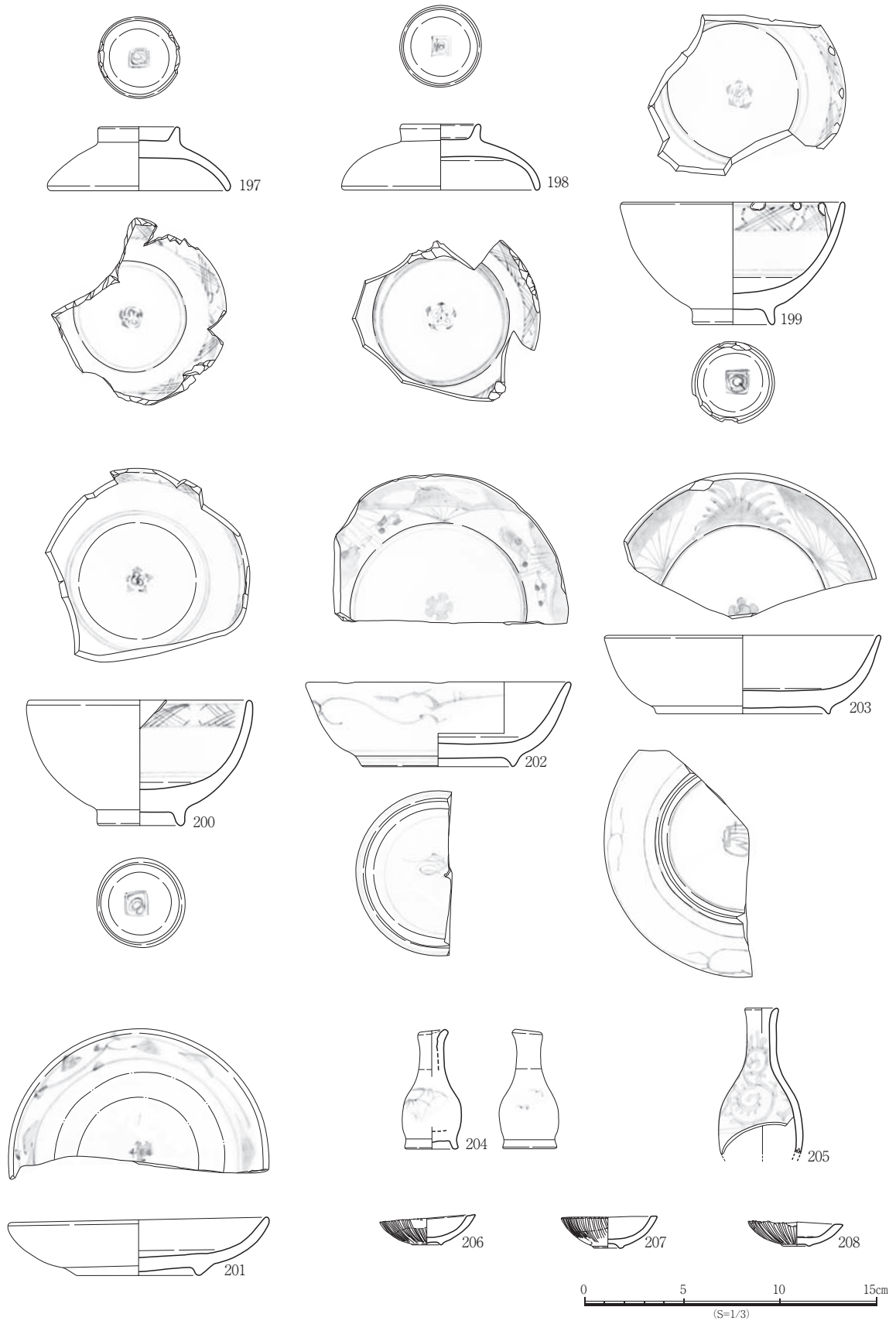


Fig.38 その他の出土遺物実測図(近世磁器)

2. 調査区の概要

が完存し、口径1.6cmを測る。胴部は若干膨らみ、頸部は真直ぐ上方に立ち上がり、口縁部は短く外反する。外面と口縁部内面には透明釉を薄く施し、外面には蛸唐草の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

206～208は肥前系の紅皿である。型成形で、貝殻状を呈し、底部には断面半円形の小さな高台を有する。口縁部の幅は広く、内面と口縁部外面には白色釉を薄く施す。206は完存し、口径4.9cm、器高1.6cm、底径1.5cmを測る。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。207は完存し、口径4.9cm、器高1.6cm、底径1.4cmを測る。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。208は完存し、口径4.8cm、器高1.2cm、底径1.4cmを測る。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

古銭(Fig.39 - 209～212)

209～212は寛永通寶で、すべて完存する。209は銭径2.48cm、孔径0.48cm、銭厚0.14cm、重量2.8gを測る。全面に錆化が進む。210は新寛永で銭径2.35cm、孔径0.59cm、銭厚0.15cm、重量2.9gを測る。全面に錆化が進む。211は新寛永で銭径2.40cm、孔径0.60cm、銭厚0.14cm、重量2.7gを測る。212は新寛永で銭径2.41cm、孔径0.57cm、銭厚0.12cm、重量2.4gを測る。

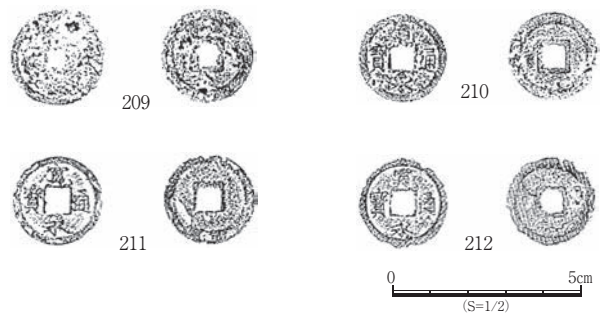


Fig.39 その他の出土遺物実測図(古銭)

第三章 遺構と遺物

1. 古代

古代の遺物包含層はほとんど土壌化しておらず、遺構の検出は非常に困難を極めたが、出土遺物や検出した遺構から寺院跡である可能性が高く、特に調査区北側で多く確認されたことからその中心は今回の調査区の北側にあるものとみられる。

(1) 掘立柱建物跡

SB-101 (Fig.40)

調査区北西部で確認した梁間2間(5.70m)の掘立柱建物跡で、桁行1間分(1.80m)を確認した。P-1とP-5の柱間には東柱に使われたとみられる礎石を確認しており、東西棟建物であったとみられるが、東側部分は確認できなかった。柱間寸法は、梁間(南北)が2.85m、桁行(東西)が1.80mである。柱穴は径0.99~1.17mの隅丸方形で、柱径は約34cmとみられ、すべての柱穴の底には石の礎板がみられた。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片10点、瓦片65点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

(2) 礎石建物跡

SB-102 (Fig.41)

SB-101の南側で確認した梁間2間(3.60m)、桁行4間(8.40m)の東西棟建物とみられるが、北側柱は確認できなかった。棟方向は方眼東で、柱間寸法は、梁間(南北)が1.80m、桁行(東西)が1.80mと2.40mで、建物中央部の柱間寸法が広がっている。礎石は径約0.50mの楕円形を呈する扁平な河原石で、加工痕等はみられな

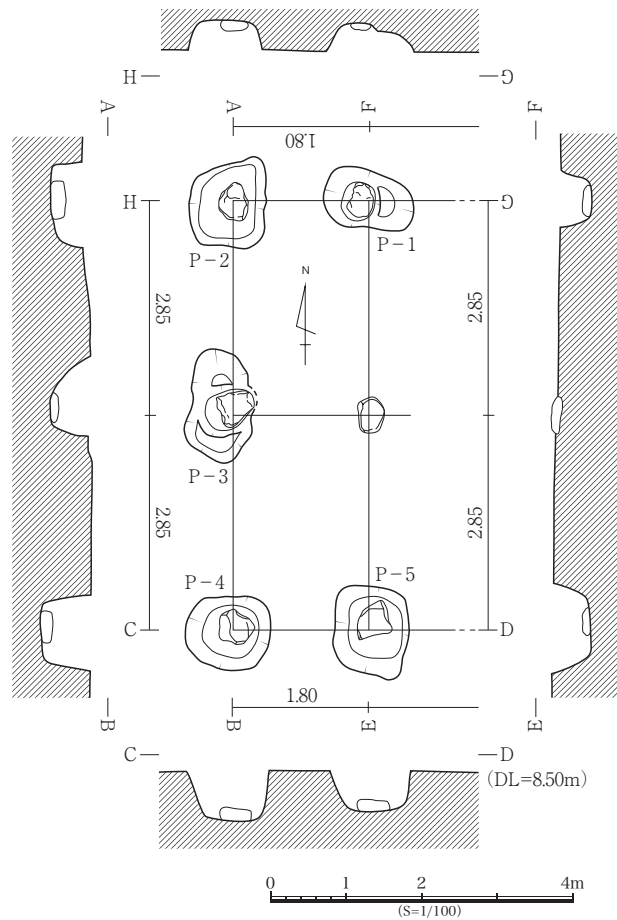


Fig.40 SB-101

Table.2 古代建物跡計測表

遺構番号	規模				面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
	梁間 × 桁行	梁間(m)×桁行(m)	柱間寸法				
			梁間(m)	桁行(m)			
SB-101	2×(1)	5.70×(1.80)	2.85	1.80	(10.26)	N-90°-E	掘立柱建物跡, 礎板
SB-102	(2)×4	(3.60×8.40)	1.80	1.80・2.40	(30.24)	N-90°-E	礎石建物跡

1. 古代

かった。また、礎石の下をわずかに掘り込み、据付けの痕跡がみられるものもあった。出土遺物は皆無であった。

(3) 溝跡

SD-101

調査区北西部で検出した南北溝跡(N-1°-E)で、北側は調査区外へ続く。7.12mを検出し、幅0.80~1.04m、深さ約14cmを測り、基底面はほぼ平らで標高8.160m前後であっ

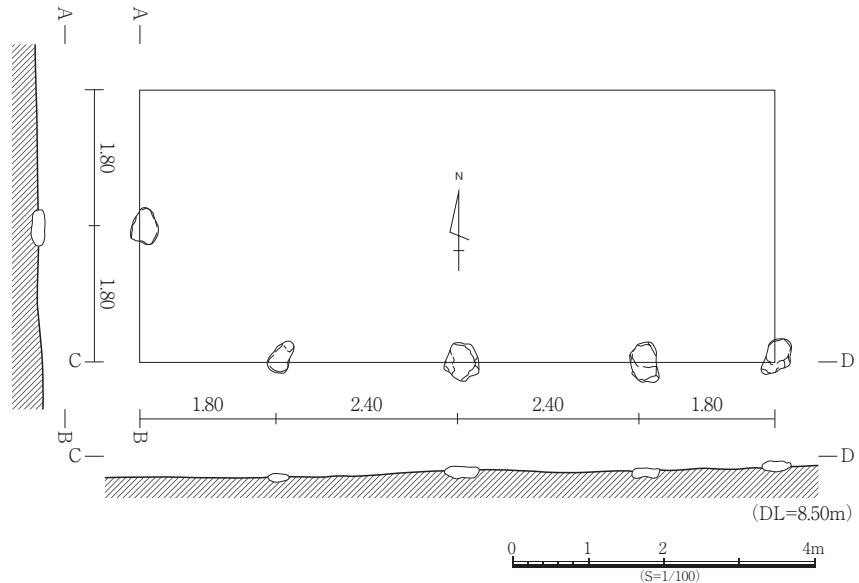


Fig.41 SB-102

た。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトであった。掘方は不明瞭であるが、埋土には非常に多くの瓦がみられ、出土遺物には瓦片約80点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-102 (Fig.42)

SD-101の東側で検出した南北溝跡(N-3°-E)で、北側は調査区外へ続く。8.00mを検出し、幅0.80~1.19m、深さ約21cmを測り、基底面はほぼ平らで標高8.200m前後であった。断面は舟底形を呈し、埋土は黄褐色砂質シルトであった。掘方は不明瞭であるが、埋土には非常に多くの瓦がみられ、出土遺物には土師器片3点、須恵器片2点、瓦片約180点がみられ、須恵器1点(213)が図示できた。

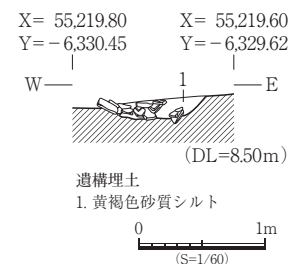


Fig.42 SD-102

出土遺物

須恵器 (Fig.43 - 213)

213は高杯で、脚部がほぼ完存し、底径11.2cmを測る。脚部はハの字状に開き、裾部は水平に伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、外面には凹線が2条みられる。胎土は粗く礫を含み、焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰色を呈する。

SD-103

調査区中央部で検出した南北溝跡で、N-5°-Wに延びた後、N-5°-Eに向きを変える。北側は攪乱を受けており、9.26mを検出した。幅27~48cm、深さ約7~25cmを測り、基底面は北(8.189m)から南(8.158m)に緩やかに傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、中粒砂を多く含んでいた。出土遺物には土師器片10点、須恵器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

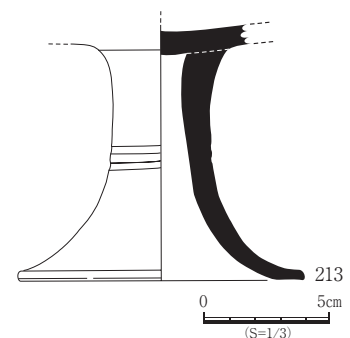


Fig.43 SD-102出土遺物実測図

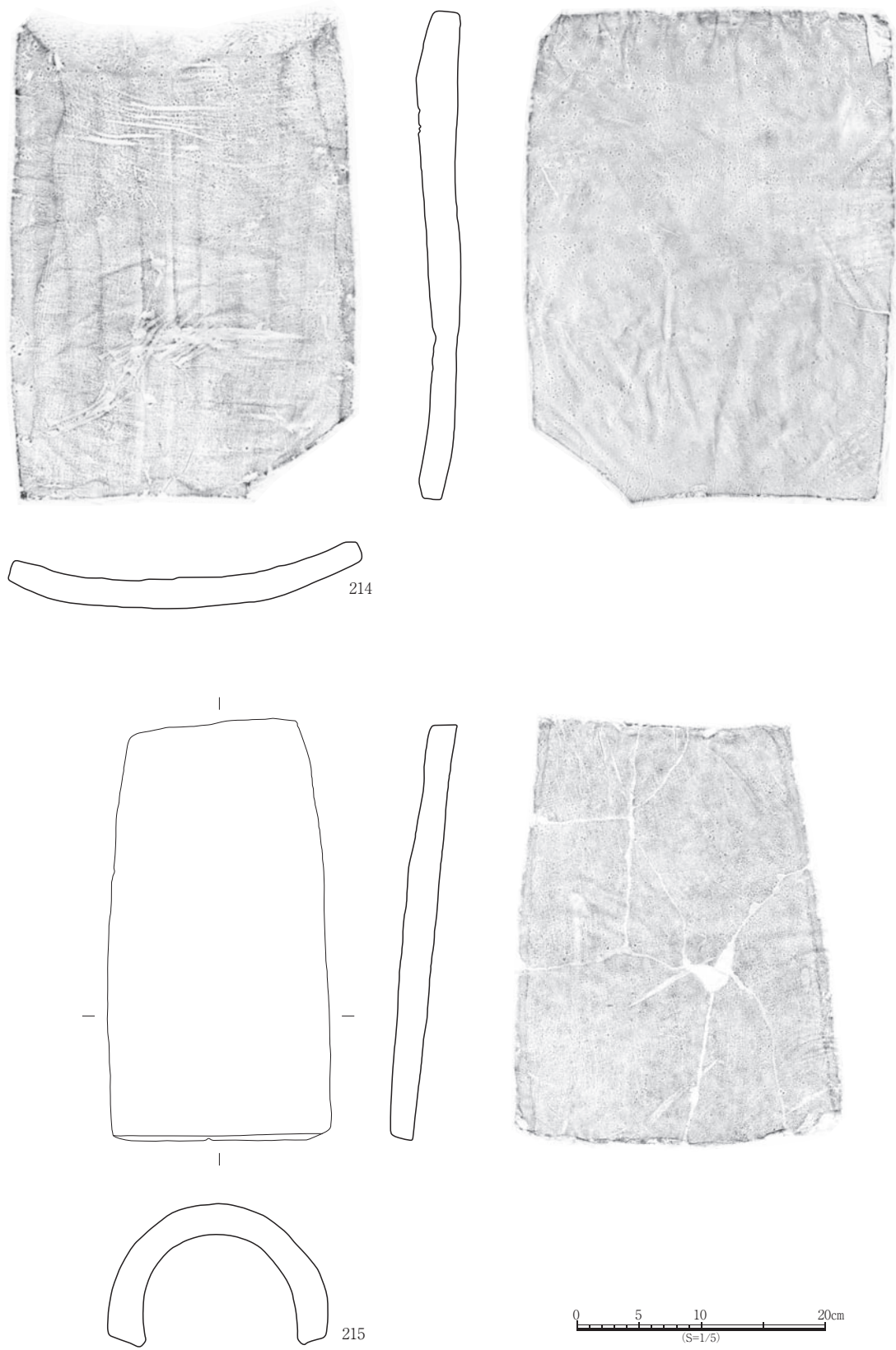


Fig.44 SD - 104出土遺物実測図

1. 古代

SD - 104

調査区北東部で検出した南北溝跡で、N - 26° - Eに延びた後、N - 3° - Wに向きを変える。一部攪乱を受けており、6.25mを検出した。幅0.61～1.31m、深さ6～17cmを測り、基底面は北(8.583m)から南(8.503m)に緩やかに傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトで、褐灰色砂質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には瓦片約90点がみられ、瓦2点(214・215)が図示できた。

出土遺物

瓦(Fig.44 - 214・215)

214は平瓦で、一部を欠損し、全長39.5cm、全幅28.5cm、厚さ3.3cmを測り、平面形態は長方形を呈する。凹面は狭端部と後端部、両端を面取りし、布目圧痕と模骨痕が残る。凸面は摩耗するが、細目の格子状タタキ目が残る。胎土はやや密で1cm大の礫を含み、焼成はやや良く、色調は凹面が暗灰色、凸面が暗灰色または灰色を呈する。

215は丸瓦で、一部を欠損し、全長33.9cm、広端幅17.5cm、狭端幅13.9cm、厚さ2.8cmを測る。凹面は両端を面取りし、布目圧痕が残る。凸面はナデ調整を施すが、摩耗するため不明瞭である。胎土はやや密で砂粒を多く含み、焼成はやや良く、色調はにぶい橙色を呈する。

(4) ピット

P - 101

SD - 102の東側で検出した隅丸方形を呈するピットで、P - 102を切る。長辺1.58m、短辺1.03m、深さ16cmを測り、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には、須恵器3点、鉄釘片1点がみられ、須恵器3点(216～218)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.45 - 216～218)

216～218は杯である。216は完存し、口径8.8cm、器高3.1cm、底径6.8cmを測る。口縁部は底部より屈曲し、外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。217は底部が完存し、口径13.2cm、器高4.8cm、底径9.9cmを測る。口縁部は底部より屈曲し、外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、口縁部内面にはわずかに煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色または灰黄色を呈する。218は底部の約1/2が残存し、底径12.0cmを測る。底部には断面方形で、ハの字状に開く高台を有し、体部は底部より緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、摩耗するため不明である。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内面が灰白色、外面は灰白色または淡黄色を呈する。

P - 102

P - 101の南側で検出した隅丸方形を呈するピットで、P - 101に切られる。長辺1.71m、短辺1.15m、深さ10cmを測り、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には、土師器片3点、須恵器片2点がみられ、土師器1点(219)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.45 - 219)

219は杯で、約1/3が残存し、口径14.7cm、器高4.1cm、底径9.4cmを測る。体部は底部より屈曲して立ち上がり、口縁部はやや内湾する。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデを加え、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面がにぶい黄橙色または灰白色、外面が灰白色または浅黄色を呈する。

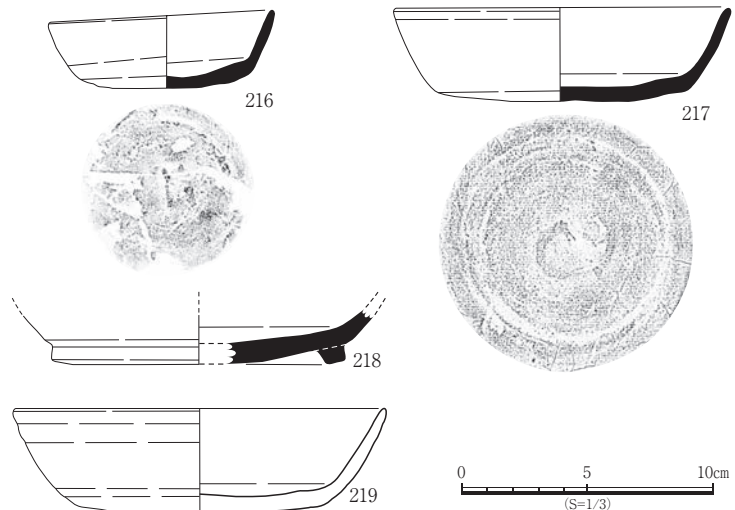


Fig.45 P-101・102出土遺物実測図

P-103

P-102の東側で検出した楕円形を呈するピットで、長径1.01m、短径0.82m、深さ15cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片35点、スサ入り塊がみられ、土師器9点(220~228)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.46 - 220~228)

220~228は杯である。220は底部の約3/4が残存し、底径7.6cmを測る。体部は底部より屈曲して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、内面の一部には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともオリーブ褐色または黄褐色を呈する。221は約1/4が残存し、口径9.2cm、器高3.0cm、底径6.7cmを測る。口縁部は体部より屈曲して外上方へ開く。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、口縁部内面には馬蹄形に煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが不明瞭である。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色または黒色、外面が灰白色を呈する。222は約1/2が残存し、口径9.2cm、器高3.0cm、底径6.5cmを測る。221と同様の形態を呈し、器面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗するため不明瞭で、内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色または黒褐色、外面が灰白色を呈する。223はほぼ完存し、口径9.7cm、器高2.9cm、底径6.4cmを測る。器壁が薄く、口縁部は体部より屈曲して外上方へ開き、端部を肥厚させる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内面がにぶい黄色または灰色、外面がにぶい黄色を呈する。224はほぼ完存し、口径10.4cm、器高3.4cm、底径6.4cmを測る。口縁部は体部より屈曲して外上方へ開く。器面には回転ナデ調整を施すが、内底面は摩耗するため不明瞭で、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が浅黄橙色、外面が橙色を呈する。225は底部が完存し、口径10.4cm、器高3.6cm、底径6.4cmを測る。口縁部は体部より屈曲して外上方へ開く。器面には回転ナデ調整を施すが、内底面は摩耗するため不明瞭で、

1. 古代

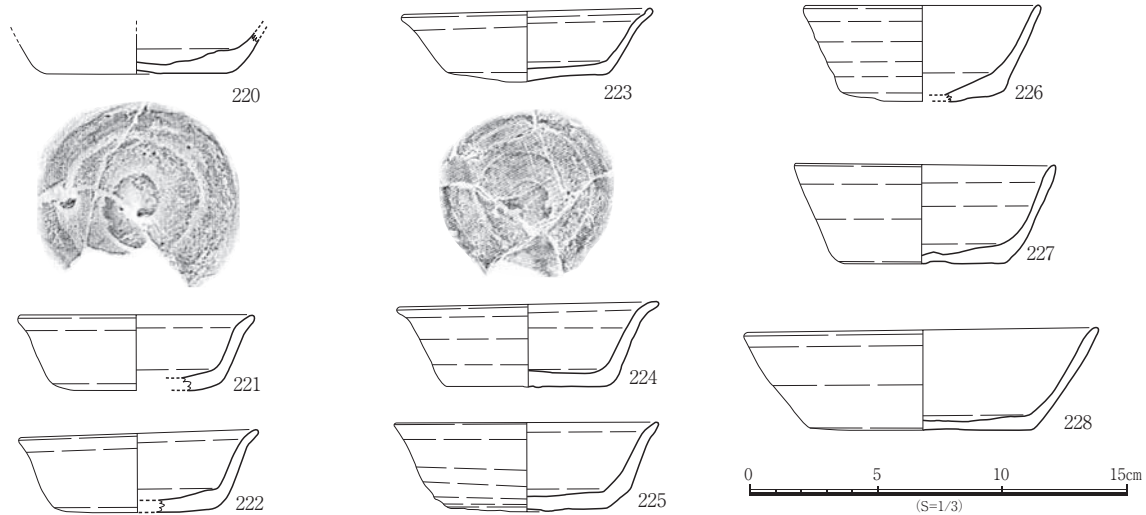


Fig.46 P - 103出土遺物実測図

口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が褐灰色、外面が浅黄橙色を呈する。226は約1/3が残存し、口径9.2cm、器高3.8cm、底径6.4cmを測る。口縁部は真直ぐ外上方へ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部内外面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色、外面が淡黄色を呈する。227は約2/3が残存し、口径10.3cm、器高4.0cm、底径6.4cmを測る。器高が高く、口縁部は体部より屈曲して外上方へ伸びる。器面には回転ナデ調整を施すが、摩耗するため不明瞭で、口縁部内外面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は悪く、色調は内外面ともにぶい赤褐色または灰色を呈する。228はほぼ完存し、口径13.8cm、器高4.1cm、底径8.9cmを測る。口縁部は外上方へ真直ぐ伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、内面にはわずかに煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

P - 104

SX - 101の西側で検出した楕円形を呈するピットで、長径0.82m、短径0.78m、深さ22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師器片14点、須恵器片1点がみられ、土師器1点(229)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.47 - 229)

229は皿で、ほぼ完存し、口径13.4cm、器高3.2cm、底径9.5cmを測る。口縁部はやや外反する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

P - 105

調査区中央部で検出した楕円形を呈するピットで、長径0.56m、短径0.54m、深さ11cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には図示した土師器1点(230)がみられた。

出土遺物

土師器(Fig.47 - 230)

230は蓋で、約1/3が残存し、口径16.4cm、器高3.3cm、つまみ径1.6cmを測る。天井部はほぼ平らでつまみを貼付し、口縁部は斜め下方に真直ぐ伸び、端部は下方へ屈曲する。口縁部と内面には回転ナデ調整ののち横方向のミガキ、天井部はヘラ削りののち横方向のミガキを施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

P-106

SX-102の西側で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺1.48m、短辺1.37m、深さ26cmを測る。埋土はにぶい黄橙色粘土質シルトで、細粒砂と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器片2点、須恵器1点がみられ、須恵器(231)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.47 - 231)

231は杯で、ほぼ完存し、口径13.9cm、器高3.8cm、底径8.0cmを測る。体部は緩やかに立ち上がり、外上方へ真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、口縁部の内外面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は悪く、色調は内外面とも灰白色または灰黄褐色を呈する。

P-107

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈するピットで、一部攪乱に切られる。長辺43cm、短辺40cm、深さ10cmを測り、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で、河原石を多く含んでいた。出土遺物には土師器片1点、須恵器片3点がみられ、須恵器1点(232)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.47 - 232)

232は杯で、底部が完存し、口径12.4cm、器高4.3cm、底径7.3cmを測る。底部には断面方形の高台を有し、体部は底部より屈曲して外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、高台内には「×」のヘラ記号がみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が浅黄橙色または黄灰色、外面は灰色または灰白色を呈する。

P-108

SX-102の東側で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺1.74m、短辺1.60m、深さ2cmを測る。埋土はにぶい黄橙色粘土質シルトで、細粒砂と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器1点、瓦片3点がみられ、土師器(233)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.47 - 233)

233は杯で、底部の約3/4が残存し、底径6.9cmを測る。体部は底部より屈曲し、外上方へ真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部内面にはわずかに煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色、外面が浅黄色または黄灰色を呈する。

1. 古代

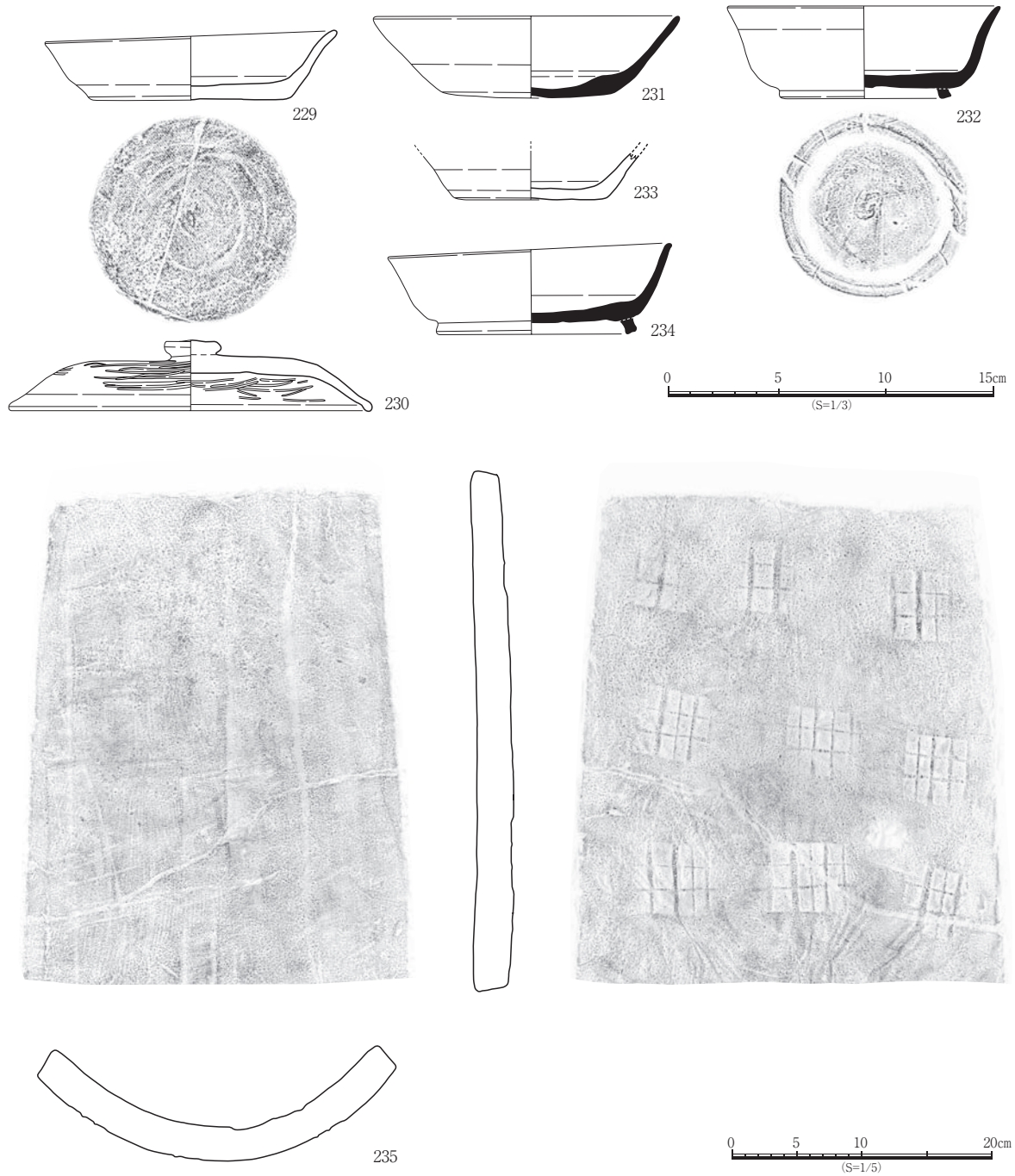


Fig.47 P-104~110出土遺物実測図

P-109

P-108の南側で検出した楕円形を呈するピットで、長径0.54m、短径0.47m、深さ7cmを測る。埋土はにぶい黄橙色砂質シルトであった。出土遺物には図示した須恵器1点(234)がみられた。

出土遺物

須恵器(Fig.47-234)

234は杯で、ほぼ完存し、口径12.9cm、器高4.2cm、底径8.8cmを測る。底部には断面方形でハの字状に開く高台を有し、体部は底部より屈曲し、外上方へ真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、

内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が褐灰色または灰黄褐色、外面が暗灰黄色またはにぶい黄褐色を呈する。

P-110

P-108の東側で検出した楕円形を呈するピットで、長径1.08m、短径0.84m、深さ12cmを測る。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には図示した瓦1点(235)がみられた。

出土遺物

瓦(Fig.47-235)

235は平瓦で、完存し、全長40.6cm、広端幅28.6cm、狭端幅24.3cm、全厚2.6cmを測る。凹面は両端面を取りし、布目圧痕と模骨痕が残る。凸面はナデ調整で、粗目の格子状のタタキ目が縦横3段の計9箇所にもみられる。胎土はやや密で砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は凹面が灰白色、凸面が灰色または灰黄色を呈する。

P-111

調査区北部で検出した楕円形を呈するピットで、長径0.59m、短径0.51m、深さ15cmを測る。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で、炭化物を非常に多く含んでいた。出土遺物には土師器2点、瓦片1点のみみられ、土師器2点(236・237)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.48-236・237)

236・237は杯である。236は底部が完存し、口径8.2cm、器高3.0cm、底径4.9cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は体部より若干屈曲して外上方に伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、口縁部内面には馬蹄形に煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が明黄褐色または浅黄色、外面が浅黄色または灰色を呈する。237は約3/4が残存し、口径12.6cm、器高3.9cm、底径7.0cmを測る。器壁が薄く、体部は外上方に真直ぐ伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、口縁部内面にはわずかに煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は比較的精良で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも灰色または灰白色を呈する。

P-112

P-111の南側で検出した隅丸方形を呈するピットで、P-113の底で検出した。長辺45cm、短辺38cm、深さ8cmを測る。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片9点、須恵器1点のみみられ、土師器1点(238)、須恵器1点(239)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.48-238)

238は皿で、約1/4が残存し、口径17.5cm、器高3.5cmを測る。体部は底部より緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は外上方に真直ぐ伸び、端部内面には浅い段を有する。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、内外面に赤色顔料がみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

須恵器(Fig.48-239)

1. 古代

239は蓋で、約1/5が残存し、口径10.2cmを測る。天井部はほぼ平らで、口縁部は緩やかに内湾し、端部にはかえりを貼付する。器面には回転ナデ調整を施し、天井部は回転ヘラ削りを行い、外面には自然釉が付着する。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が灰色、外面が灰色またはオリーブ灰色を呈する。

P-113

P-111の南側で検出した隅丸方形を呈するピットで、長辺1.16m、短辺0.53m、深さ31cmを測る。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には須恵器1点、瓦片1点がみられ、須恵器(240)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.48-240)

240は壺の底部で、約1/4が残存し、底径14.6cmを測る。体部は平らな底部より屈曲し、内湾して立ち上がる。調整は底部外面がナデ、体部外面と内面は回転ナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

P-114

P-113の西側で検出した隅丸方形を呈するとみられるピットで、長辺0.93m、短辺0.42m、深さ26cmを測る。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で、灰白色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器3点、瓦片5点がみられ、須恵器2点(241・242)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.48-241・242)

241は杯で、約1/5が残存し、口径14.0cm、器高4.2cm、底径9.8cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を貼付し、体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色、外面が灰黄色を呈する。242は皿で、約1/4が残存し、口径13.8cm、器高2.9cm、底径11.4cmを測る。体部は底部より屈曲し、やや内湾する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面とも灰黄白色を呈する。

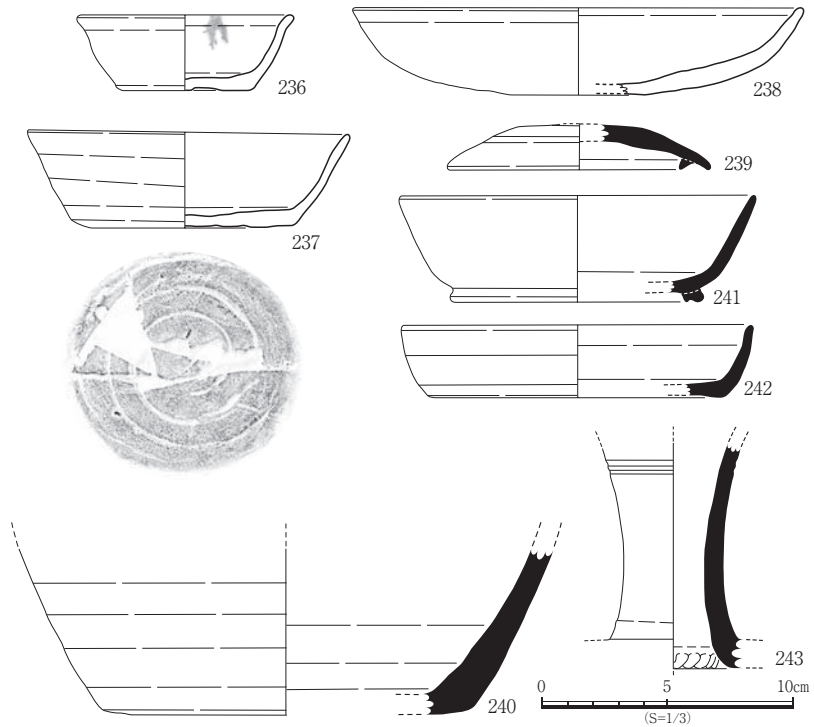


Fig.48 P-111～115出土遺物実測図

P-115

SD-104の東側で検出した楕円形を呈するピットで、長径47cm、短径39cm、深さ2cmを測る。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には須恵器1点、瓦片1点がみられ、須恵器(243)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.48-243)

243は長頸壺で、口縁部の一部が残存する。口縁部は緩やかに外反し、ラップ状に開く。口縁部には回転ナデ調整を施し、頸部内面はナデ調整で、指頭圧痕が明瞭に残り、口縁部外面には凹線が2条みられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰色、外面が灰白色または浅黄色を呈する。

(5) 性格不明遺構

SX-101

調査区中央部で検出した不整楕円形を呈する遺構で、東側は確認できなかった。長径5.95m、短径4.08m、深さ3~15cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で、3~10cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師器片26点、須恵器片9点、鉄製品1点がみられ、土師器1点(244)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.50-244)

244は杯で、約1/2が残存し、口径10.1cm、器高2.6cm、底径7.2cmを測る。器高が低く皿に近い形態を呈し、体部は平らな底部よりやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

SX-102 (Fig.49)

調査区中央部で検出した楕円形を呈する遺構で、長径5.08m、短径2.48mの範囲に遺物が集中して出土した。明確な掘方は確認できなかったが、一括性が高いとみられたので、遺構として捉えた。出土遺物には土師器片75点、須恵器片74点、瓦1点、鉄釘片2点がみられ、土師器10点(245~254)、須恵器11点(255~265)、瓦(266)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.50-245~254)

245~253は杯で、いずれも高台を持たないものである。245は底部がほぼ完存し、口径8.6cm、器高3.4cm、底径6.0cmを測る。器高が高く、体部はあまり開かず真直ぐ伸び、口縁部内面にはわずかに煤が付着する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。246は約1/2が残存し、口径9.4cm、器高3.0cm、底径6.3cmを測る。体部は器壁が厚く、外上方へ真直ぐ伸び、口縁部は体部よりわずかに屈曲して短く開く。器面には回転ナデ調整を施すが、摩耗するため不明瞭で、口縁部内面にはわずかに煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。247は約1/2が残存し、口径10.0cm、器高2.7cm、底径6.3cmを測る。底部は器壁が厚く、体部

1. 古代

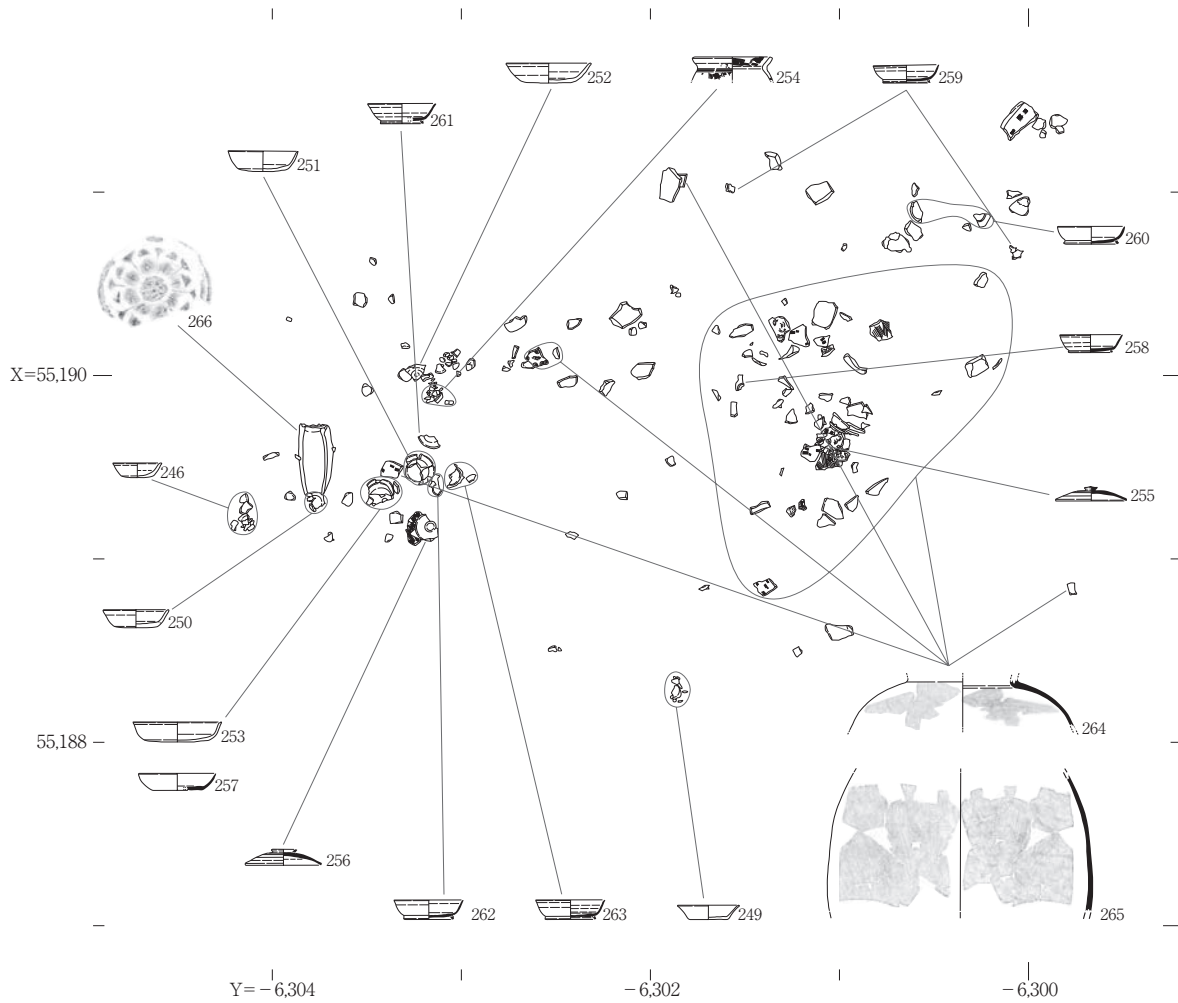


Fig.49 SX - 102

はやや内湾する。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは摩耗するため不明である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。248は底部が完存し、口径10.2cm、器高2.8cm、底径6.6cmを測る。体部は器壁が薄く、外上方へ真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、口縁部内面には馬蹄形に煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。249は約1/2が残存し、口径12.0cm、器高3.0cm、底径7.4cmを測る。体部は器壁が薄く、外反する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内面が橙色、外面が橙色または浅黄橙色を呈する。250は約1/2が残存し、口径12.7cm、器高3.7cm、底径8.6cmを測る。底部は器壁が厚く、体部は外上方へ真直ぐ伸び、口縁部をやや細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、全面に赤色顔料を塗彩する。内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内面が橙色または黒褐色、外面が橙色または灰白色を呈する。251はほぼ完存し、口径13.6cm、器高4.2cm、底径9.8cmを測る。体部は器壁が厚く、外上方へ真直ぐ伸び、口縁部をやや細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

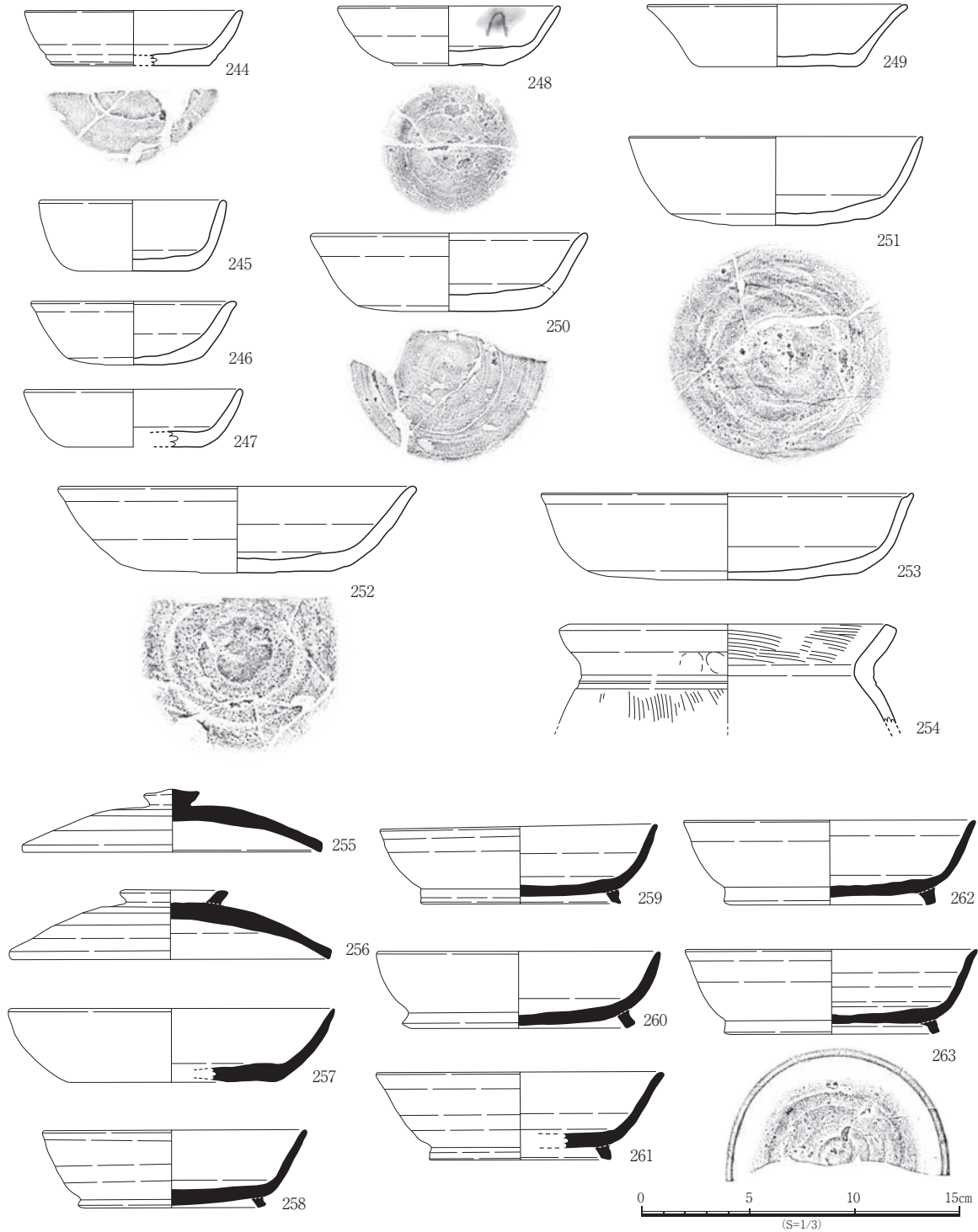


Fig.50 SX - 101・102出土遺物実測図

胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内面が灰色またはにぶい黄色、外面が黒褐色またはにぶい黄色を呈する。252は約1/3が残存し、口径16.4cm、器高4.1cm、底径8.8cmを測る。体部は外上方へ真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや良好で、色調は内外面とも明黄褐色を呈する。253は約2/3が残存し、口径17.3cm、器高4.1cm、底径12.6cmを測る。器壁が薄く、体部は底部よ

1. 古代

り緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部は細く仕上げ、内面には段を有する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

254は甕で、口縁部の約1/5が残存し、口径14.8cmを測る。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内傾する面を有する。調整は体部外面にタテ方向のハケ調整、口縁部にはヨコナデで、内面には横方向のハケ調整、体部内面にはナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰黄褐色または黒褐色、外面は褐色または明赤褐色を呈する。

須恵器(Fig.50・51 - 255～265)

255・256は杯蓋である。255は約1/2が残存し、口径14.0cm、器高4.0cm、つまみ径2.6cmを測る。天井部はほぼ平らで、扁平な擬宝珠形を呈するつまみを有し、口縁部は斜め下方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、天井部内面はナデ調整を加え、口縁部外面には回転ヘラ削りを行う。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。256は約2/3が残存し、口径15.0cm、器高3.3cm、つまみ径5.1cmを測る。天井部には輪状のつまみを貼付し、天井部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。器面には回転ナデ調整を施し、天井部内面はナデ調整を加え、天井部外面には回転ヘラ削りを行う。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

257～263は杯である。257は高台をもたない杯で、約1/3が残存し、口径15.4cm、器高3.5cm、底径9.8cmを測る。体部は底部より屈曲し、やや内湾して立ち上がり、口縁部を細く仕上げる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は悪く、色調は内面が灰白色または灰色、外面は淡黄色または灰色を呈する。258～263は高台を有する杯である。258は約3/4が残存し、口径12.3cm、器高3.7cm、底径8.0cmを測る。底部は器壁が厚く、断面方形でハの字状に開く高台を有し、体部は底部より屈曲し、外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が暗灰色または灰色、外面が灰色を呈する。259は底部が完存し、口径12.9cm、器高3.8cm、底径9.2cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し、体部は底部より緩やかに内湾して立ち上がり、外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、口縁部内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、高台内はナデ調整を行う。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。260は約1/2が残存し、口径13.2cm、器高4.6cm、底径10.2cmを測る。底部には断面方形でハの字状に開く高台を有し、体部は底部より緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは摩耗するため不明である。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。261は約1/4が残存し、口径13.4cm、器高4.2cm、底径8.4cmを測る。底部は器壁が厚く、断面方形でハの字状に開く高台を有し、体部は底部より屈曲し、外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。262は約1/2が残存し、口径13.6cm、器高4.0cm、底径9.4cmを測る。底部には断面方形で直立する高台を有し、体部は底部より緩やかに内湾し、外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも青灰色を呈する。263は約1/2が残存し、口径13.6cm、器高4.0cm、底径

9.6 cmを測る。底部には断面方形でハの字状に開く高台を有し、体部は底部より緩やかに内湾し、外上方に真直ぐ伸び、口縁部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

264・265は甕で、同一個体の可能性が高い。264は肩部で、頸部より屈曲してやや張った形態を呈する。器面には回転ナデ調整を施し、外面には平行線状のタタキ目、内面には同心円文が残り、頸部にはヨコナデ調整を行う。胎土はやや粗く、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。265は胴部で、膨らまず長胴になるとみられる。器面には回転ナデ調整を施したのち、外面にはタタキ目

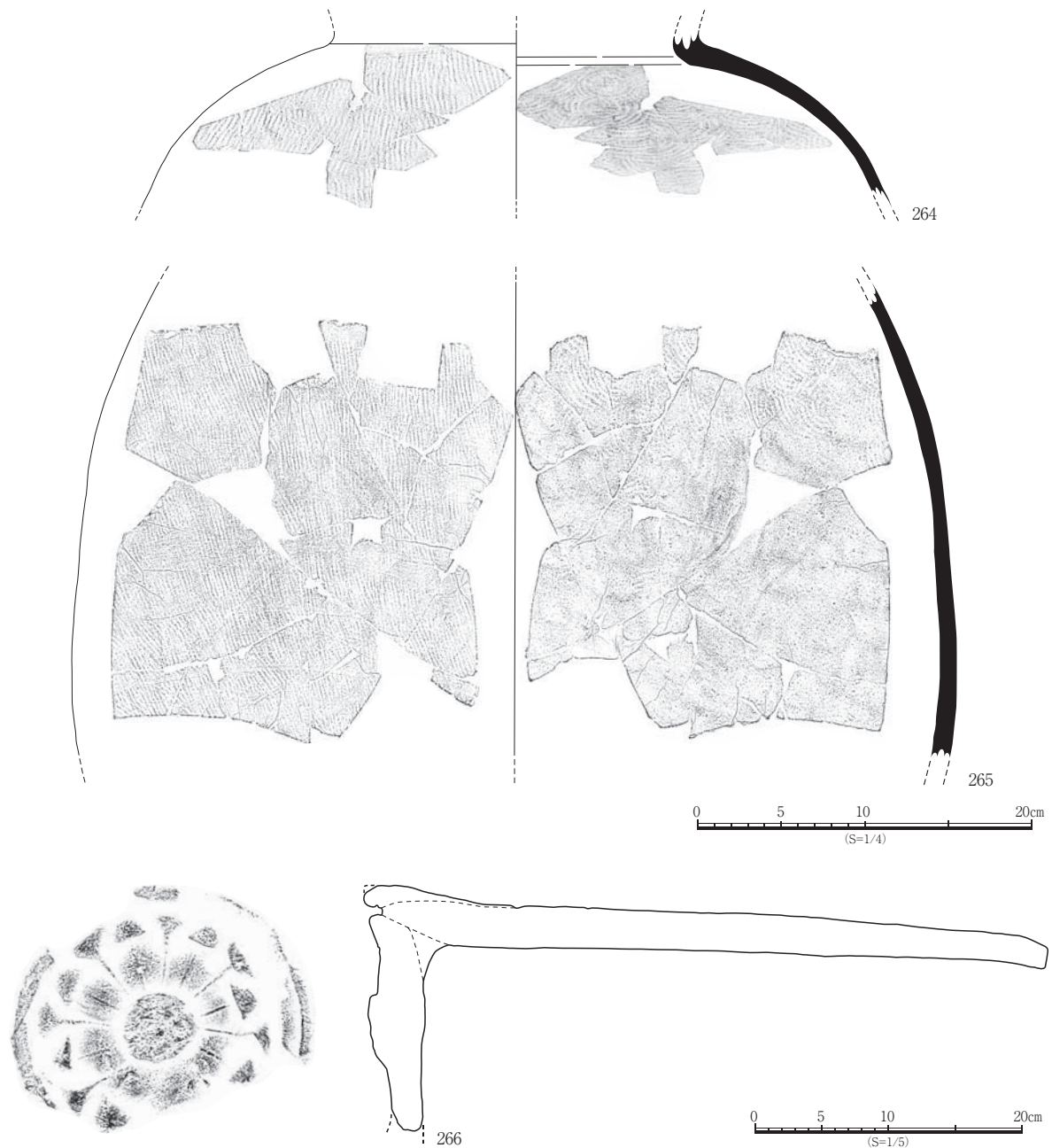


Fig.51 SX - 102出土遺物実測図

2. 中世

が残り、一部ハケ調整を行う。内面には同心円文が残り、一部をナデ消す。胎土はやや粗く、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

瓦(Fig.51 - 266)

266は軒丸瓦で、瓦当の約3/4が残存し、丸瓦部は完存する。瓦当は素弁八葉蓮華文で、花卉は稜を有し、花卉端は反転し、直線的に仕上げる。間弁は肉厚で三角形を呈し、中房には1+4顆の連子が残存するが、1+8顆あったものとみられる。周縁には圏線状の浅い溝が一部みられる。丸瓦部の凹面には布目圧痕が残り、その他はナデ調整を施す。胎土はやや密で砂粒を多く含み、焼成はやや良く、色調はにぶい橙色を呈する。

2. 中世

中世の遺構は調査区全面でみられ、特に調査区西部・中央部で掘立柱建物跡等が確認された。13～16世紀の長期に亘って集落が存続していたとみられる。調査区東部は遺跡の縁辺部とみられ、地形が大きく落ち込んでいた。また、その斜面部では平行に溝跡が走っており、これらの溝跡以東は水田等の生産域として利用されていたものとみられる。

(1) 掘立柱建物跡

SB-201 (Fig.52)

調査区北西部で確認した梁間1間(2.24m)、桁行2間(4.60m)の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Wである。柱間寸法は、梁間(南北)が2.24m、桁行(東西)が2.30mである。柱穴は径27～49cmの円形または楕円形で、柱径は約12cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたは灰白色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点、瓦片9点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

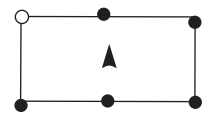


Fig.52 SB-201

SB-202 (Fig.53)

SB-201の南側で確認した、梁間2間(3.24～3.41m)、桁行4間(7.85～7.87m)の身舎の西側に下屋が付く南北2間(3.24～3.41m)、東西5間(8.74～8.84m)の東西棟建物で、棟方向はN-79°-Wである。SB-203と重なる。柱間寸法は、梁間(南北)が1.42～1.82m、桁行(東西)が1.75mと1.97～2.11mで、下屋の出が0.92mである。柱穴は径27～48cmの円形または楕円形で、柱径は13～24cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたは灰白色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片3点、瓦片19点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

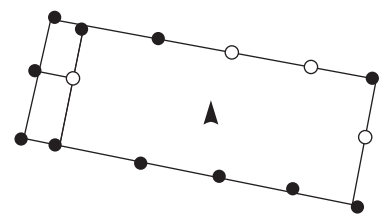


Fig.53 SB-202

SB-203 (Fig.54)

SB-201の南側で確認した梁間1間(3.16～3.39m)、桁行4間(5.77～5.85m)の南北棟建物で、棟方向はN-1°-Wである。SB-202と重なる。柱間寸法は、梁間(東西)が3.16～3.39m、桁行(南北)が1.28～1.63mである。柱穴は径15～49cmの楕円形または隅丸方形で、柱径は13～26cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたは灰白色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

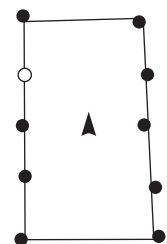


Fig.54 SB-203

SB-204 (Fig.55)

調査区北部で確認した梁間1間(1.89m), 桁行4間(7.61m)の東西棟建物で、棟方向はN-86°-Wである。北側は調査区外へ続き、SB-205と重なる。柱間寸法は、梁間(南北)が1.89m, 桁行(東西)が1.85~1.93mである。柱穴は径0.30~0.57mの楕円形または隅丸方形で、柱径は約12cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片6点, 土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

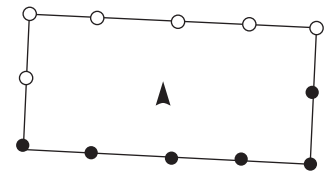


Fig.55 SB-204

SB-205 (Fig.56)

調査区北部で確認した梁間1間(2.56m), 桁行3間(5.22m)の東西棟建物で、棟方向はN-72°-Wである。SB-204と重なる。柱間寸法は、梁間(南北)が2.56m, 桁行(東西)が1.18mと2.02mである。柱穴は径0.34~0.91mの円形または楕円形で、柱径は約17cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片13点, 須恵器片2点, 土師質土器片8点, 瓦片44点, 鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

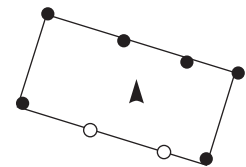


Fig.56 SB-205

SB-206 (Fig.57)

SB-205の東側で確認した梁間1間(2.27m), 桁行2間(3.84m)の東西棟建物で、棟方向はN-88°-Eである。SB-207と重なる。柱間寸法は、梁間(南北)が2.27m, 桁行(東西)が1.86~1.98mである。柱穴は径0.20~0.65mの円形または隅丸方形である。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂またはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片12点, 土師質土器片7点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

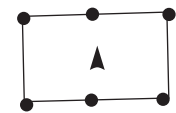


Fig.57 SB-206

SB-207 (Fig.58)

SB-205の東側で確認した梁間1間(2.29m), 桁行2間(4.20m)の東西棟建物で、棟方向はN-86°-Wである。SB-207と重なる。柱間寸法は、梁間(南北)が2.29m, 桁行(東西)が2.10mである。柱穴は径0.32~0.76mの円形または楕円形で、柱径は約29cmとみられる。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂またはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片6点, 土師質土器片3点, 瓦片15点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

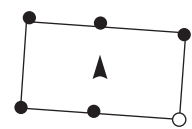


Fig.58 SB-207

SB-208 (Fig.59)

SB-207の南東で確認した梁間1間(3.21m), 桁行2間(4.82m)の南北棟建物で、棟方向はN-15°-Eである。柱間寸法は、梁間(東西)が3.21m, 桁行(南北)が2.41mである。柱穴は径0.28~0.65mの円形または楕円形で、柱径は約28cmとみられる。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂またはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片10点, 須恵器片1点, 瓦片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

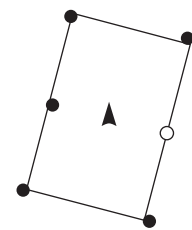


Fig.59 SB-208

SB-209 (Fig.60)

SB-208の南側で確認した梁間1間(2.34m), 桁行3間(5.92m)の南北棟建物で、棟方向はN-15°-

2. 中世

Eである。SB-210と重なる。柱間寸法は、梁間(東西)が2.34m、桁行(南北)が1.94mと1.99mである。柱穴は径0.25～0.65mの円形または楕円形である。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片6点、土師質土器片1点、瓦片10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB-210 (Fig.61)

SB-209の南西で確認した梁間1間(1.75m)、桁行2間(2.64m)の東西棟建物で、棟方向はN-76°-Wである。SB-209と重なる。柱間寸法は、梁間(南北)が1.75m、桁行(東西)が1.32mである。柱穴は径0.30～0.68mの楕円形または隅丸方形で、柱径は約16cmとみられる。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂またはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点、瓦片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB-211 (Fig.62)

SB-209の南側で確認した梁間1間(2.54m)、桁行2間(4.88m)の南北棟建物で、棟方向はN-13°-Eである。SB-210と重なる。柱間寸法は、梁間(東西)が2.54m、桁行(南北)が2.44mである。柱穴は径0.37～0.59mの円形または楕円形で、柱径は19～21cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片2点、瓦片4点、鉄製品1点がみられ、須恵器1点(267)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.78-267)

267は杯蓋で、口縁部の約1/3が残存し、口径16.5cmを測る。口縁部は緩やかに内湾し、端部を下方に屈曲させる。器面には回転ナデ調整を施したのち、天井部には回転ヘラ削りを行う。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰色または灰黄色を呈する。

SB-212 (Fig.63)

SB-209の東側で確認した梁間2間(4.67m)、桁行4間(6.77m)の総柱東西棟建物で、棟方向はN-72°-Wである。柱間寸法は、梁間(南北)が2.13mと2.54m、桁行(東西)が1.58～1.85mである。柱穴は径0.33～0.77mの円形または楕円形で、柱径は20～26cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片19点、須恵器片3点、瓦片21点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB-213 (Fig.64)

調査区中央部で確認した梁間1間(2.48m)、桁行3間(5.73m)の南北棟建物で、棟方向はN-2°-Eである。SB-214と重なる。柱間寸法は、梁間(東西)が2.48m、桁行(南北)が1.51mと2.11mである。柱穴は径0.33～0.59mの楕円形または隅丸

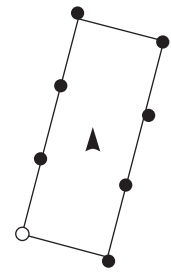


Fig.60 SB-209

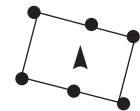


Fig.61 SB-210

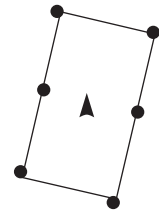


Fig.62 SB-211

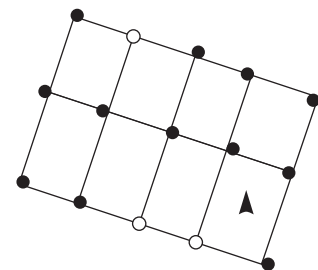


Fig.63 SB-212

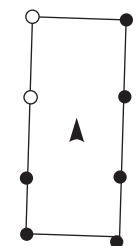


Fig.64 SB-213

方形で、柱径は約16cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片5点、須恵器片2点、瓦片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB-214 (Fig.65)

SB-213の東側で確認した梁間1間(3.08m)、桁行3間(5.82m)の南北棟建物で、棟方向はN-13°-Eである。SB-213・215と重なる。柱間寸法は、梁間(東西)が3.08m、桁行(南北)が1.55m、1.90m、2.35mである。柱穴は径0.25~0.69mの円形または楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂またはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片2点、瓦片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

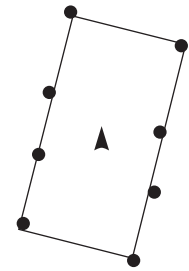


Fig.65 SB-214

SB-215 (Fig.66)

SB-214の東側で確認した梁間2間(3.81m)、桁行3間(5.93m)の東西棟建物で、棟方向はN-78°-Wである。柱間寸法は、梁間(南北)が1.84mと1.97m、桁行(東西)が1.89mと2.02mである。柱穴は径0.22~0.59mの円形または楕円形で、柱径は13~17cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片14点、須恵器片3点、青磁片1点、瓦片9点、焼石1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

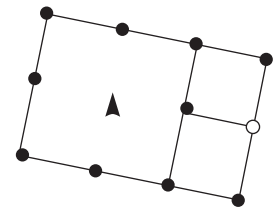


Fig.66 SB-215

SB-216 (Fig.67)

SB-215の北側で確認した梁間1間(2.63m)、桁行3間(4.66m)の南北棟建物で、棟方向はN-1°-Eである。柱間寸法は、梁間(東西)が2.63m、桁行(南北)が1.45mと1.76mである。柱穴は径0.30~0.53mの円形または楕円形である。埋土はにぶい黄

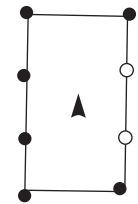


Fig.67 SB-216

Table.3 中世掘立柱建物跡計測表1

遺構番号	規模				面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考		
	梁間 × 桁行	梁間(m)×桁行(m)		柱間寸法					
				梁間(m)				桁行(m)	
SB-201	1×2	2.24	×	4.60	2.24	2.30	10.30	N-89°-W	
SB-202	2×5	3.24~3.41	×	8.74~8.84	1.42~1.82	1.75・1.97~2.11	29.23	N-79°-W	下屋
SB-203	1×4	3.16~3.39	×	5.77~5.85	3.16~3.39	1.28~1.63	19.03	N-1°-W	
SB-204	(1)×4	(1.89)	×	7.61	(1.89)	1.85~1.93	(14.38)	N-86°-W	
SB-205	1×3	2.56	×	5.22	2.56	1.18・2.02	13.36	N-72°-W	
SB-206	1×2	2.27	×	3.84	2.27	1.86~1.98	8.71	N-88°-E	
SB-207	1×2	2.29	×	4.20	2.29	2.10	9.62	N-86°-W	
SB-208	1×2	3.21	×	4.82	3.21	2.41	15.47	N-15°-E	
SB-209	1×3	2.34	×	5.92	2.34	1.94・1.99	13.85	N-15°-E	
SB-210	1×2	1.75	×	2.64	1.75	1.32	4.62	N-76°-W	
SB-211	1×2	2.54	×	4.88	2.54	2.44	12.40	N-13°-E	
SB-212	2×4	4.67	×	6.77	2.13・2.54	1.58~1.85	31.62	N-72°-W	総柱
SB-213	1×3	2.48	×	5.73	2.48	1.51・2.11	14.21	N-2°-E	

2. 中世

褐色シルトであった。出土遺物には土師器片2点、須恵器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB-217 (Fig.68)

SB-215の東側で確認した梁間1間(2.68m)、桁行3間(5.46m)の東西棟建物で、棟方向はN-87°-Wである。柱間寸法は、梁間(南北)が2.68m、桁行(東西)が1.53~1.95mである。柱穴は径16~31cmの円形または楕円形で、柱径は約10cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。

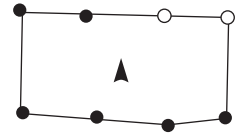


Fig.68 SB-217

出土遺物には土師質土器片1点、瓦片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB-218 (Fig.69)

SB-217の南側で確認した梁間1間(2.65~2.72m)、桁行3間(4.85m)の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Wである。柱間寸法は、梁間(南北)が2.65~2.72m、桁行(東西)が1.52~1.73mである。柱穴は径0.43~0.53mの円形または楕円形で、柱径は20~24cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片5点、瓦器片1点、備前焼片1点、瓦片7点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

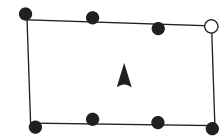


Fig.69 SB-218

SB-219 (Fig.70)

調査区北部で確認した梁間1間(2.79m)、桁行3間(4.70m)の東西棟建物で、棟方向はN-81°-Wである。SB-220~223と重なる。柱間寸法は、梁間(南北)が2.79m、桁行(東西)が1.30mと1.70mである。柱穴は径0.38~0.59mの楕円形または隅丸方形で、柱径は20~33cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂または黄灰色シルト質砂であった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片6点、土師質土器片14点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

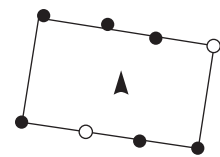


Fig.70 SB-219

SB-220 (Fig.71)

調査区北部で確認した梁間2間(3.30~3.46m)、桁行4間(6.97m)の南北棟建物で、棟方向はN-13°-Eである。SB-219・221~224と重なる。柱間寸法は、梁間(東西)が1.63~1.74m、桁行(南北)が2.03~2.08mである。柱穴は径0.22~0.66mの円形または楕円形である。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂または灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片21点、土師質土器片146点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

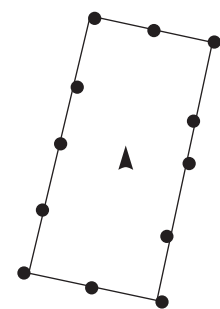


Fig.71 SB-220

SB-221 (Fig.72)

調査区北部で確認した梁間1間(2.14m)、桁行3間(5.47m)の身舎の南側に下屋が付く、梁間2間(3.35m)、桁行3間(5.47m)の東西棟建物で、棟方向はN-79°-Wである。SB-219・220・222~225と重なる。柱間寸法は、梁間(南北)が1.21mと2.14m、桁行(東西)が1.36mと2.03~2.08m、下屋の出は1.21mである。柱穴は径0.30~0.63mの楕円形または隅丸方形で、柱径は23~30cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂または灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺

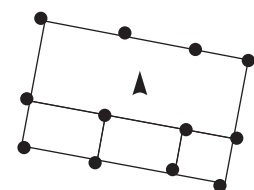


Fig.72 SB-221

物には瓦器片2点, 土師質土器片84点, 瓦片3点がみられ, 瓦器1点(268), 土師質土器1点(269)が図示できた。

出土遺物

瓦器(Fig.78 - 268)

268は椀で, 約1/3が残存し, 口径15.6cm, 器高4.4cm, 底径3.8cmを測る。底部には断面台形を呈する高台を貼付し, 体部は内湾して立ち上がる。内面はナデ調整のち口縁部に圈線状のミガキ, 底部には平行暗文を施し, 口縁部にヨコナデ調整を一段, 体部外面はナデ調整で, 指頭圧痕が残る。胎土はやや密で, 焼成はやや良く, 色調は内外面とも灰色または灰白色を呈する。

土師質土器(Fig.78 - 269)

269は小皿で, ほぼ完存し, 口径7.0cm, 器高2.2cm, 底径4.6cmを測る。器高が高く, 口縁部は内湾する。器面には回転ナデ調整を施し, 内底面にはナデ調整を加え, 底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で, 焼成はやや良く, 色調は内面が橙色またはにぶい黄橙色, 外面がにぶい黄橙色を呈する。

SB - 222 (Fig.73)

調査区北部で確認した梁間2間(3.81m), 桁行4間(4.94~5.22m)の身舎に東側と北側に下屋が付く, 南北3間(4.90m), 東西4間(6.03~6.40m)の東西棟建物で, 棟方向はN-81°-Wである。SB-219~221・223~225と重なる。柱間寸法は, 梁間(南北)が1.77~2.04m, 桁行(東西)が1.48~1.94mで, 下屋の出は東側が1.18m, 北側が1.09mである。柱穴は径0.27~0.65mの円形または楕円形で, 柱径は19~25cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂または灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には須恵器片3点, 瓦器片25点, 土師質土器片135点, 瓦質土器片3点, 鉄製品1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

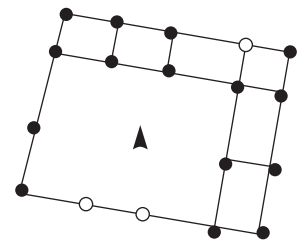


Fig.73 SB - 222

SB - 223 (Fig.74)

調査区北部で確認した梁間2間(3.22m), 桁行4間(6.56m)の南北棟建物で, 棟方向はN-4°-Eである。SB-219~222・224と重なる。柱間寸法は, 梁間(東西)が1.47~1.75m, 桁行(南北)が1.58~1.69mである。柱穴は径29~47cmの円形または楕円形で, 柱径は16~26cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂または灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片5点, 土師質土器片34点, 土製品1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

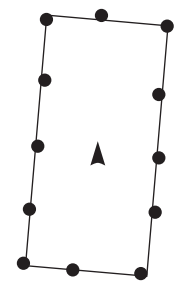


Fig.74 SB - 223

SB - 224 (Fig.75)

調査区北部で確認した梁間2間(4.64m), 桁行3間(6.62m)の総柱東西棟建物で, 棟方向はN-83°-Wである。SB-219~223・225と重なる。柱間寸法は, 梁間(南北)が2.26mと2.38m, 桁行(東西)が2.07~2.33mである。柱穴は径0.39~0.64mの円形または楕円形で, 柱径は16~34cmとみられる。埋土は黄灰色シルト質砂または灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片10点, 東播系須恵器片1点, 土師質土器片99点, 瓦片3点, 土製品2点がみられ, 土師質土器1点(270)が図示できた。

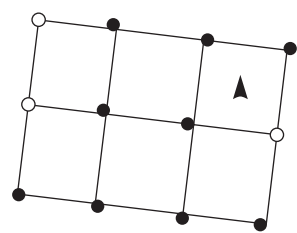


Fig.75 SB - 224

2. 中世

出土遺物

土師質土器(Fig.78 - 270)

270は杯で、底部の約1/5が残存し、底径7.4cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり、器面には回転ナデ調整を施すが、摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

SB - 225 (Fig.76)

調査区北部で確認した梁間2間(3.10m)、桁行4間(5.00m)の南北棟建物で、南から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN - 13° - Eである。SB - 221・222・224と重なる。柱間寸法は、梁間(東西)が1.38mと1.72m、桁行(南北)が1.18~1.32m、南庇幅が1.03mである。柱穴は径0.27~0.76mの円形または楕円形で、柱径は12~21cmとみられる。埋土は灰黄褐色シルト質砂または黄灰色シルト質砂であった。

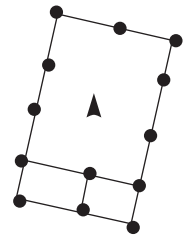


Fig.76 SB - 225

出土遺物には土師器片21点、瓦器片35点、土師質土器片182点、白磁1点、青磁片2点、備前焼片1点、瓦片8点、土製品2点、鉄滓がみられ、土師質土器1点(271)、白磁(272)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.78 - 271)

271は小皿で、ほぼ完存し、口径7.5cm、器高2.0cm、底径5.4cmを測る。底部の器壁が厚く、口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

白磁(Fig.78 - 272)

272は杯で、口縁部の一部が残存し、口径11.9cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には灰白色の釉を薄く施し、口縁端部は釉ハギを行う。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

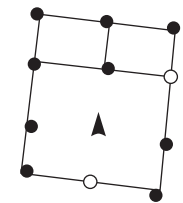


Fig.77 SB - 226

SB - 226 (Fig.77)

SB - 225の南側で確認した梁間2間(3.59~3.69m)、桁行3間(4.26m)の南北棟建物で、身舎の北から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN - 6° - Eである。柱間寸法は、梁間(東西)が1.74~1.85m、桁行(南北)が1.25mと1.76mである。柱穴

は径23~46cmの円形または楕円形で、柱径は13~21cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

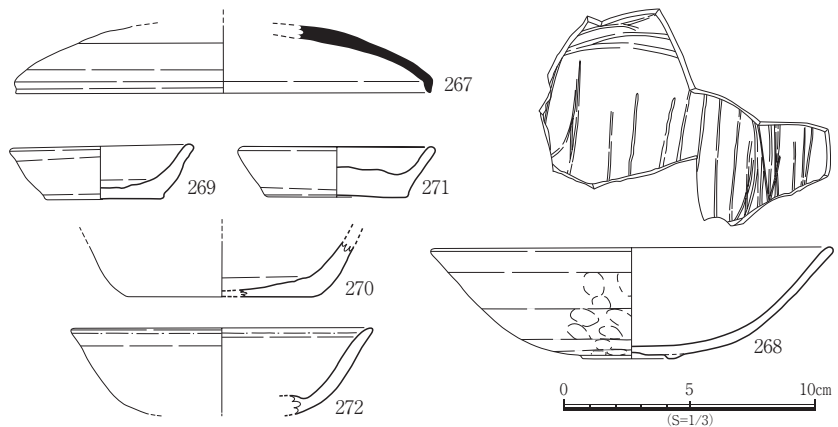


Fig.78 SB - 211・221・224・225出土遺物実測図

Table.4 中世掘立柱建物跡計測表2

遺構番号	梁間 × 桁行	規模				面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
		梁間(m)×桁行(m)		柱間寸法				
				梁間(m)	桁行(m)			
SB-214	1×3	3.08 × 5.82	3.08	1.55・1.90・2.35	17.93	N-13°-E		
SB-215	2×3	3.81 × 5.93	1.84・1.97	1.89・2.02	22.59	N-78°-W	間仕切柱	
SB-216	1×3	2.63 × 4.66	2.63	1.45・1.76	12.26	N-1°-E		
SB-217	1×3	2.68 × 5.46	2.68	1.53~1.95	14.63	N-87°-W		
SB-218	1×3	2.65~2.72 × 4.85	2.65~2.72	1.52~1.73	13.02	N-89°-W		
SB-219	1×3	2.79 × 4.70	2.79	1.30・1.70	13.11	N-81°-W		
SB-220	2×4	3.30~3.46 × 6.97	1.63~1.74	1.45~1.98	23.56	N-13°-E		
SB-221	2×3	3.35 × 5.47	2.14	2.03~2.08	18.32	N-79°-W	下屋	
SB-222	3×4	4.90 × 6.03~6.40	1.77~2.04	1.48~1.94	30.45	N-81°-W	下屋	
SB-223	1×4	3.22 × 6.56	3.22	1.58~1.69	21.12	N-4°-E		
SB-224	2×3	4.64 × 6.62	2.26・2.38	2.07~2.33	30.72	N-83°-W	総柱	
SB-225	2×4	3.10 × 5.00	1.38・1.72	1.18~1.32	15.50	N-13°-E	下屋	
SB-226	2×3	3.59~3.69 × 4.26	1.74~1.85	1.25・1.76	15.51	N-6°-E	下屋	

(2) 塀・柵列跡

SA-201

調査区西部で確認した東西塀(N-84°-W)で、SB-203と重なる。4間分(6.25m)を検出し、柱間は1.72~1.88m、柱穴は径15~37cmの円形または楕円形である。埋土はにぶい黄褐色シルトまたは灰白色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SA-202

調査区中央部で確認した東西塀(N-76°-W)で、SB-215の北側に位置する。3間分(4.05m)を検出し、柱間は1.28~1.47m、柱穴は径23~39cmの円形または楕円形である。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点、瓦片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SA-203

SA-202の北側で確認した東西塀(N-77°-W)である。3間分(6.72m)を検出し、柱間は2.22~2.27m、柱穴は径33~44cmの円形または楕円形で、柱径は約13cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には須恵器片5点、土師質土器片1点がみられ、須恵器1点(273)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.79-273)

273は杯で、約1/4が残存し、口径13.2cm、器高4.4cm、底径8.7cmを測る。底部には断面台形のハの字状に開く高台を貼付し、体部は外上方に真直ぐ伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で

2. 中世

ある。胎土はやや密で、焼成は悪く、色調は内面が灰白色、外面が灰白色または灰色を呈する。

SA - 204

SB - 215の南側で確認した南北塀(N - 8° - E)である。3間分(5.82m)を検出し、柱間は1.83 ~ 2.10m、柱穴は径0.32 ~ 0.58mの円形または楕円形で、柱径は23 ~ 26 cmとみられる。埋土はにぶい黄橙色シルト質砂またはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片7点、須恵器1点、土師質土器片1点、瓦片3点がみられ、須恵器(274)が図示できた。

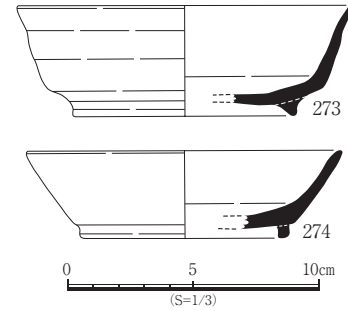


Fig.79 SA - 203・204
出土遺物実測図

出土遺物

須恵器(Fig.79 - 274)

274は杯で、一部が残存し、口径12.4cm、器高3.5cm、底径8.0cmを測る。底部には断面方形で直立する高台を貼付し、体部は底部より屈曲し、外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、高台内はナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

Table.5 中世塀・柵列跡計測表

遺構番号	規模			方向 (NはGN)	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA - 201	5	6.25	1.72 ~ 1.88	N - 84° - W	
SA - 202	4	4.05	1.28 ~ 1.47	N - 76° - W	
SA - 203	4	6.72	2.22 ~ 2.27	N - 77° - W	
SA - 204	4	5.82	1.83 ~ 2.10	N - 8° - E	

(3) 土坑

SK - 201

調査区北西部で検出した溝状を呈する土坑で、南端は他の遺構によって切られる。長さ4.65m、幅1.42m、深さ10cmを検出し、長軸方向はN - 17° - Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片8点、瓦片10点、鉄釘片1点がみられ、土師質土器1点(275)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.85 - 275)

275は杯で、底部が完存し、底径5.7cmを測る。底部は器壁が厚く、体部は内湾して立ち上がる。器面は回転ナデ調整を施すが、摩耗するため不明瞭で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

SK - 202

SK - 201の南東で検出した楕円形の土坑である。長径1.59m、短径0.90m、深さ46cmを測り、長軸方向はN - 25° - Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックと

マンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 土師質土器片9点, 瓦質土器片1点, 瀬戸・美濃系陶器1点, 青磁片1点, 瓦片15点がみられ, 瀬戸・美濃系陶器(276)が図示できた。

出土遺物

瀬戸・美濃系陶器(Fig.85 - 276)

276は折縁皿で, 約2/3が残存し, 口径10.4cm, 器高1.9cm, 底径5.3cmを測る。底部の器壁は厚く断面三角形を呈する削り出し高台を有する。体部は外上方に真直ぐ立ち上がり, 口縁部は屈曲して水平に伸び, 内面には浅い溝が巡る。また, 体部内面には丸ノミ状工具によるソギが入る。全面に黄緑色の釉を薄く施し, 内底面は円形に釉ハギを行い, 高台内には重ね焼きの痕跡がみられ, 円形に粘土が付着する。胎土はやや粗く, 焼成はやや良く, 色調は内外面とも暗オリーブ色またはオリーブ黄色を呈する。

SK - 203

SK - 202の東側で検出した溝状を呈する土坑である。長さ3.31m, 幅0.64m, 深さ41cmを測り, 長軸方向はN - 43° - Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は浅黄色シルトで, 炭化物とマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片3点, 土師質土器片15点, 瓦質土器片2点, 備前焼片1点, 瓦片56点, 鉄滓がみられ, 瓦質土器1点(277)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器(Fig.85 - 277)

277は羽釜の口縁部の破片である。口縁部はやや内湾し, 端部は外傾する面を有する。外面には断面三角形の扁平な鏝を貼付する。口縁部はヨコナデ調整, 鏝の下はナデ調整で指頭圧痕が残る。内面は摩耗するため調整は不明で, 炭素の吸着も見られない。胎土は粗く砂粒を多く含み, 焼成はやや不良で, 色調は内面が灰黄色, 外面が黄灰色を呈する。

SK - 204 (Fig.80)

SK - 203の東側で検出した長方形を呈する土坑である。長辺1.53m, 短辺0.73m, 深さ27cmを測り, 長軸方向はN - 13° - Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルトで炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 土師質土器片3点, 古瀬戸片1点, 瓦片30点, 鉄釘片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

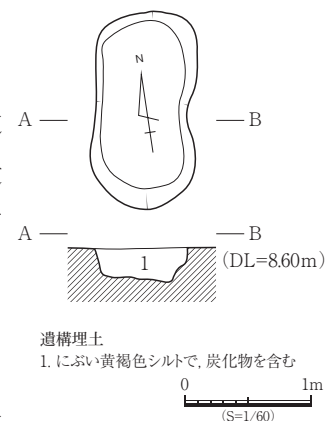


Fig.80 SK - 204

SK - 205

SK - 204の東側で検出した長方形を呈する土坑である。長辺1.83m, 短辺0.94m, 深さ19cmを測り, 長軸方向はN - 2° - Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点, 瓦片20点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 206

SK - 202の南側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺0.66m, 短辺0.50m, 深さ41cmを測り, 長軸方向はN - 7° - Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点, 瓦片15点がみられ, 土師質土器1点(278)が図示できた。

2. 中世

出土遺物

土師質土器 (Fig.85 - 278)

278は杯で、約3/4が残存し、口径10.9cm、器高3.4cm、底径6.4cmを測る。器壁が薄く、体部はやや内湾して立ち上がる。器面は回転ナデ調整を施し、内面には煤が付着する。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈する。

SK - 207

SK - 206の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.56m、短辺1.02m、深さ11cmを測り、長軸方向はN - 57° - Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片10点、瓦質土器片2点、青磁片2点、瓦片8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 208 (Fig.81)

SK - 207の東側で検出した長方形を呈する土坑で、一部近世の遺構に切られる。長辺1.77m、短辺0.50m、深さ30cmを検出し、長軸方向はN - 15° - Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片4点、瓦質土器片3点、瓦片18点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

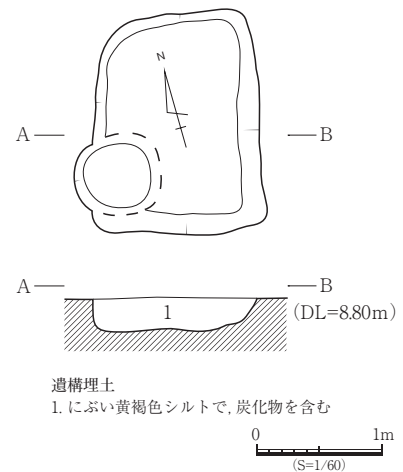


Fig.81 SK - 208

SK - 209

SK - 208の南側で検出した方形を呈する土坑で、一部近世の溝跡に切られる。長辺1.28m、短辺0.77m、深さ16cmを検出し、長軸方向はN - 73° - Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点、瓦質土器片2点、瓦片18点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 210 (Fig.82)

SK - 206の南側で検出した長方形を呈する土坑である。長辺1.38m、短辺1.18m、深さ0.54mを測り、長軸方向はN - 72° - Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片3点、東播系須恵器片1点、土師質土器片5点、瓦質土器片2点、瓦片28点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

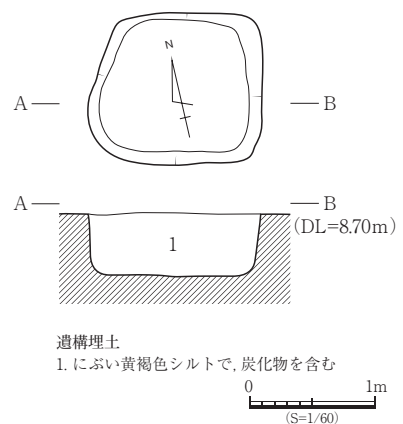


Fig.82 SK - 210

SK - 211

SK - 210の南西で検出した溝状を呈する土坑で、一部近世の遺構に切られる。長さ1.83m、幅0.70m、深さ18cmを検出し、長軸方向はN - 4° - Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、

土師質土器片2点, 瓦質土器片1点, 瓦片2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-212

SK-210の南側で検出した長方形を呈する土坑である。長辺1.59m, 短辺1.44m, 深さ28cmを測り, 長軸方向はN-73°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 土師質土器片3点, 瓦片8点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-213

SK-212の東側で検出した正方形を呈する土坑で, 一辺1.18m, 深さ32cmを測る。断面は舟底形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 東播系須恵器片1点, 土師質土器片5点, 瓦質土器片1点, 青磁片1点, 瓦片4点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-214

SK-213の南西で検出した長方形を呈する土坑である。長辺1.10m, 短辺1.02m, 深さ22cmを測り, 長軸方向はN-23°-Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 土師質土器片4点, 瓦片15点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-215 (Fig.83)

SK-214の南側で検出した長方形を呈する土坑である。長辺1.07m, 短辺1.00m, 深さ11cmを測り, 長軸方向はN-83°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルトで, 灰色シルトのブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点, 瓦片3点がみられ, 土師質土器1点(279)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.86-279)

279は羽釜の口縁部の破片である。口縁部は内湾し, 端部は外傾する面を有する。外面には断面半円形の鏝を貼付する。口縁部がヨコナデ調整, 鏝の下はナデ調整で指頭圧痕が残り, 内外面に煤が付着する。胎土はやや粗く砂粒を多く含み, 焼成はやや良好で, 色調は内面が浅黄橙色または灰黄褐色, 外面が灰褐色を呈する。

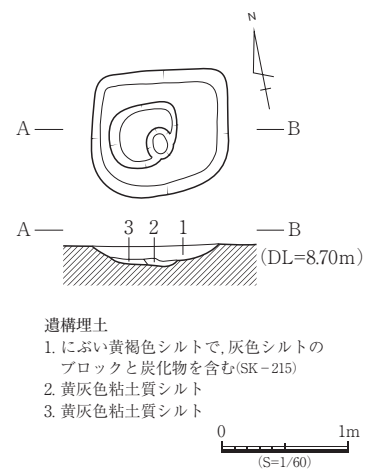


Fig.83 SK-215

SK-216

調査区南西部で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で, 西側は近世の遺構に切られる。長径1.03m, 短径1.29m, 深さ21cmを検出し, 長軸方向はN-77°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰白色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点, 瓦片3点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-217 (Fig.84)

SK-215の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.44m, 短径1.25m, 深さ13cmを測

2. 中世

り、長軸方向は方眼東を示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、青磁片1点、瓦片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-218

SK-217の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.11m、短径0.89m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-77°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点、青磁片1点がみられ、土師質土器1点(280)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.85-280)

280は杯で、ほぼ完存し、口径10.6cm、器高2.7cm、底径5.36cmを測る。器高が低く皿に近い形態を呈し、口縁部は内湾する。器面には回転ナデ調整を施すが、外面は摩耗するため不明瞭で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

SK-219 (Fig.86)

調査区中央部で検出した不整隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.03m、短辺0.90m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-14°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片10点、緑釉陶器片1点、瓦片9点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-220

SK-219の南東で検出した楕円形を呈する土坑である。長径0.97m、短径0.83m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-89°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片1点、土師質土器片8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-221

SX-202の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.40m、短辺0.94m、深さ4cmを測り、長軸方向はN-40°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含

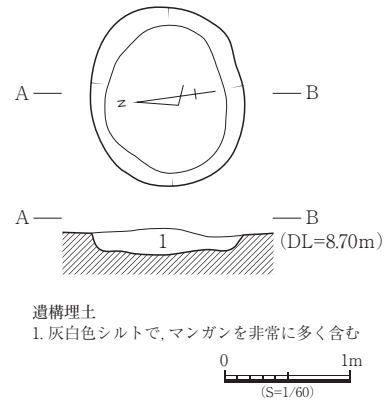


Fig.84 SK-217

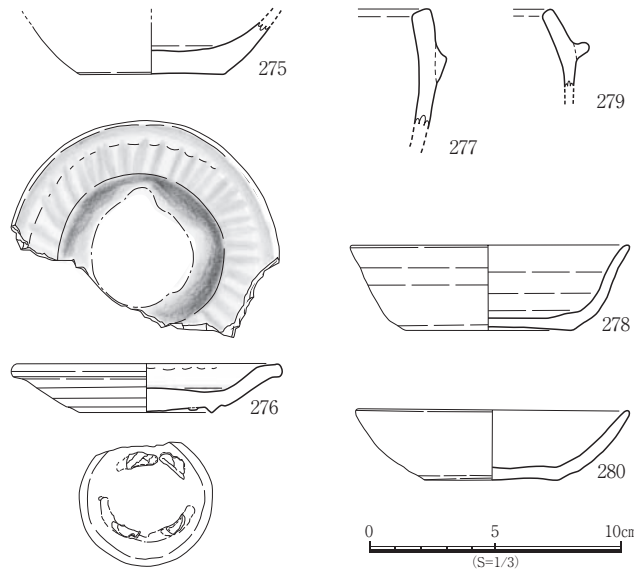


Fig.85 SK-201~203・206・215・218出土遺物実測図

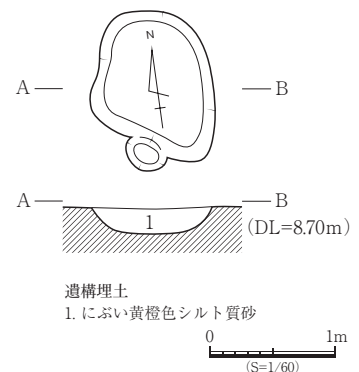


Fig.86 SK-219

んでいた。出土遺物には土師器片2点、瓦器片1点、瓦片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-222

調査区北部で検出した円形を呈するとみられる土坑で、北側は調査区外に続く。径0.88m、深さ6cmを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片33点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-223

SK-222の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.06m、短径0.74m、深さ18cmを測り、長軸方向はN-80°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片26点、瓦片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-224

SK-223の東側で検出した長方形を呈する土坑で、一部攪乱を受ける。長辺1.28m、短辺1.21m、深さ6cmを検出し、長軸方向はN-86°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片2点、土師質土器片30点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-225

SK-224の南側で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、東側は他の遺構に切られる。長径0.96m、短径0.76m、深さ31cmを検出し、長軸方向はN-51°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片15点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-226

SK-225の東側で検出した不整形を呈する土坑で、南側は他の遺構に切られる。長さ0.90m、幅0.54m、深さ28cmを測り、長軸方向はN-83°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片7点、土師質土器片21点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-227

SK-224の東側で検出した長方形を呈する土坑で、SK-229を切る。長辺2.06m、短辺0.87m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-9°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片31点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-228

SK-227の南側で検出した隅丸方形を呈するとみられる土坑で、北側は近世の遺構に切られる。長辺1.03m、短辺0.59m、深さ16cmを検出し、長軸方向はN-74°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片6点、東播系須恵器片1点、土師質土器片31点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-229

SK-227の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-227に切られる。長辺1.39m、短辺1.16m、

2. 中世

深さ17cmを測り、長軸方向はN-84°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片5点、土師質土器片11点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-230

SK-229の南東で検出した長方形を呈する土坑で、両端を他の遺構に切られる。長辺1.20m、短辺0.64m、深さ10cmを検出し、長軸方向はN-87°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片56点、土師質土器片40点、瓦質土器片1点、青磁片1点がみられ、瓦器5点(281~285)が図示できた。

出土遺物

瓦器(Fig.87-281~285)

281~284は椀である。281はほぼ完存し、口径15.2cm、器高4.1cm、底径4.1cmを測る。底部には断面逆台形を呈する高台を貼付し、体部は内湾して立ち上がる。内面がナデ調整で、体部には横方向のミガキ、内底面には平行線状の暗文を施す。口縁部にはヨコナデ調整を1段、外面はナデ調整を施し、指頭圧痕が平行に4段残る。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が暗灰色、外面が暗灰色または灰白色を呈する。282は約1/3が残存し、口径15.1cm、器高4.0cm、底径4.3cmを測る。底部には断面半円形を呈する高台を貼付し、体部は内湾して立ち上がり、口縁は大きく傾く。調整は内面がナデ調整で、体部には圏線状のミガキ、内底面には平行暗文を施す。口縁部にはヨコナデ調整を2段、外面はナデ調整を施し、指頭圧痕が残るが、外面には炭素の吸着がみられない。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が灰色、外面が浅黄色を呈する。283は約1/2が残存し、口径15.4cm、器高4.4cm、底径4.4cmを測る。底部には断面半円形を呈する高台を貼付し、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ調整で、体部には圏線状のミガキ、内底面にはジグザグ状の暗文を施す。口縁部にはヨコナデを2段、外面はナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が暗灰色、外面が暗灰色または灰色を呈する。284は底部が完存し、口径15.6cm、器高5.1cm、底径3.8cmを測る。底部には断面逆台形を呈する高台を貼付し、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ調整で、体部には圏線状のミガキ、内底面には平行線状の暗文を施す。口縁部にはヨコナデ調整を1段、外面はナデ調整で、指頭圧痕が残り、重ね焼痕がみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が暗灰色または灰白色、外面が灰黄色または灰色を呈する。

285は小皿で、ほぼ完存し、口径8.8cm、器高1.9cmを測る。底部は丸く、滑らかに口縁部に至る。口縁部はヨコナデ調整、底部にはナデ調整を施し、底部外面には指頭圧痕が残る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰黄色または黄灰色を呈する。

SK-231

SK-230の東側で検出した隅丸方形を呈するとみられる土坑で、両端を他の遺構に切られる。長辺1.72m、短辺0.71m、深さ13cmを検出し、長軸方向は方眼東を示す。断面は逆台形を呈し、埋土は褐灰色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片1点、瓦器片3点、東播系須恵器2点、土師質土器片6点、瓦片2点がみられ、瓦器2点(286・287)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.87 - 286・287)

286・287は椀である。286は約1/4残存し、口径15.4cm、器高5.2cm、底径3.3cmを測る。底部には断面半円形を呈する高台を貼付し、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ調整で、体部には圈線状のミガキ、内底面には幅約1mmの細い平行線状の暗文を施す。口縁部にはヨコナデ調整を1段、外面はナデ調整を施し、指頭圧痕が平行に4段残る。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。287は約1/2残存し、口径15.1cm、器高4.2cm、底径3.5cmを測る。底部には断面半円形を呈する高台を貼付し、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ調整で、体

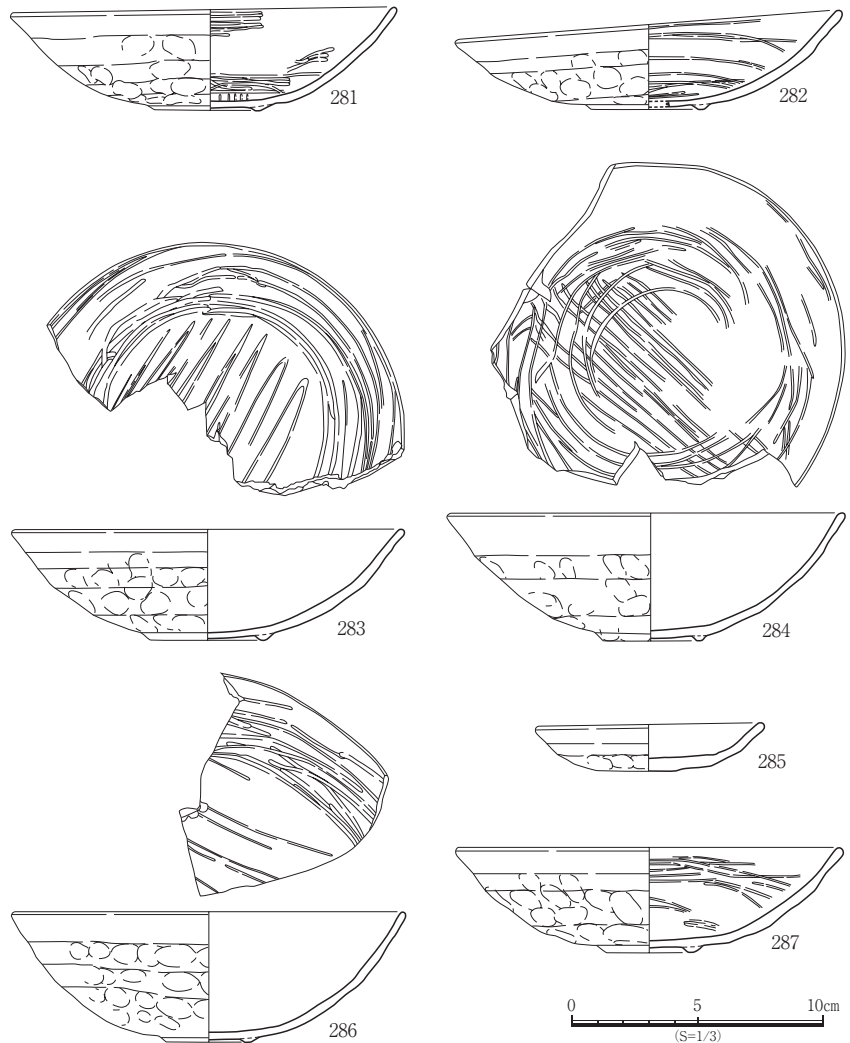


Fig.87 SK - 230・231出土遺物実測図

部には圈線状のミガキを施すが、内底面は摩耗するため不明である。口縁部にはヨコナデ調整を1段、外面はナデ調整を施し、指頭圧痕が平行に3段残る。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

SK - 232

SK - 231の北東で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.39m、短径0.58m、深さ24cmを測り、長軸方向はN - 86° - Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片5点、東播系須恵器片1点、土師質土器片17点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 233

SK - 231の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.02m、短径0.62m、深さ12cmを測り、長軸方向はN - 30° - Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片5点、土師質土器片56点、瓦片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

2. 中世

SK - 234

SK - 233の南西で検出した土坑で、SK - 236に切られる。攪乱を受けており平面形態は不明であるが、長さ1.85m、幅1.00m、深さ6cmを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物、マンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片2点、土師質土器片31点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 235 (Fig.88)

SK - 234の南西で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.52m、短辺1.07m、深さ0.74mを測り、長軸方向はN - 87° - Eを示す。断面は袋状を呈し、埋土は2層に分かれ、上層がにぶい黄橙色シルト質砂、下層が灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物は上層より瓦器片6点、土師質土器片41点、備前焼片1点、瓦質土器片4点、下層より須恵器片4点、瓦器片26点、土師質土器片166点、白磁片2点、青磁片1点がみられ、上層より出土した土師質土器1点(288)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.93 - 288)

288は小皿で、底部が完存し、口径6.2cm、器高1.7cm、底径4.5cmを測る。器高が高く、口縁部はやや内湾する。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも黄褐色を呈する。

SK - 236 (Fig.89)

SK - 235の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK - 234を切る。長辺1.56m、短辺0.92m、深さ0.59mを測り、長軸方向はN - 29° - Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層がにぶい黄橙色シルト質砂、下層が灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物は上層より瓦器片9点、東播系須恵器片1点、土師質土器片55点、備前焼片1点、青磁片2点、下層より須恵器片1点、瓦器片24点、土師質土器片181点、瓦質土器片4点、青磁片2点、土製品2点、鉄釘片1点がみられ、下層より出土した瓦質土器1点(289)、土製品1点(290)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.93 - 289)

289は羽釜で、口縁部の一部が残存する。口縁部は真直ぐ立ち上がり、端部は内傾する面を有する。外面には幅1.2cmの鋳が水平に伸びる。調整は口縁部がヨコナデ調整、内面と鋳の下はナデ調整を施す。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

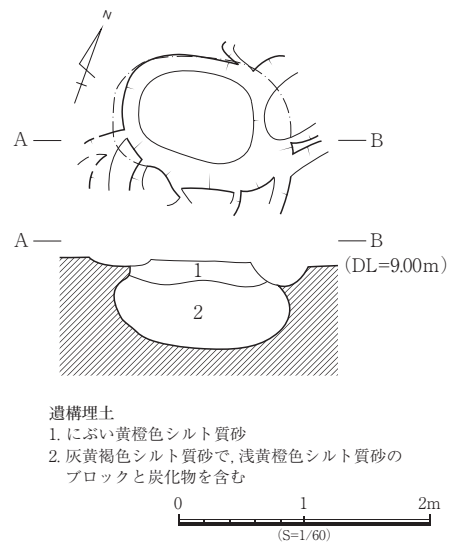


Fig.88 SK - 235

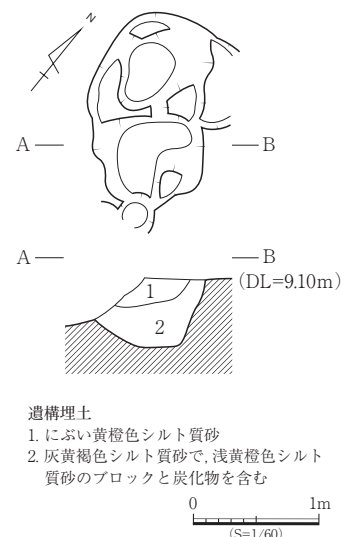


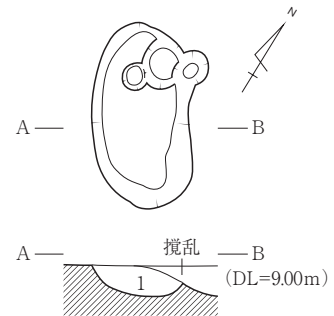
Fig.89 SK - 236

土製品 (Fig.93 - 290)

290は管状土錘で、紡錘形を呈する。完存し、全長4.7cm、全幅1.1cm、孔径0.5cm、重量4.5gを測る。全面にナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため不明である。

SK - 237 (Fig.90)

SK - 236の北東で検出した楕円形を呈する土坑で、一部攪乱に切られる。長径1.46m、短径0.76m、深さ28cmを検出し、長軸方向はN - 32° - Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片37点、東播系須恵器片1点、土師質土器片159点、瓦質土器片2点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。



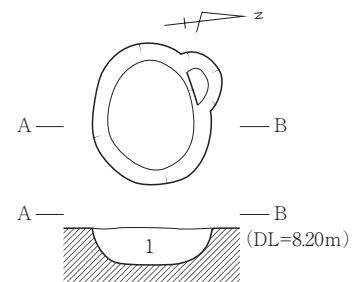
遺構埋土
1. にぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含む

0 1m
(S=1/60)

Fig.90 SK - 237

SK - 238 (Fig.91)

調査区南東部で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.13m、短径0.89m、深さ33cmを測り、長軸方向は方眼東を示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器片20点、須恵器片3点、土師質土器片20点がみられたが、復元図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. にぶい黄褐色シルトで、炭化物を含む

0 1m
(S=1/60)

Fig.91 SK - 238

SK - 239

SK - 238の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.33m、短辺1.11m、深さ9cmを測り、長軸方向は方眼北を示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 240

SK - 239の東側で検出した楕円形を呈する土坑で、SK - 241、SD - 219に切られる。長径1.42m、短径1.38m、深さ6cmを検出し、長軸方向はN - 19° - Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器片31点、須恵器片4点、青磁片2点がみられ、須恵器1点(291)が図示できた。

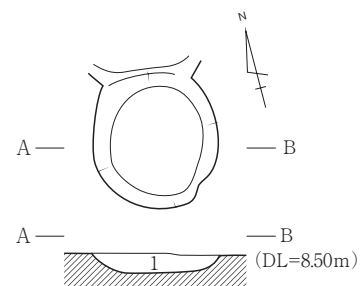
出土遺物

須恵器 (Fig.93 - 291)

291は杯で、約1/8が残存し、口径10.4cmを測る。体部は内湾し、口縁部は短く外反する。器面には回転ナデ調整を施し、底部外面にはナデ調整を加える。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

SK - 241 (Fig.92)

SK - 240の南側で検出した楕円形を呈する土坑で、SK - 240を切る。長径1.07m、短径1.00m、深さ12cmを検出し、長軸方向はN -



遺構埋土
1. にぶい黄褐色シルトで、炭化物を多く含む

0 1m
(S=1/60)

Fig.92 SK - 241

2. 中世

22°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師器片27点、須恵器片4点、土師質土器片2点がみられ、須恵器1点(292)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.93 - 292)

292は蓋で、約1/2が残存し、口径9.4cm、器高2.5cm、つまみ径1.4cmを測る。天井部はほぼ平らで、緩やかに湾曲して口縁部に至り、端部にはかえりを有する。器面には回転ナデ調整を施し、天井部は回転ヘラ削りを行い、外面には自然釉が付着する。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰オリーブ色を呈する。

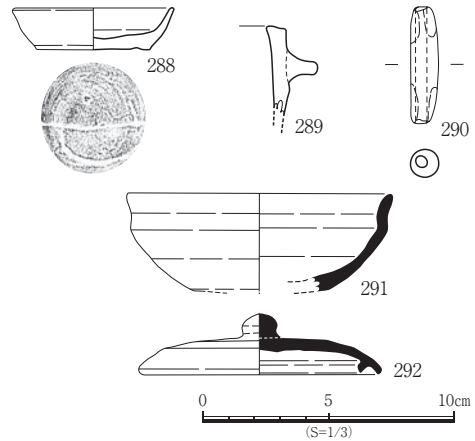


Fig.93 SK - 235・236・240・241
出土遺物実測図

SK - 242

SK - 241の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.28m、短辺1.01m、深さ32cmを測り、長軸方向はN - 9° - Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルト質砂で、細粒砂とマンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師器片1点、瓦器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片9点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

(4) 溝跡

SD - 201

調査区北西部で検出した南北溝跡(N - 17° - E)で、南北両端は調査区外へ続く。2.16mを検出し、幅0.36 ~ 0.59m、深さ9cmを測り、基底面はほぼ平らで標高8.460mであった。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点、瓦片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 202 (Fig.94)

調査区北西部で検出した南北溝跡(N - 16° - E)で、南端は調査区外へ続き、SX - 201に切られる。13.72mを検出し、幅0.90 ~ 2.98m、深さ8 ~ 22cmを測り、基底面は北(8.309m)から南(8.226m)に若干傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトであった。出土遺物には須恵器片7点、土師質土器片11点、青磁片1点、瓦片64点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

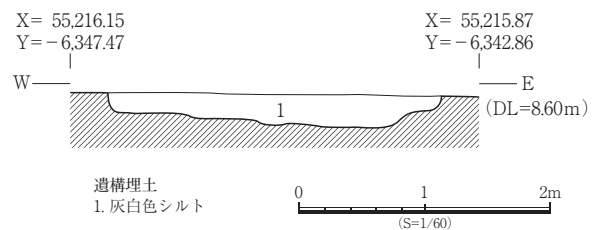


Fig.94 SD - 202

SD - 203 (Fig.95)

調査区南西部で検出した東西溝跡(N - 84° - W)で、西端は調査区外へ続く。10.11mを検出し、幅0.20 ~ 0.61m、深さ9 ~ 25cmを測り、基底面は東(8.404m)から西(8.382m)に若干傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は

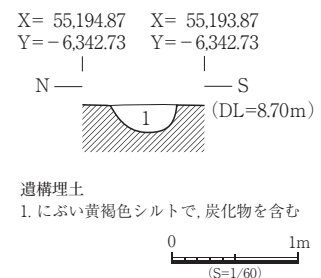


Fig.95 SD - 203

にぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、瓦質土器片1点、瓦片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-204

SD-203の南側で検出した東西溝跡で、N-72°-Wに延びた後、N-79°-Wに方向を変える。西端はSK-216に切られ、10.97mを検出した。幅0.25～0.50m、深さ5～10cmを測り、基底面は東(8.547m)から西(8.453m)に緩やかに傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点、瓦片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-205

SD-204の南側で検出した東西溝跡で、N-78°-Wに延びた後、N-84°-Wに方向を変える。西端は調査区外に続き、SD-207を切る。17.51mを検出し、幅0.24～0.69m、深さ2～14cmを測り、基底面は東(8.472m)から西(8.408m)に緩やかに傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、瓦片8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-206

SD-204の東側で検出した東西溝跡で、N-83°-Wに延びた後、N-76°-Wに方向を変える。長さ28.65m、幅0.18～0.56m、深さ19cmを測り、基底面は西(8.530m)から東(8.325m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片2点、瓦質土器片1点、瓦片16点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-207

SD-206の南側で検出した東西溝跡(N-80°-W)で、西端はSD-205に切られる。10.74mを検出し、幅23～36cm、深さ7～15cmを測り、基底面は西(8.516m)から東(8.490m)に若干傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点、瓦片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-208

SD-205の南側で検出した東西溝跡(N-90°-E)である。長さ11.78m、幅0.30～0.76m、深さ4～6cmを測り、基底面は8.535m前後でほぼ平らであった。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、瓦片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-209

SD-206の北側で検出した東西溝跡(N-80°-W)である。長さ6.30m、幅17～40cm、深さ2～5cmを測り、基底面は東(8.474m)から西(8.444m)に若干傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片1点、須恵器片1点、瓦片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-210 (Fig.96)

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-13°-E)で、北端は調査区外へ続き、SD-211を切る。

2. 中世

24.47mを検出し、幅0.55～1.00m、深さ5～10cmを測り、基底面は南(8.645m)から北(8.521m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片20点、須恵器片4点、瓦器片4点、土師質土器片10点、土錘片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。
SD-211 (Fig.96)

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-13°-E)で、北端は調査区外へ続き、SD-210に切られる。24.40mを検出し、幅0.58～0.88m、深さ0.27～0.51mを測り、基底面は南(8.435m)から北(8.272m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は南部では2層に分かれ、上層が明黄褐色シルト質砂、下層がにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物は上層より土師器片7点、須恵器片2点、瓦器片9点、土師質土器片53点、瓦質土器片4点、白磁片1点、青磁片1点、下層より須恵器片6点、瓦器片11点、土師質土器片43点、備前焼片1点、瓦質土器片2点、鉄滓がみられ、上層より出土した須恵器1点(293)が図示できた。

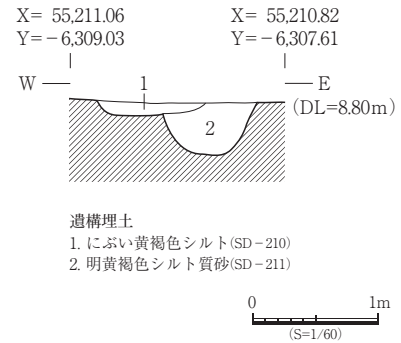


Fig.96 SD-210・211

出土遺物

須恵器(Fig.99-293)

293は杯で、約1/2が残存し、口径10.4cm、器高3.8cm、底径6.8cmを測る。底部には断面方形の高台を有し、体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

SD-212

SD-211の東側で検出した南北溝跡(N-8°-E)で、北端はSX-202を切る。長さ13.02m、幅0.26～0.63m、深さ9～15cmを測り、基底面は北(8.583m)から南(8.570m)に若干傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片30点、須恵器片7点、瓦片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-213

調査区北部で検出した南北溝跡(N-12°-E)で、北端は調査区外に続き、南端は近世の遺構に切られる。2.39mを検出し、幅0.49～0.80m、深さ15cmを測り、基底面は8.590m前後でほぼ平らであった。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片4点、土師質土器片11点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-214 (Fig.97)

調査区南部で検出した東西溝跡(N-83°-W)である。長さ14.03m、幅0.17～0.50m、深さ8～23cmを測り、基底面は東(8.559m)から西(8.451m)に傾斜する。断面はV字形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器片4点、須恵器片2点、瓦器片1点、土師質土器片3点、瓦質土器2点、瓦片2点がみられ、瓦質土器2点(294・295)が図示できた。

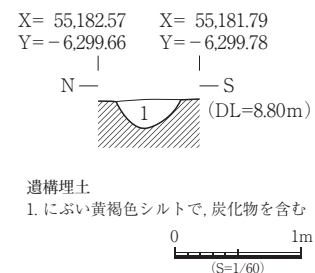


Fig.97 SD-214

出土遺物

瓦質土器(Fig.99 - 294・295)

294・295は鍋である。294は口縁部の一部が残存し、口径19.8cm、胴径19.2cmを測る。口縁部は胴部より屈曲して、内湾して立ち上がり、端部を細くつまみ上げる。胴部外面には一部ナデ調整と指頭圧痕が残るが、器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色または灰色、外面が灰色またはにぶい黄橙色を呈する。295は口縁部の一部が残存し、口径19.6cmを測る。口縁部は胴部より屈曲して、外上方へやや外反して伸びる。胴部には一部ナデ調整と指頭圧痕が残るが、器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内面が灰色または灰黄色、外面がオリーブ黒色または灰黄色を呈する。

SD - 215

調査区北部で検出した東西溝跡(N - 74° - W)で、両端を攪乱と近世の遺構に切られる。4.07mを検出し、幅0.68～0.72m、深さ6～10cmを測り、基底面は西(8.807m)から東(8.751m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄褐色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片6点、土師質土器片20点、瓦片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 216

SD - 215の南側で検出した東西溝跡(N - 85° - W)である。長さ10.80m、幅12～32cm、深さ約10cmを測り、基底面は西(8.881m)から東(8.840m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 217

調査区東部で検出した東西溝跡で、N - 74° - Eに延びた後、N - 88° - Wに方向を変える。西端は近世の遺構に切られる。7.05mを検出し、幅0.31～0.50m、深さ5～9cmを測り、基底面は東(8.238m)から西(8.186m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には図示した白磁1点(296)がみられた。

出土遺物

白磁(Fig.99 - 296)

296は碗で、底部の約1/2が残存し、底径5.4cmを測る。高く直立する削り出し高台を有し、内面と外面の体部下半まで白色釉を薄く施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

SD - 218 (Fig.98)

SD - 217の南側で検出した東西溝跡である。中世の遺物包含層4(第IV - 3層)に伴う遺構で、SD - 219を切る。主軸方向はN - 75° - Wに延びた後、N - 73° - Eに方向を変える。長さ11.85m、幅約2.15m、深さ3～17cmを測り、基底面は西(8.275m)から東(8.102m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰黄褐色細粒砂、下層が灰白色シルト質砂であった。出土遺物は上層より土師器片3点、須恵器片5点、瓦器片5点、土師質土器片51点、瓦質土器片2点、青磁片3点、鉄滓、下層より土師器片2点、須恵器片2点、土師質土器片25点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

2. 中世

SD-219 (Fig.98)

SD-218の南側で検出した東西溝跡(N-81°-W)で、SD-220とSK-240を切る。中世の遺物包含層4(第IV-3層)に伴う遺構である。長さ7.88m、幅0.13~0.71m、深さ2~13cmを測り、基底面は西(8.380m)から東(7.991m)に大きく傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層は灰白色細粒砂、下層は灰黄褐色中粒砂であった。出土遺物は上層

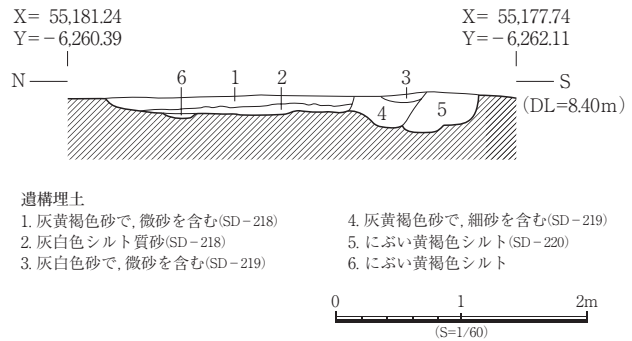


Fig.98 SD-218~220

より土師器片1点、須恵器片2点、瓦器片1点、土師質土器片12点、白磁片1点、下層より須恵器片3点、瓦器片1点、土師質土器片11点がみられ、上層より出土した須恵器1点(297)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.99-297)

297は蓋で、約1/3が残存し、口径9.6cm、器高3.3cmを測る。天井部はやや丸味を有し、口縁部は大きく湾曲して下方に伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、天井部外面には回転ヘラ削りを行う。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

SD-220 (Fig.98)

SD-219の南側で検出した東西溝跡(N-77°-W)で、SD-219に切られる。中世の遺物包含層4(第IV-3層)に伴う遺構である。長さ12.33m、幅0.28~0.93m、深さ5~29cmを測り、基底面は西(8.286m)から東(7.827m)に大きく傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片3点、瓦器片1点、土師質土器片6点、瓦片1点がみられ、土師質土器1点(298)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.99-298)

298は羽釜の口縁部の破片で、口径23.6cmを測る。口縁部はやや内湾し、端部は外傾する面を有する。外面には幅0.8cmの短い鏝が水平に伸びる。調整は胴部がナデ調整で、外面には指頭圧痕が残るが、口縁部は摩耗するため不明である。胎土はやや粗く砂粒、焼成はやや良好で、色調は内外面とも橙色を呈する。

SD-221

調査区北東部で検出した南北溝跡(N-11°-E)で、中世の遺物包含層4(第IV-3層)に伴う遺構である。北端は調査区外へ続き、5.03mを検出した。幅0.64~0.91m、深さ30~40cmを測り、基底面は南(7.890m)から北(7.809m)に傾斜する。断面はV字形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰黄色シルト質砂、下層が灰黄褐色砂質シルトで、灰白色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-222

SD-221の南側で検出した東西溝跡で、中世の遺物包含層4(第IV-3層)に伴う遺構である。主軸

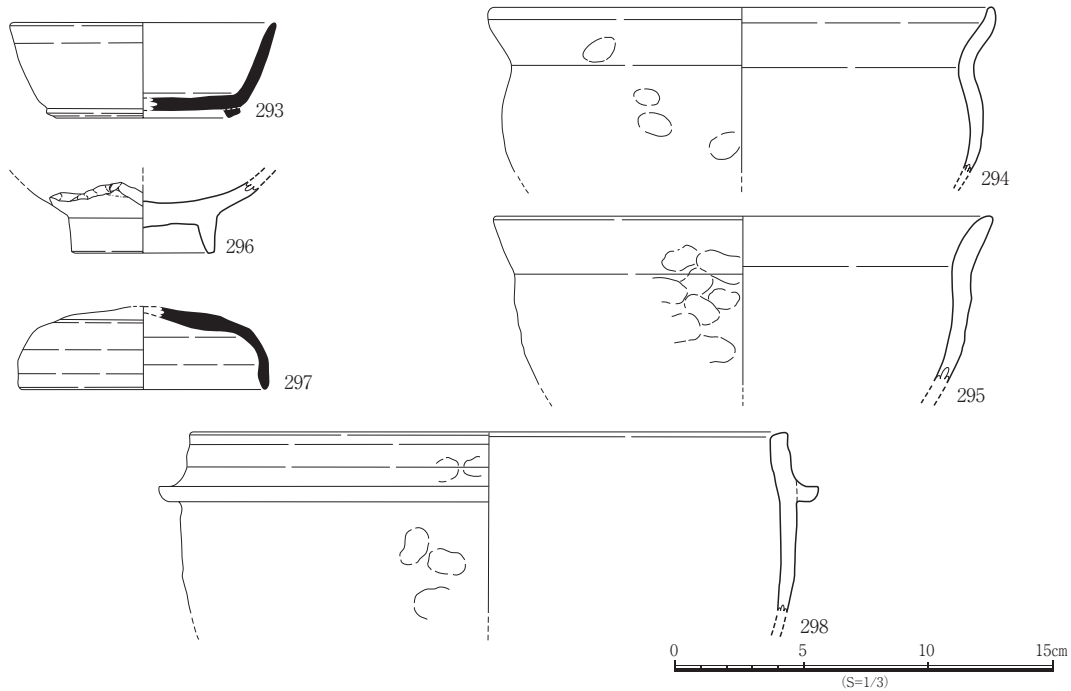


Fig.99 SD - 211・214・217・219・220 出土遺物実測図

方向はN - 72° - Wに延びた後, N - 85° - Wに方向を変える。長さ6.72m, 幅0.49~1.21m, 深さ5~27cmを測り, 基底面は西(8.171m)から東(7.494m)に大きく傾斜する。断面は舟底形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 土師質土器片16点, 備前焼1点, 青磁片1点がみられ, 瓦器1点(299), 備前焼(300)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.103 - 299)

299は小皿で, 約1/3が残存し, 口径7.8cm, 器高1.3cmを測る。底部は丸く, 口縁部は短く内湾する。調整は内底面がナデ調整, 口縁部がヨコナデ調整, 底部外面がナデ調整で, 指頭圧痕が残る。胎土はやや密で, 焼成は良く, 色調は内面が暗灰色, 外面が灰色を呈する。

備前焼 (Fig.103 - 300)

300は甕で, 底部の一部が残存し, 底径15.5cmを測る。胴部は底部から屈曲し, やや内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ調整で, 指頭圧痕が残り, 胴部外面はナデ調整, 底部外面は未調整である。胎土はやや密で砂粒を含み, 焼成は良好で, 色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。

SD - 223 (Fig.100)

SD - 222の南側で検出した南北溝跡(N - 5° - E)で, 中世の遺物包含層7(第IV - 12層)に伴う遺構である。長さ9.71m, 幅0.41~1.14m, 深さ0.51~0.77mを測り, 基底面は北(7.659m)から南(7.481m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれ, 上層が灰黄褐色砂質シルトに灰白色シルトのブロックを含み, 下層がにぶい黄橙色砂質シルトであった。出土遺物には土師器1点, 瓦器片1点, 土師質土器片23点, 青磁片1点が

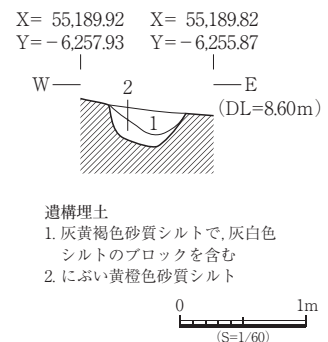


Fig.100 SD - 223

2. 中世

みられ、土師器(301)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.103 - 301)

301は皿で、約1/5が残存し、口径13.8cm、器高1.8cm、底径9.4cmを測る。器壁が厚く、口縁部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、摩耗するため不明瞭である。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面とも橙色を呈する。

SD - 224

SD - 223の東側で検出した南北溝跡(N - 11° - E)で、中世の遺物包含層6(第IV - 11層)に伴う遺構である。北端は調査区外へ続き、16.00mを検出した。幅0.40 ~ 1.16m、深さ20 ~ 34cmを測り、基底面は南(7.266m)から北(7.119m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層がにぶい黄橙色砂質シルト、下層が浅黄色シルトで、中粒砂と炭化物を含んでいた。出土遺物は図示した青磁1点(302)がみられた。

出土遺物

青磁(Fig.103 - 302)

302は龍泉窯系の碗で、約1/2が残存し、口径17.4cm、器高7.0cm、底径6.0cmを測る。底部は器壁が厚く、断面方形で低く直立する削り出し高台を有する。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は薄く仕上げ、内面には劃花文がみられる。内面と外面の高台までオリブ色の釉を薄く施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰オリブ色を呈する。

SD - 225

SD - 224の東側で検出した南北溝跡で、中世の遺物包含層6(第IV - 11層)に伴う遺構である。主軸方向はN - 7° - Wに延びた後、N - 10° - Eに方向を変える。北端は調査区外へ続き、11.75mを検出した。幅0.42 ~ 1.03m、深さ9 ~ 45cmを測り、基底面は北(6.805m)から南(6.694m)に大きく傾斜する。断面はU字形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層がにぶい黄橙色シルト質砂、下層がにぶい黄橙色粘土質シルトで、いずれも中粒砂と炭化物を含んでいた。

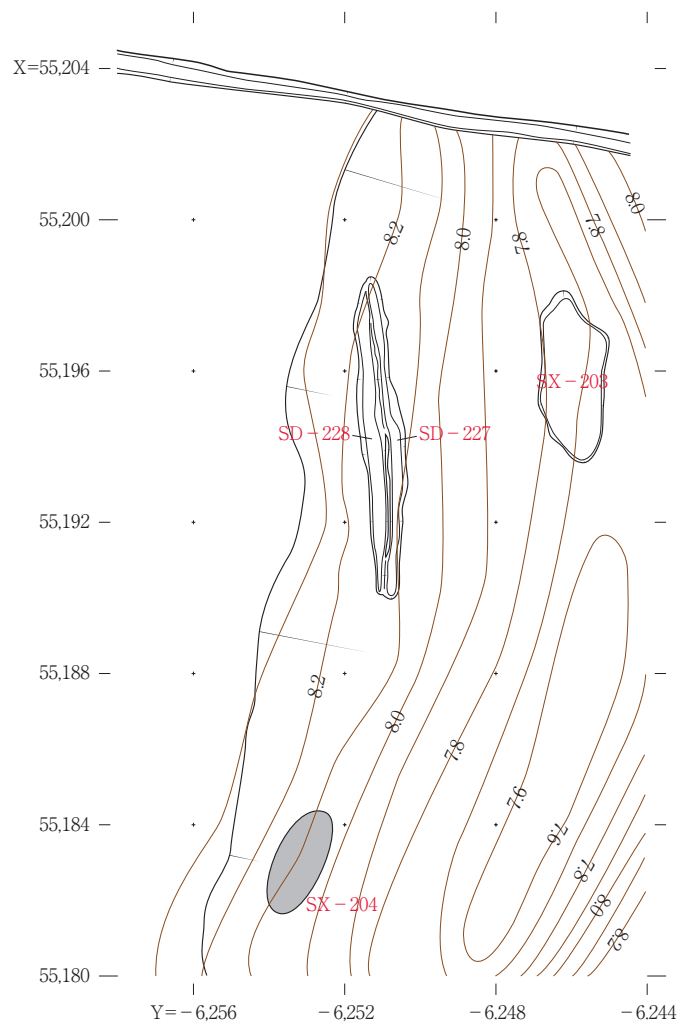


Fig.101 中世遺構平面図2

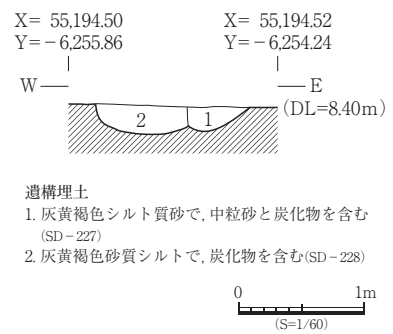
た。出土遺物には瓦器片6点, 土師質土器片1点, 鉄滓がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 226

SD - 225の東側で検出した南北溝跡(N - 6° - E)で, 中世の遺物包含層7(第IV - 12層)に伴う遺構である。北端は調査区外へ続き, 11.55mを検出した。幅0.38~0.80m, 深さ14~38cmを測り, 基底面は北(6.807m)から南(6.605m)に大きく傾斜する。断面は逆台形を呈し, 埋土は黄灰色砂で, にぶい黄橙色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 瓦器片1点, 土師質土器片4点, 青磁片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 227 (Fig.102)

調査区東部で検出した南北溝跡(N - 5° - W)で, 中世の遺物包含層2(第IV - 1層)に伴う遺構である。長さ8.52m, 幅0.32~0.54m, 深さ3~33cmを測り, 基底面は南(7.205m)から北(7.167m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色シルト質砂で, 中粒砂と炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片32点, 東播系須恵器片1点, 土師質土器片43点, 備前焼片1点, 瓦質土器片1点, 青磁片5点がみられ, 青磁1点(303)が図示できた。



遺構埋土
1. 灰黄褐色シルト質砂で, 中粒砂と炭化物を含む (SD-227)
2. 灰黄褐色砂質シルトで, 炭化物を含む (SD-228)

Fig.102 SD - 227・228

出土遺物

青磁 (Fig.103 - 303)

303は龍泉窯系の碗で, 口縁部の約1/6が残存し, 口径14.6cmを測る。器壁が厚く, 体部は内湾して立ち上がり, 口縁端部を丸く仕上げ, 内面には片彫りによる飛雲文がみられる。器面にはオリーブ色の釉を薄く施す。胎土は密で, 焼成はやや悪く, 色調は内外面ともオリーブ黄色またはにぶい黄色を呈する。

SD - 228 (Fig.102)

SD - 227の西側で検出した南北溝跡(N - 4° - W)で, SD - 227に切られる。中世の遺物包含層2(第

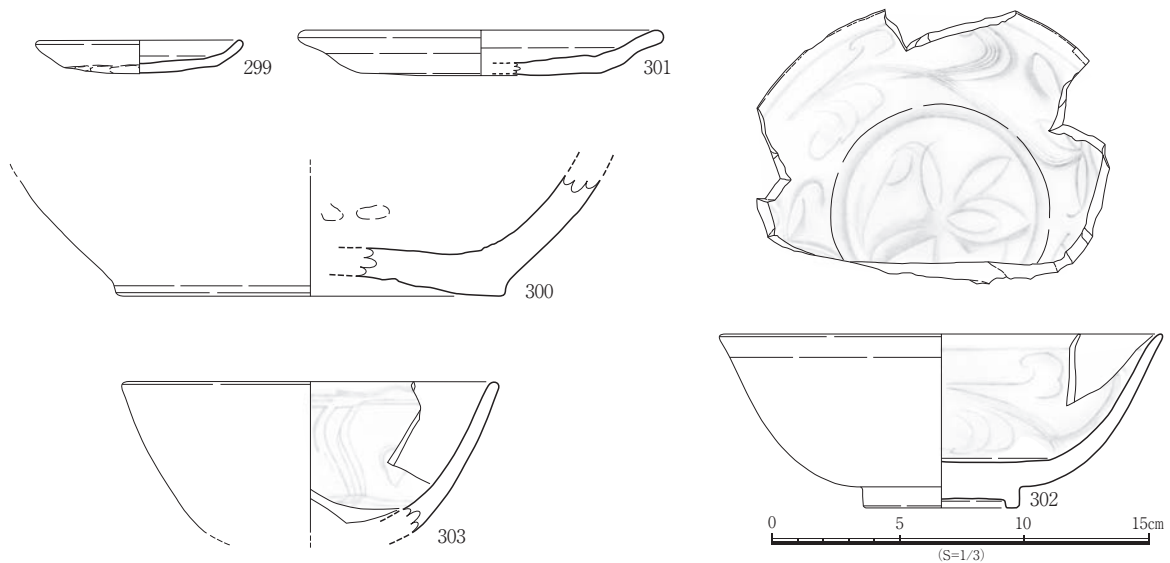


Fig.103 SD - 222 ~ 224・227 出土遺物実測図

2. 中世

IV-1層に伴う遺構である。長さ8.09m、幅0.20～0.57m、深さ12cmを測り、基底面は北(8.149m)から南(7.986m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

(5) ピット

P-201

調査区北西部で検出した楕円形を呈するピットで、SX-201に切られる。長径0.55m、短径0.44m、深さ48cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点、瓦質土器片1点がみられ、土師質土器1点(304)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.104-304)

304は羽釜の口縁部の破片である。胴部は大きく膨らみ、口縁部はやや内湾し、端部は水平な面を有する。外面には断面半円形の鏝を貼付する。調整は胴部外面がナデ調整で、指頭圧痕が残り、その他は摩耗するため不明である。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は内面ににぶい橙色または灰黄褐色、外面がにぶい橙色を呈する。

P-202

P-201の南側で検出した楕円形を呈するピットで、SX-201に切られる。長径41cm、短径33cm、深さ40cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器1点、瓦片3点がみられ、須恵器(305)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.104-305)

305は杯で、約1/8が残存し、口径14.5cm、器高3.3cm、底径8.4cmを測る。口縁部の器壁は薄く、底部より屈曲し、内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

P-203

P-201の東側で検出した円形を呈するピットである。径21cm、深さ27cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器1点、瓦片3点がみられ、土師質土器(306)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.104-306)

306は羽釜で、約1/4残存し、口径19.8cmを測る。胴部はやや膨らみ、口縁部は直立して、端部を丸く収める。口縁部には断面半円形の鏝を貼付し、外面には煤が付着する。調整は胴部内面がナデ、口縁部がヨコナデ、胴部外面は横方向のヘラ削りの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は内面が橙色、外面が橙色または黒褐色を呈する。

P-204

SK-203の北側で検出した楕円形を呈するピットである。長径0.54m、短径0.45m、深さ36cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した土師器1点(307)が

みられた。

出土遺物

土師器 (Fig.104 - 307)

307は杯で、約1/4が残存し、口径10.7cm、器高2.6cm、底径7.4cmを測る。器壁が薄く、口縁部は体部より屈曲して外上方に開き、端部内面には浅い溝が巡る。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が橙色、外面が橙色またはにぶい黄橙色を呈する。

P - 205

SK - 202の東側で検出した楕円形を呈するピットである。長径23cm、短径19cm、深さ45cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器1点、土師質土器片4点、瓦質土器片2点がみられ、土師器(308)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.104 - 308)

308は杯で、底部の約1/3が残存し、底径6.6cmを測る。口縁部は体部より内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面がにぶい褐色または灰黄褐色、外面がにぶい褐色を呈する。

P - 206

P - 205の南側で検出した楕円形を呈するピットである。長径23cm、短径18cm、深さ15cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した瓦1点(309)がみられた。

出土遺物

瓦 (Fig.104 - 309)

309は平瓦で、一部が残存する。凹面には布目が残り、凸面は細かい格子状のタタキ目が残る。側面は面取りを行う。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

P - 207

SK - 206の西側で検出した楕円形を呈するピットである。長径34cm、短径30cm、深さ35cmを測り、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には須恵質土器1点、土師質土器片1点、瓦質土器片1点、青磁片1点、瓦片3点がみられ、須恵質土器(310)が図示できた。

出土遺物

須恵質土器 (Fig.104 - 310)

310は杯で、底部の約1/4が残存し、底径8.2cmを測る。底部は平らで、断面方形で直立する高台を貼付する。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは静止糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、炭素が吸着し、瓦質土器に似た焼成である。色調は内外面とも灰色を呈する。

P - 208

SK - 209の南西で検出した楕円形を呈するピットである。長径32cm、短径28cm、深さ32cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した鉄製品1点(311)がみられた。

2. 中世

出土遺物

鉄製品(Fig.104 - 311)

311は刀子で、一部が残存し、残存長6.7cm, 全幅1.6cm, 全厚0.2cmを測る。全面に錆化がみられるが、刃部は真直ぐ伸びる。

P - 209

調査区南西部で検出した楕円形を呈するピットである。長径40cm, 短径29cm, 深さ36cmを測り、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器1点, 須恵器片1点, 土師質土器片2点, 瓦片15点がみられ、土師器(312)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.104 - 312)

312は杯で、約1/3が残存し、口径10.8cm, 器高2.8cm, 底径7.6cmを測る。底部の器壁が厚く、体部は内湾して立ち上がり、端部を細く仕上げる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。また、口縁部の内外面に炭素が吸着し、重ね焼き痕がみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

P - 210

SK - 205の北東で検出した不整楕円形を呈するピットである。長径0.56m, 短径0.46m, 深さ9cmを測り、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には図示した土師質土器1点(313)がみられた。

出土遺物

土師質土器(Fig.104 - 313)

313は杯で、ほぼ完存し、口径10.8cm, 器高3.0cm, 底径5.6cmを測る。器壁は薄く、口縁部はやや内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも浅黄色または橙色を呈する。

P - 211

P - 210の南東で検出した円形を呈するピットである。径26cm, 深さ26cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師器片6点, 須恵器片1点がみられ、土師器1点(314)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.105 - 314)

314は杯で、ほぼ完存し、口径10.5cm, 器高3.2cm, 底径6.7cmを測る。器壁は薄く、体部は底部より緩やかに立ち上がり、口縁部はやや外反する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。器面の一部には煤が付着する。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面ともいぶい橙色を呈する。

P - 212

P - 211の北東で検出した楕円形を呈するピットである。長径0.77m, 短径0.48m, 深さ7cmを測り、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片4点, 須恵器片2点がみられ、須恵器1点(315)が図示できた。

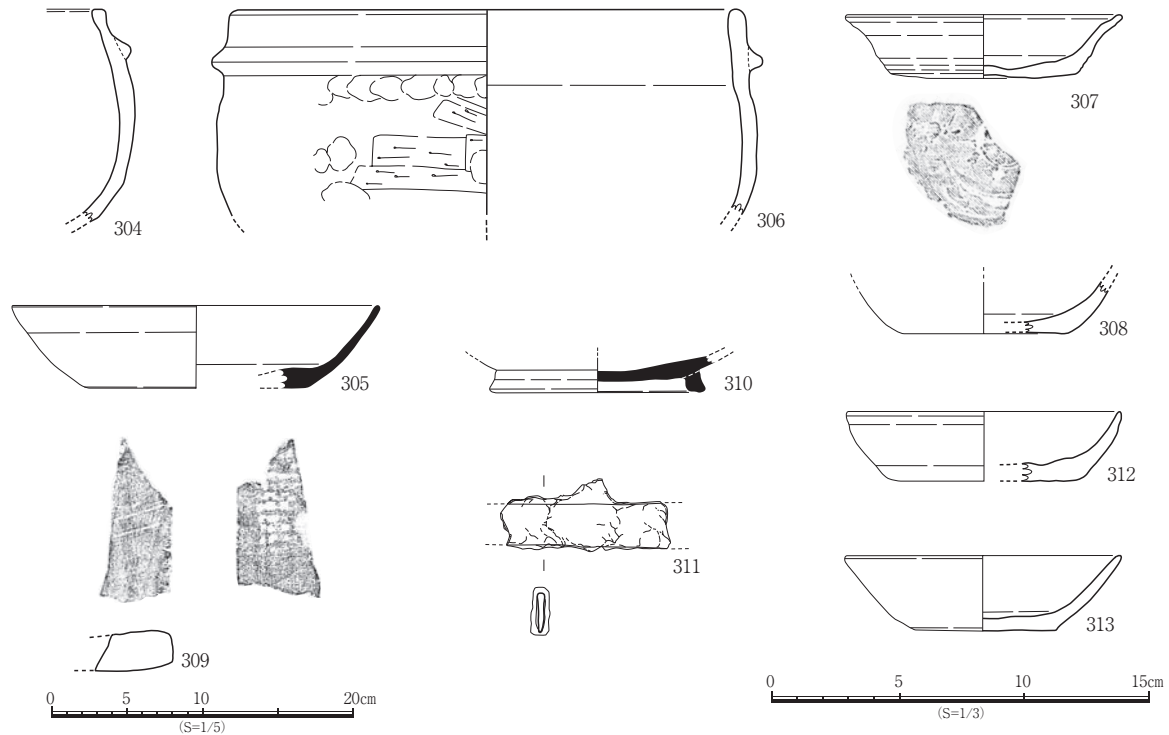


Fig.104 P - 201 ~ 210 出土遺物実測図

出土遺物

須恵器 (Fig.105 - 315)

315は杯で、底部が完存し、口径14.0cm、器高4.1cm、底径8.9cmを測る。底部の器壁は厚く、断面方形でハの字状に開く高台を貼付する。体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。口縁部内面には若干煤が付着する。胎土は粗く砂粒を多く含み、焼成は不良で、色調は内面が灰色、外面が灰色または灰黄色を呈する。

P - 213

P - 212の南側で検出した円形を呈するピットである。径0.52m、深さ21cmを測り、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片11点がみられ、土師器1点(316)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.105 - 316)

316は杯で、約1/3が残存し、口径13.4cm、器高3.0cm、底径8.0cmを測る。器壁は薄く、体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。口縁部内面には一部煤が付着する。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が橙色または赤褐色、外面が橙色または明赤褐色を呈する。

P - 214

調査区中央部で検出した円形を呈するピットで、SX - 202を切る。径0.52m、深さ23cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には須恵器片3点、土師器片2点がみられ、須恵器1点(317)が図示できた。

2. 中世

出土遺物

須恵器(Fig.105 - 317)

317は杯で、約1/4が残存し、口径12.7cm、器高4.1cm、底径7.8cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し、体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が灰色、外面が灰色または灰黄色を呈する。

P - 215

SX - 202の東側で検出した円形を呈するピットである。径26cm、深さ12cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器1点、瓦片1点がみられ、土師質土器(318)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.105 - 318)

318は杯で、底部の約1/3が残存し、底径6.8cmを測る。体部は器壁が薄く、底部より緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰黄色または黄灰色、外面が浅黄色または黄灰色を呈する。

P - 216

SX - 202の南側で検出した隅丸方形を呈するピットで、SX - 202に切られる。長辺1.04m、短辺0.56m、深さ9cmを検出し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師器片10点、須恵器片2点、瓦器片1点がみられ、須恵器1点(319)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.105 - 319)

319は杯で、底部の約1/4が残存し、底径7.2cmを測る。底部には直立する高台を有し、体部は底部より屈曲して外上方に立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、高台内はナデ調整を行う。内面と外面の一部には自然釉が付着する。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰黄色または灰オリーブ色を呈する。

P - 217

P - 216の南側で検出した楕円形を呈するピットである。長径0.61m、短径0.58m、深さ30cmを測り、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師器片2点、須恵器片2点、瓦片4点がみられ、須恵器1点(320)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.105 - 320)

320は杯で、底部の約1/5が残存し、底径9.6cmを測る。底部にはハの字状に開く高台を有し、体部は底部より屈曲してやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰色または灰白色を呈する。

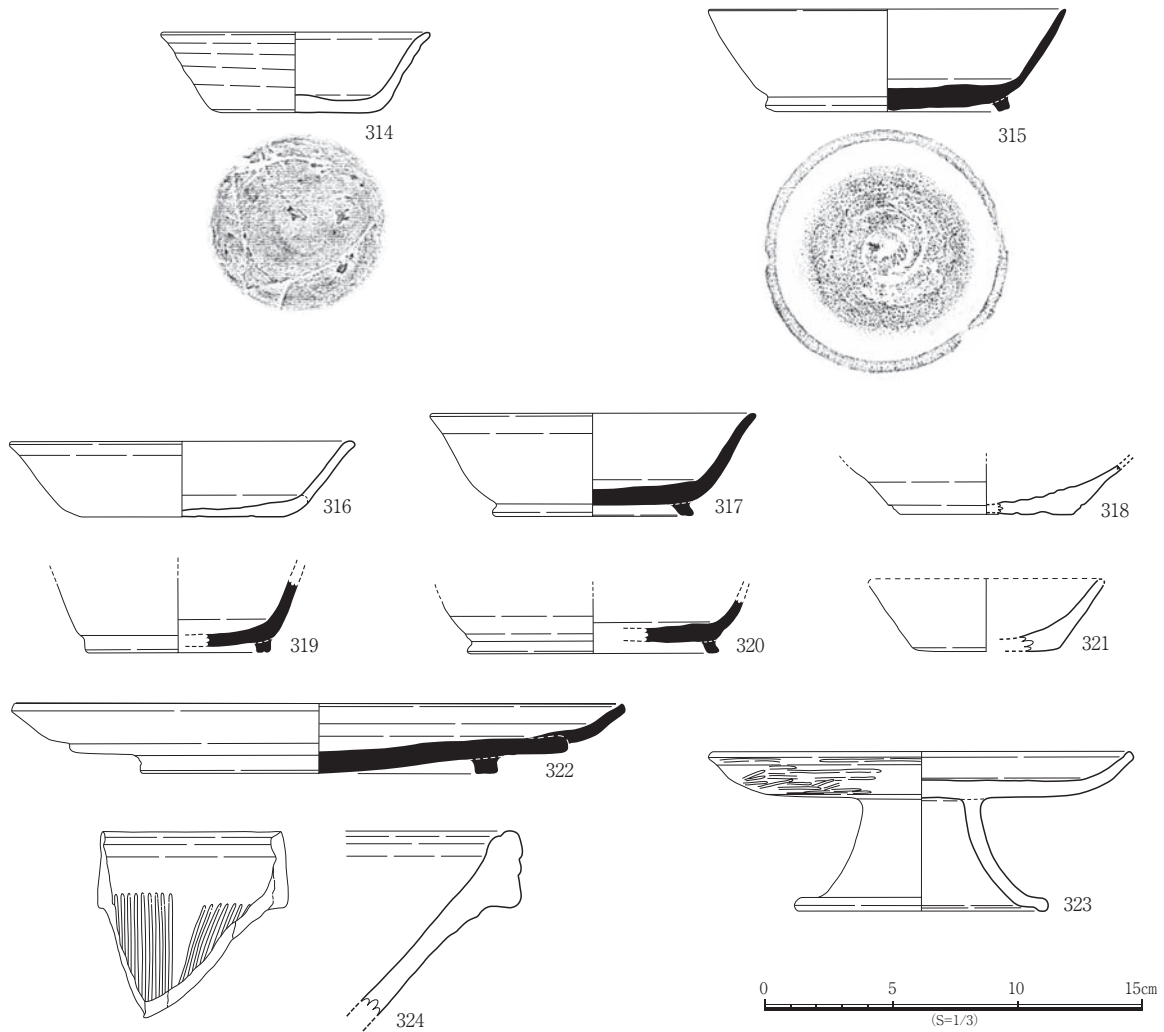


Fig.105 P-211～220出土遺物実測図

P-218

調査区南部で検出した楕円形を呈するピットである。長径31cm, 短径22cm, 深さ19cmを測り, 埋土はにぶい黄褐色シルトで, マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師器片2点がみられ, 土師器1点(321)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.105-321)

321は杯で, 底部の約1/4が残存し, 底径5.6cmを測る。体部は底部より緩やかに立ち上がり, 外上方に真直ぐ伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で, 底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で, 焼成はやや良く, 色調は内面が浅黄橙色またはにぶい橙色, 外面が浅黄橙色または橙色を呈する。

P-219

P-218の南側で検出した楕円形を呈するピットで, P-220に切られる。長径0.54m, 短径0.50m, 深さ25cmを測り, 埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には図示した須恵器1点(322)がみられた。

2. 中世

出土遺物

須恵器(Fig.105 - 322)

322は盤で、約1/3が残存し、口径24.0cm、器高2.8cm、底径14.0cmを測る。底部は器壁が厚く、太く直立する高台を有する。体部は底部より内湾して立ち上がり、口縁端部は内傾する面を有する。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

P - 220

P - 219の南側で検出した隅丸方形を呈するピットで、P - 219を切る。長辺0.76m、短辺0.69m、深さ15cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には図示した土師器1点(323)、備前焼1点(324)がみられた。

出土遺物

土師器(Fig.105 - 323)

323は高杯で、脚部が完存し、口径16.4cm、器高6.3cm、底径9.8cmを測る。脚部はハの字状に開き、裾部は水平に伸び、端部を下方につまむ。杯部は浅く、平らな底部より緩やかに内湾して立ち上がる。調整は脚部が回転ナデ調整、杯部は口縁部がヨコナデ調整、底部外面がナデ調整で、口縁部外面には横方向のミガキを施す。杯部の内面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色または浅黄橙色を呈する。

備前焼(Fig.105 - 324)

324は播鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は外上方に真直ぐ伸び、口縁部は顎部の張り出しが顕著で、分厚く、外面には凹線が2条みられる。器面には回転ナデ調整を施し、内面には残存部で9本の摺り目が残り、口縁部外面には重ね焼き痕がみられる。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は内面が赤褐色、外面がにぶい赤褐色を呈する。

P - 221

P - 220の北東で検出した楕円形を呈するピットである。長径35cm、短径28cm、深さ35cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には図示した須恵器1点(325)がみられた。

出土遺物

須恵器(Fig.106 - 325)

325は杯で、底部の約1/2が残存し、底径9.0cmを測る。底部にはハの字状に開く高い高台を有し、体部は底部より緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが不明瞭である。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

P - 222

P - 221の南側で検出した隅丸方形を呈するピットである。長辺27cm、短辺25cm、深さ26cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には図示した土師器1点(326)がみられた。

出土遺物

土師器 (Fig.106 - 326)

326は杯で、約1/2が残存し、口径9.8cm、器高2.7cm、底径6.4cmを測る。器壁が薄く、口縁部は体部より屈曲して外上方にやや内湾し、端部は上方につまむ。器面には回転ナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内面が浅黄色、外面が灰色または灰白色を呈する。

P - 223

SD - 214の北側で検出した楕円形を呈するピットである。長径0.69m、短径0.65m、深さ18cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器1点、瓦片2点がみられ、土師質土器(327)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.106 - 327)

327は小皿で、ほぼ完存し、口径9.3cm、器高2.1cm、底径4.6cmを測る。器高が高く、口縁部はやや内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

P - 224

調査区北部で検出した楕円形を呈するピットである。長径47cm、短径35cm、深さ50cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には図示した須恵器1点(328)がみられた。

出土遺物

須恵器 (Fig.106 - 328)

328は杯で、底部の約1/4が残存し、底径7.6cmを測る。器壁が厚く、底部には直立する高い高台を有し、体部は底部より緩やかに立ち上がる。調整は内面が粗いナデ調整、高台内はナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰色または灰白色を呈する。

P - 225

P - 224の北側で検出した楕円形を呈するピットである。長径0.87m、短径43cm、深さ8cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片20点、白磁片1点がみられ、土師質土器1点(329)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.106 - 329)

329は小皿で、約1/2が残存し、口径7.2cm、器高1.5cm、底径5.0cmを測る。口縁部は底部より緩やかに立ち上がり、外上方に短く伸びる。器面は著しく摩耗するため調整と底部の切り離しは不明である。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

P - 226

P - 225の東側で検出した楕円形を呈するピットである。長径24cm、短径19cm、深さ0.60mを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した石製品1点(330)がみられた。

2. 中世

出土遺物

石製品(Fig.106 - 330)

330 は石鍋で、口縁部の一部が残存し、口径 26.0 cmを測る。口縁部はやや内湾し、端部は水平な面をもち、外面の口縁部直下には断面方形の鏝が巡る。また、鏝の上に残存部で 1箇所径 6 mmの円孔がみられる。調整は内面が斜め方向の削り、外面が横方向の削りである。石材は滑石である。

P - 227

P - 227 の南側で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、他の遺構に切られる。長径 26 cm、短径 24 cm、深さ 29 cmを検出し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片 2点、土師質土器片 2点がみられ、瓦器 1点(331)が図示できた。

出土遺物

瓦器(Fig.106 - 331)

331 は椀で、口縁部の約 1/5が残存し、口径 14.1 cmを測る。腰の張る形態を呈し、口縁部は緩やかに内湾する。調整は内面がナデ調整ののち、横方向のミガキ、口縁部はヨコナデ調整を 1段、体部外面はナデ調整で、指頭圧痕が残る。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰色、外面が暗灰色またはにぶい黄橙色を呈する。

P - 228

P - 227 の南側で検出した円形を呈するピットである。径 18 cm、深さ 12 cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器 1点、土師質土器片 10点がみられ、瓦器(332)が図示できた。

出土遺物

瓦器(Fig.106 - 332)

332 は小皿で、約 1/4が残存し、口径 7.6 cm、器高 1.5 cmを測る。口縁部は底部より緩やかに立ち上がり、外上方に短く伸びる。調整は内面がナデ調整、口縁部がヨコナデ調整、底部外面がナデ調整で、指頭圧痕が残る。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも暗灰色を呈する。

P - 229

P - 228 の南側で検出した楕円形を呈するピットである。長径 19 cm、短径 16 cm、深さ 11 cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片 4点、土師質土器片 5点、青磁片 1点がみられ、土師質土器 1点(333)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.106 - 333)

333 は小皿で、底部が完存し、口径 7.4 cm、器高 1.6 cm、底径 4.4 cmを測る。底部の器壁が厚く、口縁部はやや内湾する。内面の調整は著しく摩耗するため不明で、口縁部はヨコナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

P - 230

P - 229 の南側で検出した円形を呈するピットである。径 22 cm、深さ 22 cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には図示した土師質土器 1点(334)がみられた。

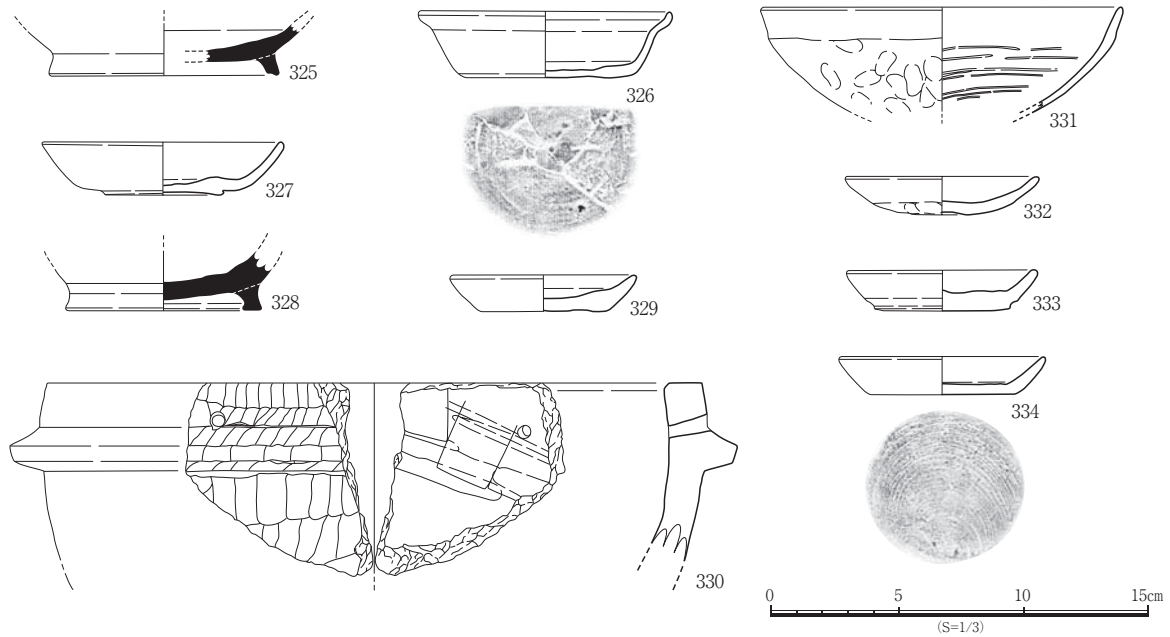


Fig.106 P - 221 ~ 230 出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器 (Fig.106 - 334)

334は小皿で、ほぼ完存し、口径8.0cm、器高1.5cm、底径6.0cmを測る。口縁部は底部より屈曲し、外上方に短く伸びる。器面には回転ナデ調整を施すが、摩耗するため不明瞭で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が浅黄橙色またはにぶい橙色、外面が浅黄橙色を呈する。

P - 231

P - 230の南側で検出した円形を呈するピットである。径27cm、深さ41cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片18点、土錘片1点がみられ、土師質土器2点(335・336)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.107 - 335・336)

335・336は杯である。335は底部がほぼ完存し、底径6.2cmを測る。底部の器壁が薄く、体部は緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。336は約1/3が残存し、口径11.8cm、器高3.7cm、底径6.9cmを測る。体部は底部より屈曲して立ち上がり、やや内湾する。器面には回転ナデ調整を施したとみられるが、摩耗するため不明瞭である。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

P - 232

P - 231の南東で検出した不整楕円形を呈するピットで、P - 233を切る。長径1.52m、短径0.70m、深さ25cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄褐色シルト質砂のブロックと炭化物、マンガンを含んでいた。出土遺物には瓦器片7点、土師質土器片70点、白磁片1点、土錘1点がみられ、

2. 中世

土錘(337)が図示できた。

出土遺物

土製品(Fig.107 - 337)

337は管状土錘で、紡錘形を呈する。一部を欠損し、全長4.7cm、全幅1.2cm、孔径0.4cm、重量4.6gを測る。器面には全面にナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良く、色調はにぶい橙色を呈する。

P - 233

P - 232の東側で検出した楕円形を呈するピットで、P - 232の底で確認した。長径0.57m、短径0.47m、深さ47cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片32点がみられ、土師質土器1点(338)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.107 - 338)

338は小皿で、約1/2が残存し、口径6.3cm、器高1.4cm、底径4.2cmを測る。口縁部は底部より緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面がにぶい橙色または橙色、外面がにぶい橙色を呈する。

P - 234

P - 226の東側で検出した楕円形を呈するピットである。長径32cm、短径28cm、深さ31cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片3点、東播系須恵器1点、土師質土器片25点がみられ、東播系須恵器(339)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器(Fig.107 - 339)

339は片口鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は外上方に真直ぐ伸び、口縁部は肥厚して、端部をつまみ上げる。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部外面には重ね焼き痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面が青灰色、外面が青灰色または暗灰色を呈する。

P - 235

P - 234の南側で検出した楕円形を呈するピットである。長径42cm、短径35cm、深さ33cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片4点、土師質土器27点、土製品1点がみられ、土製品(340)が図示できた。

出土遺物

土製品(Fig.107 - 340)

340は管状土錘で、紡錘形を呈する。ほぼ完存し、全長4.6cm、全幅1.2cm、孔径0.5cm、重量4.5gを測る。器面には全面にナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良く、色調はにぶい黄褐色を呈する。

P - 236

調査区北端で検出した楕円形を呈するピットで、P - 237に切られる。長径38cm、短径28cm、深さ0.54mを測り、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含ん

でいた。出土遺物には青磁1点、土製品1点、砥石片1点がみられ、青磁(341)と土製品(342)が図示できた。

出土遺物

青磁(Fig.107 - 341)

341は龍泉窯系の碗で、底部の約1/2が残存し、底径5.2cmを測る。底部の器壁は厚く、断面方形で低く直立する削り出し高台を有し、体部外面には蓮弁の一部とみられる片彫りによる文様を施す。器面には高台までオリーブ色の釉を約0.5mmの厚さに施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面ともオリーブ灰色を呈する。

土製品(Fig.107 - 342)

342は管状土錘で、紡錘形を呈する。完存し、全長6.6cm、全幅1.7cm、孔径0.5cm、重量12.9gを測る。器面には全面にナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は暗灰黄色またはにぶい黄褐色を呈する。

P - 237

P - 236の南側で検出した楕円形を呈するピットで、P - 236を切る。長径0.70m、短径0.60m、深さ38cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した土製品1点(343)がみられた。

出土遺物

土製品(Fig.107 - 343)

343は管状土錘で、紡錘形を呈する。完存し、全長4.2cm、全幅1.1cm、孔径0.2cm、重量3.8gを測る。器面には全面にナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は浅黄橙色または黒色を呈する。

P - 238

P - 237の南側で検出した隅丸方形を呈するピットである。長辺0.56m、短辺0.42m、深さ19cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器1点(344)がみられた。

出土遺物

土師質土器(Fig.107 - 344)

344は碗の底部で、約1/3が残存し、底径6.2cmを測る。器壁が薄く、体部は緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、内面には丁寧なナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が黄灰色、外面が灰色または暗灰色を呈する。

P - 239

P - 238の東側で検出した円形を呈するピットである。径37cm、深さ0.57mを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片16点、青磁1点がみられ、土師質土器1点(345)と青磁(346)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.107 - 345)

345は杯で、約1/2が残存し、口径11.2cm、器高3.9cm、底径4.8cmを測る。体部は緩やかに立ち上が

2. 中世

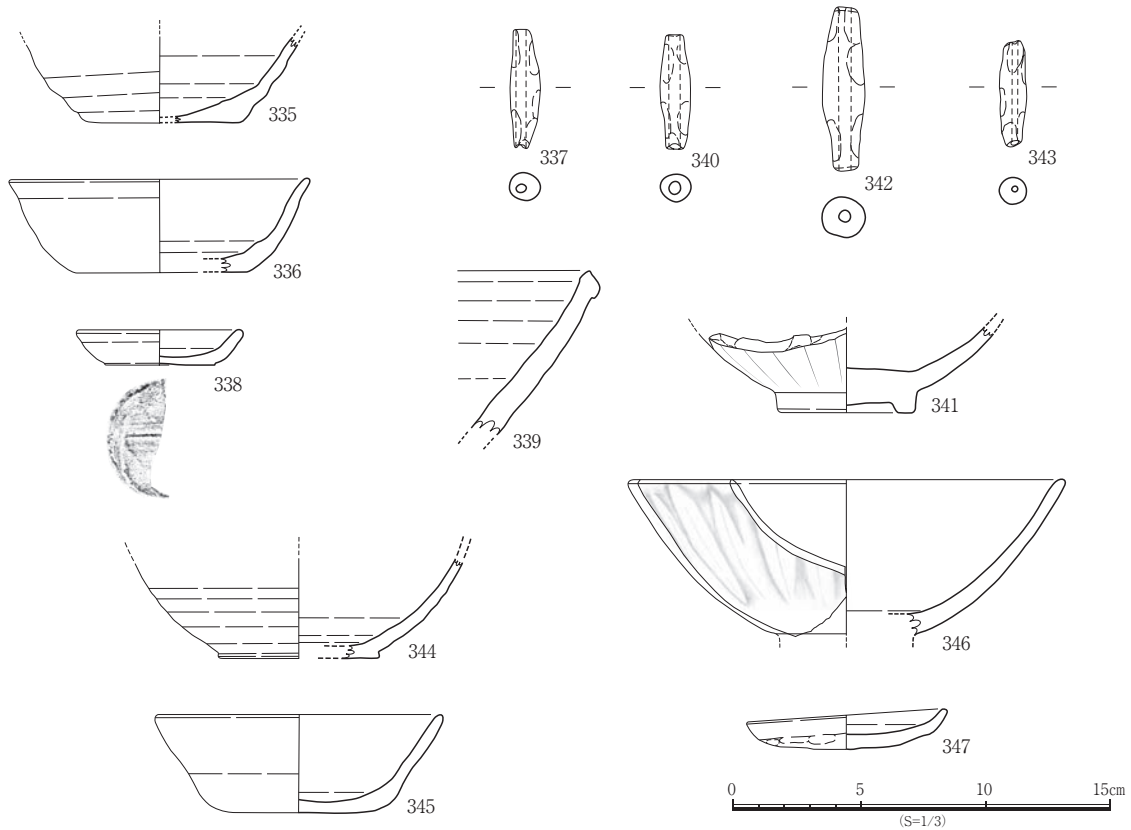


Fig.107 P-231～240出土遺物実測図

り、外上方に真直ぐ伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は内外面とも橙色を呈する。

青磁(Fig.107-346)

346は龍泉窯系の碗で、口縁部の一部が残存し、口径17.0cmを測る。体部は緩やかに内湾し、外面には鎬蓮弁文がみられる。器面にはオリーブ色の釉を薄く施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰オリーブ色を呈する。

P-240

SK-229の南側で検出した隅丸方形を呈するピットである。一辺46cm、深さ46cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器片7点、須恵器片1点、瓦器片17点、土師質土器片21点、土錘片1点がみられ、瓦器1点(347)が図示できた。

出土遺物

瓦器(Fig.107-347)

347は小皿で、約1/2が残存し、口径7.8cm、器高1.6cmを測る。底部は丸く、口縁部は短く内湾する。調整は内底面がナデ調整、口縁部がヨコナデ調整、底部外面がナデ調整で、指頭圧痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面が暗灰色または浅黄橙色、外面が暗灰色を呈する。

P-241

P-240の東側で検出した楕円形を呈するピットである。長径35cm、短径29cm、深さ37cmを測り、

埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した古銭1点(348)がみられた。

出土遺物

古銭(Fig.108 - 348)

348は2枚の古銭が凝着している。1枚は行書体の元祐通寶で、完存する。銭径2.48cm, 孔径0.63cm, 銭厚0.10cmを測る。北宋銭で、初鑄造年は1086年である。もう1枚は真書体の熙寧元寶で、完存する。銭径2.41cm, 孔径0.65cm, 銭厚0.12cmを測る。北宋銭で、初鑄造年は1068年である。

P - 242

SK - 231の南側で検出した円形を呈するピットで、SK - 231を切る。径42cm, 深さ14cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 瓦器片2点, 土師質土器片1点がみられ、瓦器1点(349)が図示できた。

出土遺物

瓦器(Fig.108 - 349)

349は椀で、口縁部の約1/4が残存し、口径14.4cmを測る。体部は内湾して緩やかに立ち上がる。調整は内面にミガキがわずかに残存し、口縁部にはヨコナデ調整を1段、体部外面はナデ調整を施し、指頭圧痕が平行に3段残る。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰黄色または黄灰色を呈する。

P - 243

SK - 231の北側で検出した楕円形を呈するピットで、SK - 231に切られる。長径27cm, 短径18cm, 深さ27cmを測り、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した東播系須恵器1点(350)がみられた。

出土遺物

東播系須恵器(Fig.108 - 350)

350は片口鉢の口縁部の破片である。体部は外上方に真直ぐ伸び、口縁部は肥厚して上下に拡張する。器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

P - 244

P - 243の北東で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、一部攪乱を受ける。長径46cm, 短径26cm, 深さ4cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した瓦質土器1点(351)がみられた。

出土遺物

瓦質土器(Fig.108 - 351)

351は羽釜の脚部で、一部が残存する。断面は楕円形を呈し、全幅2.3cmを測る。器面にはナデ調整を施し、全面に炭素が吸着する。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は灰黄色を呈する。

P - 245

P - 244の南側で検出した楕円形を呈するピットである。長径38cm, 短径25cm, 深さ0.67mを測り、

2. 中世

埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器1点、瓦器片3点、土師質土器片5点がみられ、土師器(352)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.108 - 352)

352は甕で、口縁部の一部が残存する。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。調整は胴部内面が横方向のハケのちナデ、口縁部はヨコナデで、内面には横方向のハケを加え、胴部外面はナデ調整で指頭圧痕が顕著に残り、一部ハケ調整を加える。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は内面ににぶい黄褐色、外面が黒褐色を呈する。

P - 246

P - 245の東側で検出した楕円形を呈するピットである。長径32cm、短径28cm、深さ0.51mを測り、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片14点がみられ、土師質土器1点(353)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.108 - 353)

353は杯で、底部の約2/3が残存し、底径5.6cmを測る。底部の器壁は厚く、体部は内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

P - 247

調査区北端で検出した隅丸方形を呈するピットで、一部調査区外へ続く。長辺0.75m、短辺24cm、深さ25cmを検出し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師器1点、土師質土器片8点、瓦片2点がみられ、土師器(354)が図示できた。

出土遺物

土師器(Fig.108 - 354)

354は杯で、底部の約1/3が残存し、底径5.1cmを測る。体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは摩耗するため不明瞭である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内面が灰色または灰白色、外面が灰白色を呈する。

P - 248

SK - 236の北側で検出した円形を呈するピットで、P - 249に切られる。径17cm、深さ38cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片7点、土師質土器片22点、瓦片1点、鉄滓がみられ、瓦器1点(355)が図示できた。

出土遺物

瓦器(Fig.108 - 355)

355は椀で、口縁部の約1/4が残存し、口径12.0cmを測る。器高が低く、体部は緩やかに内湾して立ち上がる。内面は摩耗するため調整は不明で、口縁部にはヨコナデを1段、外面にはナデ調整を施し、指頭圧痕が平行に2段残る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも黒色を呈する。

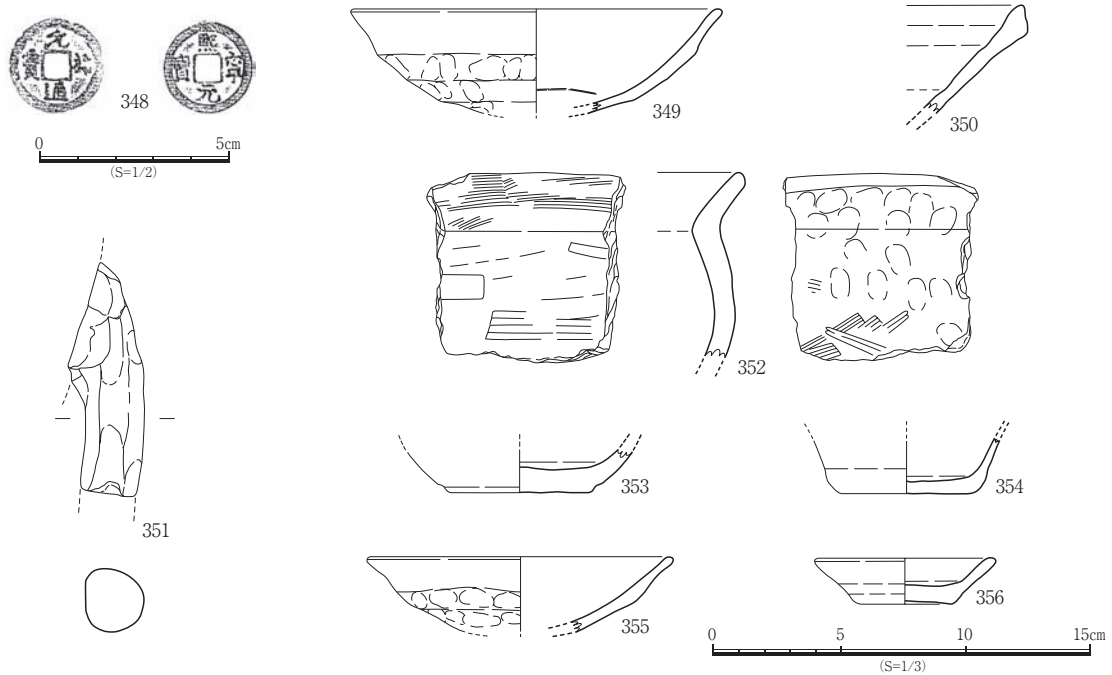


Fig.108 P - 241 ~ 249 出土遺物実測図

P - 249

P - 248 の東側で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、P - 248 を切る。長径 28 cm, 短径 25 cm, 深さ 38 cm を検出し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片 2 点, 土師質土器片 22 点がみられ、土師質土器 1 点(356)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.108 - 356)

356 は小皿で、約 1/3 が残存し、口径 7.0 cm, 器高 1.8 cm, 底径 3.6 cm を測る。口縁部は外上方へ真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りと見られるが、摩耗するため不明である。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

P - 250

P - 249 の東側で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、P - 249 を切る。長径 46 cm, 短径 20 cm, 深さ 24 cm を検出し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片 8 点, 土師質土器片 136 点がみられ、土師質土器 3 点(357 ~ 359)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.109 - 357 ~ 359)

357 は杯で、底部の約 1/2 が残存し、底径 6.5 cm を測る。器壁が厚く、体部は底部より屈曲して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

2. 中世

358・359は小皿である。358は底部が完存し、口径7.0cm、器高1.5cm、底径5.7cmを測る。口縁部は底部より屈曲して上方へ短く伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内面がにぶい橙色または橙色、外面がにぶい橙色を呈する。359は約1/3が残存し、口径7.3cm、器高1.5cm、底径4.8cmを測る。口縁部は底部より屈曲して外上方へ真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内面が灰黄褐色、外面が灰黄褐色または灰色を呈する。

P-251

P-250の東側で検出した楕円形を呈するピットである。長径21cm、短径16cm、深さ11cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、細粒砂を含んでいた。出土遺物には須恵器1点、土師質土器片2点がみられ、須恵器(360)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.109-360)

360は壺の胴部の破片である。器面には回転ナデ調整を施し、内面は同心円文を一部ナデ消し、外面には3状の凹線と櫛状工具による刺突文がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

P-252

SD-216の北側で検出した隅丸方形を呈するとみられるピットである。長辺29cm、短辺19cm、深さ31cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片15点、青磁片1点がみられ、土師質土器1点(361)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.109-361)

361は小皿で、完存し、口径7.9cm、器高1.9cm、底径4.6cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で砂粒を多く含み、焼成はやや良く、色調は内面が灰黄褐色またはにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

P-253

SD-216の南側で検出した楕円形を呈するとみられるピットで、一部他の遺構に切られる。長径25cm、短径21cm、深さ26cmを検出し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器1点、土師質土器片2点、瓦片1点がみられ、瓦器(362)が図示できた。

出土遺物

瓦器(Fig.109-362)

362は椀で、約1/3が残存し、口径14.8cm、器高3.9cm、底径4.8cmを測る。底部には断面半円形の高台を貼付し、体部は緩やかに立ち上がる。調整は内面がナデ調整で、体部には一部にミガキ、底部には平行暗文がみられる。口縁部はヨコナデ調整を1段、体部外面にはナデ調整を施し指頭圧痕が平行

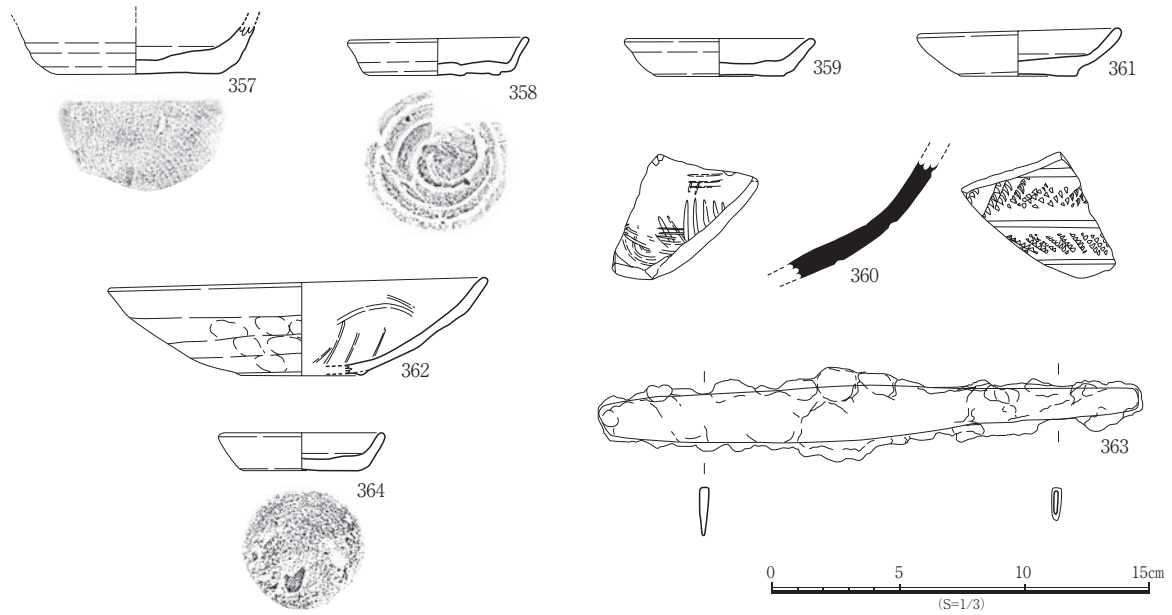


Fig.109 P - 250 ~ 255 出土遺物実測図

に3段残る。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも明黄褐色または橙色を呈する。

P - 254

SD - 218の南側で検出した溝状を呈するピットで、SD - 218を切る。長さ1.01m、幅28cm、深さ11cmを測り、埋土は灰白色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片1点、刀子片2点がみられ、刀子1点(363)が図示できた。

出土遺物

鉄製品 (Fig.109 - 363)

363は刀子で、先端を欠損する。残存長21.4cm、刃部長14.7cmを測る。刃部はほぼ直線的に伸びて関に至る。全面に錆化がみられる。

P - 255

調査区東端で検出した円形を呈するピットである。径32cm、深さ21cmを測り、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物と焼土を伴っていた。出土遺物には土師質土器片24点、骨片がみられ、土師質土器1点(364)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.109 - 364)

364は小皿で、底部が完存し、口径6.3cm、器高1.5cm、底径4.6cmを測る。口縁部は短く、外上方に立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗するため不明瞭である。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

(6) 性格不明遺構

SX - 201

調査区北西部で検出した水溜まり状の遺構で、SD - 202を切る。長さ8.23m、幅2.46 ~ 3.84m、深

2. 中世

さ8～19cmを測り、長軸方向はN-17°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトであった。出土遺物には須恵器2点、瓦片約100点がみられ、須恵器2点(365・366)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.110 - 365・366)

365・366は杯で、いずれも体部は底部より屈曲して、外上方に真直ぐ伸びる。365は約1/8が残存し、口径11.2cm、器高2.9cm、底径7.9cmを測る。器面には回転ナデ調整を施すが、内面は摩耗するため不明瞭である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも灰白色を呈する。366は約1/6が残存し、口径14.9cm、器高3.6cm、底径8.2cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加え、底部外面にはナデ調整を施す。口縁部の内外面には煤が付着する。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰白色または黒色を呈する。

SX-202

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する遺構である。長辺6.39m、短辺4.27m、深さ8～15cmを測り、長軸方向はN-15°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、マンガンと3～5cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師器片68点、須恵器片42点、東播系須恵器1点、土師質土器5点がみられ、東播系須恵器(367)、土師質土器5点(368～372)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器(Fig.110 - 367)

367は片口鉢で、口縁部の約1/8が残存し、口径24.1cmを測る。器壁が薄く、体部は外上方に真直ぐ伸び、口縁部は肥厚して上下に拡張する。器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや粗く、焼成は良く、色調は内外面とも紫灰色を呈する。

土師質土器(Fig.110 - 368～372)

368～372は小皿である。368はほぼ完存し、口径7.0cm、器高1.5cm、底径5.4cmを測る。口縁部は短

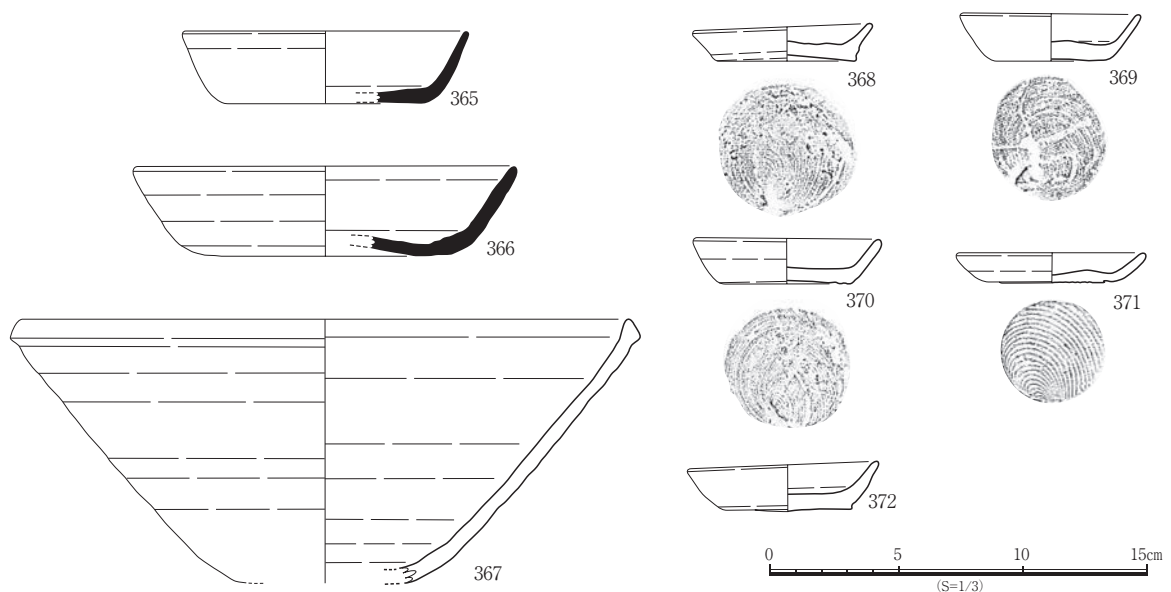


Fig.110 SX - 201・202出土遺物実測図

く外上方に伸びる。器面は摩耗するため調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。369は約2/3が残存し、口径7.0cm、器高1.9cm、底径4.6cmを測る。器高が高く、口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも浅黄橙色または橙色を呈する。370はほぼ完存し、口径7.2cm、器高1.9cm、底径5.0cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面にぶい橙色、外面が灰黄褐色を呈する。371は底部が完存し、口径7.3cm、器高1.2cm、底径4.0cmを測る。器高が低く、口縁部はやや内湾する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は精良で、焼成は良く、色調は内外面ともぶい橙色を呈する。372はほぼ完存し、口径7.4cm、器高2.0cm、底径5.0cmを測る。底部の器壁が厚く、口縁部は内湾して立ち上がる。器面は摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともぶい褐色を呈する。

SX-203 (Fig.111)

調査区東部で検出した不整楕円形を呈する遺構である。中世遺物包含層5(第IV-7)に伴う。長径4.58m、短径1.75m、深さ3~23cmを測り、長軸方向は方眼北を示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色細粒砂で、炭化物を非常に多く含む部分が見られた。出土遺物には東播系須恵器片1点、土師質土器片9点が見られたが、復元図示できるものはなかった。

SX-204

調査区東部で検出した遺構で、中世遺物包含層3(第IV-2)に伴う。楕円形を呈し、長径2.92m、短径1.28mの範囲に焼土が広がっていた。明確な掘方は確認できず、焼土には炭化物が含まれていたが、出土遺物は皆無であった。

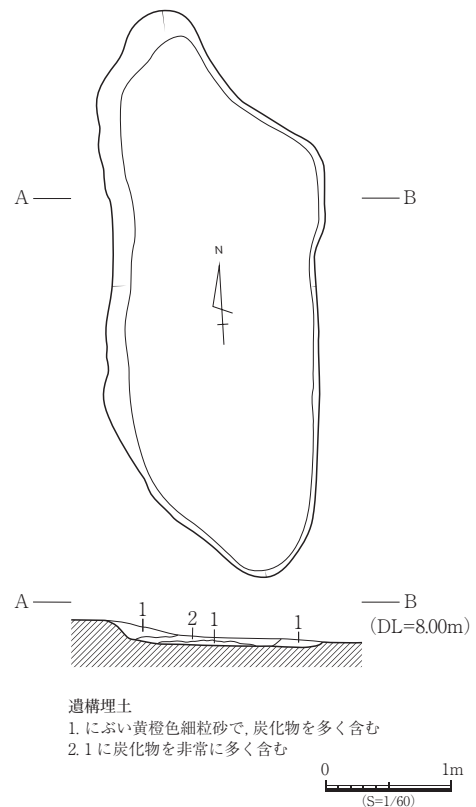


Fig.111 SX-203

3. 近世以降

18~19世紀を中心とする遺構を検出した。この時期の遺構は北西部に特に多く、溝跡と大型の土坑に囲まれた屋敷跡とみられる。また、大型の土坑は水利施設とみられるほか、炉跡も確認しており、生産機能を有する屋敷跡と考えられる。

(1) 掘立柱建物跡

SB-301 (Fig.112)

調査区北西部で確認した梁間1間(2.77m)、桁行3間(5.01m)の南北棟建物で、北側は調査区外に続く。棟方向はN-1°-Eである。柱間寸法は、梁間(東西)が2.77m、桁行(南北)が1.67mである。柱穴は径0.58

3. 近世以降

～0.79mの円形または楕円形で、柱径は15～23cmとみられる。埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点、瓦片15点がみられ、土師質土器1点(373)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.116 - 373)

373は杯で、約1/2が残存し、口径10.5cm、器高3.2cm、底径5.6cmを測る。体部は外上方に真直ぐ伸び、口縁端部を細く仕上げる。器面は摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

SB - 302 (Fig.113)

調査区西端部で確認した梁間1間(2.98m)、桁行2間(3.60m)の南北棟建物で、棟方向はN-11°-Eである。柱間寸法は、梁間(東西)が2.98m、桁行(南北)が1.80mである。柱穴は径0.37～0.67mの円形または楕円形で、柱径は約23cmとみられる。埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には白磁片1点、瓦片8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB - 303 (Fig.114)

SB - 302の北東で確認した梁間1間(2.78m)、桁行3間(6.40m)の南北棟建物で、棟方向はN-3°-Eである。SB - 304と重なる。柱間寸法は、梁間(東西)が2.78m、桁行(南北)が1.94m、2.18m、2.28mである。柱穴は径0.54～0.81mの円形または隅丸方形で、柱径は21～28cmとみられる。埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片4点、土師質土器片18点、瓦質土器片1点、青磁片1点、瓦片69点、近世陶器片2点、近世磁器片1点、土製品1点がみられ、土製品(374)が図示できた。

出土遺物

土製品(Fig.116 - 374)

374は管状土錘で、紡錘形を呈する。一部が剥離し、全長4.6cm、全幅2.3cm、孔径0.8cm、重量21.3gを測る。器面には全面にナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良く須恵質で、色調は灰色を呈する。

SB - 304 (Fig.115)

SB - 303の東側で確認した梁間1間(3.16m)、桁行4間(7.67m)の身舎の南側に下屋が付く、梁間2間(4.51m)、桁行4間(7.67m)の東西棟建物で、棟方向はN-83°-Wである。SB - 303と重なる。柱間寸法は、梁間(南北)が3.16m、桁行(東西)が1.89～1.98mで、下屋の出は1.35mである。柱穴は径0.44～0.87mの円形または楕円形で、柱径は20～26cmとみられる。埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。

出土遺物には土師器片2点、須恵器片1点、土師質土器片20点、瓦質土器片1点、青磁片1点、瓦片60点、近世陶器片4点、近世磁器片2点、土製品1点、石製品1点がみられ、土製品(375)、石製品(376)が図示できた。

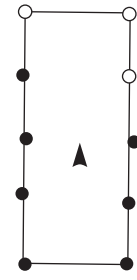


Fig.112 SB - 301

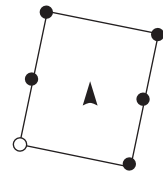


Fig.113 SB - 302

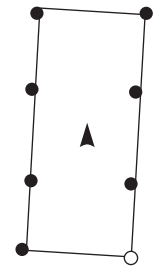


Fig.114 SB - 303

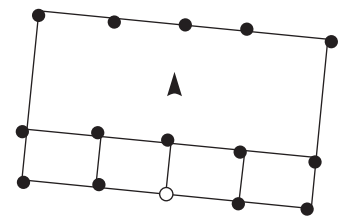
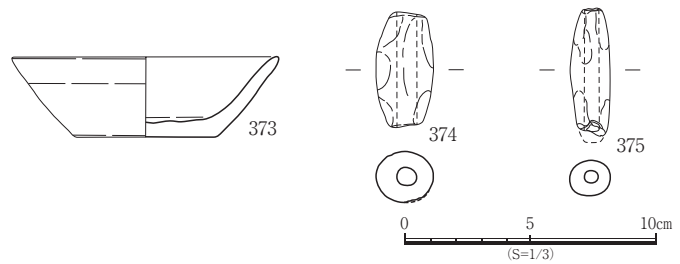


Fig.115 SB - 304

出土遺物

土製品 (Fig.116 - 375)

375 は管状土錘で、紡錘形を呈する。一部を欠損し、残存長 5.0 cm, 全幅 1.6 cm, 孔径 0.5 cm, 重量 9.3 g を測る。器面には全面にナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は浅黄橙色を呈する。



石製品 (Fig.116 - 376)

376 は石臼の上臼である。ほぼ完存し、直径 31.4 cm, 全厚 9.8 cm を測る。上面は中央を窪ませ、径 3.8 cm の孔が貫通する。下面には 5~7 本単位の斜行する播り目が 8 箇所みられ、中央には径 3.5 cm の支柱穴を穿つ。また、側面にも径 2.9 cm の孔がみられる。石材は花崗岩である。

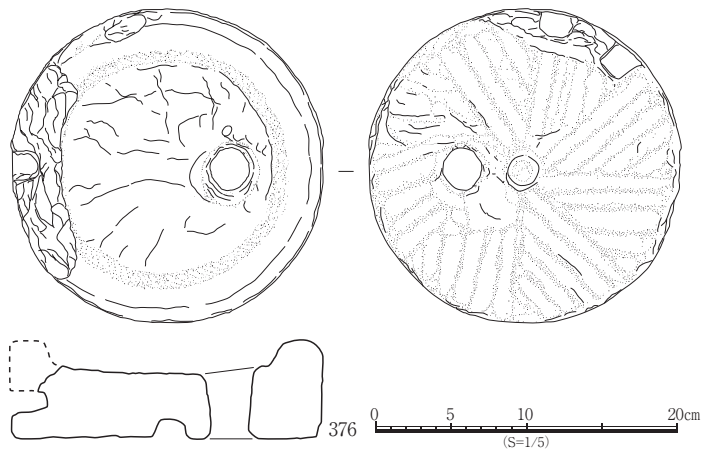


Fig.116 SB - 301・303・304 出土遺物実測図

SB - 305 (Fig.117)

SB - 304 の南側で確認した梁間 1 間 (2.80m), 桁行 3 間 (5.01m) の東西棟建物で、棟方向は N - 89° - E である。柱間寸法は、梁間 (南北) が 2.80m, 桁行 (東西) が 1.64 ~ 1.73m である。柱穴は径 0.26 ~ 0.56m の円形または楕円形である。埋土は灰白色シルトで、マンガン を非常に多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

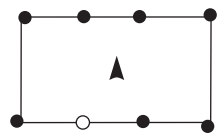


Fig.117 SB - 305

SB - 306 (Fig.118)

調査区中央部で確認した梁間 1 間 (3.55m), 桁行 3 間 (5.91m) の東西棟建物で、棟方向は N - 84° - W である。柱間寸法は、梁間 (南北) が 3.55m, 桁行 (東西) が 1.97m である。柱穴は径 31 ~ 49 cm の円形または楕円形である。埋土は灰白色シルトまたはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物は土師器片 11 点, 須恵器片 2 点, 瓦片 7 点, 鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

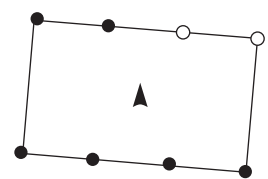


Fig.118 SB - 306

SB - 307 (Fig.119)

調査区中央部で確認した梁間 1 間 (3.56m), 桁行 2 間 (5.16m) の南北棟建物で、棟方向は N - 1° - E である。柱間寸法は、梁間 (東西) が 3.56m, 桁行 (南北) が 2.58m である。柱穴は径 0.25 ~ 0.65m の円形または隅丸方形である。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物は須恵器片 2 点, 瓦器片 7 点, 土師質土器片 7 点, 瓦片 1 点, 近世陶器片 2 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

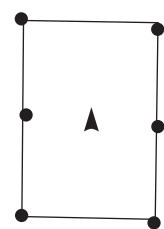


Fig.119 SB - 307

3. 近世以降

Table.6 近世掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規模				面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
	梁間 × 桁行	梁間(m)×桁行(m)	柱間寸法				
			梁間(m)	桁行(m)			
SB-301	1×(3)	2.77×(5.01)	2.77	1.67	(13.88)	N-1°-E	
SB-302	1×2	2.98×3.60	2.98	1.80	10.73	N-11°-E	
SB-303	1×3	2.78×6.40	2.78	1.94・2.18・2.28	17.79	N-3°-E	
SB-304	2×4	4.51×7.67	3.16	1.89~1.98	34.59	N-83°-W	下屋
SB-305	1×3	2.80×5.01	2.80	1.64~1.73	14.03	N-89°-E	
SB-306	1×3	3.55×5.91	3.55	1.97	20.98	N-84°-W	
SB-307	1×2	3.56×5.16	3.56	2.58	18.40	N-1°-E	

(2) 塀・柵列跡

SA-301

SB-304の北側で確認した東西塀(N-80°-W)で、SA-302と重なる。5間分(10.92m)を検出し、柱間は2.13~2.22mである。柱穴は径0.39~0.57mの円形または楕円形で、柱径は24~30cmとみられる。埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片3点、瓦片24点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SA-302

SB-304の北側で確認した東西塀(N-87°-W)で、SA-301と重なる。5間分(8.47m)を検出し、柱間は1.60~1.79m、柱穴は径29~39cmの円形または楕円形である。埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片1点、土師質土器片8点、瓦片13点、鉄滓がみられ、須恵器1点(377)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.120-377)

377は甕で、口縁部の約1/6が残存し、口径17.2cmを測る。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は若干外反して端部は肥厚させる。口縁部には回転ナデ調整を施し、頸部外面には平行タタキ、内面にはナデ調整を行う。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

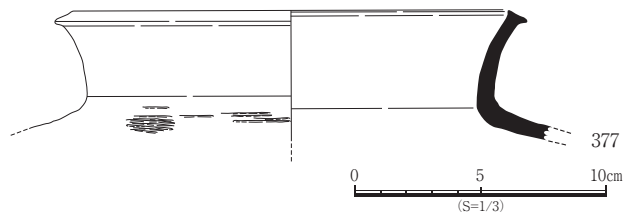


Fig.120 SA-302出土遺物実測図

SA-303

SA-302の南側で確認した東西塀(N-86°-E)で、SB-303・304と重なる。4間分(7.76m)を検出し、柱間は1.94m、柱穴は径0.48~0.57mの円形または隅丸方形で、柱径は14~25cmとみられる。埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物は須恵器片1点、土師質土器片2点、瓦片3点、近世陶器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

Table.7 近世堀・柵列跡計測表

遺構番号	規模			方向 (NはGN)	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA-301	6	10.92	2.13~2.22	N-80°-W	
SA-302	6	8.47	1.60~1.79	N-87°-W	
SA-303	5	7.76	1.94	N-86°-E	
SA-304	4	5.28	1.76	N-6°-E	
SA-305	6	4.78	0.88~0.98	N-84°-W	
SA-306	5	7.11	1.63~2.08	N-8°-E	

SA-304

SB-304の東側で確認した南北堀(N-6°-E)で、SA-301・302と重なる。3間分(5.28m)を検出し、柱間は1.76m、柱穴は径0.48~0.60mの円形または楕円形で、柱径は15~22cmとみられる。埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、瓦片11点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SA-305

調査区南部で確認した東西堀(N-84°-W)である。5間分(4.78m)を検出し、柱間は0.88~0.98m、柱穴は径21~38cmの円形または楕円形で、柱径は約18cmとみられる。埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物は瓦片1点がみられたが、復元図示できなかつた。

SA-306

調査区中央部で確認した南北堀(N-8°-E)である。4間分(7.11m)を検出し、柱間は1.63~2.08m、柱穴は径18~35cmの円形または楕円形である。埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

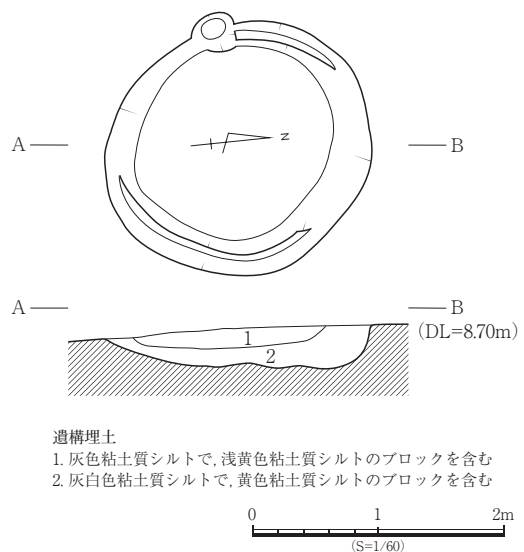
(3) 土坑

SK-301

調査区北西部で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、西側は調査区外へ続く。長径2.08m、短径1.37m、深さ29cmを検出し、長軸方向はN-83°-Wを示す。断面は方形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、瓦片23点、砥石片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-302 (Fig.121)

SK-301の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径2.12m、短径1.87m、深さ43cmを測り、長軸方向はN-63°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰色粘土質シルトで、浅黄色粘土



遺構埋土
1. 灰色粘土質シルトで、浅黄色粘土質シルトのブロックを含む
2. 灰白色粘土質シルトで、黄色粘土質シルトのブロックを含む

Fig.121 SK-302

3. 近世以降

質シルトのブロックを含み、下層が灰白色粘土質シルトで黄色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には瓦片12点、近世陶器片1点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-303

SK-302の南側で検出した正方形を呈する土坑で、一辺1.81m、深さ19cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片8点、近世陶器片1点、近世磁器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-304 (Fig.122)

SK-303の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径3.89m、短径3.81m、深さ1.18mを測り、長軸方向は方眼北を示す。断面は舟底形を呈し、埋土は12層に分かれる。中央には径0.70m、深さ1.54mを測る円形のピットがみられ、このピットの周りには下層に砂質礫または礫を含む土、その上にシルトまたは砂質シルトを重ねている。また、南部と北西部には階段状の段を有する。出土遺物には須恵器片4点、土師質土器片12点、白磁片1点、瓦片22点、近世陶器片9点、近世磁器片2点、鉄釘片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

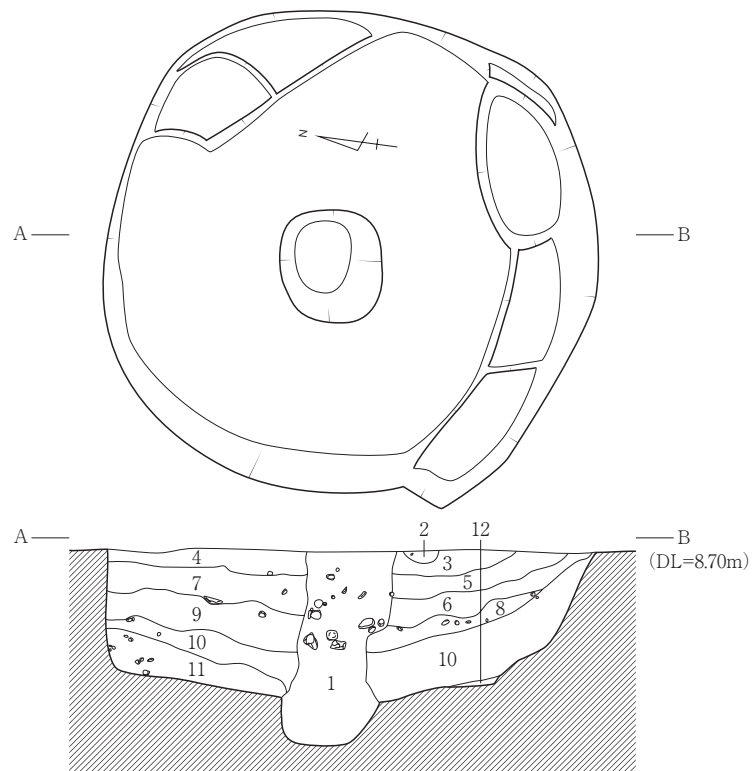
SK-305

SK-304の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺0.87m、短辺0.81m、深さ41cmを測り、長軸方向は方眼東を示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器1点、瓦片1点がみられ、土師質土器(378)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.127-378)

378は小皿で、約1/3が残存し、口径8.2cm、器高1.4cm、底径5.6cmを測る。口径が大きく、口縁部は短く内湾する。器面には回転ナデ調



遺構埋土

1. におい黄褐色シルトで、灰白色粘土質シルトのブロックと10cm大の礫を含む
2. におい黄褐色シルトで、灰白色粘土質シルトのブロックを含む
3. 灰白色砂質シルトで、におい黄褐色シルトのブロックを含む
4. 黄褐色砂質シルト
5. におい黄褐色シルトで、灰白色砂質シルトのブロックを含む
6. におい黄褐色シルトで、灰白色粘土質シルトのブロックと10cm大の礫を含む
7. 褐灰色砂質シルトで、黄褐色砂質シルトのブロックを含む
8. におい黄褐色シルトで、灰白色砂質シルトのブロックと3cm大の礫を含む
9. 浅黄色砂質シルトで、褐灰色砂質シルトのブロックを含む
10. におい黄褐色シルトで、3cm大の礫を含む
11. におい黄褐色砂質礫

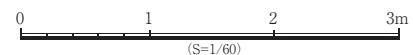


Fig.122 SK-304

整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

SK-306

SK-305の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径0.78m、短径48cm、深さ12cmを測り、長軸方向はN-32°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片12点、瓦片5点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-307

SK-306の東側で検出した不整楕円形を呈する土坑である。長径3.00m、短径0.99m、深さ30cmを測り、長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、浅黄色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、近世陶器片1点、近世磁器片1点のみみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-308

SK-307の東側で検出した長方形を呈する土坑である。長辺1.30m、短辺0.81m、深さ11cmを測り、長軸方向はN-10°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点、瓦片15点のみみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-309

SK-306の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.08m、短径0.64m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-32°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点、瓦質土器片1点、瓦片20点、近世陶器片1点のみみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-310

SK-309の東側で検出した不整楕円形を呈する土坑で、SK-312を切る。長径0.90m、短径0.78m、深さ0.50mを測り、長軸方向はN-45°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片2点、瓦片6点、近世陶器片1点、近世磁器片2点のみみられ、近世磁器1点(379)が図示できた。

出土遺物

近世磁器(Fig.127-379)

379は丸碗で、約1/4が残存し、口径10.0cmを測る。やや腰が張る形態を呈し、口縁部はわずかに内湾する。全面に透明釉を薄く施し、外面には花文と2条の圏線がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも明オリーブ灰色を呈する。

SK-311

SK-310の南側で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-312に切られる。長辺1.40m、短辺0.97m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-80°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片50点、瓦質

3. 近世以降

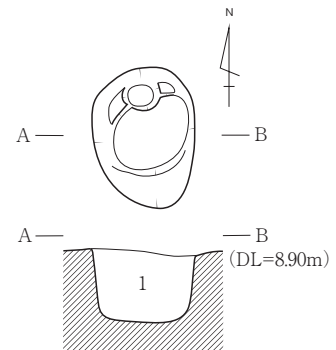
土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-312

SK-311の東側で検出した溝状を呈する土坑で、SK-311を切る。長さ3.57m、幅0.89m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-10°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-313 (Fig.123)

SK-312の東側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.12m、短径0.81m、深さ0.57mを測り、長軸方向はN-10°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、明黄褐色シルトのブロックと炭化物、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師器片2点、土師質土器片11点、青磁片1点、瓦片25点、近世陶器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。



遺構埋土
1. 灰白色シルトで、明黄褐色シルトのブロックと炭化物、マンガンを含む
0 1m
(S=1/60)

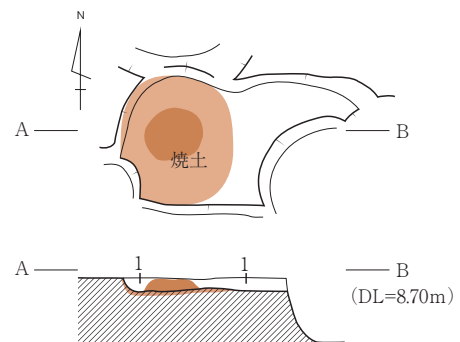
Fig.123 SK-313

SK-314 (Fig.124)

SK-313の東側で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。SK-315に切られ、長さ1.35m、幅0.71m、深さ18cmを検出し、長軸方向は方眼東を示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックと焼土、マンガンを含み、西側の中央部と壁面には焼土がみられた。出土遺物には土師質土器片3点、瓦片10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-315

SK-314の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-314を切る。長辺1.15m、短辺0.94m、深さ0.55mを測り、長軸方向はN-78°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックと炭化物、マンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片4点、白磁1点、青磁片2点、近世陶器片9点、近世磁器片2点がみられ、白磁(380)と青磁1点(381)が図示できた。



遺構埋土
1. 灰白色シルトで、黄色シルトのブロックと焼土、マンガンを含む
0 1m
(S=1/40)

Fig.124 SK-314

出土遺物

白磁 (Fig.127-380)

380は端反皿で、口縁部の約1/6が残存し、口径13.8cmを測る。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。器面には白色釉を約0.5mmの厚さに施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

青磁 (Fig.127-381)

381は龍泉窯系の碗で、口縁部の一部が残存する。外面には細い線描きの蓮弁文がみられ、器面には黄緑色の釉を薄く施す。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面ともいぶ黄色を呈する。

SK-316 (Fig.125)

SK-312の南側で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。SD-303に切られる。長さ1.23m、幅0.68m、深さ30cmを測り、長軸方向は方眼北より垂直方向を示す。北側には一辺24cmを測る方形の煙道とみられるピットが付く。一部天井部が残っており、断面は袋状を呈し、埋土は灰白色シルトで、焼土とマンガンを含み、西側の床面と壁面および天井には焼土がみられた。出土遺物は皆無であった。

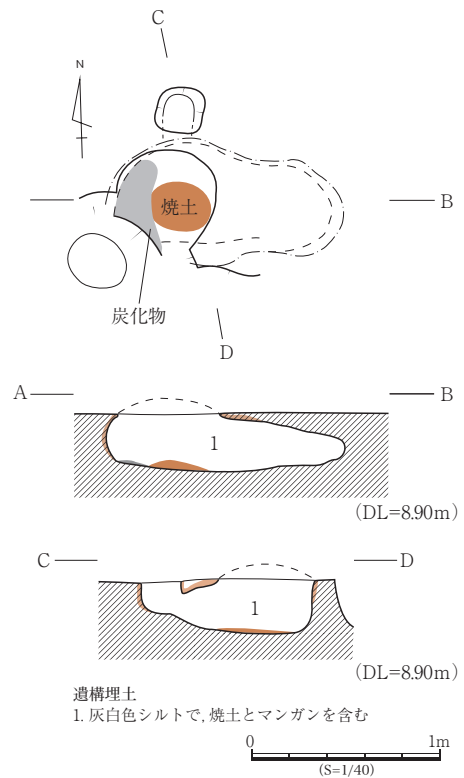


Fig.125 SK-316

SK-317 (Fig.126)

SK-316の南側で検出しただるま形を呈するとみられる土坑で、炉跡とみられる。SD-301・303に切られ、長さ0.98m、幅0.84m、深さ22cmを測り、長軸方向はN-9°-Wを示す。一部天井部が残っており、断面は袋状を呈し、埋土は灰白色シルトで、焼土とマンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

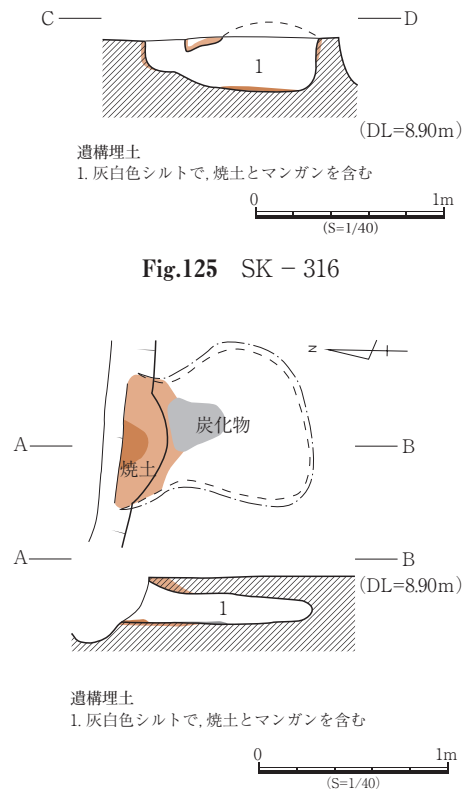


Fig.126 SK-317

SK-318

SK-316の東側で検出した円形を呈する土坑で、径0.71m、深さ41cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片16点、白磁片1点、瓦片4点、近世磁器片1点、鉄滓がみられ、土師質土器1点(382)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.127-382)

382は小皿で、約2/3が残存し、口径6.8cm、器高1.6cm、底径5.0cmを測る。器壁が厚く、口縁部は短く上方に立ち上がる。内面には布目が残る、口縁部はヨコナデ、その他はナデ調整を施し、底部外面には指頭圧痕と板状圧痕が残る。また、胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面がにぶい橙色、外面が褐灰色またはにぶい黄橙色を呈する。

SK-319

SK-337の北側で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、SK-337に切られる。長径0.60m、短径0.50m、深さ13cmを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、瓦質土器片1点、瓦片30点がみられ、土師質土器1点(383)が図示できた。

3. 近世以降

出土遺物

土師質土器 (Fig.127 - 383)

383は杯で、底部の約1/4が残存し、底径6.2cmを測る。器壁が薄く、体部は底部より屈曲し、やや内湾する。ロクロ水挽成形で、器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は精良で、焼成は良く、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

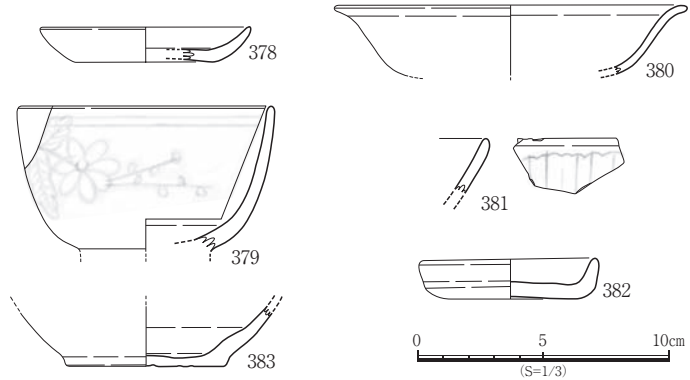


Fig.127 SK - 305・310・315・318・319出土遺物実測図

SK - 320

SK - 337の北側で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。長さ0.67m、幅39cm、深さ3cmを測り、長軸方向はN - 85° - Eを示す。断面は皿状を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、焼土を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK - 321

調査区北部で検出した不整形を呈するとみられる土坑で、SD - 313を切る。一部攪乱を受け、径1.92m、深さ32cmを測り、底には幅約11cm、深さ2cmの溝が輪状に巡る。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師器片1点、土師質土器片10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 322

調査区西端で検出した円形を呈する土坑で、SK - 324を切る。径2.37m、深さ21cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には瓦片8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 323

調査区西端で検出した円形を呈するとみられる土坑で、SK - 324に切られる。西側は調査区外へ続き、径2.04m、深さ19cmを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には青磁片1点、瓦片2点、近世磁器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 324 (Fig.128)

SK - 323の東側で検出した楕円形を呈する土坑で、SK - 323を切る。長径2.08m、短径1.85m、深さ38cmを測り、長軸方向は方眼北を示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰白色粘土質シルト、下層が灰白色シルトで、細粒砂を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片1点、瓦片6点、近世陶器片1点、

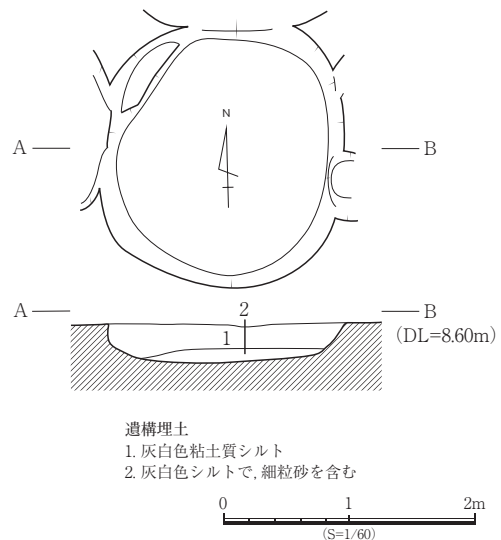


Fig.128 SK - 324

近世磁器片2点, 鉄滓がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 325 (Fig.129)

SK - 324 の東側で検出した楕円形を呈する土坑で, SK - 326 を切る。長径2.50m, 短径2.32m, 深さ30cmを測り, 底には幅約15cm, 深さ5cmの溝が輪状に巡る。長軸方向はN - 72° - Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれ, 上層が灰白色シルトで黄色粘土質シルトのブロックとマンガンを含み, 下層が灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師器片2点, 須恵器片3点, 土師質土器片4点, 白磁片1点, 青磁片1点, 近世陶器片1点, 近世磁器片1点, 瓦片33点, 鉄釘片4点がみられ, 上層より出土した鉄釘3点(384~386)が図示できた。

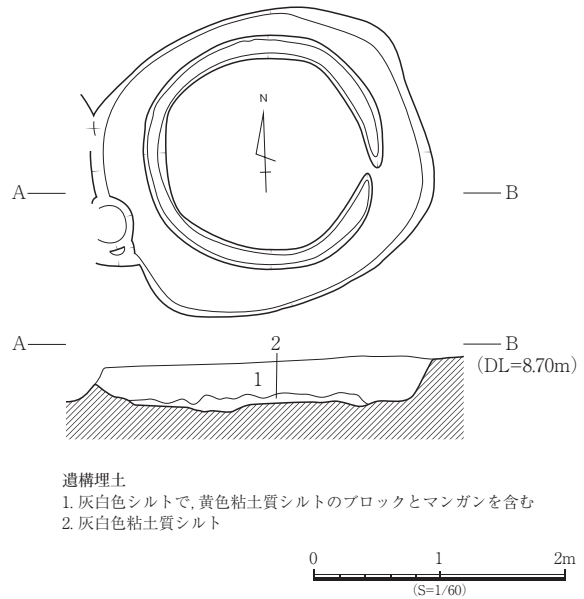


Fig.129 SK - 325

出土遺物

鉄製品 (Fig.130 - 384~386)

384~386は釘で, いずれも断面は矩形を呈し, 先端を細く加工する。384は頂部を欠損し, 残存長6.5cm, 全幅0.8cmを測る。湾曲しており, 全面に錆化がみられる。385は両端を欠損し, 残存長8.5cmを測る。全面に錆化がみられる。386は頂部を欠損し, 残存長7.0cm, 全幅0.7cmを測る。湾曲しており, 全面に錆化がみられる。

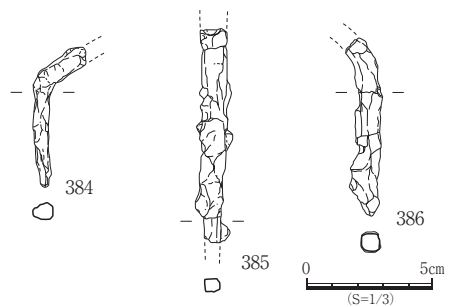


Fig.130 SK - 325 出土遺物実測図

SK - 326

SK - 325 の東側で検出した不整楕円形を呈する土坑で, SK - 325 に切られる。長径2.45m, 短径1.85m, 深さ34cmを測り, 長軸方向はN - 15° - Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰白色シルトで, 黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片2点, 瓦片21点, 近世陶器片10点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK - 327 (Fig.131)

SK - 324 の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.91m, 短径1.73m, 深さ20cmを測り, 底には壁面に沿って幅約30cm, 深さ約15cmの溝が巡り, 中央には長径1.05m, 短径0.88m, 深さ4cmを測る楕円形の掘り

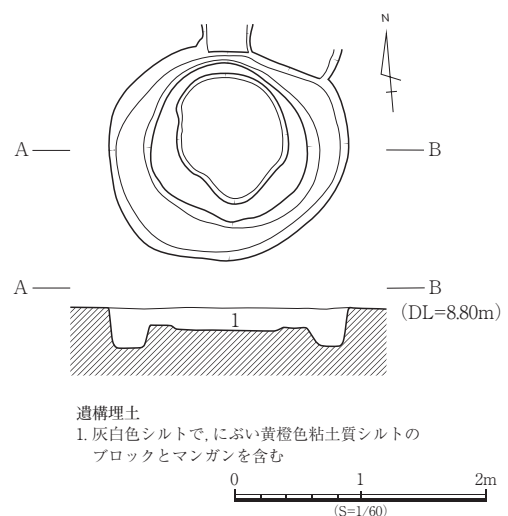


Fig.131 SK - 327

3. 近世以降

込みがみられる。長軸方向は方眼東を示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、にぶい黄橙色粘土質シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片 13 点、瓦質土器片 1 点、瀬戸・美濃系陶器片 1 点、瓦片 3 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 328 (Fig.132)

SK - 327 の東側で検出した不整形を呈する土坑で、SD - 304・306 ~ 308 に切られる。長辺 6.94m、短辺 4.12m、深さ 1.00m を測り、長軸方向は方眼東を示す。断面は逆台形を呈し、埋土は 3 層に分かれ、埋土 1 は中粒砂を多く含む灰黄褐色砂質シルト、埋土 2 は黄色粘土質シルトのブロックを含む灰色粘土質シルト、埋土 3 は細粒砂を含む灰色粘土

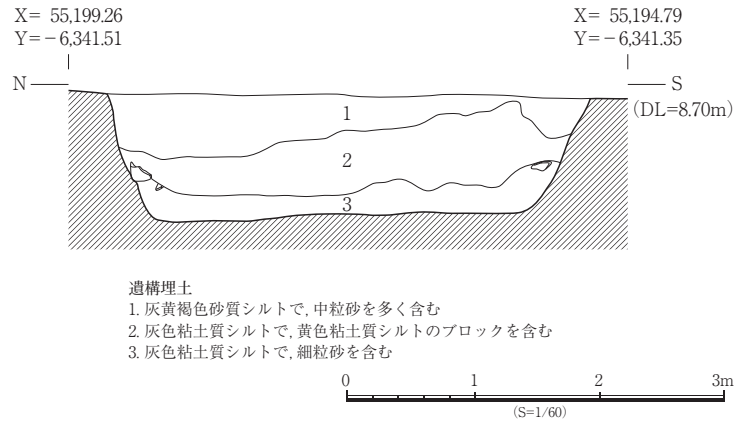


Fig.132 SK - 328

質シルトで、いずれも 5 cm 大の礫を含んでいた。出土遺物には須恵器片 5 点、土師質土器片 11 点、近世陶器片 17 点、近世磁器片 19 点、瓦片 68 点、砥石 1 点、鉄釘片 2 点、鉄滓がみられ、土師質土器 1 点 (387)、近世陶器 4 点 (388 ~ 391)、近世磁器 9 点 (392 ~ 400)、瓦 7 点 (401 ~ 407)、砥石 (408) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.133 - 387)

387 は焜炉で、底部の約 2/3 が残存し、底径 13.2cm を測る。平底で、体部は底部より屈曲し、上方に真直ぐ立ち上がる。調整は内底面がナデ調整、体部内面がナデ調整、体部外面がヘラナデ調整またはナデ調整で、外底面は未調整である。また、内面には鉄滓のようなものが付着する。胎土はやや密で礫を含み、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

近世陶器 (Fig.133 - 388 ~ 392)

388 ~ 390 は碗である。388 は半球形碗で、ほぼ完存し、口径 8.9cm、器高 5.8cm、底径 3.0cm を測る。底部には断面方形で、ハの字状に開く削り出し高台を有し、体部は大きく膨らむ。器面には高台付近まで透明釉を薄く施し、細かい貫入が入る。外面には緑色の花文と朱色の格子文の上絵付けがみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が淡黄色または褐灰色、外面が淡黄色を呈する。389 は約 1/3 が残存し、口径 12.7cm、器高 8.6cm、底径 4.3cm を測る。腰が張る形態を呈し、底部には直立する削り出し高台を有し、高台内の挟りは深い。器面には全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、砂が付着する。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも暗オリーブ色を呈する。390 は底部が完存し、底径 4.8cm を測る。腰が張る形態を呈し、底部には直立する削り出し高台を有し、高台内の挟りは深い。器面には全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面ともオリーブ黄色を呈する。

391 は壺または鉢とみられ、底部の約 1/2 が残存し、底径 14.0cm を測る。底部には太く直立する削り出し高台を有し、胴部は底部より緩やかに立ち上がる。調整は回転ナデ調整で、胴部下半に削りを

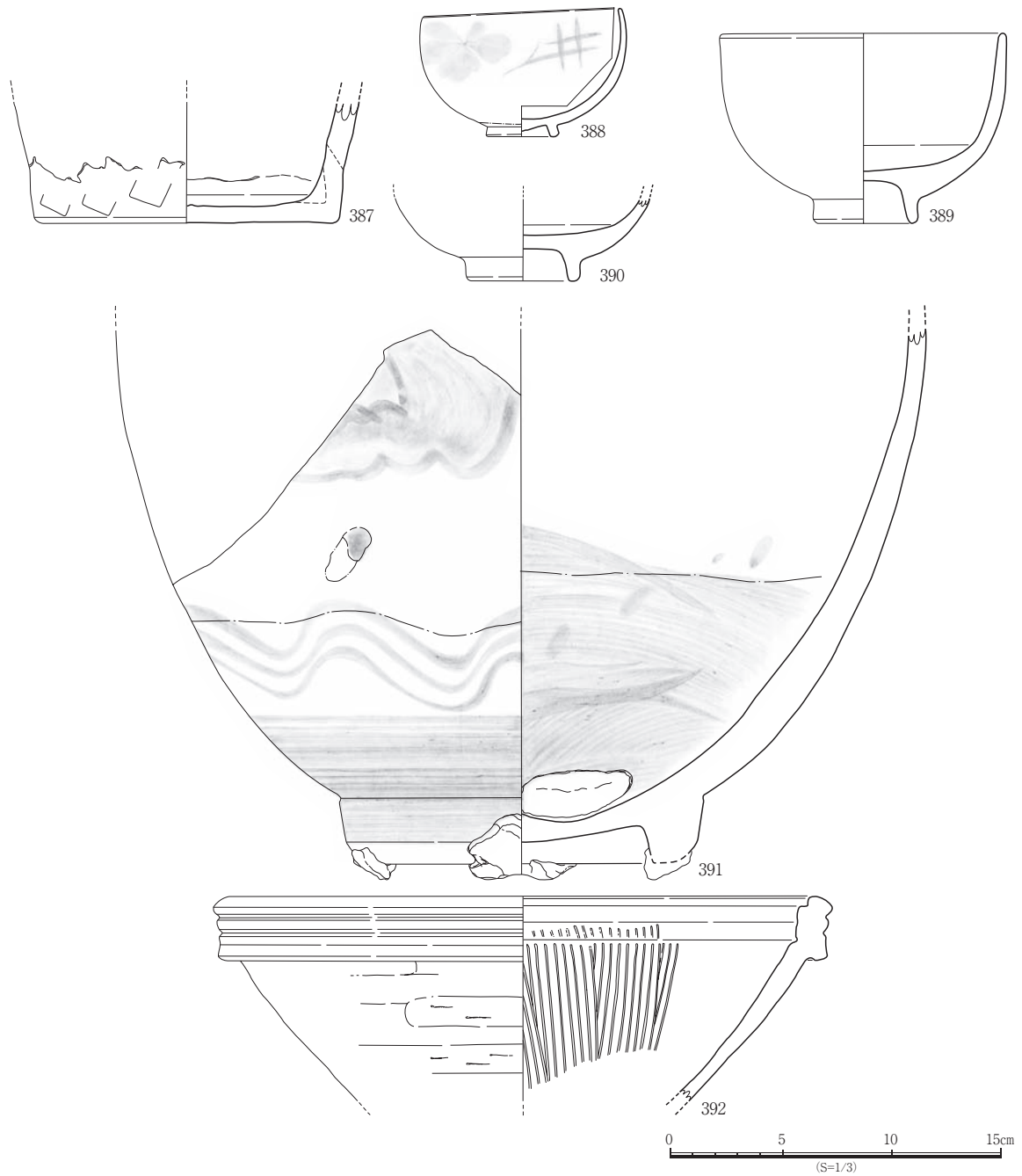


Fig.133 SK - 328 出土遺物実測図1

行う。内面は胴部上半に茶褐色の釉を薄く施し、下半は鉄釉をハケ塗りし、見込には砂目が3箇所みられる。外面は胴上部に白色釉を薄く施したのち鉄釉による文様、胴中程は露胎で白色釉による波状文、胴下部は鉄釉をハケ塗りする。畳付と高台内は露胎で、2箇所粘土塊が付着する。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が褐灰色またはにぶい黄褐色、外面が褐灰色またはにぶい黄橙色を呈する。

392は播鉢で、口縁部の約1/8が残存し、口径26.6cmを測る。体部はやや内湾し、口縁部は直立する外縁帯をなし、外面には凹線が2条めぐる。器面には回転ナデ調整を施し、内面には9本単位の播り目、外面には回転ヘラ削りを加える。胎土は密で砂粒を含み、焼成は良く、色調は内面が褐色または灰褐色、外面が褐色を呈する。

3. 近世以降

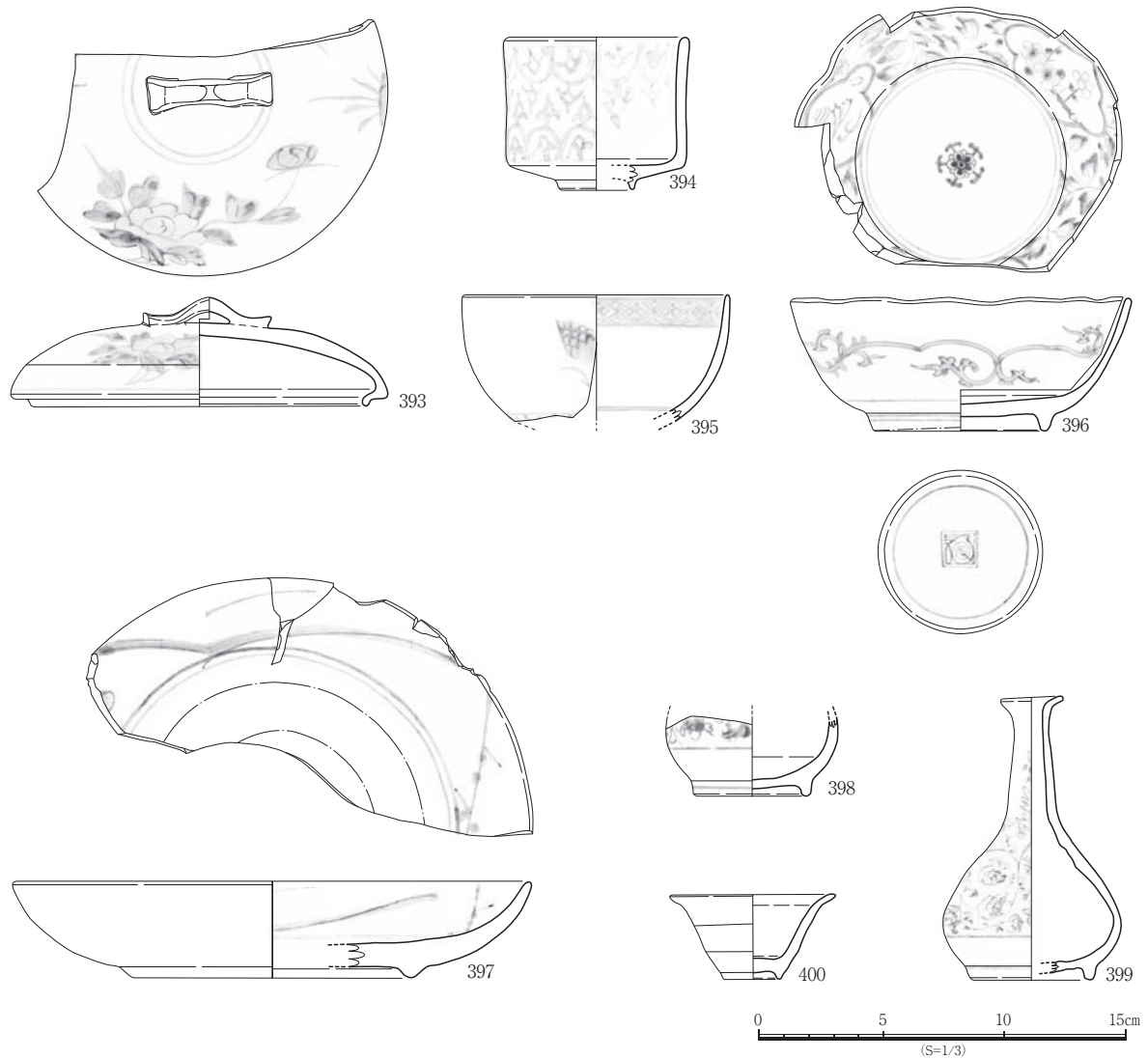


Fig.134 SK - 328 出土遺物実測図2

近世磁器 (Fig.134 - 393 ~ 400)

393は蓋で、約1/2が残存し、口径13.6cm、器高4.5cmを測る。天井部には幅1.3cmの板状のつまみを貼付し、天井から口縁にかけて緩やかに湾曲し、口縁は内側に水平に伸びたのち端部を下方につまみ、かえりとする。口縁端部を除き全面に透明釉を薄く施し、かえり部分は釉ハギを行う。外面には牡丹文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が灰白色、外面が灰白色または暗青灰色を呈する。

394・395は碗である。394は肥前系の筒形碗で、約1/4が残存し、口径7.2cm、器高6.3cm、底径2.9cmを測る。底部には断面三角形を呈する小さな削り出し高台を有し、体部は底部より屈曲して上方に真直ぐ立ち上がる。器面には透明釉を薄く施し、豊付は釉ハギを行う。内外面に文と圏線の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。395は肥前系の丸碗で、口縁部の約1/4が残存し、口径10.8cmを測る。器壁が薄く、体部は底部より緩やかに内湾し、口縁部を細く仕上げる。器面には透明釉を薄く施し、口縁部内面に四方襷文と圏線、外面には文様不明の染付がみ

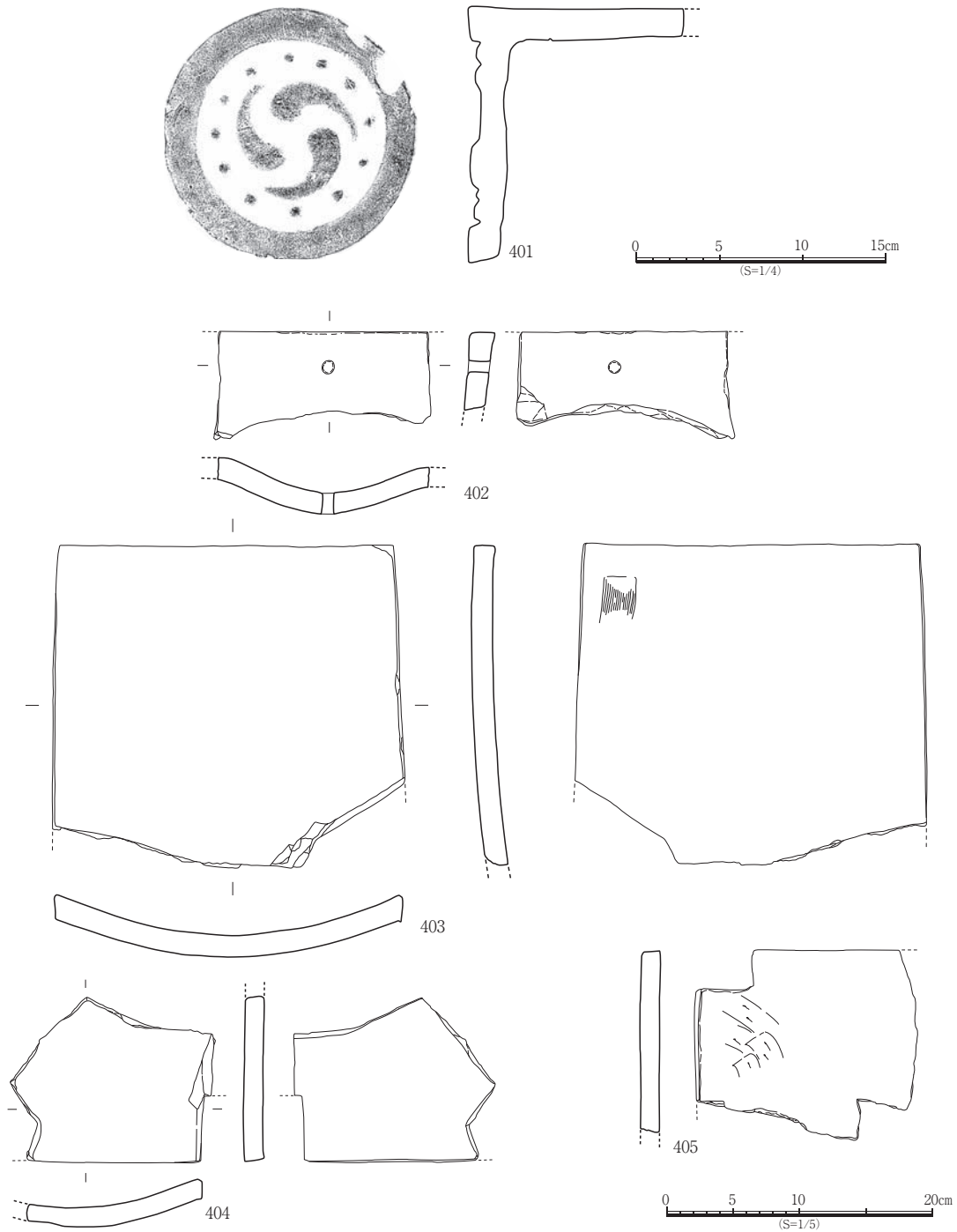


Fig.135 SK - 328 出土遺物実測図3

られる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

396・397は皿である。396は肥前系の輪花皿で、底部が完存し、口径13.6cm、器高5.5cm、底径7.0cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部は器壁が薄く、緩やかに内湾する。器面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内面には口縁部に唐草文と窓に梅、見込に手描きの五弁花、外面には唐草文の染付、高台内には二重方形枠に渦福の銘がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。397は約1/3が残存し、口径21.0cm、器高4.0cm、底径11.4

3. 近世以降

cmを測る。底部は器壁が厚く、断面三角形を呈する低い削り出し高台を有し、口縁部は緩やかに内湾する。器面には透明釉を薄く施し、見込は蛇ノ目釉ハギ、畳付は釉ハギを行い、畳付には砂が付着する。内面には草花文と圏線の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

398・399は瓶である。398は底部が残存し、底径4.4cmを測る。底部には直立する低い削り出し高台を有し、胴部は大きく膨らむ。外面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い砂が付着する。内面は露胎で、外面には圏線と草花文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面は灰白色、外面は明オリーブ灰色を呈する。399は約1/2が残存し、口径2.5cm、器高11.7cm、底径4.8cmを測る。底部には直立する低い削り出し高台を有し、胴部は大きく膨らみ、頸部は真直ぐ立ち上がり、口縁部は短く外反する。外面と口縁部内面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い砂が付着する。外面には圏線と唐草文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

400は猪口で、ほぼ完存し、口径6.6cm、器高3.5cm、底径2.3cmを測る。底部には断面三角形の小さな削り出し高台を有し、体部は外反する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

瓦 (Fig.135・136 - 401~407)

401は軒丸瓦で、直径15.5cm、残存長12.9cm、厚さ1.9cmを測る。瓦当はほぼ完存し、左巻きの三巴文と12個の珠文がみられ、キラ粉が付着する。凹面はコビキ痕が残り、凸面と瓦当の裏面はナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は暗灰色または灰白色を呈する。

402~405は平瓦である。402は一部が残存し、残存長8.1cmを測る。全面にナデ調整を施し、残存部

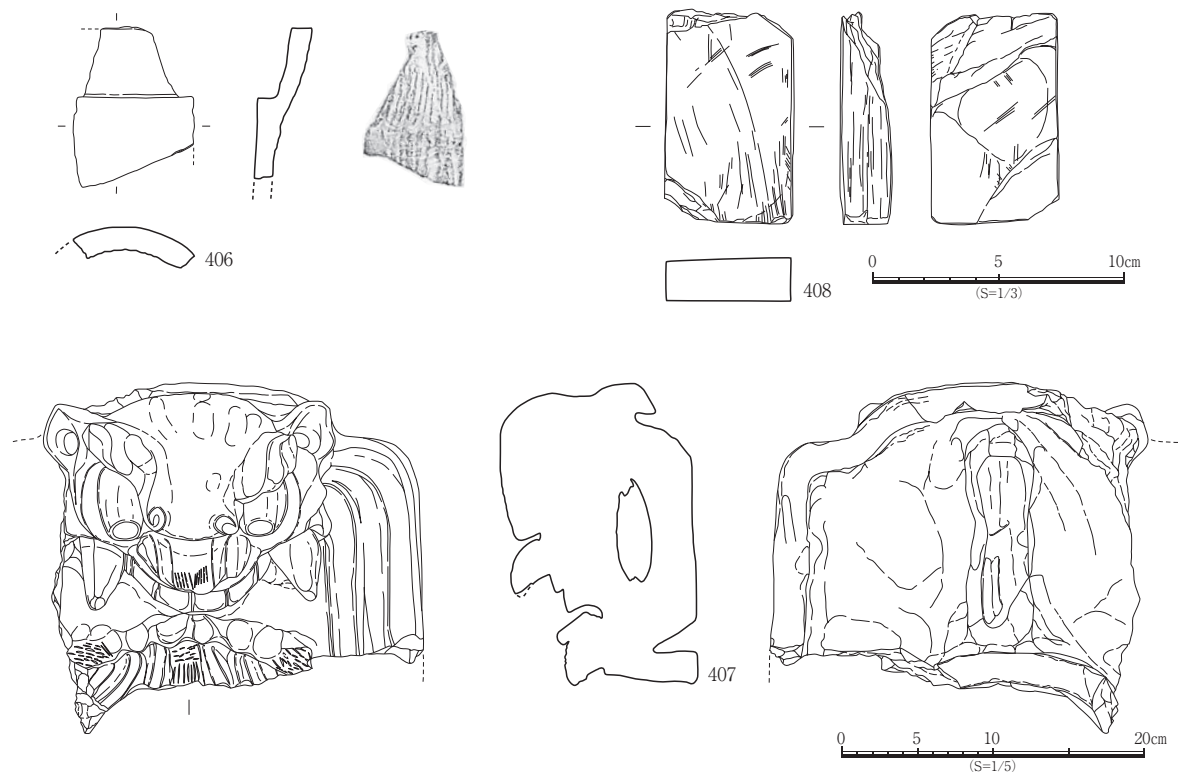


Fig.136 SK - 328 出土遺物実測図4

で1箇所に径1.0cmの釘穴がみられる。403は一部が残存し、残存長24.2cm、厚さ1.6cmを測る。調整はナデ調整で、凸面には一部板ナデ調整がみられる。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は暗灰色を呈する。404は隅切瓦で、一部が残存し、残存長12.5cmを測る。全面にナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は灰色を呈する。405も隅切瓦で、一部が残存し、残存長14.4cmを測る。側面は面取りを行い、調整はナデ調整で、凸面は一部削りを施す。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は凹面が暗灰色または灰白色、凸面はにぶい黄橙色または灰色を呈する。

406は丸瓦で、玉縁が残存し、残存長10.2cmを測る。凹面には布目圧痕が残り、凸面にはナデ調整を施す。

407は鬼瓦で、一部を欠損し、残存長23.1cmを測る。モチーフは獅子とみられ、目は柱状の粘土に径約1.5cmの孔を穿って表現し、目の内側には小さな角が付く。鼻は扁平で、毛の様なものが線刻で表現され、口は大きく横に開き、歯と牙がみられる。顎には髭が線刻と粘土の貼付によって表現され、耳は小さく外上方に伸び、顔の横にはたてがみが付く。全面にナデ調整を施し、背面には把手状のものを貼付する。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は表面が暗灰色または灰黄色、裏面が灰色または灰白色を呈する。

石製品(Fig.136 - 408)

408は砥石で、一部を欠損する。板状を呈し、全長8.6cm、全幅5.1cm、全厚1.8cm、重量115.6gを測る。2面に使用痕がみられ、3側面には加工痕が残る。石材は細粒花崗岩である。

SK - 329 (Fig.137)

SK - 326の北側で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。SK - 330に切られ、長さ1.03m、幅0.70m、深さ8cmを検出し、長軸方向はN - 89° - Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックと炭化物、焼土、マンガンを含み、床面には焼土がみられた。出土遺物は皆無であった。

SK - 330 (Fig.138)

SK - 329の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑で、炉跡とみられる。SK - 329・331を切る。長辺1.62m、短辺0.90m、深さ13cmを測り、長軸方向は方眼東を示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、炭化物を含み、西側の床面には炭化物の堆積がみられた。出土遺物には土師質土器片2点、瓦片15点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 331 (Fig.139)

SK - 330の東側で検出しただるま形を呈する土

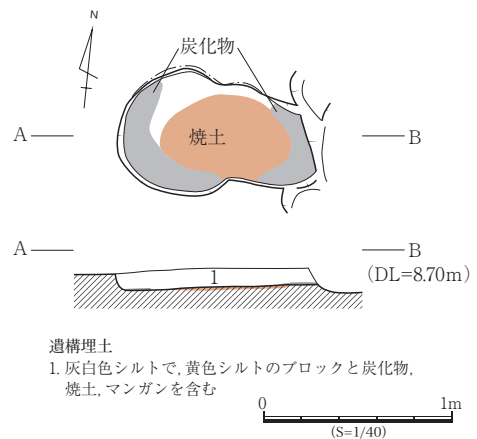


Fig.137 SK - 329

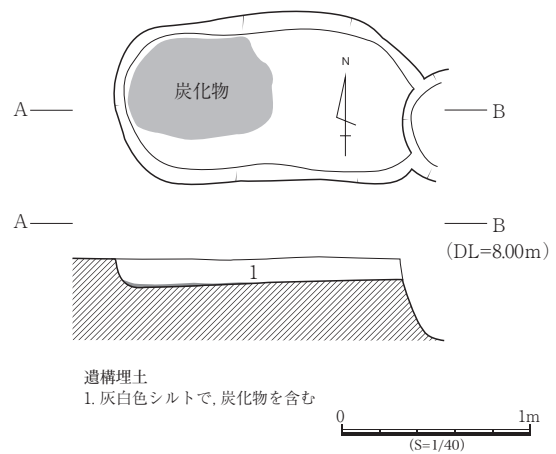


Fig.138 SK - 330

3. 近世以降

坑で、炉跡とみられる。SK - 330・332に切れ、長さ1.95m、幅0.76m、深さ15cmを検出し、長軸方向は方眼東を示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックと焼土、マンガンを含み、西側の床面には炭化物和焼土の堆積がみられた。出土遺物には青磁片1点、瓦片5点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

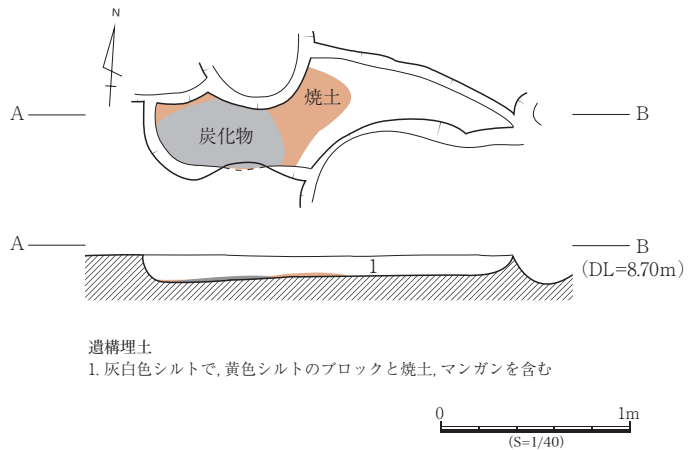


Fig.139 SK - 331

SK - 332 (Fig.140)

SK - 331の東側で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。SK - 331を切る。長さ2.08m、幅0.87m、深さ19cmを検出し、長軸方向はN - 85° - Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックと焼土、マンガンを含み、西側の床面には炭化物和焼土の堆積がみられた。出土遺物には瓦片1点がみられたが、復元図示できなかつた。

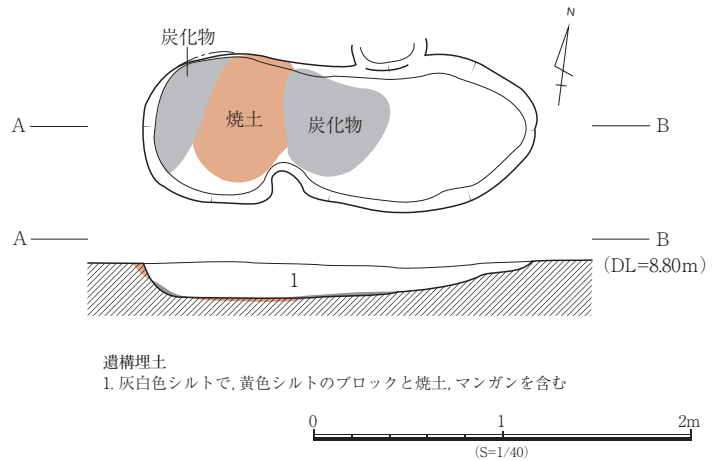
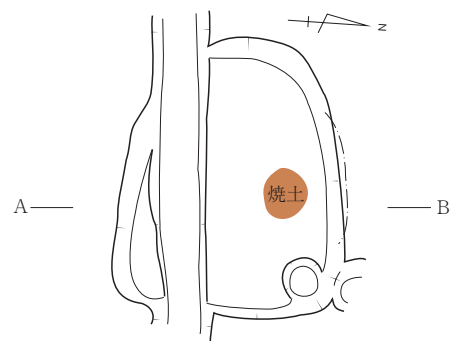


Fig.140 SK - 332

SK - 333

SK - 332の東側で検出した不整形を呈する土坑である。長さ1.70m、幅1.08m、深さ18cmを測り、長軸方向はN - 30° - Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点、白磁片1点、瓦片10点、土錘片1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。



SK - 334 (Fig.141)

SK - 333の南側で検出した隅丸方形を呈する土坑で、炉跡とみられる。SD - 306に切られる。長辺1.48m、短辺0.95m、深さ22cmを測り、長軸方向はN - 87° - Wを示す。断面は袋状を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックと焼土、マンガンを含み、西側の床面と壁面には焼土がみられた。出土遺物は皆無であった。

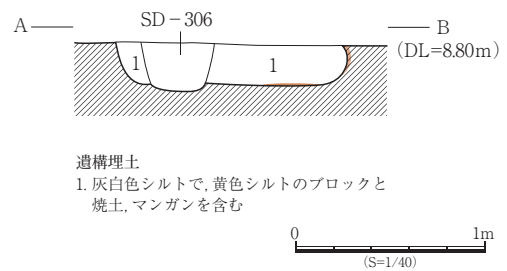


Fig.141 SK - 334

SK-335 (Fig.142)

SK-334の東側で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。SD-306に切られる。長さ0.95m、幅0.93m、深さ20cmを測り、長軸方向は方眼北を示す。断面は袋状を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックと焼土、マンガンを含み、西側の床面と壁面には焼土がみられた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

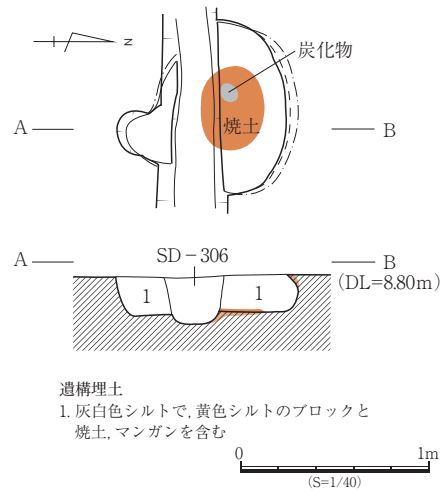


Fig.142 SK-335

SK-336

SD-307の北側で検出した楕円形を呈する土坑で炉跡とみられる。SD-307に切られる。長径0.53m、短径0.31m、深さ30cmを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンと炭化物、焼土を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、瓦片8点がみられたが復元図示できるものはなかった。

SK-337 (Fig.143)

SD-308の東端で検出したL字状を呈する土坑である。SD-301・308・314を切る。南北10.37m、東西10.10m、深さ0.87mを測り、長軸方向はN-2°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は4層に分かれ、埋土1は灰白色シルト質砂のブロックを多く含むにぶい黄橙色シルト質砂、埋土2はマンガンを含む黄灰色シルト質砂、埋土3は浅黄色シルト質砂のブロックとマンガンを含む灰白色シルト質砂、埋土4はマンガンを含む灰白色粘土質シルトであった。また、壁面には5~15cm大の石が積まれていた。出土遺物には土師器片2点、須恵器片15点、瓦器片2点、土師質土器片51点、瓦質土器片2点、瀬戸・美濃系陶器1点、青磁片4点、青花1点、近世陶器片34点、近世磁器片29点、瓦片87点、土製品1点、石製品1点、鉄製品7点、銅製品4点がみられ、埋土1より出土した瀬戸・美濃系陶器(409)、青花(410)、近世磁器4点(411~414)、鉄製品1点(415)、銅製品1点(416)、埋土3より出土した近世陶器1点(417)、瓦1点(418)、埋土4より出土した土製品(419)、鉄製品1点(420)が図示できた。

出土遺物

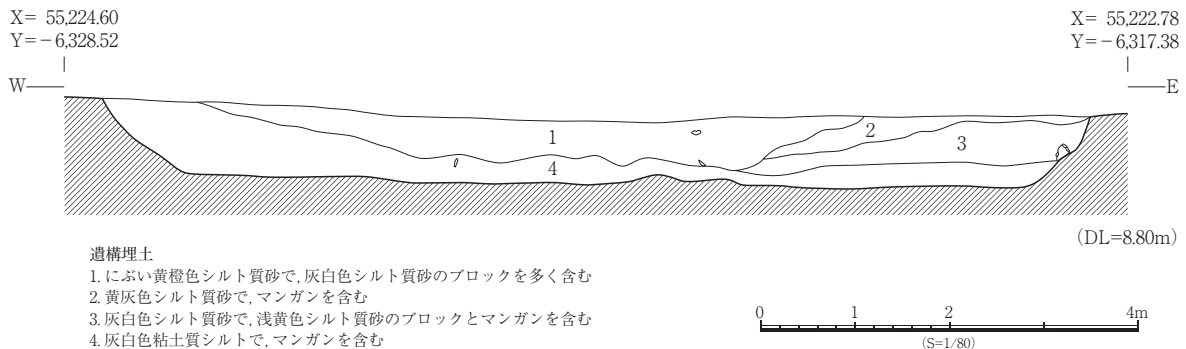


Fig.143 SK-337

3. 近世以降

瀬戸・美濃系陶器(Fig.144 - 409) - 埋土1出土遺物

409は折縁皿で、約1/5が残存し、口径10.2cm、器高2.0cm、底径5.8cmを測る。底部の器壁は厚く断面方形を呈する低い削り出し高台を有する。体部は外上方に真直ぐ立ち上がり、口縁部は屈曲して水平に伸び、端部を上方につまむ。また、体部内面には丸ノミ状工具によるソギが入り、見込には線刻による菊花文がみられる。器面には高台まで黄緑色の釉を薄く施し、高台内は露呈で重ね焼きの痕跡とみられる粘土が付着する。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも暗オリーブ色を呈する。

青花(Fig.144 - 410) - 埋土1出土遺物

410は華南系の碗で、底部の一部が残存し、底径5.0cmを測る。底部には断面逆台形を呈する削り出し高台を有する。器面には高台付近まで透明釉を薄く施し、内外面には染付がみられる。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも灰白色または緑灰色を呈する。

近世磁器(Fig.144 - 411~414) - 埋土1出土遺物

411・412は碗である。411は肥前系の小丸碗で、口縁部の約1/5が残存し、口径10.6cmを測る。器壁が薄く、体部は緩やかに内湾する。器面には透明釉を薄く施し、外面には草花文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも明オリーブ灰色を呈する。412は底部が完存し、底径4.1cmを測る。底部は器壁が厚く、直立する削り出し高台を有する。器面には透明釉を薄く施し、見込を蛇ノ目釉ハギ、畳付を釉ハギし、蛇ノ目釉ハギした部分には輪状に砂が付着する。内面には圈線とみられる染付の一部がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が明緑灰色または灰白色、外面が明緑灰色を呈する。

413は肥前系の皿で、約1/2が残存し、口径18.8cm、器高5.9cm、底径9.8cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内面には口縁部に松竹文と宝文、見込に五弁花のコンニャク印判、外面には線描きの唐草文の染付、高台内には渦福の銘がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内面が明オリーブ灰色または青灰色、外面は灰白色を呈する。

414は猪口で、約1/2が残存し、口径7.0cm、器高6.3cm、底径4.6cmを測る。底部には断面三角形を呈する小さな削り出し高台を有し、体部は底部より屈曲して外上方に真直ぐ伸びる。器面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面には岩と花文の染付がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

鉄製品(Fig.144 - 415) - 埋土1出土遺物

415は釘で、先端を欠損し、残存長7.3cm、全幅1.1cmを測る。頂部はL字状を呈し、断面は矩形である。全面に錆化がみられる。

銅製品(Fig.144 - 416) - 埋土1出土遺物

416は煙管の吸口で、完存し、全長7.1cm、羅字接続部径1.1cmを測る。羅字接続部から中程までなだらかに伸びる。全面に錆化がみられる。

近世磁器(Fig.144 - 417) - 埋土3出土遺物

417は壺で、底部が完存し、胴部径16.8cm、底径9.4cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有し、胴部は大きく膨らむ。調整は回転ナデ調整で、外面には灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、砂が

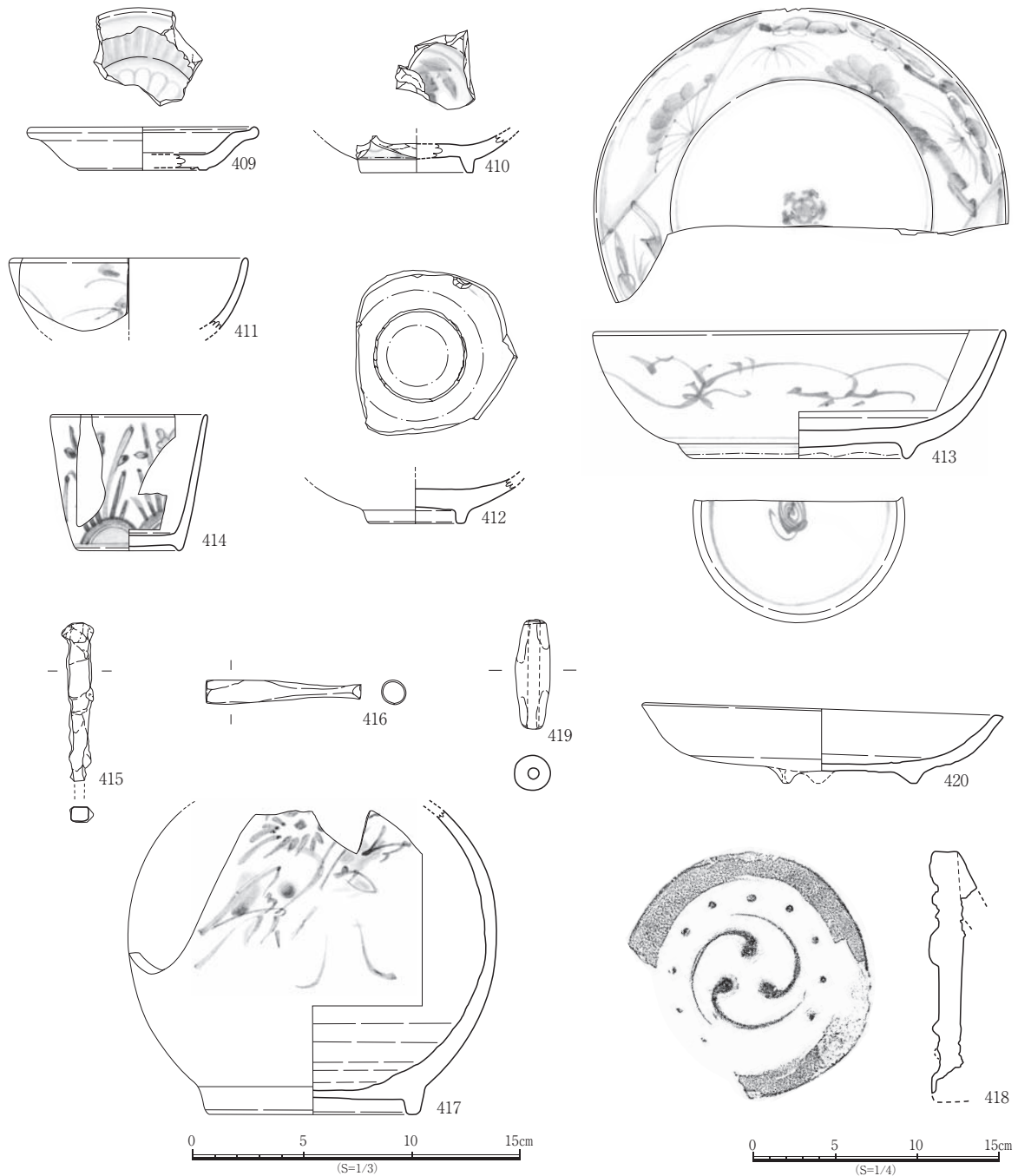


Fig.144 SK - 337 出土遺物実測図

付着する。外面には鉄釉による文様がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面がにぶい黄橙色、外面がオリブ黄色または暗灰黄色を呈する。

瓦 (Fig.144 - 418) - 埋土3 出土遺物

418 は鳥衾で、直径 15.3 cm を測る。瓦当は一部を欠損し、右巻きの三巴文と 12 個の珠文がみられ、わずかにキラ粉が付着する。瓦当の側面には残存部で 3 箇所径約 0.6 cm の穿孔がみられる。丸瓦部との接合面にはヘラ状工具による斜格子状の刻み目を施し、丸瓦部はナデ調整を行う。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は灰色または灰白色を呈する。

3. 近世以降

土製品 (Fig.144 - 419) - 埋土4出土遺物

419は管状土錘で、紡錘形を呈する。一部を欠損し、全長5.0cm、全幅1.6cm、孔径0.5cm、重量10.2gを測る。全面にナデ調整を施す。胎土は密で、焼成はやや良く、色調はにぶい橙色を呈する。

鉄製品 (Fig.144 - 420) - 埋土4出土遺物

420は脚付き皿で、約2/3が残存する。口径15.9cm、器高3.7cmを測る。脚は断面三角形を呈し、3脚とみられるが、2脚のみ残存する。器面は著しく銹化する。

SK - 338 (Fig.145)

SK - 337の南側で検出した円形を呈する土坑で、径2.18m、深さ0.58mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰白色シルト、下層が灰白色粘土質シルトで、いずれも黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、東播系須恵器片1点、土師質土器片10点、青磁片1点、瓦片4点、近世陶器片4点、近世磁器片1点、がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 339 (Fig.146)

調査区西端で検出した隅丸方形を呈する土坑である。一辺1.95m、深さ27cmを測り、床面には壁面に沿って幅約22cm、深さ3cmの溝が巡る。長軸方向は方眼東を示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には図示した近世陶器1点(421)がみられた。

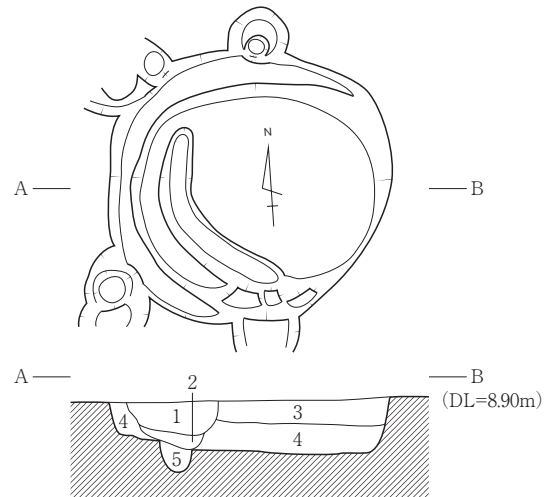
出土遺物

近世陶器 (Fig.149 - 421)

421は唐津焼の碗で、底部が完存し、底径3.8cmを測る。器壁が厚く、底部には断面逆台形を呈する低い削り出し高台を有する。内面には灰釉を薄く施し、外面は削り調整で残存部で一部に釉が流れる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が暗オリーブ色、外面がにぶい橙色または暗オリーブ色を呈する。

SK - 340 (Fig.147)

SK - 339の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.29m、短辺1.07m、深さ18cmを測り、長軸方向はN - 9° - Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層がマンガンを含む黄灰色シルト、下



遺構埋土

1. 黄灰色シルトで、マンガンを多く含む
2. 灰白色粘土質シルト
3. 灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含む(SK-338)
4. 灰白色粘土質シルトで、マンガンと黄色シルトのブロックを多く含む(SK-338)
5. 灰白色粘土質シルトで、黄色シルトのブロックを多く含む

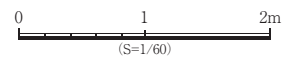
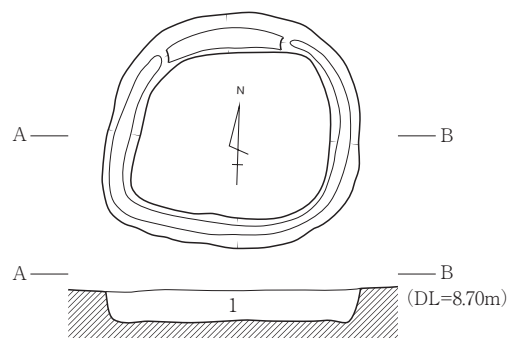


Fig.145 SK - 338



遺構埋土

1. 灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含む

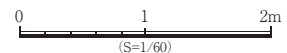


Fig.146 SK - 339

層が浅黄色粘土質シルトであった。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片2点、瓦片10点、近世陶器片1点がみられ、東播系須恵器(422)、瓦1点(423)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器(Fig.149 - 422)

422は片口鉢で、口縁部の一部が残存し、口径22.9cmを測る。口縁部は上下に大きく拡張し、器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

瓦(Fig.149 - 423)

423は平瓦で、約1/2が残存し、残存長28.8cm、厚さ1.4cmを測る。

凹面は削りのちナデ調整、凸面はナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は灰色を呈する。

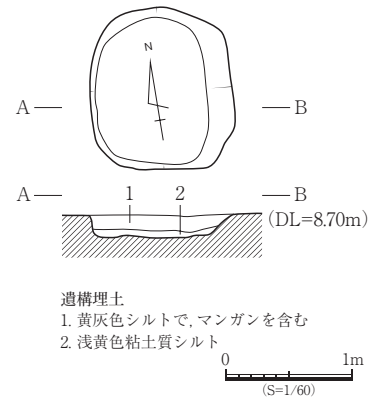


Fig.147 SK - 340

SK - 341

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.48m、短辺1.43m、深さ21cmを測り、長軸方向は方眼北より垂直方向を示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師器片1点、瓦器片1点、青磁片1点、近世陶器片1点、近世磁器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 342

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.60m、短辺0.98m、深さ16cmを測り、長軸方向はN - 10° - Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片1点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 343 (Fig.148)

SK - 342の東側で検出した長方形を呈する土坑である。長辺2.19m、短辺0.83m、深さ29cmを測り、長軸方向はN - 87° - Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片12点、青磁片1点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

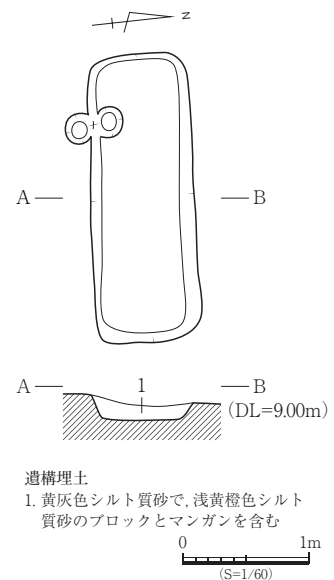


Fig.148 SK - 343

SK - 344

調査区北端の北東で検出した長方形を呈する土坑である。長辺0.84m、短辺0.55m、深さ9cmを測り、長軸方向はN - 87° - Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、細粒砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点、瓦片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 345

SK - 344の南側で検出した長方形を呈する土坑である。長辺0.70m、短辺0.63m、深さ8cmを測り、長軸方向はN - 79° - Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト

3. 近世以降

質砂のブロックとマンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師器片2点、土師質土器片8点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-346

SK-345の南東で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺2.03m、短辺0.67m、深さ29cmを測り、長軸方向は方眼東を示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、細粒砂を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片22点、近世磁器片1点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-347

SD-316の東側で検出した溝状を呈する土坑で、SD-316に切られる。長さ3.18m、幅0.83m、深さ17cmを測り、長軸方向はN-8°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には東播系須恵器片3点、土師質土器片20点、瓦片6点、近世磁器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-348

SK-347の南側で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。長さ1.03m、幅0.74m、深さ33cmを測り、長軸方向はN-6°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、焼土と炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-349

SK-348の東側で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。長さ0.52m、幅38cm、深さ30cmを測り、長軸方向はN-57°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、焼土と炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-350

SK-349の南側で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。長さ0.69m、幅0.50m、深さ26cmを測り、長軸方向はN-79°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、焼土と炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-351

SK-350の北東で検出しただるま形を呈する土坑で、炉跡とみられる。長さ1.15m、幅46cm、深さ11cmを測り、長軸方向は方眼北を示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、焼土を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-352

SD-316の東側で検出した溝状を呈する土坑で、SK-353・354を切る。長さ2.59m、幅0.59m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-21°-Eへ延びた後、N-3°-Wに方向を変える。断面は皿状を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦質土器片1点、近世陶器片5点、近世磁器片1点がみられ、近世陶器1点(424)が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.149-424)

424は瀬戸・美濃系の広東碗である。底部が完存し、底径5.8cmを測る。底部には断面三角形を呈す

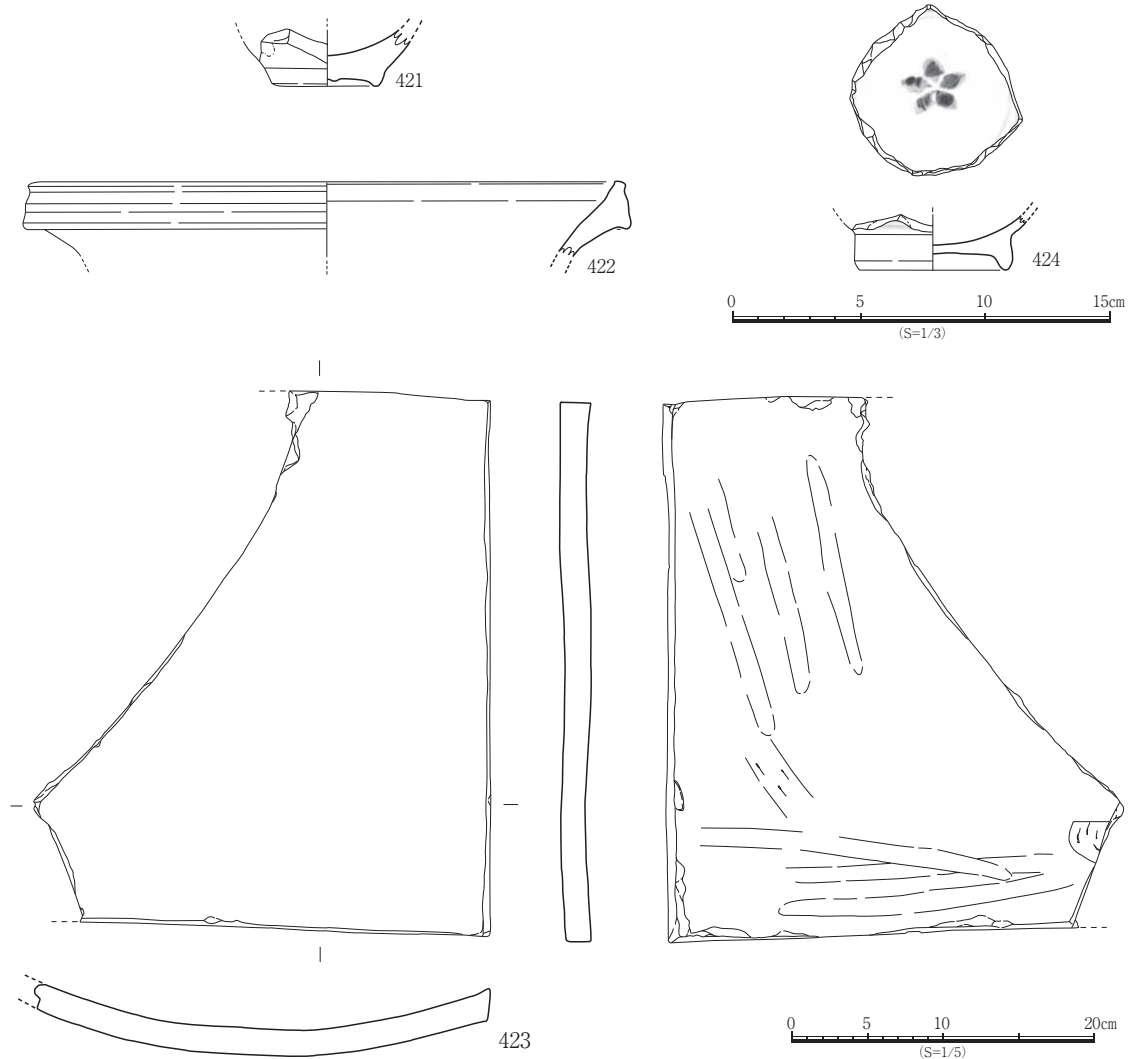


Fig.149 SK - 339・340・352出土遺物実測図

る削り出し高台を有する。器面には白化粧土を薄く施したのち透明釉を薄く掛け、畳付は釉ハギを行う。見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

SK - 353

SD - 316の南端で検出した長方形を呈する土坑で、SK - 352とSD - 316に切られる。長辺3.73m、短辺1.78m、深さ15cmを測り、長軸方向は方眼北より垂直方向を示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片15点、瓦質土器片1点、瓦片5点、近世陶器片8点、近世磁器片12点、銅製品1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 354 (Fig.150)

SK - 353の南側で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK - 353とSD - 316に切られる。長辺2.94m、短辺2.81m、深さ0.94mを測り、長軸方向は方眼北より垂直方向を示す。断面は逆台形を呈し、埋土は5層に分かれ、埋土1はマンガンを多く含む明褐灰色シルト質砂、埋土2は灰白色シルト質砂、埋

3. 近世以降

土3は淡黄色砂質シルトのブロックを多く含む灰黄褐色砂質シルト, 埋土4は炭化物を多く含む褐灰色粘土質シルト, 埋土5は緑灰色中粒砂または粗粒砂であった。出土遺物には土師器片1点, 須恵器片7点, 土師質土器片78点, 瓦質土器片2点, 備前焼片1点, 瓦片37点, 近世陶器片44点, 近世磁器片175点, 鉄製品1点がみられ, 埋土3より出土した近世陶器2点(425・426), 近世磁器6点(427~432), 埋土4より出土した近世陶器1点(433), 近世磁器2点(434・435), 埋土5より出土した近世陶器1点(436)が図示できた。

出土遺物

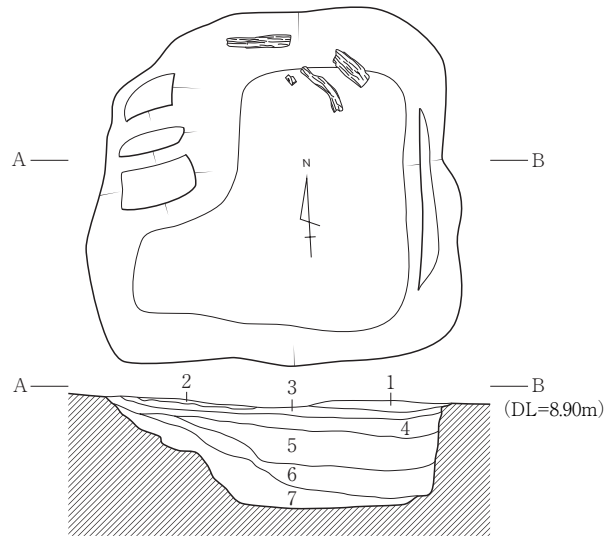
近世陶器(Fig.151 - 425・426) - 埋土3出土遺物

425は碗で, 約3/4が残存し, 口径11.0cm, 器高7.2cm, 底径4.7cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有し, 体部は大きく内湾して腰が張る形態を呈し, 口縁部は真直ぐ伸びる。器面には灰釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内外面ともオリーブ黄色を呈する。

426は能茶山焼の皿で, ほぼ完存し, 口径12.3cm, 器高4.4cm, 底径4.5cmを測る。底部にはハの字状に開く削り出し高台を有し, 口縁部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には高台付近まで鉄釉を薄く施し, 見込は蛇ノ目釉ハギを行う。胎土はやや密で, 焼成は良く, 色調は内面が暗褐色またはにぶい橙色, 外面は暗褐色または橙色を呈する。

近世磁器(Fig.151 - 427~432) - 埋土3出土遺物

427~430は碗で, いずれも丸碗である。427は約1/2が残存し, 口径11.0cm, 器高6.2cm, 底径4.6cmを測る。底部にはハの字状に開く削り出し高台を有し, 高台内をアーチ状に挟る。体部は内湾し, 口縁部は真直ぐ伸びる。器面には透明釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。内面には口縁部に四方禰文, 見込に源氏香文, 外面には濃地に白抜き丸文, 源氏香文がみられる。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内外面とも灰白色を呈する。428は約3/4が残存し, 口径8.7cm, 器高5.5cm, 底径3.3cmを測る。底部には断面三角形で直立する削り出し高台を有し, 体部は大きく膨らみ, 腰の張る形態を呈する。器面には透明釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。見込には花卉とみられる朱色の色絵, 外面には窓に朱地の花文, 紫色の桐文, 青海波文の色絵がみられる。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内外面とも灰白色を呈する。429は約2/3が残存し, 口径8.8cm, 器高5.5cm, 底径3.3cmを測る。底部には断面三角形で直立する削り出し高台を有する。体部は大きく膨らみ, 腰の張る形態を呈し, 口縁部はやや内傾する。器面には透明釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。見込には水に鳥, 外面には草花文の染付がみられる。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内外面とも灰白色を呈する。430は約1/3が残存し, 口径9.0



遺構埋土

1. 黄灰色シルト質砂で, 浅黄橙色シルト質砂のブロックを含む(SD-316)
2. 黄灰色シルト質砂で, 浅黄橙色シルト質砂のブロックを含む(SK-352)
3. 明褐色シルト質砂で, マンガンを多く含む(SK-354)
4. 灰白色シルト質砂(SK-354)
5. 灰黄褐色砂質シルトで, 淡黄色砂質シルトのブロックを多く含む(SK-354)
6. 褐灰色粘土質シルトで, 炭化物を多く含む(SK-354)
7. 緑灰色中粒砂または粗粒砂

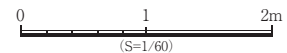


Fig.150 SK - 354

cm, 器高5.8cm, 底径3.8cmを測る。底部には断面三角形の小さな削り出し高台を有し, 体部は大きく膨らみ, 腰の張る形態を呈する。器面には透明釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。見込には水に鷲, 外面には岩に草花文の染付がみられる。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内外面とも灰白色を呈する。

431は皿で, 約1/4が残存し, 口径13.4cm, 器高4.1cm, 底径8.1cmを測る。底部には断面三角形の小さな削り出し高台を有し, 体部は内湾して緩やかに口縁部に至る。器面には透明釉を薄く施し, 高台内は輪状に釉ハギを行い, 蛇ノ目凹形高台となる。見込には五弁花, 内面には文, 外面には唐草文の染付が見られる。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内外面とも明緑灰色を呈する。

432は壺とみられ, 底部の約1/2が残存し, 底径5.4cmを測る。底部には幅の広い扁平な削り出し高台を有し, 体部は底部より屈曲して上方に真直ぐ立ち上がる。見込には白色釉を輪状にハケ塗り, 外面には青磁釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内面が黄灰色, 外面が灰オリーブ色を呈する。

出土遺物

近世陶器(Fig.151 - 433) - 埋土4出土遺物

433は落し蓋で, ほぼ完存し, 口径9.6cm, 器高2.6cm, 底径4.5cm, つまみ径1.5cmを測る。つまみは菊花状で型成形によるものとみられ, 天井部は屈曲して上方に立ち上がり, 口縁部はやや下方に伸びる。内面は回転削り調整を行い, 露胎で, 外面には鉄釉を薄く施す。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内面がにぶい黄橙色, 外面が灰褐色を呈する。

近世磁器(Fig.151 - 434・435) - 埋土4出土遺物

434は丸碗の蓋で, 約3/4が残存し, 口径9.9cm, 器高3.3cm, つまみ径4.0cmを測る。天井は丸味をもち, 口縁部は屈曲して下方に真直ぐ伸びる。器面には透明釉を薄く施し, つまみ端部は釉ハギを行う。内面には天井部に源氏香文, 口縁部に四方禪文, 外面には濃地に白抜きの丸文, 源氏香文の染付がみられ, 427と同文である。胎土はやや密で, 焼成はやや良く, 色調は内外面とも灰白色を呈する。

435は肥前系の紅皿で, 約1/2が残存し, 口径4.3cm, 器高1.6cmを測る。型成形で, 体部は貝殻状を呈し, 底部には断面半円形を呈する小さな高台を有し, 口縁部は内湾して端部は外傾する面をなす。内面と口縁部外面には白色釉を薄く施す。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内外面とも灰白色を呈する。

近世陶器(Fig.151 - 436) - 埋土5出土遺物

436は瀬戸・美濃系の広東碗で, 底部の約3/4が残存し, 底径5.6cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有する。器面には白化粧土を薄く施し, 透明釉を掛け, 畳付は釉ハギを行う。見込には五弁花とみられるコンニャク印判, 外面には文様不明の染付がみられる。胎土はやや粗く, 焼成はやや良好で, 色調は内外面とも灰白色を呈する。

SK - 355 (Fig.152)

SK - 354の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺2.74m, 短辺1.37m, 深さ0.65mを測り, 長軸方向はN - 7° - Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は8層に分かれ, 埋土1はマンガンを多く含む灰白色シルト質砂, 埋土2は灰白色シルト質砂, 埋土3は黄色シルトのブロックを多く含む褐色シルト質砂, 埋土4は炭化物を含む黄灰色シルト質砂, 埋土5は黄色シルトのブロックと炭化物を多く含む灰白色シルト質砂, 埋土6はマンガンを含む黄灰色砂質シルト, 埋土7は黄色シルトの

3. 近世以降

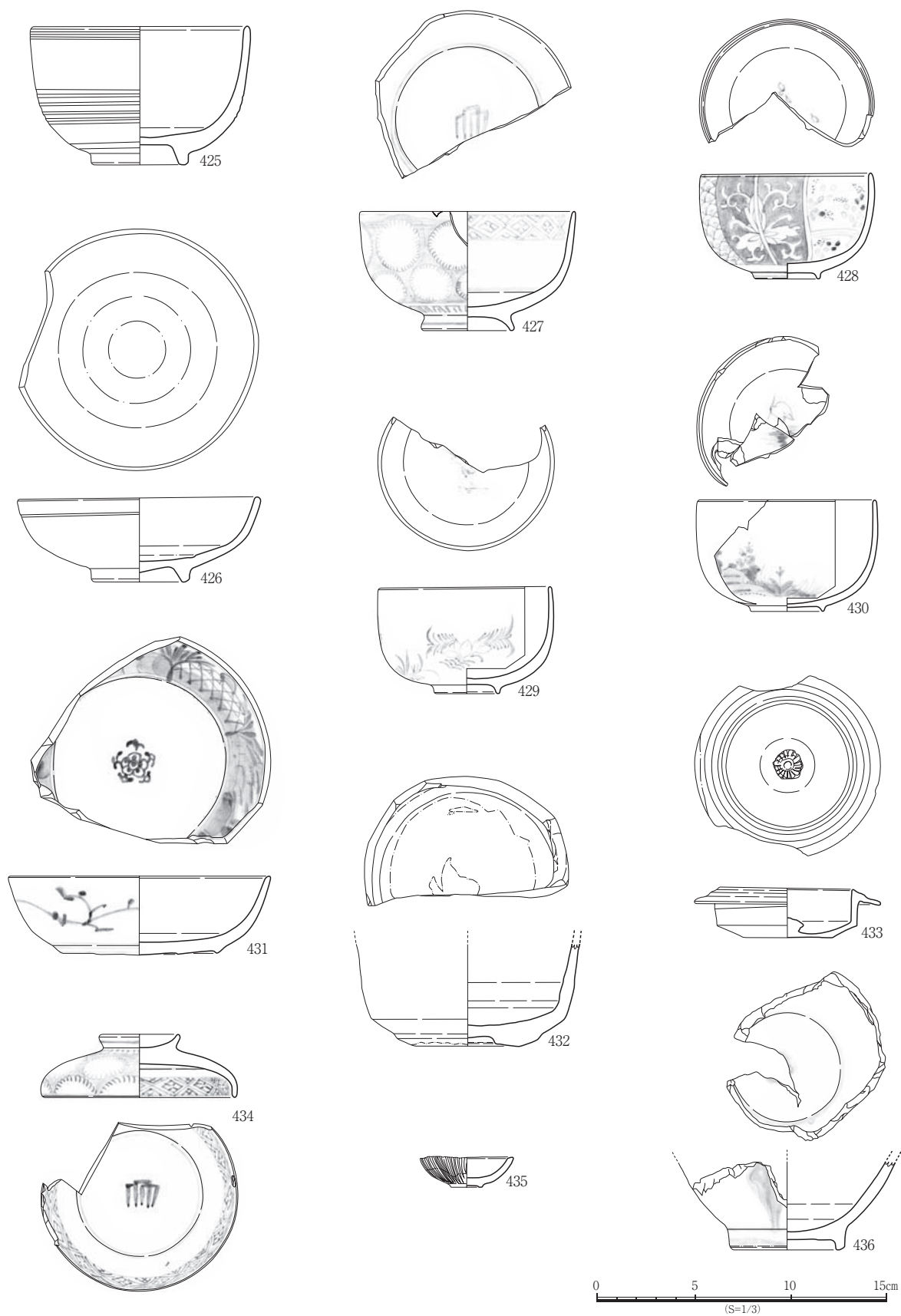


Fig.151 SK - 354出土遺物実測図

ブロックを含む黄灰色シルト、埋土8は灰白色シルト質砂のブロックを含む黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片13点、瓦質土器片4点、白磁片1点、近世陶器片13点、近世磁器片34点、瓦片5点がみられ、瓦1点(437)が図示できた。

出土遺物

瓦(Fig.153 - 437)

437は軒丸瓦で、瓦当の約1/2が残存し、直径15.4cmを測る。瓦当は右巻きの三巴文と珠文がみられ、ハナレ砂が付着する。瓦当の裏面はナデ調整を施す。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は瓦当が灰色、裏面が暗灰色を呈する。

SK - 356

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺2.30m、短辺1.01m、深さ41cmを測り、長軸方向はN - 86° - Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片15点、瓦質土器片1点、瓦片3点、近世陶器片7点、近世磁器片5点がみられ、土師質土器1点(438)、近世磁器1点(439)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.153 - 438)

438は足付きの焜炉で、口縁部の約1/4が残存し、口径25.2cmを測る。口縁部は大きく外反し、一部は上方に引き上げられる。胴部には花形とみられる窓の一部が残存し、内面には仕切り板状のものを貼付する。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部外面の窓の上部に菊花の印刻がみられる。胎土は密で金雲母を含み、焼成は良好である。

近世磁器(Fig.153 - 439)

439は皿で、底部の約1/4が残存し、底径7.2cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有する。器面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。見込には花文、内面には花文と圏線、外面と高台内には圏線の染付が見られる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも明緑灰色を呈する。

SK - 357

SK - 356の南東で検出した溝状を呈する土坑である。長さ3.16m、幅1.41m、深さ5cmを測り、長軸方向はN - 3° - Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器1点、土師質土器片3点、近世陶器片4点がみられ、須恵器(440)が図示できた。

出土遺物

須恵器(Fig.153 - 440)

440は甕の口縁部で、一部が残存する。口縁部は真直ぐ外上方に伸び、端部は肥厚して上方につま

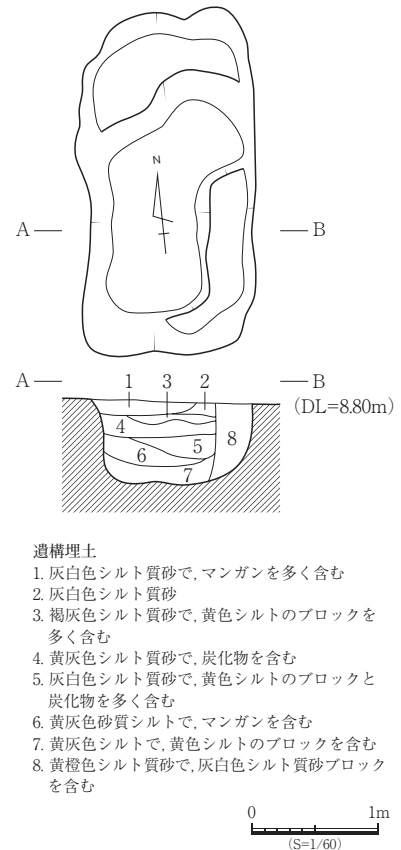


Fig.152 SK - 355

3. 近世以降

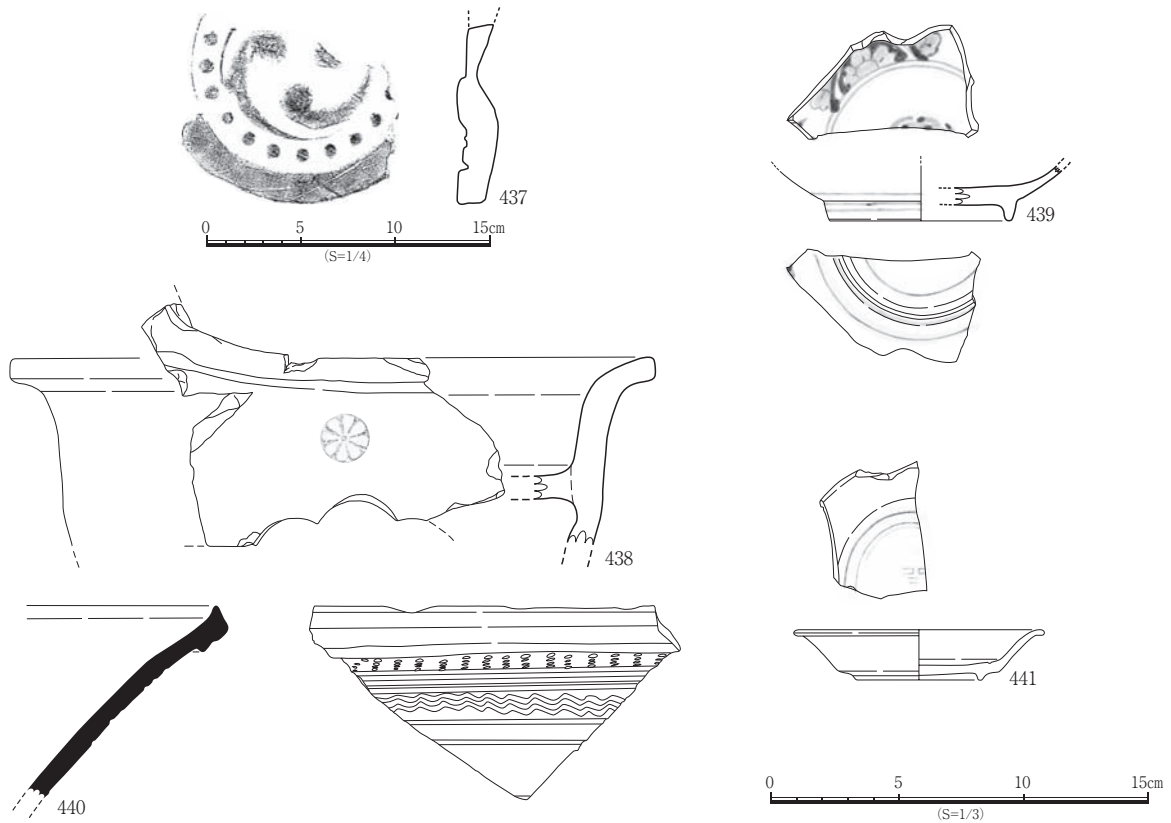


Fig.153 SK - 355 ~ 358 出土遺物実測図

む。器面には回転ナデ調整を施し、外面には凹線と櫛描波状文，櫛状工具による刺突文がみられる。胎土はやや密で，焼成は良く，色調は内外面とも灰色を呈する。

SK - 358

SK - 357の東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺6.97m，短辺6.74m，深さ0.75mを測り，長軸方向は方眼北を示す。断面は逆台形を呈し，埋土は灰黄褐色シルト質砂で，中粒砂とマンガンを多く含んでいた。出土遺物には須恵器片14点，土師質土器片30点，青磁片2点，瓦片3点，近世陶器片18点，近世磁器片23点，ガラス片1点がみられ，近世磁器1点(441)が図示できた。

出土遺物

近世磁器(Fig.153 - 441)

441は皿で，約1/4が残存し，口径9.6cm，器高2.0cm，底径5.0cmを測る。底部には断面半円形の小さな削り出し高台を有し，体部は底部より屈曲して外反する。器面には光沢のある透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。見込にはスタンプによる文様がみられる。胎土は密でわずかに黒色砂粒を含み，焼成は良く，色調は内外面とも灰白色を呈する。

(4) 溝跡

SD - 301 (Fig.154)

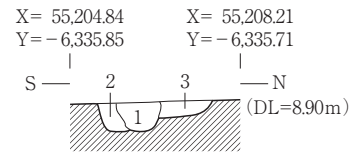
調査区西部で検出した東西溝跡(N - 88° - W)で，西端は調査区外へ続く。SD - 303・SK - 337に切られる。20.58mを検出し，幅0.18~0.58m，深さ9~30cmを測り，基底面は東(8.471m)から西(8.382m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し，埋土は灰白色シルトで，黄色シルトのブロックとマンガンを含ん

でいた。出土遺物には土師質土器片 10 点、瓦片 15 点、鉄釘片 2 点、銅製品 2 点がみられ、銅製品(442・443)が図示できた。

出土遺物

銅製品 (Fig.157 - 442・443)

442・443は煙管である。442は雁首で、一部を欠損し、全長5.8cm、火皿径 1.4 cm を測る。火皿内には炭が付着し、羅字接続部には紙質のものが残存する。443は吸口で、一部を欠損し、全長4.4 cm、全幅0.9cmを測る。外面は真鍮で花文と円文がみられ、内面は銅緑色を呈する。



遺構埋土

1. 灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含む(SD-301)
2. 灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含む(SD-303)
3. 灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含む(SD-302)

Fig.154 SD - 301 ~ 303

SD - 302 (Fig.154)

SD - 301の北側で検出した東西溝跡(N - 83° - W)で、SD - 303に切られる。5.35mを検出し、幅0.21 ~ 0.66m、深さ6 ~ 12cmを測り、基底面は東(8.748m)から西(8.610m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片 1 点、瓦質土器片 1 点、瓦片 10 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 303 (Fig.154)

SD - 302の南側で検出した東西溝跡(N - 75° - W)で、SD - 301・302を切る。6.15mを検出し、幅37 cm、深さ4 ~ 40 cmを測り、基底面は西(8.583m)から東(8.384m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片 2 点、瓦器片 1 点、土師質土器片 7 点、瓦片 14 点、近世陶器片 2 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 304

調査区西端で検出した東西溝跡(N - 77° - W)で、SK - 328を切る。4.78mを検出し、幅24 ~ 48cm、深さ5 ~ 9cmを測り、基底面は西(8.533m)から東(8.446m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片 1 点、瓦片 3 点、近世陶器片 1 点、鉄釘片 1 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 305

SD - 301の南側で検出した東西溝跡で、SD - 306を切る。主軸方向はN - 82° - Eに延びた後、N - 87° - Wに方向を変える。長さ9.91m、幅17 ~ 29cm、深さ4 ~ 11cmを測り、基底面は東(8.635m)から西(8.554m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師器片 1 点、須恵器片 1 点、土師質土器片 3 点、瓦片 9 点、近世陶器片 3 点、近世磁器片 1 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD - 306

SD - 305の南側で検出したL字状を呈する溝跡で、SD - 305・308に切られる。主軸方向はN - 87° - Eに延びた後、N - 2° - W、N - 90° - Eに方向を変える。24.50mを検出し、幅20 ~ 43cm、深さ2 ~ 23cmを測り、基底面は東(8.560m)から西(8.523m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片 3 点、瓦質土器片 1 点、瓦片 9 点、近世陶器片 2 点、近世磁器片 1 点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

3. 近世以降

SD - 307 (Fig.155)

SD - 306 の南側で検出した東西溝跡(N - 84° - E)で, SD - 308 に切られる。7.37mを検出し, 幅0.31~0.78m, 深さ9~24cmを測り, 基底面は東(8.575m)から西(8.544m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰白色シルトで, 黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には東播系須恵器片1点, 土師質土器片3点, 白磁片1点, 青磁片3点, 近世陶器片2点, 鉄釘片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

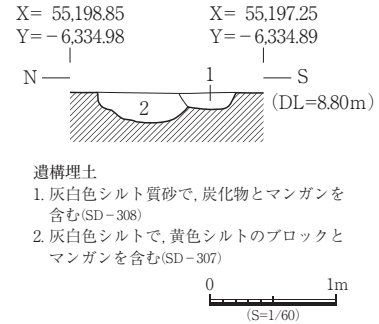


Fig.155 SD - 307・308

SD - 308 (Fig.155)

SD - 307 の南側で検出した東西溝跡(N - 89° - E)で, SK - 337に切られる。10.57mを検出し, 幅0.39~0.51m, 深さ8~30cmを測り, 基底面は西(8.584m)から東(8.355m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰白色シルト質砂で, 炭化物とマンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片3点, 土師質土器片6点, 瀬戸・美濃系陶器1点, 青磁片1点, 瓦片23点, 近世陶器片8点, 近世磁器片3点, 鉄釘片2点がみられ, 瀬戸・美濃系陶器(444), 近世陶器1点(445), 近世磁器1点(446)が図示できた。

出土遺物

瀬戸・美濃系陶器(Fig.157 - 444)

444は折縁皿で, 口縁部の一部が残存する。内面には丸ノミ状工具によるソギが入り, 器面には黄緑色の釉を薄く施す。胎土は密で, 焼成はやや悪く, 色調は内外面とも灰オリーブ色を呈する。

近世陶器(Fig.157 - 445)

445は播鉢で, 約1/4が残存し, 口径20.0cm, 器高6.7cm, 底径11.2cmを測る。体部は外上方に真直ぐ伸び, 口縁部は大きく肥厚して上下に拡張する。器面には回転ナデ調整を施し, 口縁部はヨコナデ調整, 底部外面は一部ナデ調整を加える。内面には8本単位の摺り目を施す。胎土はやや密で, 焼成は良く, 色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈する。

近世磁器(Fig.157 - 446)

446は猪口で, 底部がほぼ完存し, 底径4.2cmを測る。底部の器壁は厚く, 直立する削り出し高台を有し, 体部は外上方に真直ぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し, 口縁部は透明釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。外面には文様不明の染付がみられる。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内外面とも灰白色を呈する。

SD - 309

SD - 308 の南側で検出した南北溝跡で, 主軸方向はN - 2° - Eに延びた後, N - 11° - Eに方向を変える。7.21mを検出し, 幅17~36cm, 深さ12~16cmを測り, 基底面は南(8.530m)から北(8.467m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰白色シルトで, マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点, 瓦片2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD - 310

調査区西端で検出した東西溝跡(N - 62° - W)で, 西端は調査区外へ続き, SD - 311を切る。8.80mを検出し, 幅1.98~3.65m, 深さ1~6cmを測り, 基底面は東(8.574m)から西(8.461m)に傾斜する。断

面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、瓦片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-311

SD-310の東側で検出した東西溝跡(N-90°-E)で、SD-310に切られる。5.05mを検出し、幅0.97~1.19m、深さ3~7cmを測り、基底面は東(8.659m)から西(8.590m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、瓦片2点、近世磁器片1点、鉄釘片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-312

SD-311の南側で検出した東西溝跡(N-80°-W)である。長さ9.49m、幅0.92~1.26m、深さ3~15cmを測り、基底面は西(8.636m)から東(8.611m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片2点、白磁片1点、瓦片5点、近世陶器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-313

調査区北部で検出した南北溝跡(N-2°-W)で、SD-314・SK-321に切られる。5.61mを検出し、幅23~42cm、深さ1~7cmを測り、基底面は南(8.655m)から北(8.550m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂で、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師器片7点、土師質土器片7点、青磁片1点、近世陶器片3点、近世磁器片2点、土製品1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-314 (Fig.156)

SD-313の東側で検出した南北溝跡で、北端は調査区外に続き、南端はSK-337に切られる。主軸方向はN-28°-Eに延びた後、N-2°-Wに方向を変える。8.72mを検出し、幅0.38~0.99m、深さ2~27cmを測り、基底面は北(8.509m)から南(8.497m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師器片9点、土師質土器片2点、鉄釘片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

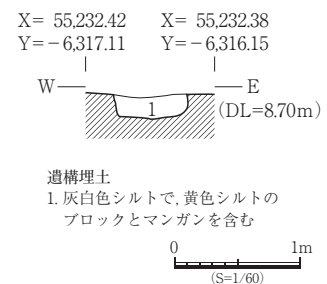


Fig.156 SD-314

SD-315

調査区中央部で検出した東西溝跡(N-78°-W)で、両端は他の遺構に切られる。2.71mを検出し、幅14~20cm、深さ6~14cmを測り、基底面は東(8.902m)から西(8.793m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、細粒砂を含んでいた。出土遺物には近世磁器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-316

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-2°-W)で、SK-353・354を切る。11.90mを検出し、幅0.86~1.89m、深さ3~11cmを測り、基底面は南(8.746m)から北(8.711m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器片5点、土師質土器片31点、青磁片2点、瓦片13点、近世陶器片30点、近世磁器片50点、古銭1点がみられ、

3. 近世以降

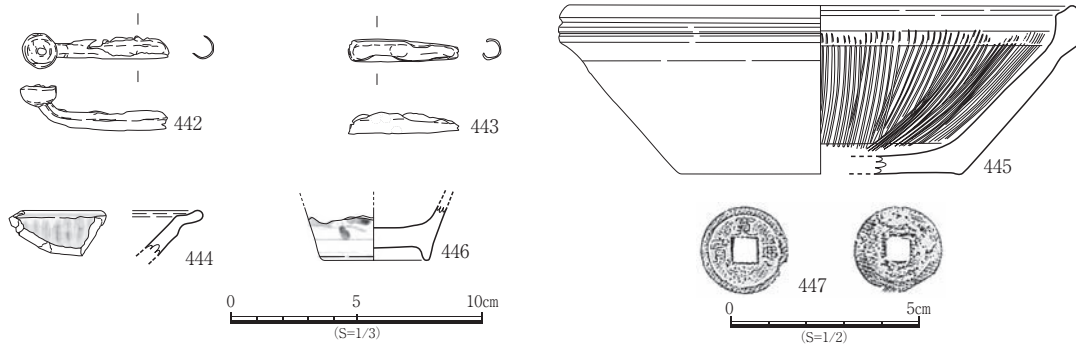


Fig.157 SD - 301・308・316 出土遺物実測図

古銭(447)が図示できた。

出土遺物

古銭(Fig.157 - 447)

447は寛永通寶で、新寛永である。完形で、銭径2.36cm, 孔径0.60cm, 銭厚0.10cm, 重量1.8gを測る。全面に錆化がみられる。

SD - 317

SD - 316の東側で検出した南北溝跡で、主軸方向はN - 8° - Eに延びた後、N - 2° - Wに方向を変える。長さ5.54m, 幅0.50m, 深さ2~7cmを測り、基底面は北(8.745m)から南(8.671m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

(5) 畝状遺構

SU - 301

調査区南西部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を3条確認した。主軸方向はN - 3° - Eで、検出長7.07m, 幅0.37~0.64m, 深さ1~6cmを測る。畝間は0.78~1.20m間隔でほぼ平行に延びており、畝幅は0.50~0.67mとみられる。埋土は灰白色シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点, 瓦片2点がみられ、土師質土器1点(448)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.158 - 448)

448は羽釜で、口縁部の一部が残存し、口径16.8cmを測る。口縁部は大きく内湾し、端部を細く上方につまむ。内面はハケ調整, 口縁部はヨコナデ調整, 外面には斜め方向のタタキのちナデ調整を加える。胎土はやや密で石英, 長石, 金雲母を含み, 焼成は良く, 色調は内面が橙色, 外面が橙色またははにぶい橙色を呈する。

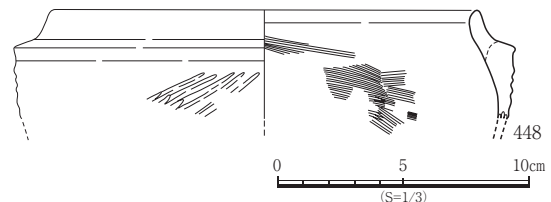


Fig.158 SU - 301 出土遺物実測図

SU - 302

調査区南西部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を5条確認した。主軸方向はN - 4° - Eで、検出

長5.18m, 幅13～23cm, 深さ2～7cmを測る。畝間は0.58～0.65m間隔でほぼ平行に延びており, 畝幅は40～45cmとみられる。埋土は灰白色シルトで, マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SU-303

SU-302の東側で検出した畝状遺構で, 畝間の痕跡を6条確認した。主軸方向はN-2°-Eで, 検出長3.63m, 幅7～22cm, 深さ1～4cmを測る。畝間は18～28cm間隔でほぼ平行に延びており, 畝幅は7～17cmとみられ, 削平を受けた可能性が高い。埋土は灰白色シルトで, マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物は瓦片1点がみられたが, 復元図示できなかった。

SU-304

SU-302の南側で検出した畝状遺構で, 畝間の痕跡を5条確認した。主軸方向はN-85°-Wで, 検出長5.92m, 幅9～32cm, 深さ2～18cmを測る。畝間は0.38～0.55m間隔でほぼ平行に延びており, 畝幅は22～40cmとみられる。埋土は灰白色シルトで, マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物は須恵器片1点, 土師質土器片1点, 瓦片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

(6) ピット

P-301

調査区西部で検出した楕円形を呈するピットである。長径44cm, 短径38cm, 深さ43cmを測り, 埋土は灰白色シルトで, マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には図示した土製品1点(449)がみられた。

出土遺物

土製品(Fig.159-449)

449は管状土錘で, 紡錘形を呈する。完存し, 全長5.0cm, 全幅1.4cm, 孔径0.6cm, 重量7.9gを測る。全面にナデ調整を施す。胎土は密で, 焼成は良く, 色調はにぶい橙色またはにぶい赤褐色を呈する。

P-302

SK-337の西側で検出した楕円形を呈するピットである。長径45cm, 短径41cm, 深さ36cmを測り, 埋土は灰白色シルトで, マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には図示した土製品1点(450)がみられた。

出土遺物

土製品(Fig.159-450)

450は管状土錘で, 紡錘形を呈する。一部欠損し, 残存長4.5cm, 全幅1.5cm, 孔径0.5cm, 重量7.0gを測る。全面にナデ調整を施す。胎土は密で, 焼成はやや良く, 色調はにぶい橙色を呈する。

P-303

SK-337の西側で検出した楕円形を呈するピットである。長径30cm, 短径18cm, 深さ30cmを測り, 埋土は灰白色シルトで, 黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には図示した須恵器1点(451)がみられた。

3. 近世以降

出土遺物

須恵器(Fig.159 - 451)

451 は杯蓋で、口縁部の一部が残存し、口径 16.0 cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲し、端部は下方に屈曲する。器面には回転ナデ調整を施し、外面には自然釉が付着する。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内面が灰白色、外面が灰黄色を呈する。

P - 304

SK - 338の南側で検出した楕円形を呈するピットで、SK - 338を切る。長径0.61m、短径0.52m、深さ 25 cmを測り、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、近世陶器1点がみられ、近世陶器(452)が図示できた。

出土遺物

近世陶器(Fig.159 - 452)

452 は甕で、口縁部の一部が残存し、口径 19.4 cmを測る。胴部は緩やかに内傾し、口縁部は上方に伸びたのち、屈曲して水平に伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部はヨコナデ、内面には同心円状の当具痕が残る。胴部内面と外面の頸部から胴部には鉄釉を薄く施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰褐色または黒褐色、外面がにぶい褐色を呈する。

P - 305

SK - 338の南側で検出した円形を呈するピットである。径17 cm、深さ 11 cmを測り、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した近世陶器1点(453)がみられた。

出土遺物

近世陶器(Fig.159 - 453)

453 は鉢の口縁部の一部である。口縁部は体部より屈曲して直立し、肥厚して上下に拡張する。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部外面には重ね焼き痕が残る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内面が灰色または灰褐色、外面が灰色またはにぶい赤褐色を呈する。

P - 306

SD - 314の西側で検出した長方形を呈するピットで、SD - 314を切る。長辺0.64m、短辺0.55m、深さ 25 cmを測り、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には瓦片3点、緑釉陶器片1点、土師質土器片2点、古銭(寛永通寶)4点がみられ、古銭1点(454)が図示できた。

出土遺物

古銭(Fig.159 - 454)

454 は2枚の寛永通寶が凝着する。1枚は銭径2.33 cm、孔径0.67 cm、銭厚0.13 cmを測る。もう1枚は銭径2.44 cm、孔径0.67 cm、銭厚0.12 cmを測る。いずれも新寛永で、錆化がみられる。

P - 307

調査区中央部で検出した楕円形を呈するピットである。長径 37 cm、短径 35 cm、深さ 36 cmを測り、埋土は灰白色シルトで、黄色シルトのブロックとマンガンを含んでいた。出土遺物には土師器片5点がみられ、土師器1点(455)が図示できた。

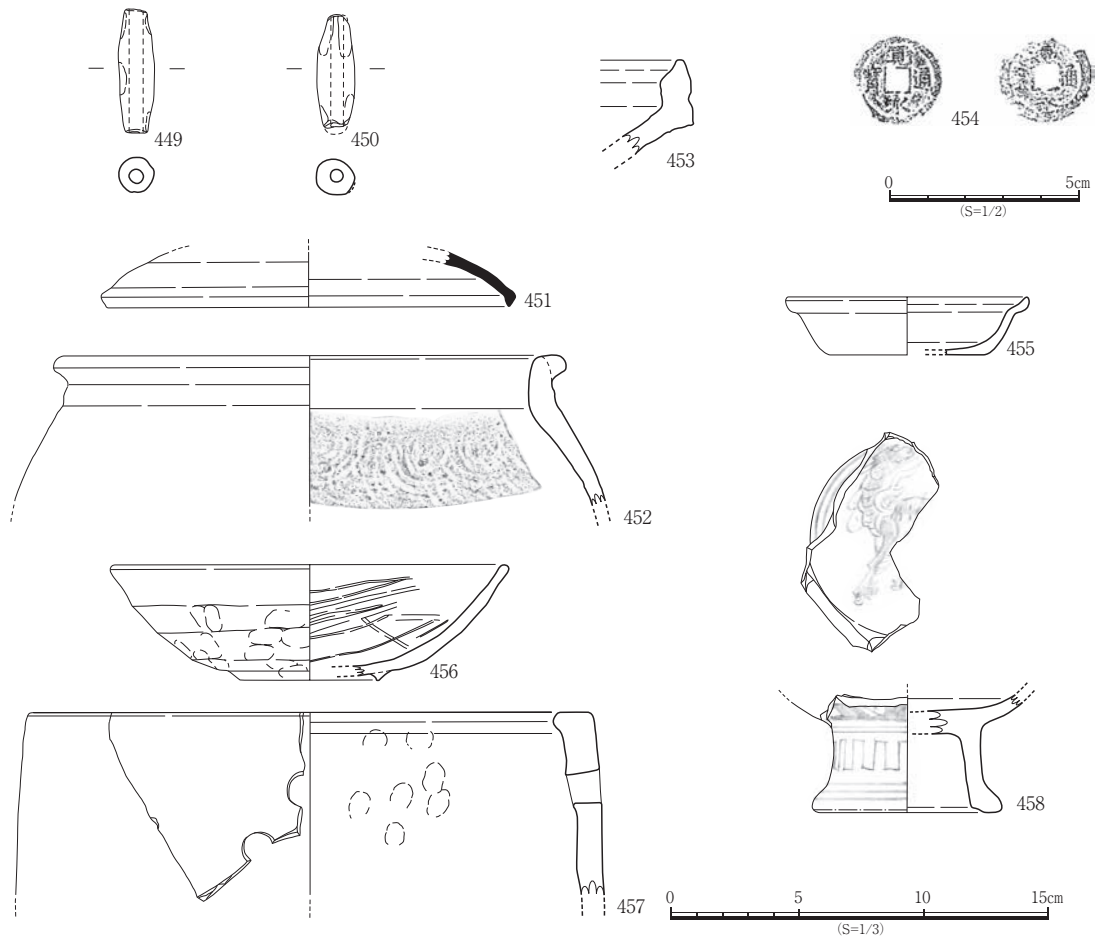


Fig.159 P - 301 ~ 309 出土遺物実測図

出土遺物

土師器 (Fig.159 - 455)

455は杯で、約1/4が残存し、口径9.6cm、器高2.3cm、底径6.0cmを測る。体部はやや内湾し、口縁部は体部より若干屈曲して外上方に短く伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

P - 308

SD - 315の西側で検出した溝状を呈するピットである。長さ0.88m、幅17cm、深さ10cmを測り、埋土は黄灰色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片8点、土師質土器片15点、近世陶器1点がみられ、瓦器1点(456)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.159 - 456)

456は椀で、約1/4が残存し、口径15.5cm、器高4.6cm、底径5.5cmを測る。器壁が厚く、底部には断面三角形を呈する高台を貼付する。調整は内面がナデ調整ののち口縁部に圈線状のミガキ、見込に平行暗文、口縁部はヨコナデ調整を1段、外面はナデ調整で、指頭圧痕が平行に4段残る。胎土はやや密で、焼成はやや良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

3. 近世以降

P - 309

調査区中央部の攪乱の底で検出したピットである。長さ0.90m, 幅0.81m, 深さ48cmを測り, 埋土は褐灰色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片3点, 瓦質土器片1点, 近世陶器片1点, 近世磁器1点, 鉄滓がみられ, 土師質土器1点(457), 近世磁器(458)が図示できた。

出土遺物

土師質土器(Fig.159 - 457)

457は焜炉で, 口縁部の一部が残存し, 口径22.2cmを測る。胴部は上方に真直ぐ立ち上がり, 口縁部は内側に肥厚させ水平な面をなす。器面にはナデ調整を施し, 口縁部はヨコナデ調整, 内面には指頭圧痕が残る。口縁部には残存部で2箇所にも円孔がみられる。胎土は密で金雲母を含み, 焼成は良く, 色調は内面に黄橙色または褐灰色, 外面が浅黄橙色を呈する。

近世磁器(Fig.159 - 458)

458は脚付きの皿とみられ, 底部の約1/2が残存し, 底径7.1cmを測る。脚部はややハの字状に開き, 端部を肥厚させ丸く収める。全面に透明釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。見込には龍文, 外面には文と圏線のコバルトによる文様がみられる。胎土は密で, 焼成は良く, 色調は内外面とも灰白色を呈する。

第IV章 考察

1. 古代について

今回の調査では、第I調査地区では確認されていなかった古代の遺物包含層と遺構を確認することができた。特に瓦の出土や礎石建物跡の存在は、これまで知られていなかった古代寺院跡の発見という大きな成果を得ることとなり、出土遺物においても二彩陶器や高知県では初出土となる埴仏などは非常に注目されるものである。この寺院跡を野田廃寺と呼称することとする。

古代の遺構は、調査区中央部の北寄りで多く検出されている。これらは寺院跡に関連するものと考えられ、まず建物跡は、掘立柱建物跡であるSB-101と、礎石建物跡であるSB-102の2棟が確認された。SB-101は梁間1間分しか確認できなかったが、P-1とP-5の間には束柱に使用されたとみられる礎石が確認されていることから、東側に続くものと考えられる。SB-102はSB-101の南側で確認した建物跡で、西妻柱と南側柱のみが確認された。SB-101との位置関係より梁間2間と想定したが、梁間2間とした場合SB-101の南側柱との距離は1.15mとなり、同時に存在したとは考え難く、時期差を考えなければならぬだろう。また、SB-102の北側には原位置を保っていないとみられるものの、礎石として使われたと考えられる石が3個存在しており、SB-102が北側へ続く可能性もあるだろう。

2棟の建物跡の時期差を考える場合、出土遺物からその前後関係を判断することは難しいが、棟方向が全く同じであることや、SB-101の側柱とSB-102の側柱の位置がちょうど南北に並んでおり、その位置関係には企画性がみられ、大きな時期差はないものと思われる。また、これらの建物跡の周辺からは瓦が多量に出土しており、いずれも瓦葺きであったものとみられる。さらに、瓦がまとまって出土した地点としては、P-105周辺、P-111周辺があり、明確な建物跡は確認できなかったものの、建物跡が存在した可能性は捨てられないだろう。

その他の寺院跡に関連する遺構としては、溝跡(SD-101・102)がある。SD-101・102は検出した古代の遺構で最も西側に位置し、その間約3mを測り、南北に平行に走っている。これらの溝跡の埋土には多量の瓦が含まれており、この周辺は今回の調査で最も多く瓦が出土した地点でもある。これらの溝跡以西では遺構は確認されず、遺物も少なく、これらの溝跡の東西では様相が異なっていることから、寺院跡の西側を区画するものと考えられる。それに対し、調査区東側で検出したSD-104はSD-101・102と比べ瓦は少ないものの、この溝跡以東は急激に遺構が少なくなっており、寺院跡の東側を画するものと考えられる。このSD-101とSD-104の距離は54mを測り、寺院跡の東西は180尺と推定できる。南限については溝跡や塀跡などの区画する遺構が確認されておらず、断定することは非常に難しいが、P-105周辺で多量の瓦が出土していること、また、遺物包含層中ではあるが埴仏が出土していること、さらに調査区南端部では遺構が検出されておらず、遺物も少量であったことを考えると、P-106やSX-102の辺りまでは寺域内と考えるのが現在のところ妥当であろう。なお、北限や伽藍については調査区の北側に遺構が続いていることもあり、寺院跡の中心部は今回の調査区の北側にあるものとみられ、明らかにすることはできなかった。

1. 古代について

出土遺物についてしてみると8世紀中葉から10世紀を中心とする土師器・須恵器が出土している。P-103からは土師器が一括出土している。P-103はSB-101の西側に位置するピットで、土師器の杯が9点出土しており、出土状況から使用後に一括廃棄されたものとみられる。これらの杯はすべて高台を持たないもので、1点を除き、口径が9～11cmに収まる小型のものである。体部が底部より屈曲して比較的上方に立ち上がり、器高も比較的低くなっていない点など、8世紀後葉から9世紀前半の範疇で捉えられるものである。そして、これらの杯すべてに煤が付着し、中には半円形に煤が付着し、灯芯の痕跡とみられるものもあることから、すべて灯明器として使用されたことが窺われる。土佐国分寺跡(南国市教育委員会1988)でも柱穴より同様な大きさの土師器の杯が一括出土しており、中には煤が付着しているものもみられ、灯明器として使用されたと考えられる。寺院跡のピットより一括出土するという状況は、P-103と同様であり、仏教に関わる儀式などに使用し、廃棄された可能性も考えられる。灯明器については、『正倉院文書』に「瓷油杯」、長屋王家木簡に「油杯」という記載があり、灯明専用器が存在したことが知られる。『正倉院文書』には口径4寸の油杯3,100口を焼くための材料が記載されており、実際に興福寺旧境内などで口径11.5cm、器高2.5cmの二彩、三彩の灯明器が出土しており、これが文献に見える「瓷油杯」とされている(巽淳一郎2004)。さらに、土師器や須恵器にもこれと同じ法量またはそれより小さい灯明器があり、これらも灯明専用器であるとされる。今回の調査で図示した須恵器58点・土師器46点の杯の中で、灯明器として使われた痕跡が残る須恵器は22%、土師器においては74%にも上る。特に口径9～11cmを測る土師器の杯で高台を持たないものは29点みられるが、その内23点に灯明器として使用された痕跡が残っている。これらをもとにみると、221～225の様に口縁部が体部から屈曲し、外傾させているものがある。この形態は畿内で須恵器の灯明専用器とされるものにもみられる形態にも似ており、この口縁部が外傾するものが土師器の灯明専用器である可能性も考えられる。また、口径12cm以上を測る土師器・須恵器については食器を転用した灯明器であるとみられ、野田遺跡においては転用灯明器あるいは灯明専用器の割合が多いことも特徴の一つである。

遺構外の出土遺物としては、土師器では畿内産土師器が1点出土している。112はロクロを使用しておらず、底部にはナデ調整を施し、指頭圧痕が残り、内面には暗文もみられ、他の土師器とは明らかに異なるものである。赤色塗彩したものは4点(15・111・238・250)出土している。杯が3点、皿が1点で、いずれも内外面に塗彩が認められる。赤色塗彩の土師器は県内の古代遺跡でもよくみられるものであり、特に下ノ坪遺跡(池澤俊幸1998)では多く出土している。下ノ坪遺跡の赤色塗彩土師器は、あえて灰白色の胎土を用いていることから、畿内産土師器の模倣というだけではなく、その用途には特殊性があるとされている。野田遺跡においても、出土数は限られているが、あえて灰白色の胎土を用いるものがある。さらに、野田遺跡では須恵器に赤色塗彩しているものが3点(23・120・136)ある。23・136は杯で、内面にのみ赤彩がみられ、120は蓋で、内外面に赤彩がみられる。23については内底面にのみ赤彩がみられることから、赤色顔料の容器として使用されたことも考えられ、しかも硯のように器面が平滑になっており、赤色顔料を混ぜるあるいは播りつぶすといった用途に用いられたことも考えられる。しかしながら120については明らかに外面にも意図的に塗彩したことが窺われ、土師器と同様に特殊な用途、強いて言えば、祭祀や儀礼などに使われた可能性もあるのではないだ

ろうか。

その他、須恵器では墨書土器(121)が出土している。121は輪状のつまみを有する蓋で、内面に「密」の文字が書かれている。

その他の遺物としては二彩陶器や緑釉陶器、黒色土器などが出土している。二彩陶器は高知県内では深淵遺跡(野市町教育委員会1989)で細片が5点出土しているが、小壺は初めての出土である。奈良三彩は神祇・仏教・呪術・葬送等の祭事に関する遺跡で出土することが多く、特に小壺は、呪法に係る儀礼や地鎮などに使われるとされ(巽淳一郎2004)、特殊な用途に用いられる遺物でもあるといえよう。緑釉陶器は図示し得るものはなかったが、細片が2点出土している。野田遺跡の西方約250mに位置する光永・岡ノ下遺跡(高知県・財高知県2000)では、曾我遺跡(高知県野市町教育委員会1989)について県内では2番目の出土量である34点が出土していることは注目すべきことであり、9世紀後半から10世紀前半を中心とするものが出土している。黒色土器は1点(30)が出土している。この黒色土器は、内黒で高台を有さず、内面には暗文がみられ、畿内産でも比較的初期のものであり、9世紀後半と位置付けられる。この時期の黒色土器は畿外では西日本の官衙や寺院跡から多く出土するとされ(森隆1995)、県内では風指遺跡(高知県1989)で出土している。この時期の畿内産黒色土器が県内で出土することは少なく、畿内との結びつきを感じさせる遺物である。

特殊なものとしては埴仏がみられる。埴仏は畿内を中心に出土する遺物で、特に寺院跡で多くみられる。四国では香川県下司廃寺跡(大平要1975)で三尊埴仏が1点出土しているほかはみられず、県内では初めての出土である。今回出土した埴仏は小型独尊のもので、上半身の一部が残存する。方形の埴面に菩薩像を配し、背面はハケ調整を施している。図様や大きさなどが類似するものは富山県松永遺跡(倉吉博物館1992)にみられるが、独尊埴仏は多種多様で同系関係のものは少なく、野田遺跡出土の埴仏についても同系のもは認められない。また、像様は不鮮明な部分が多く、奈良時代の遺物と考えられる。地方の寺院跡などの遺跡で単独で出土する埴仏の多くは、壁面装飾ではなく、礼拝対象として用いられた可能性が高いとされており(倉吉博物館1992・清水明博1995)、野田遺跡においても堂に安置されたのではないだろうか。

これらの出土遺物は8世紀中頃から10世紀にかけてのもので、ピークは8世紀末から9世紀前半と考えられ、この時期には寺院が建立されていたとみられる。創建時期については明らかにできなかったが、116や440のように5世紀末から6世紀初めの遺物や、297やかえりを有する須恵器の蓋など7世紀に上る遺物も僅かながらみられ、律令期以前の遺構が存在する可能性も窺わせている。また、官衙関連遺跡とされる隣接する光永・岡ノ下遺跡とはほぼ同時期に存在していたといえる。光永・岡ノ下遺跡本遺跡との間は旧河川あるいは低湿地であったとみられるが、その間約250mであり、充分に目視できる位置にあり、少なからず本遺跡との関連があると考えられる。光永・岡ノ下遺跡では明確な建物跡は確認されていないが、畿内産土師器や緑釉陶器、そして須恵器の鉄鉢も出土している。光永・岡ノ下遺跡の性格については明らかでない部分も多いが、官衙関連遺跡であるなら本遺跡もその関連の中で考えていく必要があるだろう。

今回の調査では瓦や埴仏などの寺院跡を裏付ける遺物や、寺院跡に伴う建物跡などを確認した。しかしながら、現在では調査区の小字「白石」には寺に関連する地名は残っておらず、文献等にも古

2. 古代の瓦について

代寺院の記載はない。長宗我部地検帳においても屋敷または畠になっており、中世末には古代寺院の存在は忘れ去られている。このような寺院の存在を発掘調査によって明らかにできたことは、地域の歴史を考える上で貴重な資料であり、大きな成果であったといえよう。(徳平)

2. 古代の瓦について

今回の調査ではコンテナケース 100箱を越える瓦が出土しており、この地に古代の瓦葺き建物が存在したことは間違いなさであろう。出土した瓦は軒丸瓦、丸瓦、平瓦で、軒平瓦は確認できなかった。これらの瓦は、凹面に布目圧痕が残り、胎土には砂粒を多く含み、色調は灰色またはにぶい橙色を呈していた。焼成は須恵質ではあるが、やや軟質な感を受けるものが多くみられた。

これらの瓦で最も多く出土したのが平瓦である。平瓦は凹面に布目圧痕と模骨痕がみられ、凸面はナデ調整を行った後に、タタキを行うものがみられた。タタキ目は縄目(170・172)、細目の格子目(162・174)、粗目の格子目(165・235)の3種みられた。縄目は凸面全面に施され、細目の格子目は部分的にタタキ目が残るものが多くみられた。粗目の格子目は235の様に、縦横3列にスタンプ状に施され、文様化しているようなものもみられた。

丸瓦は図示し得たものは少ないが、凹面は平瓦と同様に布目圧痕と模骨痕がみられ、凸面は丁寧なナデ調整を施しており、タタキ目は残存していなかった。

軒丸瓦は6点が出土している。遺物包含層からの出土が多く、遺構ではSX-102から1点が出土した。出土した軒丸瓦は1種で、すべて素弁八葉蓮華文である。瓦当は径17~18cmを測り、周縁は摩耗するものも多いが、圏線状の浅い溝が残存しているものもみられる。花卉は稜線を有し、花卉端は反転し、端部は直線的である。間弁は三角形を呈し、肉厚である。中房の連子は摩耗するため不明瞭であるが、12は1+5顆、266は1+8顆とみられる。また、丸瓦部は器高が高く、瓦当周縁の約2/3程度を覆い、瓦当との接合は、瓦当上端より下側に丸瓦を置き、その上下に補足粘土を厚く貼付しており、奈良時代の特徴がみられる。

この軒丸瓦と同型式のものが春野町大寺廃寺跡から出土している(岡本健児1989)。春野町大寺廃寺跡の軒丸瓦は表採されたものであり、発掘調査は行われておらず遺構や時期については不明である。大寺廃寺跡の軒丸瓦は径16.6cmを測り、瓦当文様は野田遺跡出土の軒丸瓦と同様である。瓦当との接合は、瓦当上端に丸瓦

を置き、その内側にのみ補足粘土を貼付しており、野田遺跡出土の軒丸瓦とは若干異なるが、丸瓦は瓦当周縁の約2/3程度を覆うことや、補足粘土が厚く、瓦当の厚さは2.9cmを測る点などは奈

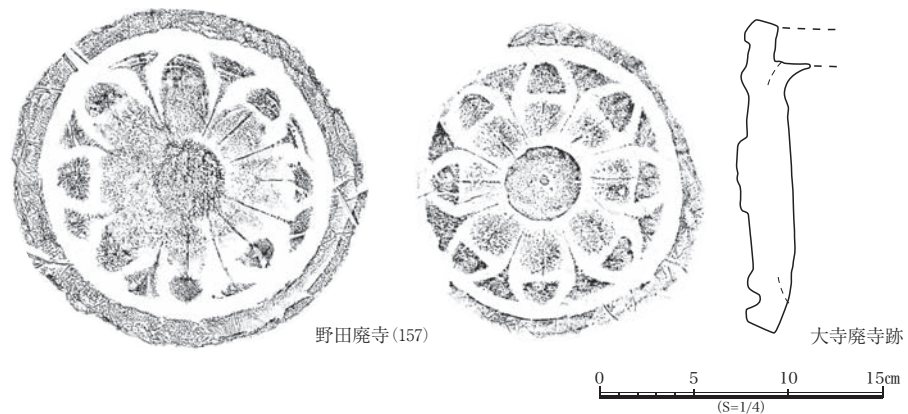


Fig.160 軒丸瓦

良時代の特徴であり、大寺廃寺跡の軒丸瓦も野田遺跡出土軒丸瓦とほぼ同時期ではないかと考えられる。

これら野田遺跡と大寺廃寺跡で出土している軒丸瓦と同系瓦とされるものが高知市秦泉寺廃寺跡で出土している(高知市1984・(財)高知県1994)。秦泉寺廃寺跡では素弁軒丸瓦が三種出土しており、一種はその時期を白鳳期後半とされ、その他二種は一種の後続であると位置付けられている。野田遺跡と大寺廃寺跡で出土しているものは、中房の連子数が少ない点や、花卉端の反りが簡略化され、端部を直線的に仕上げていることから、秦泉寺廃寺跡と立善寺跡遺跡よりも後続するものと考えられる。また、この秦泉寺廃寺跡の瓦のモデルは、地方寺院用のモデルとして畿内から遠距離の地方向けに製作されて配布されたことが看取され、中央律令政権の政治的影響を内包した官的性格を帯びるものであるとも指摘されている。そして、秦泉寺廃寺跡は「秦地区」にあることから、大寺廃寺跡は『正倉院南倉大幡残欠』のなかに「秦勝国方」の名が記されていることから、いずれも秦氏の建立による寺院であり(岡本健児1989)、また、秦泉寺廃寺跡は律令期には官的な性格を帯び、土佐郡の郡寺とも推定されている(財)高知県1994)。

そして、大寺廃寺跡に隣接する馬場末遺跡は8世紀中頃から10世紀にかけての遺跡で、畿内系土師器や緑釉陶器、徳島平野産の黒色土器などが出土している。また、幅7.2mを測る大規模な人工河川と考えられる溝跡が確認されており、現在の新川川、かつての仁淀川分流域としての性格と政治的性格をもった遺跡とされている(財)高知県2004)。大寺廃寺跡と馬場末遺跡を結びつけるのはあまりにも早計ではあるが、官衙関連施設に隣接していた寺院であるとみられる。秦泉寺廃寺跡が土佐郡の郡寺とすると、同系瓦を有する大寺廃寺跡も官寺としての可能性を有しているのではないだろうか。大寺廃寺跡と野田廃寺は同じ吾川郡にあり、仁淀川を挟み左岸に大寺廃寺跡、右岸に野田遺跡が位置する。野田廃寺から仁淀川を通り、新川川に入ると大寺廃寺跡に至り、河川交通でも結ばれた寺院でもある。同じ吾川郡に位置し、同じ瓦を持つ寺院が、奈良時代には仁淀川の兩岸に存在していたことは疑いようがなく、律令期には官的様相を有し、密接な関連をもつ寺院であったのであろう。もし仮にこれらの寺院跡が郡寺であったとするなら、時期差があり移った可能性や、吾川郡に同時期に2つの郡寺があった可能性、9世紀第2四半期頃に吾川郡から高岡郡が分かれたのを期に、野田廃寺が高岡郡の郡寺となった可能性も考えられる。しかしながら、郡寺とするには根拠に乏しく、今後の課題である。

(徳平)

3. 土師器と土師質土器について

(1) はじめに

高知県では、かつて古代の素焼土器を「土師器」、中世の素焼土器を「土師質土器」と称していた。しかし、その明確な識別が提示されることはなかった。このような中1980年代の後半から1990年代にかけて、土師器とは異なる成形技法である回転台土師器やロクロ土師器などの名称が提示されるようになり(森1986・1994)、畿内以外の古代から中世にかけての素焼土器研究に一石を投じた。そのような頃、南四国ではこの土佐市バイパスの調査が素焼土器の峻別の契機となり、その方向性を提示することとなった(廣田2000)。そして、今回その転換期を示唆する注目される遺物が出土するに至った。

3. 土師器と土師質土器

(2) 土師器の高杯

一般に、土師器の高杯は、その脚台に面取した柱状の脚部が付き、時代が下るに従いその脚高が高くなるとされる。今回出土した高杯(Fig.161)は、ロクロを使用せず作られヘラ磨きが施された杯部に粘土紐巻き上げ水挽成形⁽¹⁾された脚部が付いている。

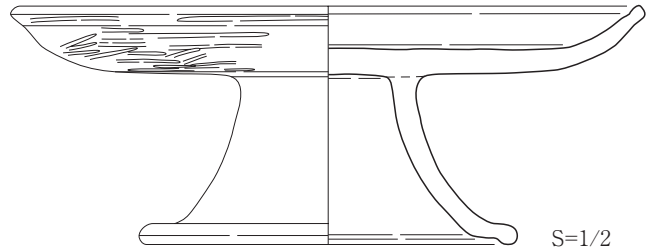


Fig.161 土師器(323)

焼成は異なるものの脚部はまさに須恵器の脚部そのものであり、186や213と全く同じ作り⁽²⁾である。換言すれば、土師器の皿に、須恵器の脚が付いたものと言えよう。西側の自然堤防上に立地する光永・岡ノ下遺跡からは同じ形態の脚部に、面取を模したかのような脚部⁽³⁾が出土している。

南四国には一方で、所謂土師器の脚部が付いた高杯も存在する。具体的には野市町下ノ坪遺跡(野市町1998)や南国市西野々遺跡の例(Fig.162)などにみられるように併存していたものと考えられる。それが畿内からの搬入品に限られたか判然としないが、少なくとも在地生産された土師器の中には前述の組み合わせで製作された高杯が存在したことは間違いなかろう。では、このことをどのような現象として捉えることができるのであろうか。

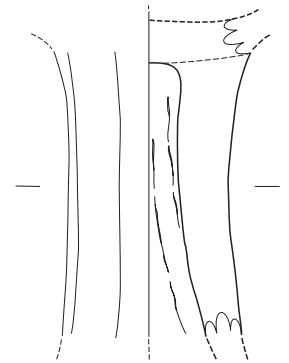


Fig.162 土師器脚
(現地説明会資料より)

そこには少なくともロクロの使用、さらには須恵器工人との関わりに言及しなければならないものと思われる。そして、ここに南四国における土師器生産の転換期を見出すことができないであろうか。換言すれば、この頃から土師器の生産にロクロの使用が徐々に始まったとみることはできるのではなかろうか。時期的には8世紀後半となろう。

(3) ロクロの使用と底部外面

ロクロの使用を端的に見出すことができるのは、底部外面に残るロクロからの切り離しの際の痕跡である。古墳時代の須恵器ではヘラ起しの後に回転ヘラ削り調整を行うことが多いので、その痕跡を確認すること⁽⁴⁾は難しいが、皿形式の須恵器⁽⁵⁾からは識別することが可能である。一方で、概して古い形態のものではナデ調整を加え、その痕跡を消している例もみられる。

また、ロクロの回転を利用した切り離し手法には回転ヘラ切りと回転糸切りがあり、前者の方が概して古く、後者の方が後出といえるが、南四国でも地域差がみられ、一元的に回転ヘラ切りから回転糸切りに転換した⁽⁶⁾とは言い難い。このようなロクロ使用の痕跡は、その痕跡そのもの以外にも底部の形態、特にその断面形態によって識別することができる。

すなわち、回転ヘラ切りのものは、底部が水平もしくは内側が外側より高くなる傾向があり、底部の内側が接地した際に外側がやや浮いた状態になることが多い。一方、回転糸切り底の場合は、底部が水平もしくは内側が外側より低くなる傾向があり、所謂上げ底風な形状をなし、最も低くなるのが糸が交差する間際で外側に寄った部分である。このような傾向は時代が下るに従って顕著となってくる。

一方、ロクロを使用しなくても製作台から切り離す際にヘラを使用したのがみられる。しかし、

その痕跡が底部外面全面に及ぶことはなく、概して外側のみ在一定幅のヘラの痕跡がみられる程度で、底部内側には底部製作時の指押さえ(指頭圧痕)などの痕跡等が残存する。また、不定方向の静止ヘラ削りが施される場合がある。いずれにしてもロクロ使用の有無は判別できる。

(4) ヨコナデ調整と回転ナデ調整

布、皮、指などで器面の凹凸を滑らかにする調整技法であり、ヨコナデ調整は土器一般に施されるヨコ方向の調整技法の総称で、特に口縁部に多用され、不定方向のナデ調整とは区別される。一方、回転ナデ調整はロクロを使用した調整技法であり、ヨコ方向に痕跡が残り、ロクロ成形された杯、碗、皿などの食膳具にみられる。

いずれの調整技法も結果的には粘土や砂粒がヨコ方向に動いた痕跡が残り、回転ナデ調整の方がヨコナデ調整に比べ均一化した痕跡になることが想定されるものの食膳具のように施される部位が限られている場合、口縁部の破片のみでそれを識別することは容易なことではなく、遺存状態が悪い場合は尚更である。このような場合は形態、胎土、焼成などから判断せざるを得ない。

(5) 土師質土器

土師器⁽⁷⁾と共に南四国では古代以降中世を通じ、一般に使用されたロクロ成形の土器であり、食膳具にみられる。その成形技法には粘土紐巻き上げ水挽成形のもの⁽⁸⁾と粘土塊からそのまま水挽したもの⁽⁹⁾の二種類あり、後者が後出であり、野田遺跡の報告⁽¹⁰⁾に準じ、前者をA技法、後者をB技法と呼称すれば、古代を通じ中世前半まではA技法が圧倒的に多く、岡豊城跡(高知県1990など)に代表される戦国期の山城などからはB技法が目立ってくる傾向⁽¹¹⁾にある。

このことを踏まえるならば、8世紀後半であってもロクロ成形の食膳具は土師質土器と呼称した方が一貫性があるものと考えられる。また、そのように捉えることがその変容や地域性を把握しやすいのではなかろうか。土師器的な口縁部の手法⁽¹²⁾がみられる8世紀後半から9世紀にかけてのものでもロクロ成形されたもの⁽¹³⁾は土師質土器であり、それは土師器から土師質土器への過渡的な様相として捉えるべきものと考えられる。また、一方で土師器は製作されており、一元的に土師器から土師質土器に転化したとは考えられず、食膳具について漸次的に移行していったものと思われる。

土師器に対するイメージと土師質土器に対するイメージは種々あるものと思われるが、古代的な形態とか中世的な形態などという感覚は一定するものではなかろう。もちろん、切り離し手法での区別は前述のとおり、様相として捉えるべきものであり、峻別の基準に当たるとは思われない。

(6) 製作工人

土師器工人が須恵器工人との関わりなしに先の高杯は製作できないであろうし、そこには密接な関係が存在したのではなかろうか。換言すれば、密接な関係があったからこそ須恵器の手法で製作し、土師器と同じ焼成を施すことが可能であったのではなかろうか。

須恵器を見た場合、古代を通じ8世紀後半、中でも末から9世紀初めにかけて出土量が最も多く、それ以降徐々に減少し、10世紀にはその生産が限定されたもの⁽¹⁴⁾になる。一方、土師質土器は9世紀頃から出土量が徐々に増え、10世紀には食膳具の多くを占めるようになる。

このような状況から製作工人の動向を推察した場合、須恵器工人は9世紀後半以降減少の一途⁽¹⁵⁾を辿り、代わって土師質土器工人が増加したことになる。焼成技法が異なるものの製作技法が同じで

4. 中世について

あるとすれば、これを単に工人の増減と捉えるのではなく、須恵器工人が土師質土器の製作に携わるようになったと考えれば、工人の増減に大きな変化はなかったとみることもできるのではなかろうか。また、土師器工人も土師質土器製作に少なからず関わったものと推察される。

(7) 結語

土師器と土師質土器については、個々のイメージがあり、簡単に峻別できるものではないかもしれない。しかし、その編年作業や地域の様相解明には製作技法が重要なキーポイントになるように思われる。 (廣田)

4. 中世について

中世の遺構は調査区西部・中央部と東部に分れる。調査区西部・中央部は地形がほぼ平坦で、建物跡や土坑などの遺構が多く、東部は地形が大きく下がり、斜面部で溝跡が確認された。このような状況は光永・岡ノ下遺跡や天神遺跡でも確認されており、自然堤防上の地形の高い部分で生活を営み、地形の低い低湿地部分では水田耕作などの生産域であったことが知られている。野田遺跡においては本調査区の西側が自然堤防頂部に当り、ちょうど県道土佐伊野線や用水路(中井筋用水)が走っている。この県道から東西に緩やかに地形が下がっており、県道に近いところで遺構が多く検出される傾向にある。

まず地形の低い調査区東部についてみると、調査区中央部との比高差約1.40mを測る落ち込み内で南北に走る溝跡が検出されている。溝跡は堆積状況より、SD-226→SD-224・225→SD-221の順に掘削されており、東側から順に掘削されていることがわかる。本調査区の東側には長池川という小さな川が流れており、おそらく当時仁淀川の増水に伴ってこの長池川も増水し、溝跡が埋没する度に新たに溝を掘削するという状況があったのではないだろうか。埋没時期についてはSD-226が13世紀前半とみられ、その後徐々に埋没していき、16世紀頃にはほぼ調査区中央部と同じ高さになったものとみられる。しかしながら平坦になった後も建物跡等は確認されず、遺跡の縁辺部であることもその要因であろうが、依然低湿地的な土地であったのではないだろうか。

調査区西部・中央部についてみると、東西に走る溝跡SD-210・211がある。この溝跡は重複していることや、溝をさらえた痕跡が窺われることから、長期に亘って存在したものと考えられ、おそらく規模は小さいものの屋敷境の区画溝として機能していたものとみられる。屋敷跡はこのSD-210・211・214を屋敷境として、東と西に存在したと考えられる。西の屋敷跡の西端は調査区外にあるものと考えられるが、東西幅は40m程度とみられる。東の屋敷跡は、落ち込み部分までとすると東西は約60mを測るが、遺構の検出状況からみると35m程度とみられ、遺跡の縁辺部と考えられることから、東端の境溝等は存在しなかったものと考えられる。また、南端については、東西に走るSD-204・206・214より南側は極端に遺構が少なく、これらの溝跡を境に遺構の様相が異なることから、これらが屋敷境の溝跡と考えられる。あるいは一連のものとする、溝の幅も小さいことから、道路の側溝として機能していた可能性も考えられる。北端については調査区外に存在するとみられるが、南北幅は25mを越えるものと考えられる。これらの屋敷跡の建物跡や区画溝は第I調査地区で確認されているものと比べると規模が小さいことが窺える。第I調査地区(高知県・跡高知県2002)は小宇

が「白石土居」に当ることもあり、屋敷を囲んでいた溝跡も幅が広く、屋敷の面積や和鏡を伴う中世墓が確認されていることなどから、名主層の存在が考えられており、おそらく中世には第I調査地区の屋敷跡を中心に野田遺跡が広がっていたとみられる。これらの屋敷跡の時期については13～16世紀の長期に亘って存続したとされている。

遺構からの出土遺物については、SK-230・231から瓦器がまとまって出土しており、13世紀前半とみられる。これらの土坑は並列していることや平面形態、瓦器の出土より同様な性格をもつとみられる。具同中山遺跡群のSK-20(助高知県2001)はSK-230・231と同様な隅丸方形を呈する土坑の両端に瓦器碗を置いており、中世墓として位置付けられている。SK-230・231の瓦器碗は意図的に置いたかは判断し難いが、墓としての可能性も考慮する必要があるだろう。それから区画溝とみられるSD-214からは15世紀の前半とみられる瓦質土器、SK-202からは16世紀末頃の瀬戸・美濃系陶器の折縁皿が出土しており、第I調査地区と同様な存続期間と考えられる。ただ、遺物包含層中ではあるが、17世紀初頭の唐津焼もみられ、集落の規模は縮小しながらも17世紀初め頃まで存続していたものとみられる。
(徳平)

5. 中世の地形について

平成7年度から行われている土佐市バイパス建設に伴う発掘調査によって、高岡地域には南北に細長い自然堤防が数条存在することが明らかになってきている。中世の項でも述べたように、遺跡は地形の高い自然堤防上に位置する。自然堤防頂部には17世紀中頃に野中兼山によって造られたと

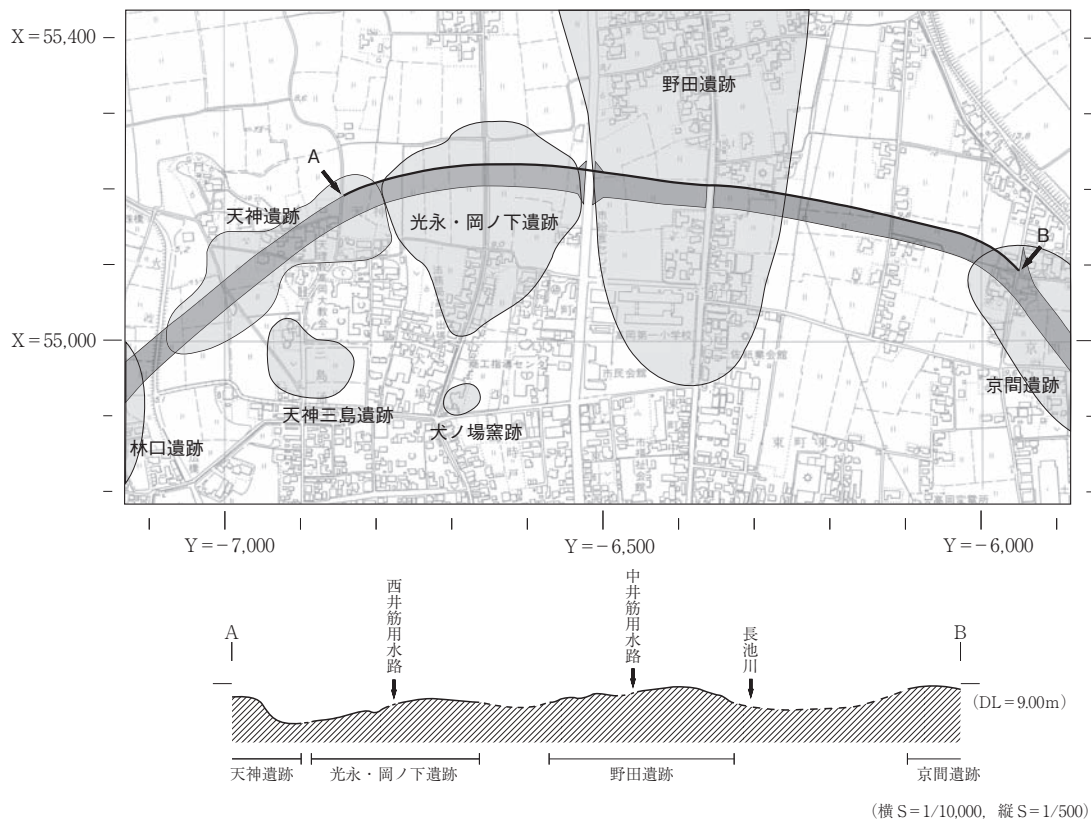


Fig.163 土佐市バイパス関連遺跡群横断面図

6. 近世について

される用水路が通っており、この用水から低い所にある水田まで水を引くということが現在でも行われている。このようなことも踏まえながら、これまでの発掘調査の成果を元に、主に中世の遺跡の立地について整理してみたい。

Fig.163 は土佐市バイパス上の遺跡の横断面である。中世遺構検出面の高さを表したものであり、中世の生活面の目安に過ぎないが、縦と横の縮尺を変えて標高を強調して示している。いずれの遺跡も標高の高い所に位置していることがわかる。天神遺跡(高知県・助高知県2001)は三島神社の鎮座する残丘の裾部に広がる遺跡で、弥生時代の遺構も確認されており、その時期から地形が高かったものと考えられる。仁淀川に近い光永・岡ノ下遺跡と野田遺跡、京間遺跡(高知県・助高知県2004)は南北に細長い自然堤防上に位置する遺跡であり、東西幅は200～250m程度である。光永・岡ノ下遺跡の東端以東は下層確認調査において、径10cm程度の河原石の礫層を確認しており、中世以前に仁淀川の氾濫の影響をかなり受けていることが窺われ、今回の調査区の北側にも「川原」「野田川」といった地名が残っている。これまでの調査では光永・岡ノ下遺跡で古墳時代の祭祀跡が確認されているが、古代以前の明確な掘方をもつ遺構は確認されておらず、天神遺跡よりも人が住めるような状況になったのが遅いのかかもしれない。弥生時代には天神遺跡、古墳時代には光永・岡ノ下遺跡、古代には野田遺跡、中世になると京間遺跡にも集落がみられ、徐々に東へ集落が拡大していく。それは氾濫を繰り返していた仁淀川の流れが徐々に落ち着き、遺跡の立地する自然堤防上が安定してきたことを意味しているのではないだろうか。ただし、野田遺跡では縄文土器や弥生土器が採集されているので、今後その時期の遺構が確認される可能性もあるだろう。

そして遺跡間の地形の低い部分は、遺物が少なく、溝跡のみが確認される場合が多い。天神遺跡と光永・岡ノ下遺跡の間の低地部分は南北と東西の溝が検出されており、マンガンの堆積層を確認していることから水田の区画溝とみられる。同じ状況は野田遺跡の東端部、京間遺跡の西端部でもみられ、中世には低湿地を利用した水田耕作が営まれていたことが窺われる。(徳平)

6. 近世について

近世の遺構は調査区西部ではみられず、調査区西部と中央部で特に多くみられた。調査区西部では掘立柱建物跡や土坑、溝跡などがみられ、比較的規模が大きい掘立柱建物跡は調査区北西部に多い。調査区北西部ではこれらの掘立柱建物跡を取り囲むように溝跡と土坑が配置されており、これらの遺構で囲まれた区画が一つの屋敷地とみられる。SK-328・337は大規模な土坑で、平面の一部に河原石を貼り付けていた部分もみられ、また、最下層の埋土は粘土質シルトであり、貯水施設や遊水地の様な用途として用いられたものとみられる。そして、SD-308はSK-328とSK-337を繋いでいる溝跡で、この溝跡の東端の底には板が敷かれていた。この調査区の西側には用水路が通っていることから、この用水路からSD-304、SK-328、SD-308を通してSK-337に水を貯めていたとみられ、大掛りな水利施設と考えられる。これらの遺構の埋土からは18世紀後半から19世紀前半にかけての肥前系陶磁器や瀬戸・美濃系陶器、瓦などが出土している。このSK-337のような大掛りな遺構が単なる屋敷内に存在するとは考え難く、用水路の際にあることや19世紀前半には高岡でも製紙が盛んに行われていたことから(土佐市史編纂委員会1978)、製紙関連の施設である可能性が

考えられよう。明治中頃には野田においても用水路沿いの水田の一部に、三和土で固めた冬場の紙草の晒し場ができていたようであり、そのような用途に利用されたのではないだろうか。

この区画外の遺構としては、調査区南西部では畝状遺構を確認している。これらの畝状遺構は非常に小規模なものであり、屋敷地内に作られた畝跡ではないだろうか。また、調査区中央部では検出されているが建物跡は少なく、規模も小さく、やや閑散とした状況がみられる。さらに調査区東部においては若干地形が下がっており、遺構は検出されなかった。調査区北西部は大掛りな水利施設がみられるが、一方では農村的な印象を受ける。19世紀には現在の旧国道56号線を中心に商店などがみられたようで、この時期には現在と同じように本調査区より南にこの地域の中心があるといえよう。（徳平）

7. 炉跡について

今回の調査では焼土を伴う遺構を確認している。同様な遺構は隣接する京間遺跡でも窯跡として報告しており、5基が確認されている（高知県・財高知県2004）。野田遺跡では15基を確認しており、平面形はSK-332のような楕円形を二つ繋げただるま形を呈し、全長は大きなもので約2m、幅は0.90m前後を測る。ほとんどの遺構は一つの楕円形を呈する部分に焼土を伴い、床面や壁面、天井部の一部に焼土がみられた。床面は焼土が見られる部分の方が極僅かに低くなっており、床面の焼土の上には炭化物がみられるものもあった。SK-316・117は天井部の一部が残存しており、SK-316は床面と天井部の間の残存高は30cmで、完存しているとおそらく40cm近くになるものと思われる。天井部はいずれも焼土を伴う部分の方が高いとみられ、焼土が見られない部分はSK-316が約20cm、SK-117は約16cmを測り、非常に低くなっている。さらにSK-316には焼土のみられる部分の壁面から方形を呈する煙道とみられる掘方が続いており、その壁面には焼土もみられた。これらの遺構の埋土からは、図示できるものは出土していないが、土師質土器片やSK-331からは青磁片と肥前系の染付片が出土している。京間遺跡の遺構からは唐津焼片が出土しているものがある。また、SK-316・317、SK-324～326はいずれも18世紀後半以降の溝跡に切られており、これらの炉跡はそれ以前のものと考えられる。

焼土を伴う遺構としては炉跡として県内でも発見されている。中村市具同中山遺跡群（高知県・財高知県1992）では2基が確認されている。いずれも平面形態は楕円形を呈し、長径1mを測り、焼土と炭化物が検出されている。出土遺物はみられず、時期については不明であるが、掘立柱建物跡に伴うものだとすると13～15世紀のものであると思われる。南国市田村遺跡群（高知県1986）では13基が確認されており、著しく削平を受けているものとみられるが、平面形態は楕円形を呈し、長径は0.92m以内を測る。埋土の周辺部には焼土、中央部には炭化物がみられ、多量の鉄滓が出土している。これらは14世紀の野鍛冶跡と考えられている。

具同中山遺跡群と田村遺跡群の炉跡は中世であり、本遺跡とは時期も異なるとみられる。また、天井部がある鍛冶炉は県外でも見あたらず、本遺跡のものを炉跡と考えるのは難しいが、野田遺跡や京間遺跡では遺物包含層からは一定量の鉄滓が出土していることも考慮しなければならない。京間遺跡では窯跡として報告したが、土器の窯跡と考えると小さく、問題があると思われ、現在の時点では炉跡の可能性を考えたい。なお、天井部の構造については、土を盛った痕跡は確認できず、削り貫

9. 結語

いたものと考えられるが不明な点が多々有り、今後の類例の増加を期待したい。(徳平)

8. 近世作業土坑について

野田遺跡では、18世紀以降に廃棄されたとみられる底面に溝状の落ち込みが巡る円形の土坑が4基(SK-321・325・327・339)確認された。このうちSK-321・325はほぼ同じ規模で底面に溝が巡らない土坑が伴って、建物に付属した形となっている。このような土坑は県内では、佐川町上美都岐遺跡、南国市田村遺跡群、小籠遺跡などで確認されている。中でも上美都岐遺跡で確認された6基の土坑は、同じ規模の土坑が伴い、溝状の落ち込みが底面壁沿いを巡り、かつ建物に付属した形となっており、野田遺跡のものと酷似している。また、この土坑の特徴である底面を巡る溝状の落ち込みについては、平面形が円形を呈することや落ち込みが数センチと浅いことから桶状の物などを置いた痕跡ではないかと考えられている。

これら、建物に付属する桶状の用途として考えられるのは、まず便所である。現在でも、便所を廃棄する際には地域によって違いはみられるものの、砥石などを入れて埋める信仰が残っている(桂井和雄1973)。上美都岐遺跡の土坑2基からは砥石が出土しているが、野田遺跡の土坑からはそれに当たる遺物は出土していない。次に家の配置から考えた時、土佐市の一般的な家の配置は、日当たりの良い南向きに母屋を建て、西側の少し離れた位置に納屋を、南東の角若しくは北西に倉を、便所は南西の方に別棟として建てていたようである(土佐市1978)。このことから考えると、SK-325・327はSB-304の南西にあたり、丁度便所の位置に該当する。また、便所は糞尿の処理と肥料の貯蔵をかねて設けられている所が多く(高知県1978)、調査区南部で検出された畠と考えられる畝状遺構は、これらの土坑が便所である可能性を傍証するものかもしれない。また、隣接して検出された土坑は、風呂または堆肥を作るための肥料舎ではないかとも考えられる。この他の用途として、高岡では中井筋用水を生活だけでなく紙業にも利用していることも考慮しなければならない。野田遺跡も中井筋用水から屋敷に水を引き入れた溝跡や原料を浸けておくための溜め池跡等が検出されており、紙業に利用していた作業土坑の可能性も考えられる。時期や地域によって異なるが井戸・倉・便所・風呂などは一般に地相や家相の対象となる付属屋であり、「巽便所乾倉」など吉凶を考えて建ててある場合が多い(日本民俗建築学会2001)。便所の造り方もハンダや三和土、底に石を敷き詰め桶の底を抜いて作る場合がある。このように、近世に限らず屋敷は方位や信仰的な事などが大きく関係している。以上のことから野田遺跡で検出したこれらの土坑の性格は、便所もしくは紙業用の作業土坑の可能性が考えられるのではないだろうか。(大原)

9. 結語

(1) はじめに

土佐市バイパス建設に伴う発掘調査は、平成7年度の確認調査が発端となり、翌平成8年度から本格的な発掘調査に入り、整理期間を含め足掛け10年で新設された部分(第I工区)の調査がすべて終了したことになる。平成8年度から実施した本発掘調査は土佐市での最初の大規模発掘調査であったこともあり、土佐市の歴史の空白部分の多くを埋めることができ、旧地形が判明したことにより

遺跡の成立過程についても解明することができた。

調査した遺跡は、調査順に光永・岡ノ下遺跡、天神遺跡、林口遺跡、蓮池城跡北面遺跡、野田遺跡、京間遺跡の6遺跡で、調査延べ面積は約54,000㎡であった。詳細は各遺跡の報告書に譲ることにし、ここでは調査の成果と遺跡の消長を記したうえで今後の課題を挙げ結語としたい。

(2) 調査の成果

まず、最初に挙げることができるのは古代末から中世前半にかけての一連の遺構・遺物の発見であろう。各遺跡から屋敷を始めとした集落跡が確認され、搬入品と共に数多くの土師質土器が出土した。中でも、埴仏、湖州方鏡、山水双鳥鏡、蝙蝠扇、完形の龍泉窯系青磁碗など県内では初出土のものが少なくなく、高岡郡唯一となる古代寺院跡(野田廃寺)¹⁶⁾の発見は古代郡寺との繋がりを研究する上で極めて重要である。また、土師質土器を再検討し得る資料を得たことも大きな成果の一つではなかろうか。さらに、在地産を示唆する瓦器の出土や高知平野中央部との様相の違いを示す土器の出土など地域性を指摘できる資料も数多く得ることができた。さらに、地味ではあるが「はたけ」跡とみられる畝状遺構の発見も重要である。天神遺跡で検出された古代、中世、近世の3時期に互る畝

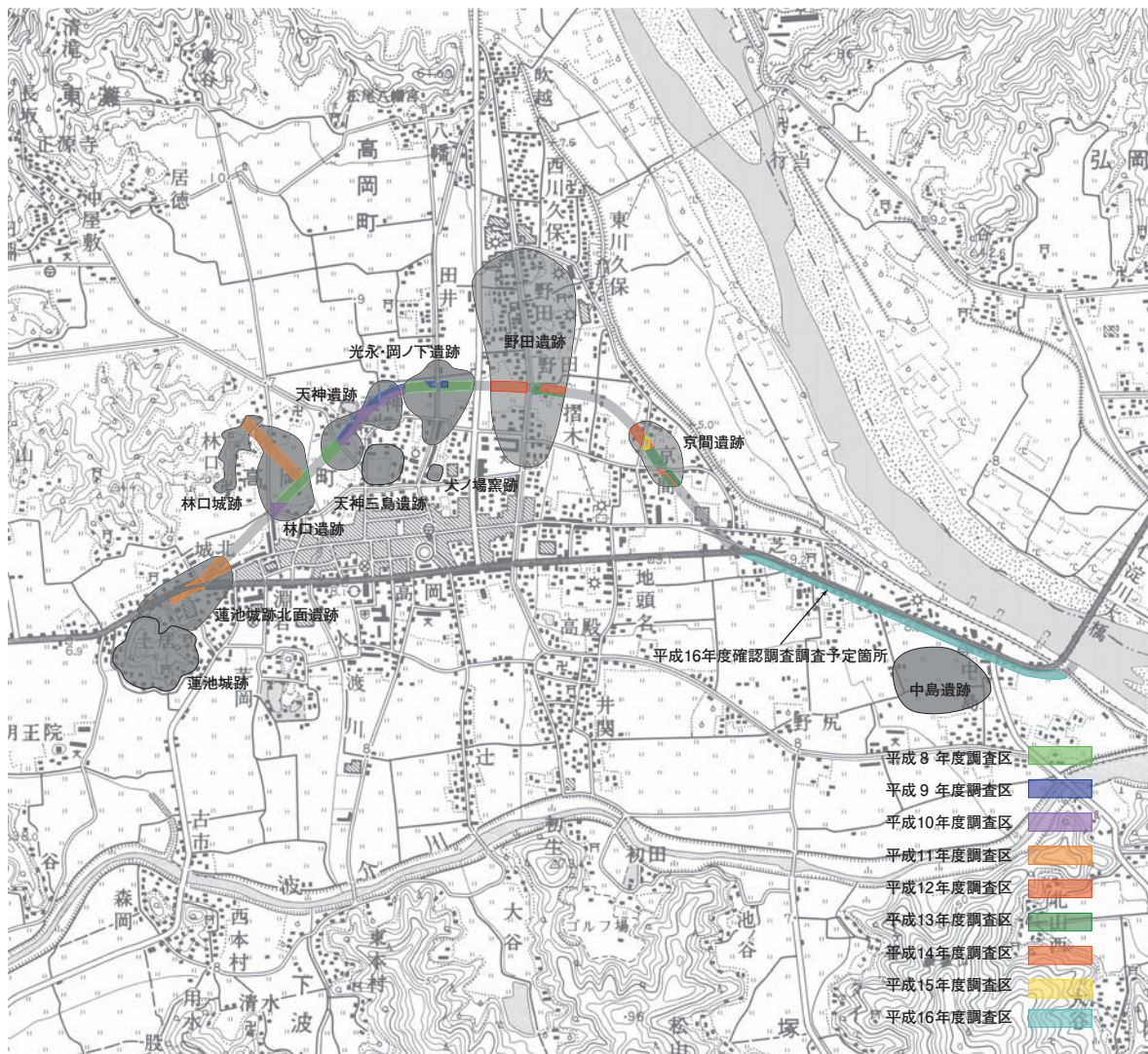


Fig.164 土佐市バイパス関係の遺跡と調査年度(S=1/25,000)

9. 結語

状遺構はほぼ同一箇所から重複しており、その立地を考えるうえで注目される。

古環境についても遺跡の立地が扇状地性低地の微高地上や残丘(低位段丘の残丘)の裾部から南北に細長く延びる自然堤防上に徐々に拡大したことが判明した。自然堤防上の遺跡は時代が下るに従って仁淀川に近い自然堤防上に拡がって行く。すなわち林口遺跡・天神遺跡, 光永・岡ノ下遺跡, 野田遺跡, 京間遺跡の順に生活域が開拓されたことになる。また, 自然堤防間に形成される後背湿地は仁淀川に近づくほどその幅を拡大する。

このように土佐市バイパス建設に伴う一連の発掘調査によって一定の成果を上げることができたのではなかろうか。

(3) 遺跡の消長

まず, 人の痕跡が確認されるのは林口遺跡で, その時期は縄文時代後期初頭であり, 四国一円に拡がるとみられる縁帯文土器を持った人たちが扇状地性低地の微高地上を生活場所としている。高知平野での最初の確認でもあり, その分布を考える上で, 重要であろう。当時は, 低湿地が各所にあり, 生活に適した場所は限られていたものと考えられ, 検出された遺構・遺物も僅かであった。林口遺跡の東方にある自然堤防はまだ安定した生活空間ではなかったとみえてその痕跡は今回の発掘調査では確認されなかった。これ以降弥生時代まで人の痕跡は途絶える。

次に, 人の痕跡が窺えるのは弥生時代前期前半の時期である。確認されたのは林口遺跡と天神遺跡で, いずれも平安時代末から鎌倉時代の遺物と伴出しているが, 周辺部に集落が形成されていたことを示唆するものであろう。特に, 林口遺跡では林口城跡東麓の溝跡(SD-401)から一定まとまって出土しており, その可能性がより強い。遺構が確認されるのは, 県内一円に遺跡が拡がる後期後半になってからであり, 遺物は, 遺構が検出されなかった林口遺跡からも出土しており, その拡がりが見える。遺構は天神遺跡の三島神社が鎮座する残丘西・北麓の微高地上で確認されており, 祭祀関連遺構とみられる土器がまとまって出土するものや集石を伴うものなどが検出され, 隣接して竪穴住居跡も確認されている。この残丘西・北麓部の微高地は一定北に拡がるとみられるものの北西には低湿地が拡がり, 東には光永・岡ノ下遺跡に繋がる後背湿地となっており, 集落を形成するにはやや狭く, 集落本体は比較的広く開ける残丘南麓に存在したのではなかろうか。

古墳時代では光永・岡ノ下遺跡から古墳時代前期の祭祀遺構⁷⁾が確認されている。遺構は後背湿地に向かう自然堤防の斜面部で検出されたことから水に関係した何らかの祭祀が行なわれたものと推察される。当該期の祭祀遺物が比較的まとまって出土した北西約1kmに所在する居徳遺跡群と少なからず関連があったものと思われる。また, この時期, 幡多郡では具同中山遺跡群や古津賀遺跡群など四国でも有数の祭祀遺跡が確認されているが, 高知平野にあっては不透明な時期で, 居徳遺跡群や光永・岡ノ下遺跡がその実態解明に資するものとなろう。一方, 後期では散発的な遺物の出土はみられたものの, 遺構の確認には至らなかった。

次に遺構が確認されたのは, 8世紀後半になってからである。天神遺跡, 光永・岡ノ下遺跡, 野田遺跡で確認されている。前述のとおり, 野田遺跡からは奈良時代に創建された寺院跡(野田廃寺)が発見された。調査範囲が寺域の南に限られたため伽藍配置は確認できなかったものの, 東西162尺(54m)の規模であったことが判明した。比較的規模の小さな寺院であるが, 県内初出土の博仏や春野町大

寺廃寺と同型式の軒丸瓦の出土などが古代寺院研究の貴重な資料となろう。天神遺跡の残丘西麓からは南から続く排水用と考えられる比較的規模の大きな溝が確認されており、残丘南には何らかの施設が存在したものと考えられる。遺物では、暗文の施された土師器、赤色塗彩土器、須恵器と共に二彩陶器や緑釉陶器などがみられ、前述のとおり古代寺院と並んで官衙関連施設の存在を示唆するものと考えられ、犬ノ場窯跡も含め天神遺跡から光永・岡ノ下遺跡、野田遺跡にかけては古代の重要拠点であったものとみられる。これ以降平安時代末にかけては明確な遺構が確認されなかったものの当該期の遺物が散見されることから引き続き集落が一定営まれていたものと推察される。

12世紀後半頃になると各遺跡で集落が形成され、これまで人の痕跡がなかった京間遺跡にも生活の営みがみられるようになり、各遺跡とも数区画の屋敷跡が検出され、その立地からみて集村化の傾向が窺え、一連の遺跡が最も伸展した時期である。貿易陶磁を始め、瓦器や東播系須恵器などの搬入品も数多く出土し、活発な商品流通も窺える。また、湖州方鏡、山水双鳥鏡、蝙蝠扇など特殊なものも出土しており、2面の鏡は名主層以上の存在、蝙蝠扇は国人領主層の存在を示唆するものではなかろうか。光永・岡ノ下遺跡と蓮池城跡北面遺跡では14世紀頃、天神遺跡では15世紀頃になると人の痕跡が途絶えるものの、林口遺跡、野田遺跡、京間遺跡では引き続き16～17世紀にかけて集落が営まれている。

18世紀・19世紀には京間遺跡の北部を中心に集落が拡がり、野田遺跡、天神遺跡、林口遺跡でも集落が少なからずみられるものの、19世紀には土佐市の中心は現在の旧国道56号線沿いに移っており、かつての面影は薄らいでいる。天神遺跡では三島神社の北麓から明治・大正期の様々な遺物がまともに出ており、当時の様子を物語っている。しかし、この時期ほとんどの遺跡は地中に埋もれ、人の記憶から忘れ去られて行く。

(3) 最後に—今後の課題—

以上のようにこの一連の発掘調査によって、これまで忘れられていた歴史が日の目を見ることができた訳であるが、あくまでも土佐市の歴史解明の糸口に過ぎない。今後、土佐市バイパスの開通により隣接地の開発に拍車がかかることが予想され、その隣接地には野田廃寺を筆頭に高知県の歴史解明においても重要な遺跡が遺存しており、この調査結果を踏まえ十分な対応を取らなければいけない。周辺部の状況を明らかにすることが、歴史に肉付けし、より鮮明な歴史像を描くことができるものと思われる。また、土佐市バイパスの発掘調査以外にも居徳遺跡群を始めとして四国横断自動車道建設に伴う発掘調査が行なわれ、新たな資料が数多く出土しており、それらとの関連を精査することが今後の研究課題であろう。

本年度からは第Ⅱ工区である芝から中島にかけての現道拡幅部分の確認調査に入っている。第Ⅰ工区に比べると調査範囲が限られ、仁淀川に近づくことから遺跡の密度は低いものと推測されるものの、遺跡の成り立ちや古環境復元には貴重な資料を提供してくれるものと期待している。(廣田)

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

『光永・岡ノ下遺跡』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 2000.11

『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 2001.2

註

- 『天神遺跡Ⅱ』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 2001.3
『林口遺跡Ⅱ・蓮池城跡北面遺跡』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 2001.8
『野田遺跡Ⅰ』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ 2002.3
『京間遺跡』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ 2004.3
『野田遺跡Ⅱ・野田廃寺』土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 2005.3

註

- (1) 中村浩氏の言う「マキアゲ・ミズビキ法」である。中村浩ほか『陶邑』Ⅰ～Ⅶ 大阪府文化財センター 1976～1990, 中村浩『須恵器』ニュー・サイエンス社 1980, 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981など, なお, この土師器は土師質土器との折衷型とも言い得るものであるが, 土師質土器に高杯と言う器形がみられないことからこれは土師器の範疇で捉えられるものである。
- (2) 西側の自然堤防上に立地する光永・岡ノ下遺跡からは酷似する須恵器の高杯の脚部(報告書Fig.27-142)が出土し, 杯部は異なるものの土佐山田町大法寺西窯跡からはほぼ同形態の脚部が出土している。その他にも類例がある。高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『光永・岡ノ下遺跡』2000, 廣田典夫『土佐の須恵器』私家本 1991など
- (3) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『光永・岡ノ下遺跡』2000のFig.25-108とPL.70に掲載している。
- (4) 古墳時代の南四国の須恵器では, Ⅱ型式の最終段階(Ⅱ-4)に杯蓋の天井部外面や杯身の底部外面にみられる。廣田佳久「南四国の須恵器-周辺地域における須恵器の変遷-」『王朝の考古学』雄山閣 1995
- (5) 所謂杯蓋にかえりが付き, 杯身に受部が消失する時期の須恵器である。(4)参照
- (6) 古代の土佐の中心であった土佐国衙跡では10世紀後半に転化している(廣田佳久「Ⅲ総括」『土佐国衙跡発掘調査第9集-金屋地区の調査-』高知県教育委員会 1989)が, 土佐市天神遺跡のSS-1からは東播系須恵器や瓦器などと共にほぼ同形態の杯で底部の切り離しが回転ヘラ切りとなったものと回転糸切りとなったものが出土しており, 少なくとも12世紀代にも回転ヘラ切りのものがある。(高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ』2001)
- (7) 8世紀後半以降土師質土器の占める割合が圧倒的に多くなるが, ロクロを使用せず製作されたものも一定出土している。中世においても後述している岡豊城跡や田村城館跡からは京都系土師器皿が少なからず出土している。また, 手づくね土器も散見される。このことを考えれば, 中世の素焼土器を総じて「土師質土器」と呼称することはないものと思われる。以前, そのようなものを土師質土器に含めて論じたことがあるが, 前述のように区別して論じた方がそのもの自体の本質を表しているものと考えられる。
- (8) 中村浩の言う須恵器のマキアゲ・ミズビキ法と同じである。
- (9) 所謂一本ビキである。
- (10) 『野田遺跡Ⅰ-土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ-』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002では, 粘土紐巻き上げ水挽成形をA技法, 後出の粘土塊からの水挽成形をB技法として報告した。
- (11) 岡豊城跡ではB技法の土師質土器以外に京都系土師器皿の出土も比較的多く, 田村城館跡からもまとめて出土しており, 京都との繋がりが窺える。
- (12) 平城宮発掘調査報告書では「口縁部・・・(中略)・・・, 端部では粘土を内側におりかえし, まるくなでつけるのを通則としている。・・・」などと表現されるものであり, 須恵器にもみられる。
- (13) 成形技法は須恵器のマキアゲ・ミズビキ法と同じであるA技法で, B技法はこの時期のものにはみられない。
- (14) 南国市奥谷南遺跡の例のように限定された場所で, 小規模な生産が行なわれていたものと考えられる。『奥谷南遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000
- (15) 陶邑にみられるように, 薪として使用していた資源の減少も視野に入れる必要がある。

(16) 報告されているように寺院の創建は秦氏との関連が考えられ、奈良時代の範疇で捉えられる。確かに奈良時代の創建となれば野田は吾川郡に属しており、高岡郡の名が出てくるのは吾川郡から新設される『続日本後紀』承和8年(841)8月庚申条からである。郡衙が設置され機能し始めたのは9世紀前半、中でも中葉に近い時期となる。出土遺物を見る限り、9世紀後半の緑釉陶器や10世紀代の遺物も一定出土しており、有力豪族が建立した寺院が高岡郡の新設に伴って郡寺となったことも十分考えられる。比江廃寺などと同じではなからうか。西側にある光永・岡ノ下遺跡からも8世紀後半から9世紀にかけての遺物が出土しており、周辺に官衙関連施設があったことはほぼ間違いなからう。その有力な候補として高岡郡衙を挙げることができる。土佐国衙と比江廃寺の関係のように、鬼門に寺跡を配置していたとすれば、旧地形からみて郡衙(郡庁)は野田遺跡の南西部ないし光永・岡ノ下遺跡の南部に存在したことになる。

この古代寺院跡は広い野田遺跡の一角にあるが、特筆される遺跡であることから今後この寺域に限って「野田廃寺」と呼称することが適切と思われる。

(17) 明確な掘方は持たず、土師器の小型壺2点・甕3点・高杯1点が折り重なるような状態で出土している。

引用・参考文献

- 池澤俊幸 1998「南四国における古代前期の土器様相－下ノ坪遺跡の成果を中心として－」『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会
- 稲垣真也編 1971『日本の美術66 古代の瓦』至文堂
- 大平要 1975「下司廃寺跡出土の埴仏片について」『瀬戸内海歴史民俗資料館だよりNo.1』瀬戸内海歴史民俗資料館
- 岡本健児 1989『日本の古代遺跡39 高知』保育社
- 桂井和雄 1973『俗信の民俗』
- 清水明博 1995「出土状況からみた埴仏用法の検討」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷 第19冊』奈良県橿原考古学研究所
- 巽淳一郎 2004「古代前期の土器」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺構編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 森郁夫 1987『考古学ライブラリー43 瓦』ニュー・サイエンス社
- 森隆 1986「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会
- 森隆 1994「回転台土師器の研究史素描」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』日本中世土器研究会
- 森隆 1995「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 倉吉博物館 1992『埴仏－土と火から生まれた仏たち－』
- 高知県 1978『高知県史』民俗編
- 高知県教育委員会 1986「第八章 Loc.1」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群 第6分冊』
- 高知県教育委員会 1989『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査Ⅱ 風指遺跡 アゾノ遺跡』
- 高知県教育委員会 1990『岡豊城跡－第1～5次発掘調査報告書－』など
- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994『西鴨地遺跡－四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第61集
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997『小籠遺跡Ⅲ－あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書－』埋蔵文化財センター第29集
- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001『秦泉寺廃寺跡発掘調査報告書－県道高知本山線道路改良工事に伴う発掘調査報告書－』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第18集
- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001『具同中山遺跡群Ⅳ－県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第59集

引用文献・参考文献

- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 具同中山遺跡群 第2分冊』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000『光永・岡ノ下遺跡－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第55集
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001『天神遺跡Ⅱ－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第60集
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『野田遺跡Ⅰ－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第73集
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004『田村遺跡群－高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』第一分冊埋蔵文化財センター第85集
- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004『京間遺跡－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第89集
- 高知県野市町教育委員会 1989『曾我遺跡発掘調査報告書』
- 高知県立図書館 1963『長宗我部地検帳 高岡郡上の一』
- 高知市教育委員会 1984『秦泉寺廃寺跡－第3次発掘調査－』高知市文化財調査報告書第5集
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2001『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品－東アジアの視野から－ 資料集』
- 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 1997『立善寺跡遺跡－阿南工業高校電子機械科第2棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第17集
- 土佐市史編纂委員会 1978『土佐市史』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2002『白鳳のイメージ－奈良県出土博覧展－』
- 南国市教育委員会 1988『土佐国分寺跡－第一次発掘調査概報－』
- 日本民俗建築学会 2001『図説民俗建築大事典』
- 野市町教育委員会 1989『深淵遺跡』
- 野市町教育委員会 1998『下ノ坪遺跡Ⅱ』
- 廣田佳久 1997『上美都岐遺跡－佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書－』佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 廣田佳久 2000「南四国における古代末の土器様相－素焼土器を中心に－」『考古学論究』第7号 立正大学考古学研究会

古代の土器の時期については以下のものを参考にした。

- 廣田佳久 1995「南四国の須恵器－周辺地域における須恵器の変遷」『王朝の考古学』雄山閣
- 吉成承三 1997「土佐の古代末から中世前期にかけての土器様相－高知平野を中心に」『中近世土器の基礎研究Ⅻ』日本中世土器研究会
- 池澤俊幸 1998「南四国における古代前期の土器様相－下ノ坪遺跡の成果を中心として－」『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会
- 池澤俊幸 2000「土佐からみた平安時代の土器」『中近世土器の基礎研究ⅩⅤ』日本中世土器研究会
- (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004『馬場末遺跡－新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡群Ⅱ区発掘調査報告書－』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第84集

圖 版



調査前風景(東より)



調査前風景(西より)



調査区西部近世遺構検出状態(北より)



調査区西部近世遺構検出状態(南より)



調査区西部近世遺構完掘状態(北より)



調査区西部近世遺構完掘状態(真上より)



調査区西部中世遺構検出状態(北より)



調査区西部中世遺構完掘状態(北より)



調査区南部中世遺構検出状態(西より)



調査区南部中世遺構完掘状態(西より)



調査区南東部中世遺構検出状態(西より)



調査区南東部中世遺構完掘状態(東より)



調査区北東部中世遺構検出状態(西より)



調査区北東部中世遺構完掘状態(南東より)



調査区中央部中近世遺構検出状態(南より)



調査区中央部中近世遺構完掘状態(北上空より)



調査区中央部古代遺構検出状態(東より)



調査区中央部古代遺構完掘状態(東より)



調査区中央部中近世遺構検出状態(西より)



調査区中央部中近世遺構完掘状態(真上より)



調査区中央部古代遺構検出状態(西より)



調査区中央部古代遺構完掘状態(西より)



調査区中央部古代遺構完掘状態(東上空より)



調査区中央部古代遺構完掘状態(真上より)



調査区中央部北壁セクション(南より)



調査区北東部北壁セクション(南より)



SB - 101・102 (東より)



SB - 101 (西より)



SB - 102 (南より)



SB - 219 ~ 225 (北西より)

PL.16



SD - 225・226 (南東より)



SK - 304 (西より)



SK - 328 セクション (西より)



SK - 328 完掘状態 (西より)



SK - 316 (南西より)



SK - 329 (北より)



SK - 331 (北より)



SK - 332 (東より)



SK - 337 (南西より)



SK - 337 (北西より)



SD - 101 瓦出土状態 (南西より)



SD - 102 瓦出土状態 (西より)



SD - 104 瓦出土状態 (南西より)



SX - 102 遺物出土状態 (北より)



SB - 101 (南より)



SD - 103 (南より)



P - 114 (西より)



SX - 101 (東より)



SK - 203 (西より)



SK - 231 (西より)



SK - 233 (北西より)



SK - 235 (南より)



SK - 237 (南より)



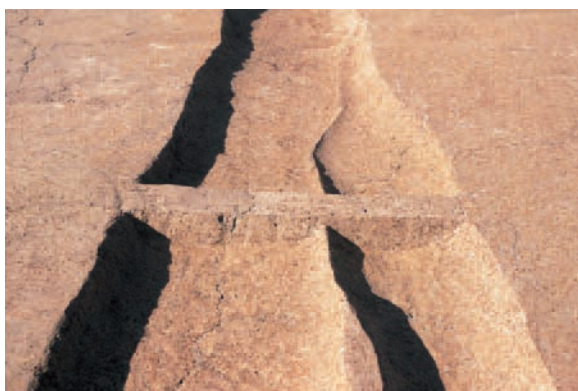
SK - 242 (東より)



SD - 201 (南より)



SD - 203 (西より)



SD - 205・207 (東より)



SD - 206 (西より)



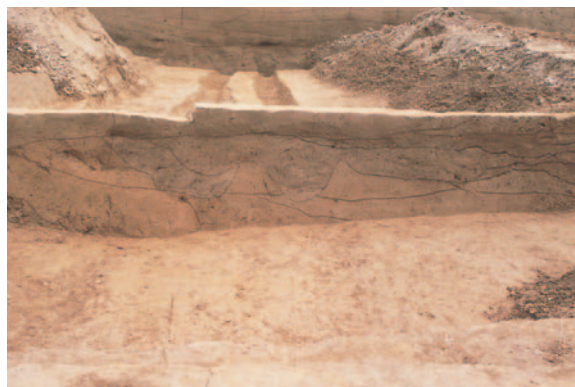
SD - 210・211 (南より)



SD - 222 (東より)



SD - 223 (南より)



SD - 225・226 (南より)



ピット集石出土状態 (北より)



SK - 302 (東より)



SK - 303 (南より)



SK - 313 (南より)



SK - 314 (東より)



SK - 321 (南より)



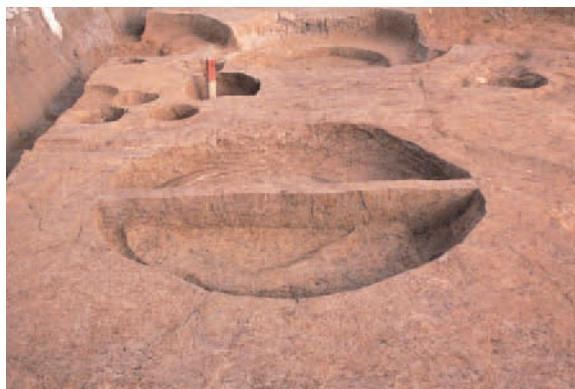
SK - 322 (南より)



SK - 323・324 (南より)



SK - 325 (南より)



SK - 327 (南より)



SK - 329 検出状態 (南より)



SK - 329 (南より)



SK - 330 (東より)



SK - 331・332 検出状態 (南東より)



SK - 334 (南より)



SK - 335 (南東より)



SK - 336 検出状態 (南より)



SK - 338 (南より)



SK - 339 (南より)



SK - 340 (南より)



SK - 341 (西より)



SK - 343 (東より)



SK - 344 (西より)



SK - 345 (東より)



SK - 351 (南東より)



SK - 354 (南より)



SK - 355 (南より)



SK - 356 (西より)



SD - 307・308 (西より)



SD - 314 (南より)



第Ⅲ層須恵器(7)出土状態(西より)



第Ⅲ層土師質土器(8)出土状態(東より)



第Ⅳ-1層青磁(59)出土状態(南より)



第Ⅳ-1層青磁(60)出土状態(南より)



第Ⅳ-3層土師質土器(71)出土状態(東より)



第Ⅳ-7層土師質土器(74)出土状態(西より)



第Ⅳ-7層土師質土器(75)出土状態(南より)



第Ⅳ-7層土師質土器(76)出土状態(南より)



第IV - 11層須恵器(78)出土状態(南より)



第IV - 11層瓦器(80)出土状態(南より)



第IV - 11層土師質土器(88)出土状態(北より)



第IV - 11層青磁(96)出土状態(南より)



第IV - 12層鉄製品(103)出土状態(南東より)



第V層土師器(104)出土状態(西より)



第V層土師器(110)出土状態(南より)



第V層土師器(115)出土状態(西より)



第V層須恵器(129)出土状態(西より)



第V層須恵器(135)出土状態(東より)



第V層瓦(157)出土状態(東より)



SD-102須恵器(213)出土状態(南より)



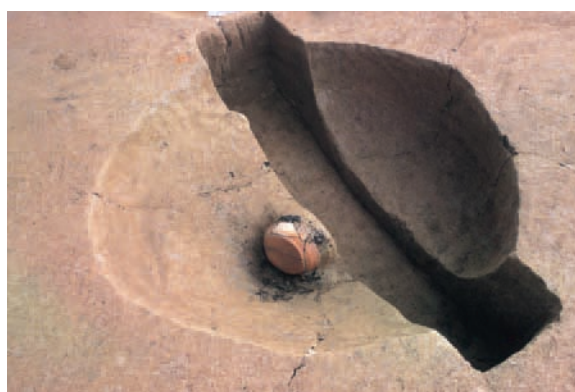
P-101遺物出土状態(南より)



P-101須恵器(216・217)出土状態(西より)



P-103土師器(220～228)出土状態(北より)



P-104土師器(229)出土状態1(北西より)



P - 104 土師器 (229) 出土状態 2 (南西より)



P - 106 遺物出土状態 (南より)



P - 109 須恵器 (234) 出土状態 (西より)



P - 111 瓦出土状態 (南より)



P - 114 須恵器 (241) 出土状態 (西より)



SX - 102 土師器 (252) 出土状態 (南より)



SX - 102 瓦 (266) 出土状態 (北より)



SB - 221 土師質土器 (269) 出土状態 (北より)



SK - 201 土師器(275)出土状態(北より)



SK - 206 土師質土器(278)出土状態(西より)



SK - 218 土師質土器(280)出土状態(南より)



SK - 230 瓦器(283)出土状態(北より)



SK - 230 瓦器(285)出土状態(北より)



SK - 231 瓦器(286)出土状態(南より)



SK - 231 瓦器(287)出土状態(北より)



SD - 211 須恵器(293)出土状態(北西より)



SD - 224 青磁(302)出土状態(南より)



P - 203 土師質土器(306)出土状態(南より)



P - 210 土師質土器(313)出土状態(西より)



P - 211 土師器(314)出土状態(南より)



P - 212 須恵器(315)出土状態(北東より)



P - 220 土師器(323)出土状態1(北西より)



P - 220 土師器(323)出土状態2(北西より)



P - 230 土師質土器(334)出土状態(東より)



P - 236 青磁(341)出土状態(南東より)



P - 241 古銭(348)出土状態(北より)



P - 249 土師質土器(356)出土状態(北東より)



P - 252 土師質土器(361) 出土状態(西より)



P - 255 土師質土器(364)出土状態(西より)



SB - 304 石製品(376)出土状態(東より)



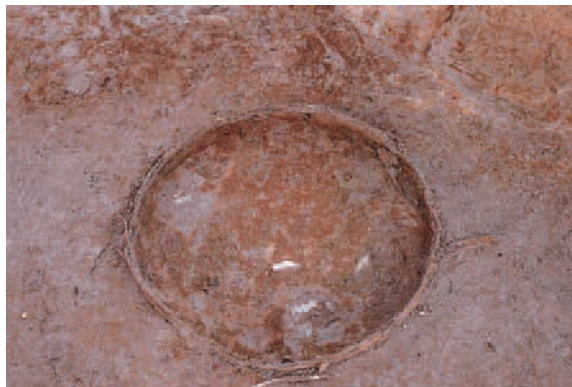
SK - 328 近世陶器(388)出土状態(北より)



SK - 328 遺物(390・399)出土状態(南より)



SK - 337瓦(418)出土状態(西より)



SK - 337曲物出土状態(南西より)



SK - 354近世磁器(427)出土状態(南より)



SK - 354近世磁器(427・429・431)出土状態(北より)



SK - 354近世磁器(431)出土状態(東より)



SK - 354遺物(433・434)出土状態(南東より)



SK - 357須恵器(440)出土状態(北東より)



P - 306古銭(454)出土状態(南東より)



SB - 101 P - 1 礎板出土状態 (北より)



SB - 101 P - 2 礎板出土状態 (南より)



SB - 101 P - 3 礎板出土状態 (南より)



SB - 101 P - 4 礎板出土状態 (南より)



SB - 101 P - 5 礎板出土状態 (南より)



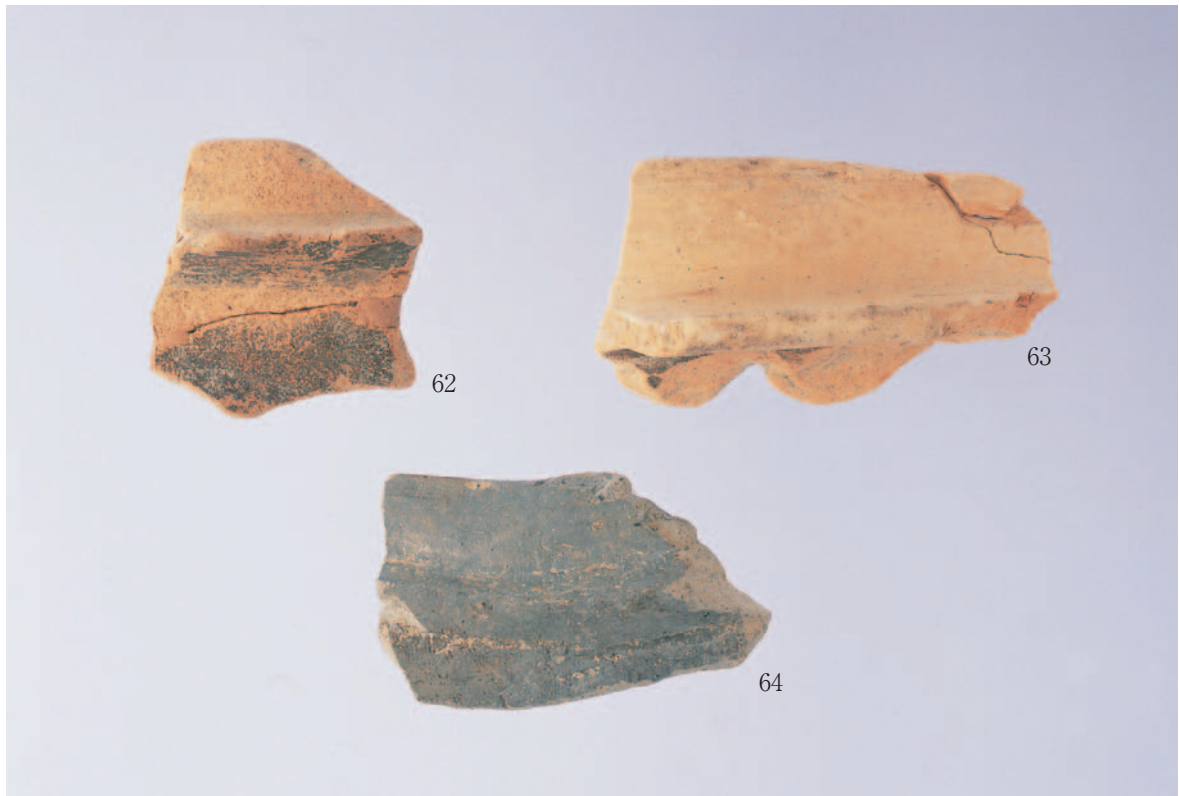
SB - 102 礎石検出状態 (南より)



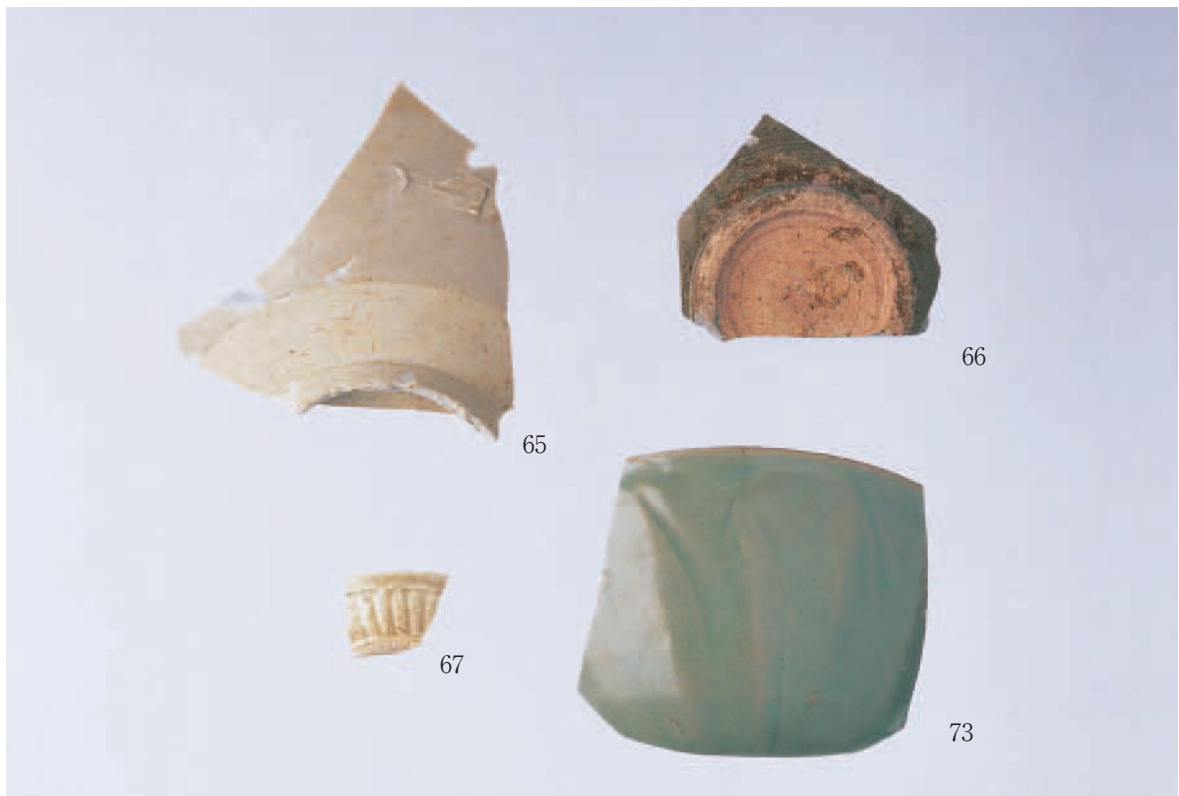
SB - 102 礎石セクション (西より)



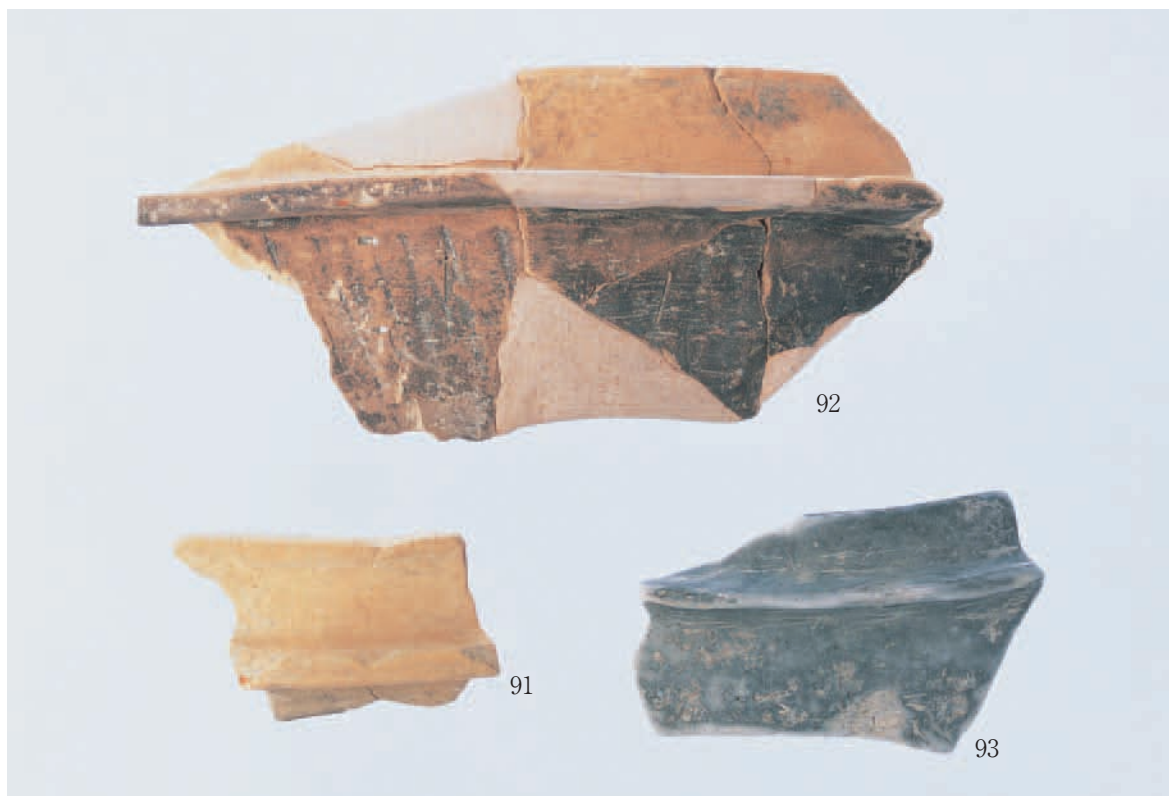
SB - 102 礎石 (南より)



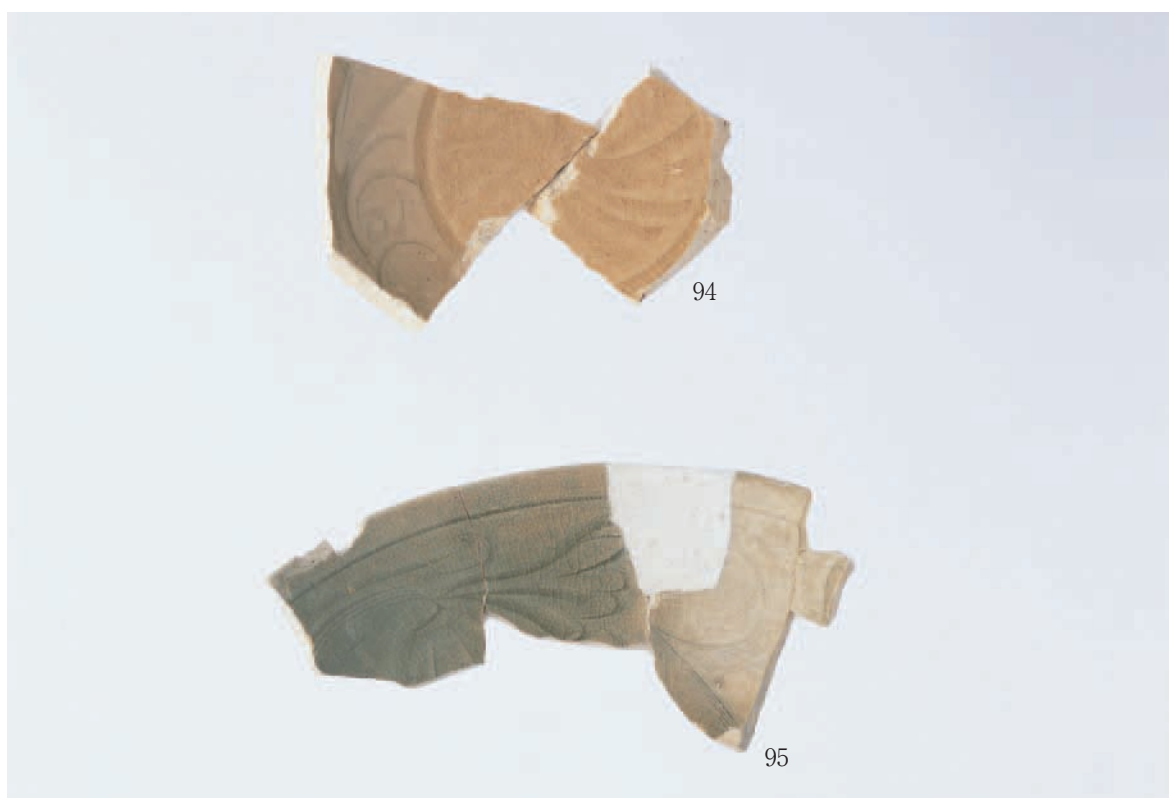
土師質土器(羽釜), 瓦質土器(羽釜)



白磁(碗), 青磁(碗), 青白磁(合子)



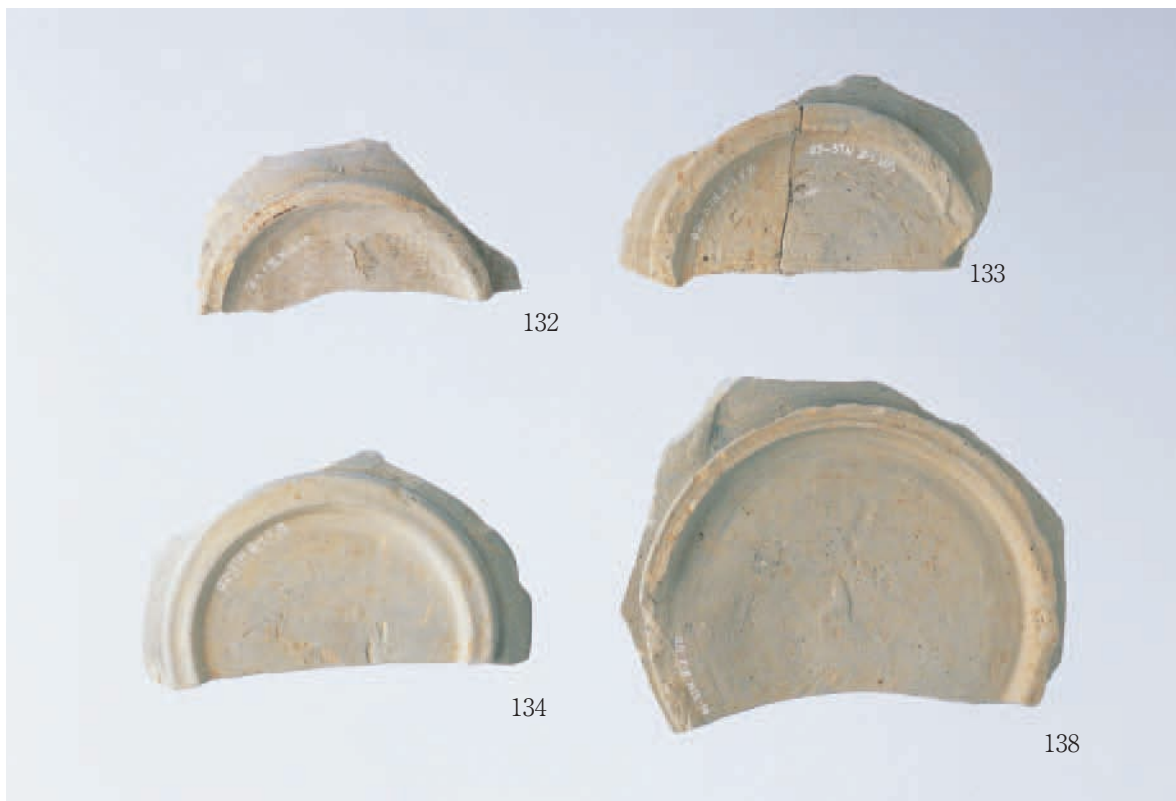
土師質土器(羽釜), 瓦質土器(羽釜)



青磁(碗)



須恵器(蓋)



須恵器(杯)



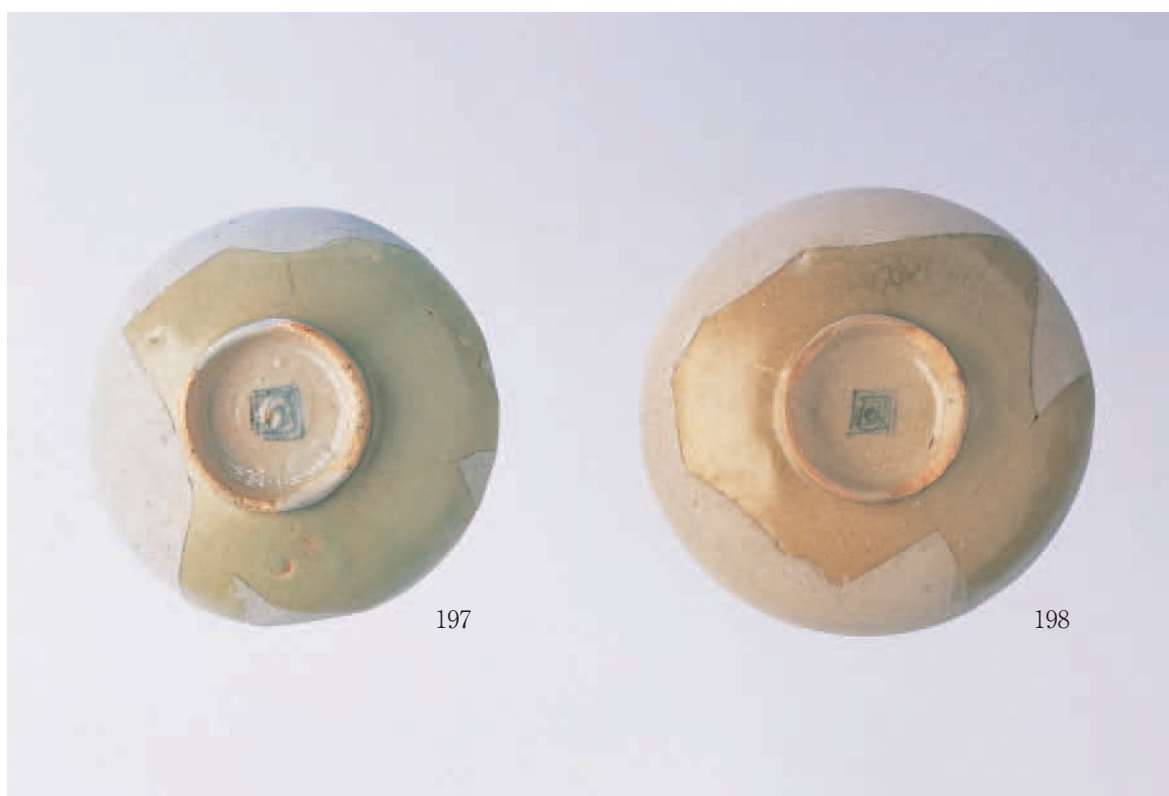
瓦(軒丸瓦)



瓦(軒丸瓦)



瓦 (軒丸瓦)



近世磁器 (蓋)



瓦(軒丸瓦)



土師質土器(小皿)



瓦 (平瓦)



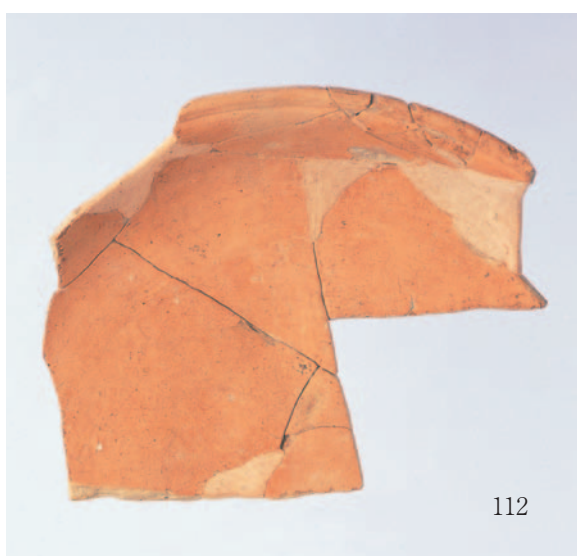
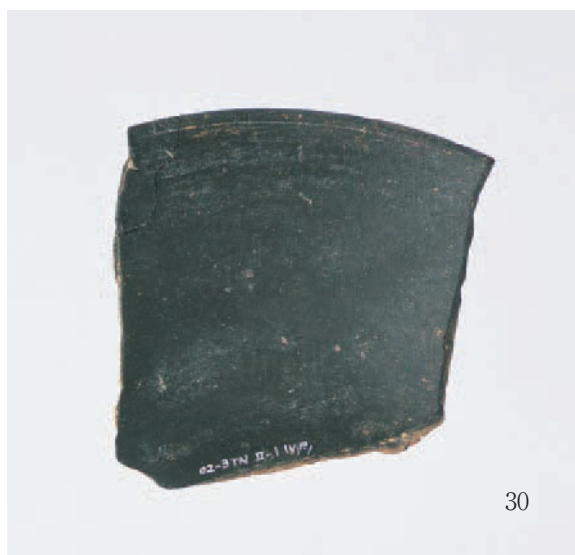
瓦(平瓦)



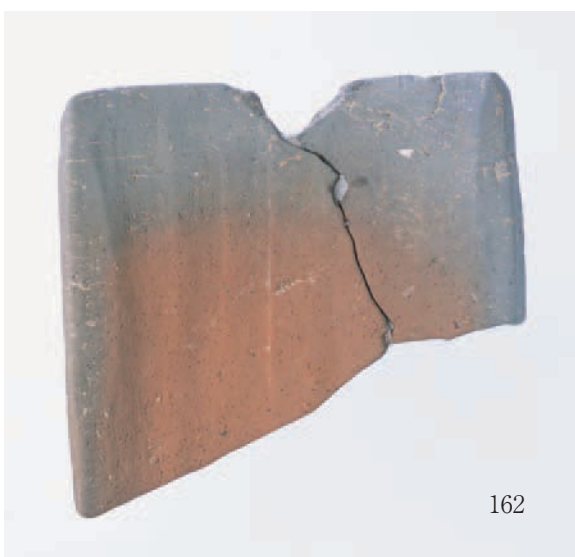
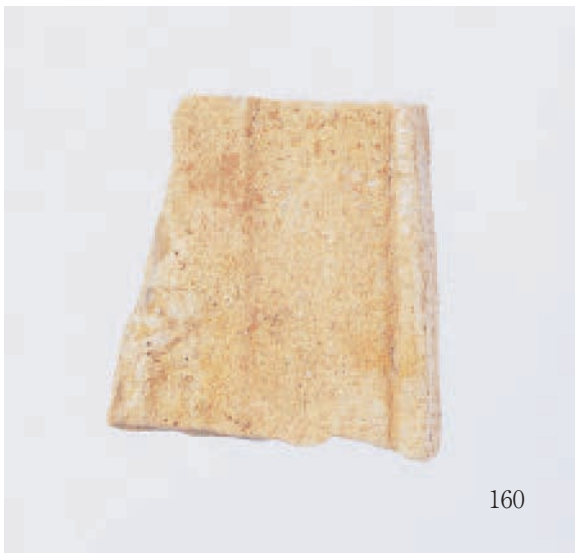
瓦 (平瓦)



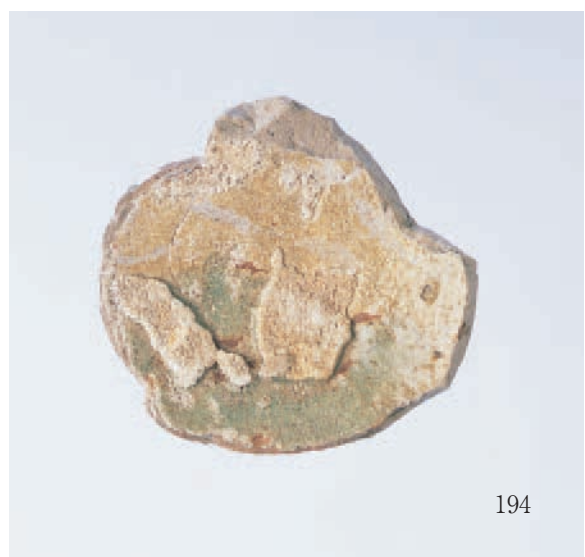
瓦(丸瓦・平瓦)



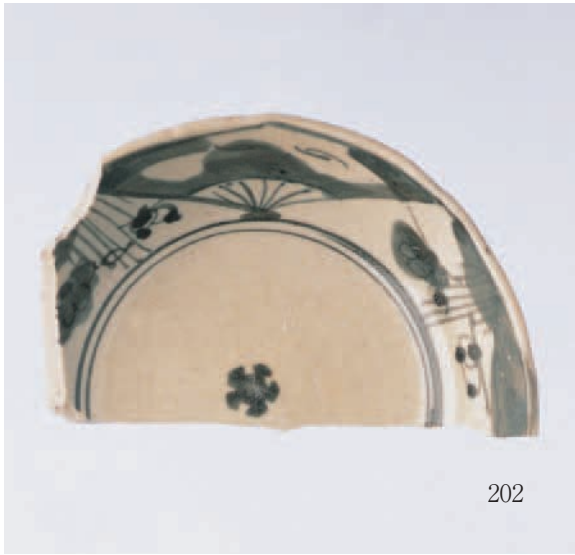
土師器(杯), 須惠器(杯·高杯·蓋), 黑色土器(椀), 瓦(軒丸瓦)



須惠器(壺), 瓦(平瓦)



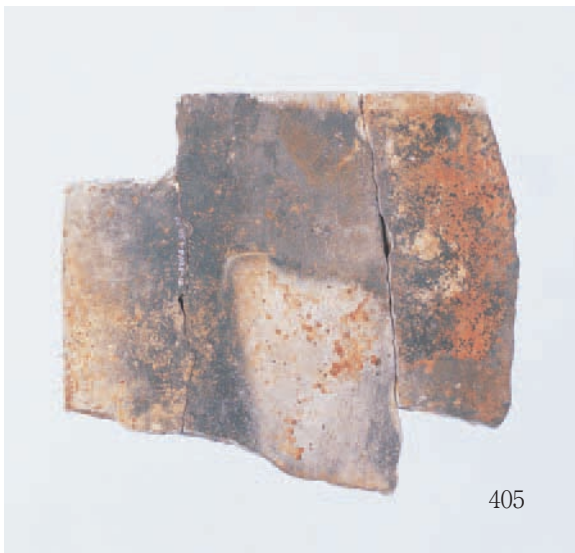
土師質土器(火鉢), 瓦(平瓦・丸瓦), 近世陶器(皿), 土製品(埴仏)



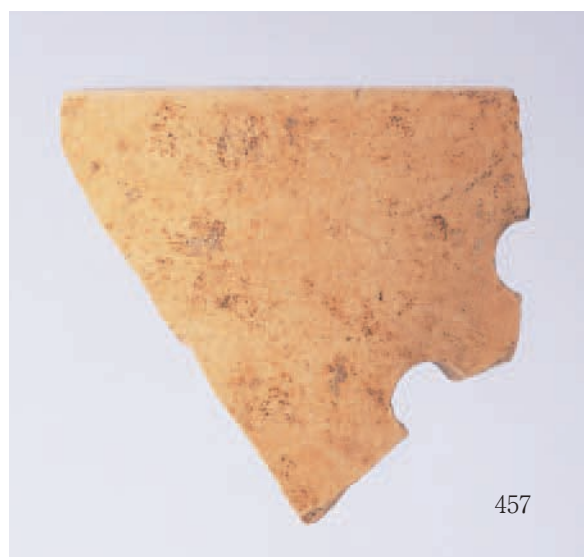
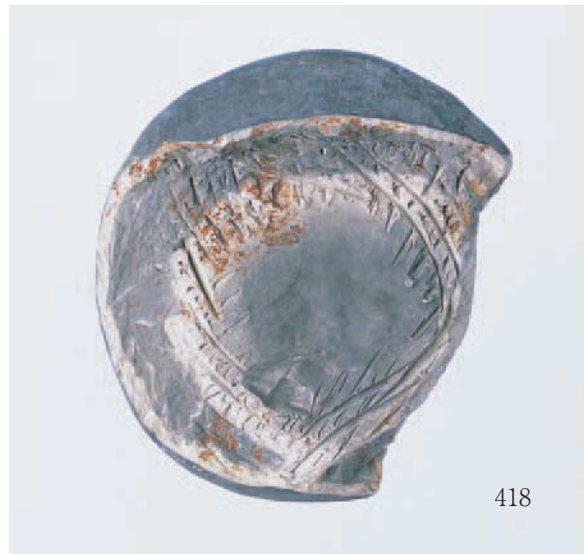
須恵器(杯・高杯), 備前焼(播鉢), 瀬戸・美濃系陶器(皿), 近世磁器(皿・瓶)



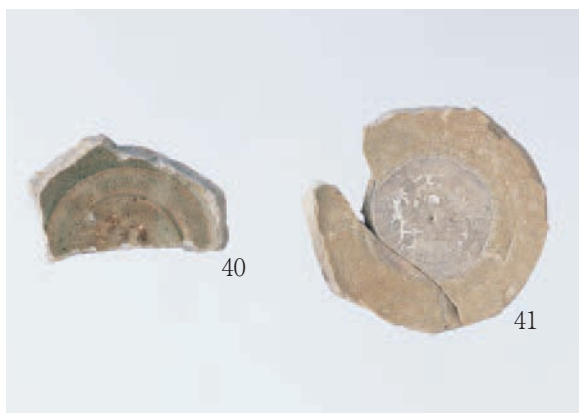
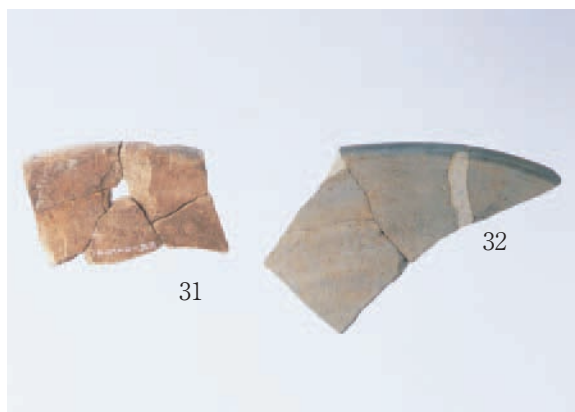
土師器(甕), 須惠器(壺), 青磁(碗), 近世陶器(鉢), 近世磁器(皿), 石製品(石鍋)



瓦(軒丸瓦・平瓦・鬼瓦), 近世陶器(壺), 近世磁器(瓶)



土師質土器(焜炉), 瓦(軒丸瓦・鳥衾), 近世陶器(蓋), 近世磁器(蓋)



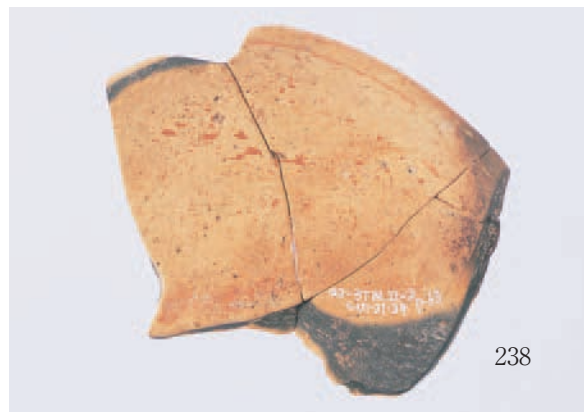
東播系須恵器(甕・片口鉢), 青磁(碗), 近世陶器(皿), 近世磁器(碗・鉢), 土製品(土錘)



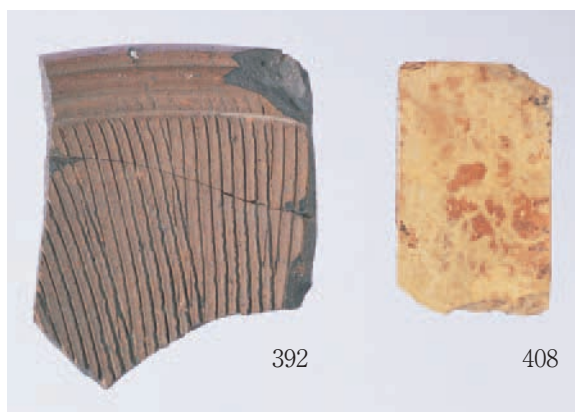
土師器(杯), 須恵器(杯・高杯・蓋), 青磁(碗)



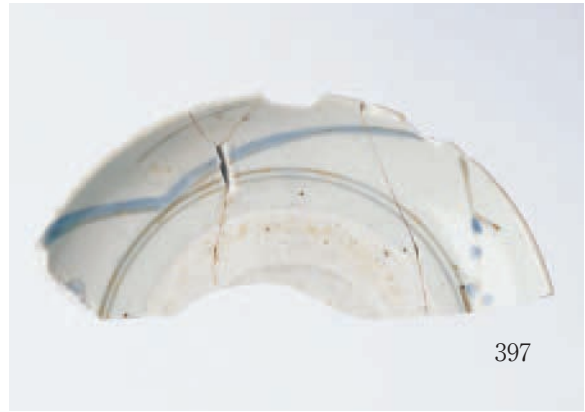
土師質土器(焜炉), 備前焼(播鉢), 瓦質土器(焜炉), 瓦(軒丸瓦), 近世陶器(碗・播鉢), 土製品(土錘), 鉄製品(釘)



土師器(皿・甕), 瓦器(椀), 青磁(碗), 近世磁器(皿)



土師器(高杯), 土師質土器(焜炉), 青磁(碗), 近世陶器(碗搗鉢), 近世磁器(碗), 土製品(土錘), 石製品(砥石), 鉄製品(釘)



近世陶器(碗), 近世磁器(碗・皿・猪口)



須惠器(甕), 土師質土器(焜炉), 近世陶器(甕・搗鉢), 近世磁器(碗・皿), 土製品(土錘), 銅製品(煙管)



土師器(杯), 須恵器(杯・壺), 土師質土器(小皿), 瓦(軒平瓦)



瓦器(碗), 東播系須恵器(片口鉢), 土師質土器(杯・小皿), 石製品(砥石), 古錢(元豐通寶)



土師器(杯), 土師質土器(杯·小皿), 青磁(碗)



土師器(杯・皿), 須恵器(杯・皿・盤), 二彩陶器(小壺)



土師器(杯), 須恵器(杯), 近世陶器(皿), 近世磁器(紅皿), 古錢(寛永通寶)



土師器(杯・皿・蓋), 須恵器(杯)



土師器(杯), 須恵器(杯・蓋), 土師質土器(小皿)



須恵器(蓋), 瓦器(小皿・椀), 土師質土器(杯・小皿), 瀬戸・美濃系陶器(皿)



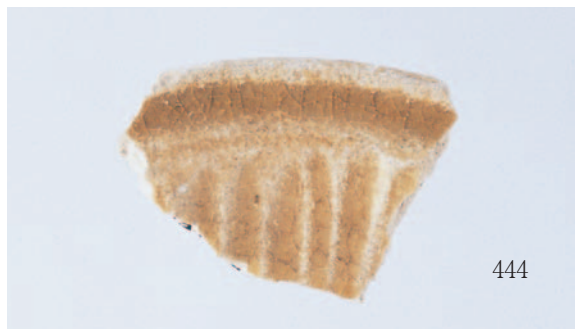
土師器(杯), 須恵器(杯), 土師質土器(小皿・羽釜), 鉄製品(刀子)



瓦器(小皿·碗), 土師質土器(小皿), 青磁(碗), 古錢(元祐通寶·熙寧元寶)



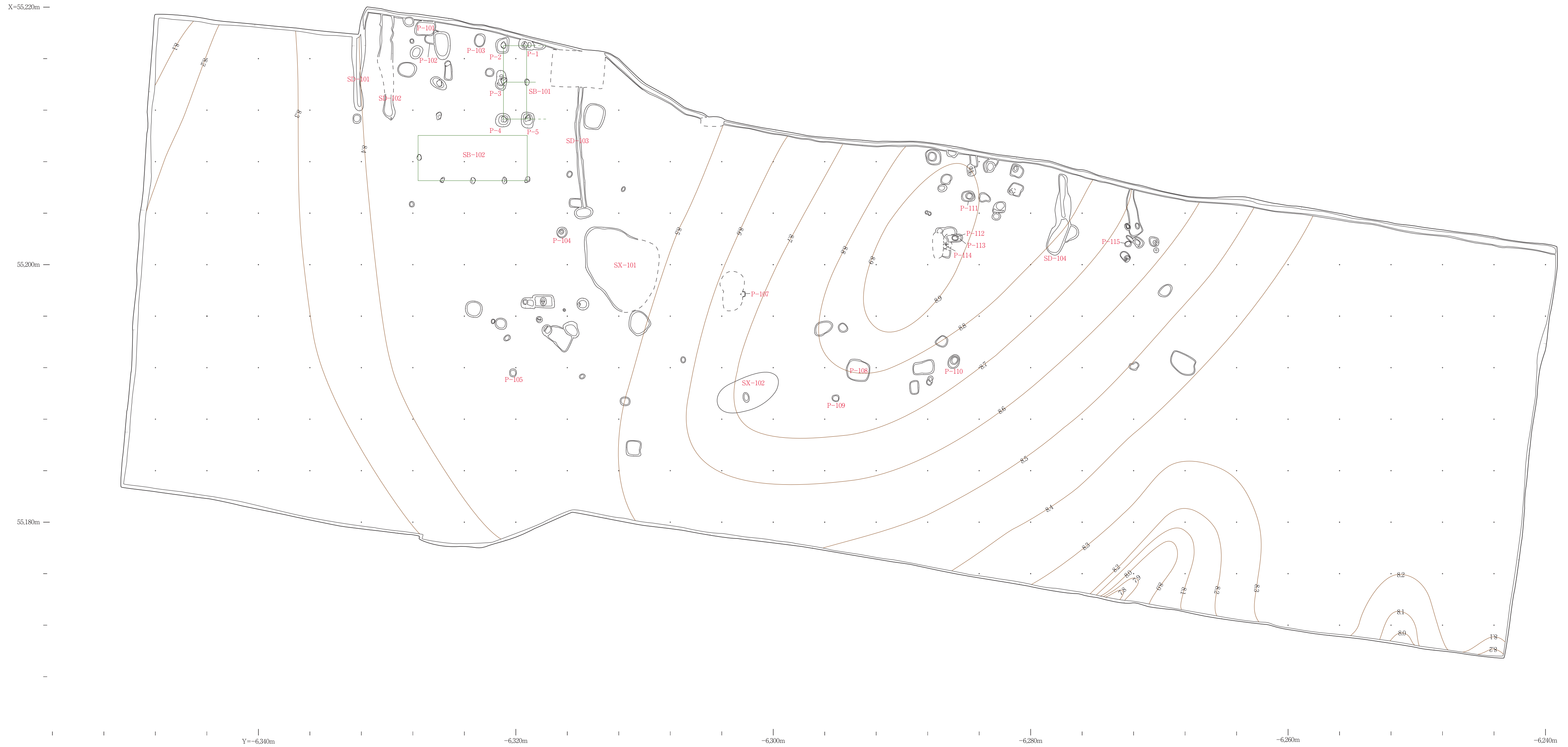
土師質土器(杯・小皿), 瀬戸・美濃系陶器(皿), 青磁(碗), 瓦(平瓦), 近世磁器(蓋), 青花(碗), 土製品(土錘), 鉄製品(短刀)



近世陶器(皿・蓋), 近世磁器(皿・紅皿・蓋), 鉄製品(皿・釘), 銅製品(煙管)

報告書抄録

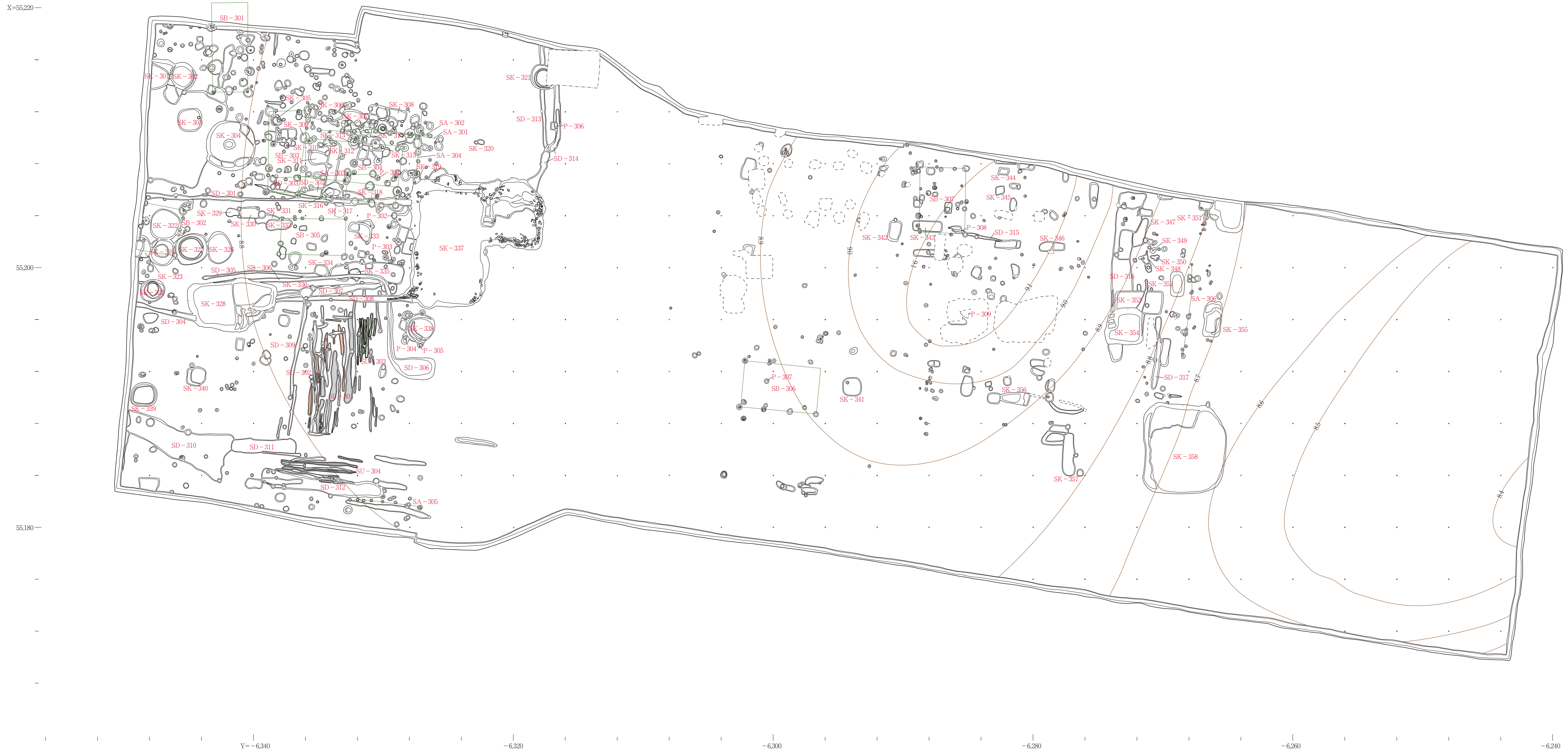
ふりがな		のだいせきに・のだはいじ						
書名		野田遺跡Ⅱ・野田廃寺						
副書名		土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次		Ⅶ						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第93集						
編著者名		廣田佳久・徳平涼子・大原直美						
編集機関		(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原南泉1437-1						
発行年月日		2005年3月18日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のだいせき 野田遺跡 のだはいじ 野田廃寺	〒781-1103 高知県土佐市 たかおかちょうへい 高岡町丙 あざしらいし 字白石	39205	050019	33° 30' 04"	133° 25' 47"	2001.11.14)) 2002.2.8 2002.5.13)) 2002.6.19 2002.10.30)) 2003.3.3	4,287㎡	土佐市 バイパス 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野田廃寺	寺院跡	古代	掘立柱建物跡	1棟	土師器	古代の礎石建物跡や多量に瓦を含む溝跡など、野田廃寺に伴う遺構が確認されている。	中近世では溝で囲まれた屋敷跡の一角を検出し、屋敷跡がこれまでより東へ拡がるのが確認された。近世には炉跡とみられる遺構や水利施設も確認している。	
			礎石建物跡	1棟	須恵器			
			溝跡	3条	黒色土器			
			ピット	15個	二彩陶器			
					瓦			
					東播系須恵器			
					備前焼			
					白磁			
					青磁			
					古銭			
野田遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡	26棟	土師質土器	中近世では溝で囲まれた屋敷跡の一角を検出し、屋敷跡がこれまでより東へ拡がるのが確認された。近世には炉跡とみられる遺構や水利施設も確認している。		
			塀・柵列跡	4列	瓦			
			土坑	42基	東播系須恵器			
			溝跡	28条	備前焼			
			ピット	55個	白青古			
					磁器			
					近世陶磁器			
					古銭			
					煙管			
			掘立柱建物跡	7棟				
			塀・柵列跡	6列				
			土坑	58基				
			溝跡	17条				
			ピット	9個				



付図1 野田遺跡第Ⅱ調査地区古代遺構平面図(S=1/200)



付図2 野田遺跡第II調査地区中世遺構平面図1(S=1/200)



付図3 野田遺跡第II調査地区近世以降遺構平面図(S=1/200)

本書作成データ

ハード：PowerMacG5/2.0dual, PowerBookG4/1.5, iBookG4/1.2

システム：MacOS X (10.3.7)

ソフト：JeditX, Adobe Photoshop®8.0.1, Adobe Illustrator®11.0.1, Adobe Indesign®3.0.1など

フォント：モリサワOTF基本7書体, ヒラギノ角ゴProW6, Times Italic

プリンタ：Xerox Docu Print C3530 (文書校正)

データ：図版以外はすべてデジタルデータで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第93集

野田遺跡Ⅱ・野田廃寺

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

2005年3月18日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社